

よし たけ  
吉武遺跡群

VIII

飯盛・吉武團場整備事業関係調査報告書2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集

1996

福岡市教育委員会

# よし たけ 吉 武 遺 跡 群

## 飯盛・吉武園場整備事業関係調査報告書 2

—弥生時代墳墓の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集



連絡略号：YST  
調査番号：8335,8416  
8518,8525

1996

福岡市教育委員会



1号幹線と背景飯盛山



大型建物と王墓



宮武高木全景



大石K45号出土状况



福波墳丘墓

## 序

古来より大陸への門戸であった福岡市には、中国をはじめとするアジア諸国との交流を示す数多くの遺跡が発見されています。

この中、市の西部に位置する早良平野では、平野を北に貫いて流れ博多湾に注ぐ室見川の左岸一体を中心に弥生時代から奈良時代までの長期にわたる遺跡が分布しており、中流域にあたる吉武遺跡群はこれらの中心をなす遺跡と考えられます。

さて、今回報告しますのは昭和56年度から昭和60年度まで同地区で行われた圃場整備事業にともない発掘調査されたもののうち、特に豊富な副葬品が出土し、早良王墓ではないかと考えられる弥生時代の特殊な墓地群の一部です。

これらの調査成果は、弥生時代にはじまる我国の初期的な「国（クニ）」の実態を考えるうえで非常に重要な意味をもつものと理解されます。

最後に本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する認識と理解につながり、更に学術研究の分野にいささかでも貢献することができれば幸甚に存じます。

また、本報告書の作成にあたり非常な協力をいただきました関係者の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第であります。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会  
教育長 尾花 剛

## 例 言

1. 本書は、飯盛吉武地区土地改良事業（圃場整備）に伴い、発掘調査を実施した福岡市西区大字飯盛・吉武域内に所在した「吉武遺跡群」の樋渡地区、大石地区、高木地区の発掘調査の報告書の第2冊である。
2. 発掘調査は、福岡市教育委員会が昭和56年度（1981年）から昭和60年度（1985年）まで実施した。
3. 発掘調査で検出した遺構は、その種類ごとに記号を附し、土壇をSK、溝状遺構をSD、竪穴住居跡をSC、竪立柱建物やSB、柱穴をSP、木棺墓をM、甕棺墓をKと表記した。
4. 本書は、調査された各時代の遺構のうち、豊富な副葬品を出土した吉武高木、吉武大石及び樋渡墳丘墓のうち副葬品を出土した遺構を中心に報告するものである。
5. 本書に掲載した遺構実測図は、各年度の調査担当者および調査補助員が行った。また、遺物実測図は調査担当者の他に、吉武大石を田中克子、吉武高木および樋渡墳丘墓甕棺を本課大塚紀宜氏によった。記して感謝する次第である。また、重要文化財の吉武高木・吉武大石・樋渡墳丘墓の甕棺復元は、土斐崎つや子、堂園晴美、小森佐和子、池田由美、衛藤美奈子で行った。
6. 本書に使用した図面類の整図および製図は、調査担当者の他に安野 良、副田則子、池田由美、衛藤美奈子が行った。
7. 本書に使用した写真は、第3～4次の遺構を下村、第5次の遺構を横山、第6次の遺構を力武が撮影した。また、第3～6次までの遺物は力武、下村、横山が撮影した。
8. 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
9. 本書の執筆は、第一章および第二章 調査報告（第一節 第3次調査報告、第二節 第4・5次調査報告）を横山、第二章（第三節 第6次調査報告）を力武が担当し、第三章は担当者全員の討論で行った。また、本書の編集は、関係者の協力をえて力武と横山で行った。
10. 本書に関する調査記録は埋蔵文化財センター、重要文化財である甕棺類は福岡市博物館へそれぞれ平成8年度に取蔵、搬入する予定である。
11. 表紙の題字は、埋蔵文化財センター杉山悦子氏にお願いした。記して感謝いたします。

# 本文目次

第一章	はじめに	1
第二章	調査の報告	
	第3～6次調査概要	3
第一節	第3次調査報告	
	調査概要	3
1.	豊柏墓	
	1.K5号豊柏墓	7
	2.K61号豊柏墓	9～10
	3.K62号豊柏墓	10～13
	4.K64号豊柏墓	14～15
	5.K75号豊柏墓	16～18
	6.K77号豊柏墓	20～23
2.	木棺墓	23～25
3.	福岡市西区横渡豊柏遺跡出土の鉄剣及び細形銅剣に付着する織物について	26～28
4.	単独発見の銅剣	29
5.	小結	32
第二節	第4・5次調査報告	
	調査概要	33
1.	豊柏墓	
	1.K100号豊柏墓	33,36～38
	2.K109号豊柏墓	38～41
	3.K110号豊柏墓	42～46
	4.K111号豊柏墓	47～51
	5.K115号豊柏墓	52～54
	6.K116号豊柏墓	55～58
	7.K117号豊柏墓	58～64
	8.K125号豊柏墓	65～66
2.	木棺墓	
	概要	66
	1.第1号木棺墓	67～70
	2.第2号木棺墓	71～76
	3.第3号木棺墓	76～84
	4.福岡市西区吉武高木遺跡出土の細形銅矛及び細形銅戈に付着する織物について	85～86
	5.第4号木棺墓	87～89
	小結	91～92
3.	第6次調査報告	
	調査概要	93～96
1.	大石地区の概要	97～98
2.	木棺墓	
	1.第1号木棺墓	99～101
	2.第4号木棺墓	102～103
	3.第5号木棺墓	103～109
	4.第6号木棺墓	106
3.	豊柏墓	
	1.K1号豊柏墓	107～109
	2.K10号豊柏墓	109
	3.K45号豊柏墓	111
	4.K51号豊柏墓	115～118

5.K53号豊柏墓	118～121	
6.K60号豊柏墓	122～123	
7.K67号豊柏墓	124～126	
8.K70号豊柏墓	126～128	
9.K71号豊柏墓	122～130	
10.K81号豊柏墓	131～132	
11.K140号豊柏墓	132～134	
4.	小結	134～136
5.	赤色顔料	139～142
第三章	おわりに	143～148
	参考文献	149～150

# 挿図目次

Fig.1	弥生墓地全体図	2
2	第3次調査弥生墓地全体図 (1/1000)	4
3	横渡墳丘墓遺跡平面図 (1/200)	5
4	墳丘墓土層断面図 (1/150)	6
5	K5号豊柏墓出土状況図 (1/30)	7
6	K5号豊柏墓実測図 (1/8)	7
7	K5号豊柏墓副葬鉄剣・鉄鏃実測図 (1/2)	8
8	K61号豊柏墓出土状況図 (1/30)	9
9	K61号豊柏墓副葬鉄剣実測図 (1/2)	10
10	K61号豊柏墓実測図 (1/8)	11
11	K62号豊柏墓出土状況図 (1/30)	12
12	K62号豊柏墓実測図 (1/8)	13
13	K62号豊柏墓副葬鉄刀・鐵突頭図 (1/2)	14
14	K64号豊柏墓出土状況図 (1/30)	15
15	K64号豊柏墓副葬素環大刀実測図 (1/2)	15
16	K64号豊柏墓実測図 (1/8)	16
17	K75号豊柏墓出土状況図 (1/30)	17
18	K75号豊柏墓実測図 (1/8)	18
19	K75号豊柏墓副葬銅剣・把頭鎧実測図 (1/2)	19
20	K77号豊柏墓出土状況図 (1/30)	20
21	K77号豊柏墓実測図 (1/8)	21
22	K77号豊柏墓副葬銅剣・銅突頭図 (1/2)	22
23	木棺墓出土状況図 (1/30)	23
24	木棺墓出土土類実測図 (1/1)	24
25	木棺墓副葬鉄剣実測図 (1/2)	25
26	横渡豊柏遺跡出土の平絹	28
27	出土平絹の繊維断面転写図	28
28	単独発見銅剣実測図 (1/2)	29
29	第4・5次調査遺跡全体図 (1/500)	34
30	第4・5次調査弥生墓地全体図 (1/200)	35
31	K100号豊柏墓出土状況図 (1/30)	36
32	K100号豊柏墓実測図 (1/8)	37
33	K100号豊柏墓副葬銅剣実測図 (1/2)	38
34	K109号豊柏墓出土状況図 (1/30)	39
35	K109号豊柏墓実測図 (1/8)	40

36	K109号甕棺墓出土管玉実測図 (1/1) .....	41	85	第6次調査区全体図 .....	95
37	K110号甕棺墓出土状況図 (1/30) .....	42	86	旧石器時代の調査 .....	95
38	K110号甕棺墓副葬遺物出土状況図 (1/4) .....	43	87	弥生時代の調査 .....	95
39	K110号甕棺墓副葬銅剣・勾玉実測図 (1/2) .....	43	88	古墳の調査 .....	96
40	K110号甕棺墓出土管玉実測図 (1/1) .....	44	89	中世遺構の調査 .....	95
41	K110号甕棺実測図 (1/8) .....	46	90	大石地区遺構全体図 .....	96
42	K111号甕棺墓出土状況図 (1/30) .....	47	91	全体写真 .....	96
43	K111号甕棺墓副葬遺物出土状況図 (1/4) .....	48	92	発掘作業員のみなさん .....	98
44	K111号甕棺墓出土管玉実測図 (1/1) .....	49	93	大石地区全景 (正面が坂盛山) .....	98
45	K111号甕棺実測図 (1/8) .....	51	94	第1号木棺墓出土状況図 (1/30) .....	99
46	K115号甕棺墓出土状況図 (1/30) .....	52	95	銅剣・銅戈 .....	100
47	K115号出土銅剣実測図 (1/2) .....	53	96	銅剣・銅戈実測図 (1/2) .....	100
48	K115号甕棺実測図 (1/8) .....	54	97	第1号木棺墓 (南西より) .....	101
49	K116号甕棺墓出土状況図 (1/30) .....	55	98	第1号木棺墓 .....	101
50	K116号甕棺墓副葬銅剣実測図 (1/2) .....	56	99	第1号木棺墓 .....	101
51	K116号甕棺実測図 (1/8) .....	57	100	銅戈・銅剣出土状況 .....	101
52	K116号甕棺墓副葬土器実測図 (1/3) .....	58	101	土器実測図 (1/3) .....	101
53	K117号甕棺墓出土状況図 (1/30) .....	59	102	第4号木棺墓出土状況図 (1/30) .....	102
54	K117号甕棺墓副葬遺物出土状況図 (1/4) .....	60	103	第4号木棺墓 .....	103
55	K117号甕棺墓副葬銅剣・勾玉実測図 (1/2) .....	61	104	土器実測図 (1/3) .....	103
56	K117号甕棺実測図 (1/8) .....	62	105	第5号木棺墓出土状況図 (1/30) .....	103
57	K117号甕棺墓副葬土器実測図 (1/3) .....	63	106	第5号木棺墓 .....	104
58	K117号甕棺墓出土管玉実測図 (1/1) .....	63	107	作業風景 .....	104
59	K125号甕棺墓出土状況図 (1/30) .....	65	108	第5号木棺墓 .....	104
60	K125号甕棺墓出土磨製石籠実測図 (1/2) .....	65	109	銅剣・鞘実測図 (1/2) .....	105
61	K125号甕棺実測図 (1/8) .....	66	110	銅剣・鞘 .....	105
62	第1号木棺墓出土状況図 (1/30) .....	67	111	第6号木棺墓出土状況図 (1/30) .....	106
63	第1号木棺墓副葬遺物出土状況図 (1/4) .....	68	112	第6号木棺墓 .....	106
64	第1号木棺墓副葬銅剣実測図 (1/2) .....	69	113	第6号木棺墓 .....	106
65	第1号木棺墓出土玉類実測図 (1/1) .....	69	114	土器実測図 (1/3) .....	106
66	第1号木棺墓副葬土器実測図 (1/3) .....	70	115	K1号甕棺墓出土状況図 (1/30) .....	107
67	第2号木棺墓副葬銅剣・勾玉出土状況図 (1/4) .....	72	116	K1号甕棺墓 .....	107
68	第2号木棺墓出土状況図 (1/30) .....	(折込み)	117	K1号甕棺 .....	108
69	第2号木棺墓出土銅剣・勾玉実測図 (1/4) .....	73	118	K1号甕棺実測図 (1/8) .....	108
70	第2号木棺墓出土管玉実測図 (1/1) .....	74	119	銅矛実測図 (1/2) .....	109
71	第2号木棺墓副葬土器実測図 (1/3) .....	76	120	K10号甕棺墓出土状況図 (1/30) .....	109
72	第3号木棺墓出土状況図 (1/30) .....	77	121	K10号甕棺墓 .....	109
73	第3号木棺墓副葬遺物出土状況図 (1/4) .....	78	122	K10号甕棺 .....	110
74	第3号木棺墓副葬銅剣実測図 (1/2) .....	79	123	K10号甕棺実測図 (1/8) .....	110
75	第3号木棺墓副葬銅剣・銅矛実測図 (1/2) .....	80	124	石鏃 .....	110
76	第3号木棺墓副葬多鈕短文鏡・勾玉実測図 (1/2) .....	81	125	石鏃実測図 (1/2) .....	110
77	第3号木棺墓出土管玉実測図 (1/1) .....	82	126	K45号甕棺墓出土状況図 (1/30) .....	111
78	第3号木棺墓副葬土器実測図 (1/3) .....	84	127	K45号甕棺墓 (北東より) .....	111
79	古武高木遺跡出土の平絹 .....	86	128	K45号甕棺墓 .....	111
80	出土平絹の繊維断面転写図 .....	86	129	K45号甕棺墓 .....	111
81	第4号木棺墓出土状況図 (1/30) .....	87	130	K45号甕棺 .....	112
82	第4号木棺墓副葬銅剣実測図 (1/2) .....	88	131	K45号甕棺実測図 (1/8) .....	112
83	第4号木棺墓副葬土器実測図 (1/3) .....	89	132	銅矛・木柄実測図 (1/2) .....	113
84	古武遺跡群の弥生時代墓地 .....	94	133	銅矛・木柄 .....	113

134	銅剣実測図 (1/2)	114
135	銅剣	114
136	K51号甕棺墓出土状況図 (1/30)	115
137	K51号甕棺墓	115
138	K51号甕棺墓	115
139	K51号甕棺	116
140	K51号甕棺実測図 (1/8)	116
141	銅剣実測図 (1/2)	117
142	銅剣	117
143	管玉実測図 (1/1)	118
144	管玉	118
145	K53号甕棺墓出土状況図 (1/30)	118
146	K53号甕棺墓	118
147	K53号甕棺墓	119
148	銅戈出土状況	119
149	K53号甕棺実測図 (1/8)	119
150	K53号甕棺	120
151	銅戈実測図 (1/2)	121
152	銅戈	121
153	石剣実測図 (1/2)	121
154	石剣	121
155	K60号甕棺墓出土状況図 (1/30)	122
156	K60号甕棺墓	122
157	石剣	122
158	石剣実測図 (1/2)	122
159	K60号甕棺	123
160	K60号甕棺実測図 (1/8)	123
161	K67号甕棺墓出土状況図 (1/30)	124
162	K67号甕棺墓	124
163	作業風景	124
164	K67号甕棺	125
165	K67号甕棺実測図 (1/8)	125
166	銅矛出土状況	126
167	銅矛実測図 (1/2)	126
168	銅矛	126
169	K70号甕棺墓	126
170	K70号甕棺墓出土状況図 (1/30)	127
171	K70号甕棺	127
172	K70号甕棺実測図 (1/8)	127
173	研ぎ分け	127
174	細形銅文	128
175	銅戈実測図 (1/2)	128
176	K71号甕棺墓出土状況図 (1/30)	128
177	K71号甕棺墓	128
178	K71号甕棺	129
179	青銅製品実測図 (1/2)	129
180	管玉実測図 (1/1)	129
181	管玉	130
182	K81号甕棺墓出土状況図 (1/30)	130

183	K81号甕棺墓	130
184	K81号甕棺	131
185	K81号甕棺実測図 (1/8)	131
186	石剣実測図 (1/2)	132
187	石剣	132
188	K140号甕棺墓出土状況図 (1/30)	132
189	K140号甕棺墓	133
190	K140号甕棺墓	133
191	銅剣実測図 (1/2)	133
192	銅剣	133
193	K140号甕棺	134
194	K140号甕棺実測図 (1/8)	134
195	大石地区全景	135
196	大石地区墓地の変遷	136
197	大石地区の遺物	137
198	遺構保存レベルの検討	137

## 図版目次

### PL1

1. 第3次調査K01号甕棺墓出土状況
2. 第3次調査K02号甕棺墓出土状況
3. 第3次調査K04号甕棺墓出土状況
4. 第3次調査K03号甕棺墓出土状況
5. 第3次調査K05号甕棺墓出土状況
6. 第3次調査K05号甕棺墓副葬品出土状況

### PL2

1. 第3次調査K62号甕棺墓出土状況
2. 第3次調査K64・65号甕棺墓出土状況
3. 第3次調査K66号甕棺墓出土状況
4. 第3次調査K67・68号甕棺墓出土状況
5. 第3次調査K69・70・71・73号甕棺墓出土状況
6. 第3次調査K71号甕棺墓出土状況

### PL3

1. 第3次調査K72号甕棺墓出土状況
2. 第3次調査K76号甕棺墓出土状況
3. 第3次調査K75号甕棺墓出土状況
4. 第3次調査K75号甕棺墓副葬品出土状況
5. 第3次調査K75号甕棺墓副葬品出土状況(近影)
6. 第3次調査K75号甕棺墓副葬品出土状況

### PL4

1. 第3次調査K77号甕棺墓出土状況
2. 第3次調査K77号甕棺墓副葬品出土状況
3. 第3次調査K78号甕棺墓出土状況
4. 第3次調査K79号甕棺墓出土状況
5. 第3次調査K86号甕棺墓出土状況
6. 第3次調査草出土銅剣出土状況

### PL5

1. 第3次調査木棺墓出土状況

2. 第3次調査木棺墓南小口部近影  
(碧玉・ガラス小玉群)
3. 第3次調査木棺墓南小口部副葬品出土状況
4. 第3次調査木棺墓碧玉出土状況
5. 第3次調査木棺墓ガラス小玉出土状況
6. 第3次調査木棺墓鉄剣出土状況(棺外)
- PL.6
1. 吉武高木遺跡墓地全景(南より)
2. 吉武高木遺跡墓地近景(南より)
- PL.7
1. 第4次調査K104号雙棺墓出土状況
2. 第4次調査K106号雙棺墓出土状況
3. 第4次調査K105号雙棺墓出土状況
4. 第4次調査K107号雙棺墓出土状況
5. 第4次調査K109号雙棺墓出土状況
6. 第4次調査K111号雙棺墓出土状況
7. 第4次調査K110号雙棺墓出土状況
8. 第4次調査K112号雙棺墓出土状況
9. 第4次調査K113号雙棺墓出土状況
- PL.8
1. 第4次調査K114号雙棺墓出土状況
2. 第4次調査K118号雙棺墓出土状況
3. 第4次調査K117号雙棺墓出土状況(北より)
4. 第4次調査K117号雙棺墓出土状況(東より)
5. 第4次調査K117号雙棺墓出土状況近影(北東より)
6. 第4次調査K117号雙棺墓出土状況(南から)
7. 第4次調査K117号雙棺墓出土状況(東より、開棺時)
8. 第4次調査K117号雙棺墓副葬品出土状況(北東より)
- PL.9
1. 第4次調査K119号雙棺墓出土状況
2. 第4次調査K120号雙棺墓出土状況
3. 第4次調査K121号雙棺墓出土状況
4. 第4次調査K122号雙棺墓出土状況
5. 第4次調査K126号雙棺墓出土状況
6. 第4次調査K127号雙棺墓出土状況
7. 第4次調査K134号雙棺墓出土状況
- PL.10
1. 第4次調査第2号木棺墓出土状況(南より)
2. 第4次調査第2号木棺墓副葬品出土状況
3. 第4次調査第3号木棺墓出土状況(北より)
4. 第4次調査第3号木棺墓玉類出土状況(南より)
5. 第4次調査第3号木棺墓銅鏡・銅剣・銅矛出土状況
6. 第4次調査第3号木棺墓銅剣・銅戈出土状況
7. 第4次調査第3号木棺墓副葬土器出土状況
8. 第4次調査第4号木棺墓礎石出土状況(南西から)
9. 第4次調査第4号木棺墓出土状況
10. 第4次調査第4号木棺墓銅剣出土状況
- PL.11
1. 第3次調査K61号雙棺

2. 第3次調査K77号雙棺
- PL.12
1. 第3次調査K62号雙棺
2. 第3次調査K75号雙棺
- PL.13
1. 第3次調査K64号雙棺
2. 第3次調査K5号雙棺
3. 第4次調査K125号雙棺
- PL.14
1. 第4次調査K100号雙棺
- PL.15
1. 第4次調査K109号雙棺
2. 第4次調査K110号雙棺
- PL.16
1. 第4次調査K111号雙棺
- PL.17
1. 第4次調査K115号雙棺
2. 第4次調査K116号雙棺
- PL.18
1. 第4次調査K117号雙棺

## 表 目 次

Tab.1	木棺墓出土玉類計測表	24
2	横渡雙棺墓出土の鉄剣及び銅形銅剣に付着する 平削の織維断面計測値と織り密度	27
3	漢代の平絹における織維断面計測値	27
4	第3次調査遺構一覽表	30~31
5	K109号雙棺墓出土管玉計測表	41
6	K110号雙棺墓出土管玉計測表	45
7	K111号雙棺墓出土管玉計測表	50
8	K117号雙棺墓出土管玉・ガラス玉計測表	64
9	第1号木棺墓出土管玉計測表	70
10	第2号木棺墓出土管玉計測表	75
11	第3号木棺墓出土管玉計測表	83
12	吉武高木遺跡出土の銅形銅矛及び銅形銅戈に付着する 平削の織維断面計測値と織り密度	86
13	漢代の平絹における織維断面計測値	86
14	第4・5次調査遺構一覽表	90
15	K51号雙棺墓出土管玉計測表	118
16	K71号雙棺墓出土管玉計測表	129
17	大石地区雙棺墓表(金海式期)	138

## 第一章 はじめに

### 1. 調査報告書作成に至る経過

福岡市西区吉武、飯盛地区に所在する吉武遺跡群の調査は、今をさる昭和56年度から昭和60年度まで同地区の団体営圃場整備事業にともなって5年間継続された。

この5ケ年におよぶ大規模な調査では、弥生時代前期末から中期末にかけての甕棺墓地や同時期の竪穴住居址・大型建物を含む掘立柱建物群を数多く検出した。このうち弥生時代前期末～中期初頭の墓地である吉武高木地区（第4・5次調査）や吉武大石地区（第6次調査）では、多数の青銅製武器や多鈕細文鏡、翡翠製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉を副葬した特定集団のものと考えられる墓地群が確認され、これとともに地点を異にして甕棺墓が列をなし延長450mにもおよぶ「甕棺ロード」が見つかっている。また、これに先立つ樋渡地区調査（第3次調査）では、弥生時代中期後半～後期初頭にかけて造営された弥生墳丘墓が検出された。

このように当該遺跡では弥生時代前期末から後期初頭にかけての集落と墓地の変遷、ひいては弥生時代の「クニ」の成立時期を考えるうえで非常に重要な成果を含んでいるため広範な分野からの調査報告書の刊行が待たれていたところである。

さて、吉武高木遺跡については、平成4・5年度に行われた国史跡指定を契機に将来の本遺跡のあるべき整備像を明らかにするため福岡市教育委員会が平成5年度に「吉武高木遺跡調査研究指導委員会」を発足させ、今後のスケジュールを確定するなかで、弥生時代遺構に関する報告書の作成年次計画を決定した。これは以下の内容である。

- ・平成6年度 飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 1 -弥生時代掘立柱建物の報告-  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集 1995 (既刊)
  - ・平成7年度 飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 2 -弥生時代墳墓の報告-  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集 1996
  - ・平成8年度 飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 3 -弥生時代竪穴住居址跡の報告-
  - ・平成9・10年度 飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 4 -弥生時代甕棺ロードの報告-
- このように弥生時代に関する遺構の報告を順次継続して行うこととなった。

ところで、平成7年度は、-弥生時代墳墓の報告-としたが内容は本調査の中心をなす吉武高木地区・吉武大石地区および樋渡地区の3地点において主に青銅器や多数の副葬品等を副葬した甕棺墓、木棺墓、土壇墓を中心とした報告である。

### 2. 報告書作成の組織

【整理主体】 福岡市教育委員会 教育長 尾花 剛

【整理総括】 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝、第1係長 横山邦雄、第2係長 山口譲治

【整理庶務】 内野保基

【整理業務】 下村 智、加藤良彦、常松幹雄、力武卓治、横山邦雄

【整理作業員】 池田由美、衛藤美奈子、安野 良、副田剛子、土斐崎つや子、堂園晴美、小森佐和子

このほか吉武高木地区の第117号甕棺墓等の赤色顔料分析については市埋蔵文化財センター本田光子氏から原稿をいただいた。記して感謝する次第である。

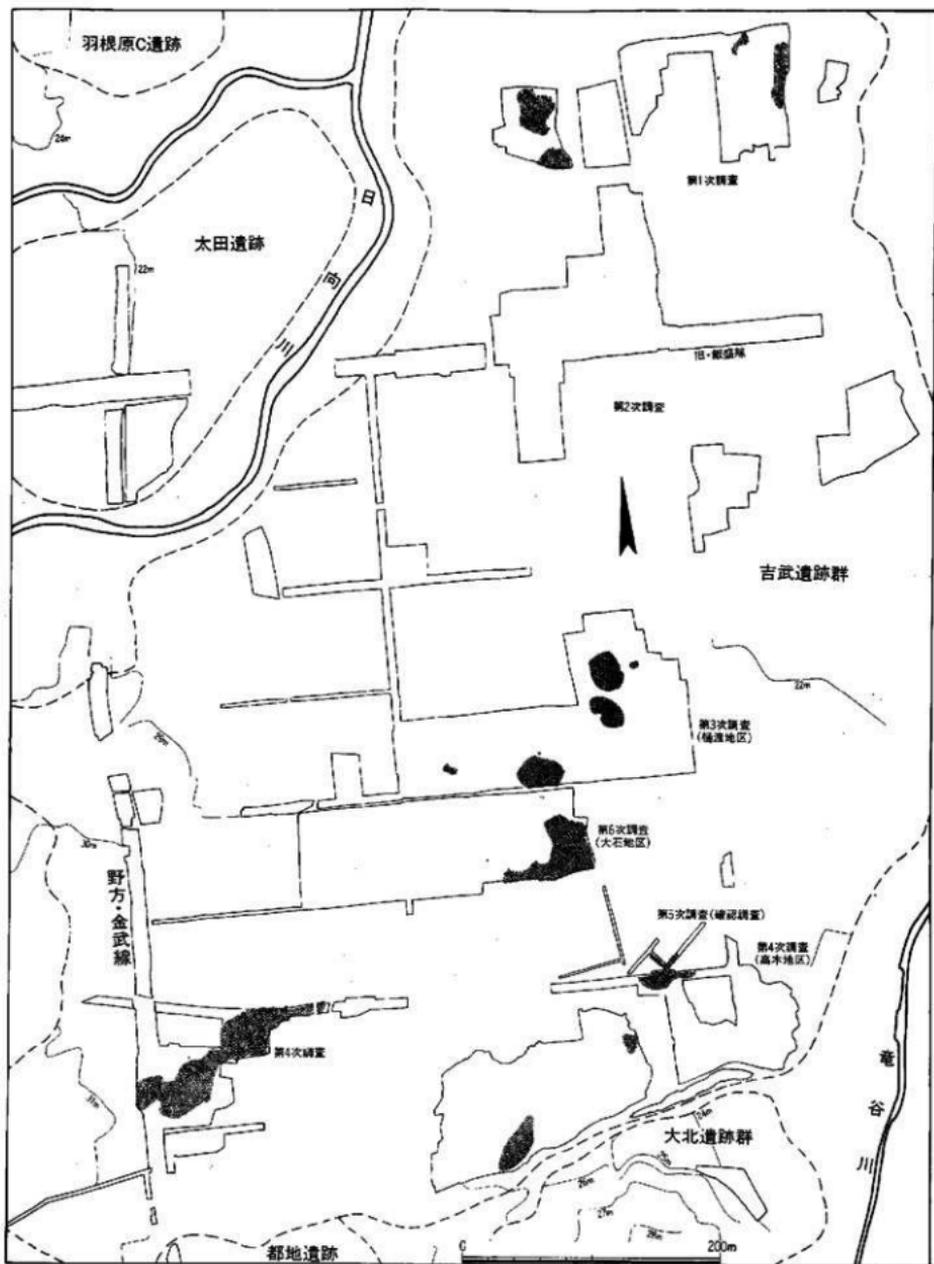


Fig.1 弥生墓跡全体図

## 第二章調査の報告

### 第3～6次調査概要

吉武・飯盛地区園地整備事業に伴う吉武遺跡群の発掘調査では、第3次調査（昭和58年度）-3～4群を数える弥生時代中期前葉～中期末の甕棺墓140基、木棺墓1基、石蓋土墳1基、石棺墓1基などが検出され、このうち調査区北東端では東西約25m、南北約27mをはかる長方形をなすと考えられる墳丘墓が見つかった。墳丘墓中央付近の甕棺墓では青銅製武器・前漢鏡・鉄製武器の副葬が目立つ。しかし、生活遺構は少なく前期末・後期のものがわずかにある。（樋渡墳丘墓）

第4次調査では、調査区西側で前期末～後期初頭の甕棺墓480基以上、石棺墓・土墳墓からなる墓地群と同東側で30基前後からなる前期末～中期前半の墓地が3群見つかった。このうち北側端にある一群は、甕棺墓34基、木棺墓4基からなり、うち大型遺構は南北に長く長方形に分布する。副葬品は非常に多く、第3号木棺墓の内容から「早良王墓」として広く、紹介された（吉武高木地区）。

第5次調査は、第4次調査区の北側の墓地範囲の確認調査である。北側には長軸をそらえた金海式甕棺墓16基が検出され、墓地が約20mほど北側に広がることがわかった。

第6次調査では、弥生時代前期末～中期初頭にかけての甕棺墓203基、木棺墓8基、土墳墓11基が検出された。この調査では、副葬品の数量が第4次調査の高木地区とほぼ同数であるが、玉類が少なく、しかも、磨製石鏃や石刻の切先などの出土が見られ、様相を異にしている。（吉武大石地区）

これら第3～6次調査の中心をなす墓地は、その間の距離が各150～200mあり、弥生時代前期末～中期初頭と中期後半～後期初頭を中心とする2時期にある。

また、遺跡群ではこの間の時期を埋める墓地は継続しているが、副葬品をほとんど出土することの無い墓地群であり、先の2時期と違う様相である。

### 第一節 第3次調査報告

**調査概要** 第3次調査では、ほぼ4群の墓地が確認された。調査区北側の1群（甕棺墓30基以上・石棺墓1基・木棺墓1基-樋渡墳丘墓）、この南側に隣接する2群（甕棺墓54基・石蓋土墳墓）、遺跡群南西からのびた甕棺ロードの北側にある3群（中期前半を主とする甕棺墓35基）、それから調査区西側にある4群（小型甕棺墓7基）である。

このうち第1群は、5C前半代と考えられる樋渡1号墳の墳丘下に見つかった南北約27m・南西約25mをはかる規模の長方形と考えられる弥生墳丘墓である。甕棺墓は南北に長い墳丘の長軸と並行な配置を示すものが多く、これに直交するものが続いた。また、墳丘断面において墳丘頂上部からの墓堀り方を明瞭に確認することのできる甕棺墓もいくつか見られる。

墳丘墓を含む樋渡1号墳の後円部は、昭和30年代の土取り工事によって1/3強が失われており、埋葬主体から避難した銅剣も見られるところから、さらに甕棺墓の全体数は増える。

今回報告では、墳丘墓から検出した埋葬主体のうち、副葬品を出土した甕棺墓6基（K5号甕棺墓、K61号甕棺墓、K62号甕棺墓、K64号甕棺墓、K75号甕棺墓、K77号甕棺墓）、木棺墓1基について報告することにしたい。墳丘内の他の甕棺墓については一頁表で簡単な紹介にとどめた。また、K77号甕棺墓より出土した銅剣付着の網布同定については、出土直後から布目順郎先生に玉摘をいただいていた。しかしながら時間が経過してしまつたため今回の報告に収録させていただいた。

以下、7基の甕棺墓と木棺墓について個別の報告をおこなう。



Fig.2 第三次調查採集點分布圖





SA⇒暗黄褐色—黒褐色粘土(GS・炭灰子混入)  
 SB⇒暗黄褐色砂質土(灰質は西側に比べて黄褐色砂土のブロックが少ない)  
 SC⇒暗黄褐色砂質土(1ヶ/1ヶ)  
 SD⇒灰黄褐色砂質土  
 SE⇒赤褐色砂  
 SF⇒灰黄褐色土(SC: 含むが全層に褐色である)  
 SG⇒暗褐色灰黄褐色土(GS、円礫、基礎土(SD)ブロック少量混入)  
 SJ⇒暗褐色砂質土

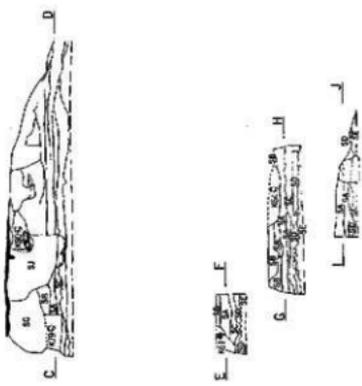


Fig.4 境丘墓土層断面図 (1/150)

# 1. 甕棺墓

## 1. K5号甕棺墓 (Fig.5~7) (PL.1-5・6)

墳丘北側に位置するが、土取りによる破壊により旧状をほとんど残していない。長軸をN-66°-Wにむける。

破壊によって上甕、下甕ともにわずかしか残存しないが、出土状況から呑口式の甕棺墓と考えられる。下甕の中位に鉄剣一点と三角形鉄鏃1点を副葬している。副葬鉄剣は左側辺におかれたと考えられる。

**上甕** 上甕は胴部下半をほとんど欠失する。く字に屈曲する短い口縁を有し、下部に低い三角突帯1条を巡らす中型甕である。口径50.4cmを測り、口縁外面は横ナデ、胴部に縦ハケを施す。内面は強い横ナデである。器色は内外面ともに明褐色を呈する。焼成は堅緻である。

**下甕** 下甕は胴部の中位突帯以上を打ち欠く。全体にぼつたりしたつくりである。

胴部には低い断面コ字形突帯2条を施す。胴部最大径69.4cm、残存器高63.1cm、底部径13.6cmを測る大型甕である。

器色は、内外面ともに薄い淡褐色を呈する。胎土は砂粒をわずかに含むが、密である。焼成は堅緻である。胴部の外面中位に黒斑あり。また、胴部中～下位にかけて黒色の顔料を塗布した痕跡がある。

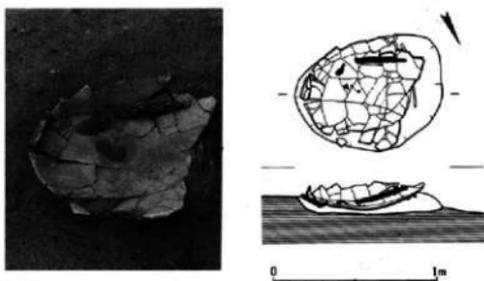


Fig.5 K5号甕棺墓出土状況図 (1/30)

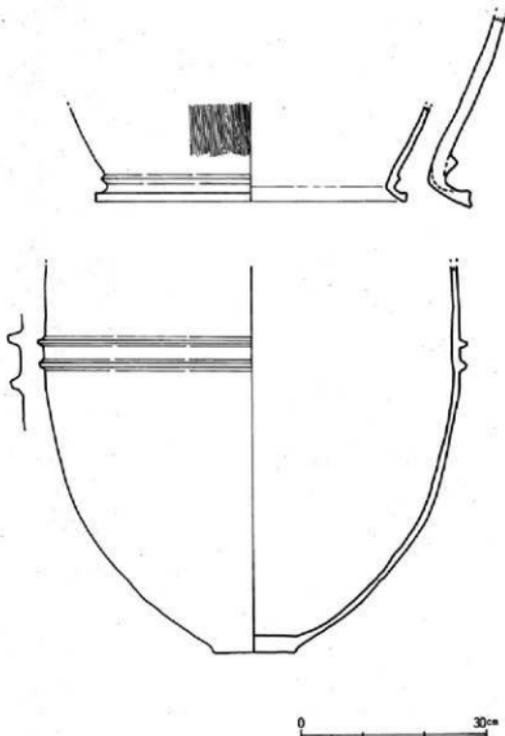


Fig.6 K5号甕棺実測図 (1/8)

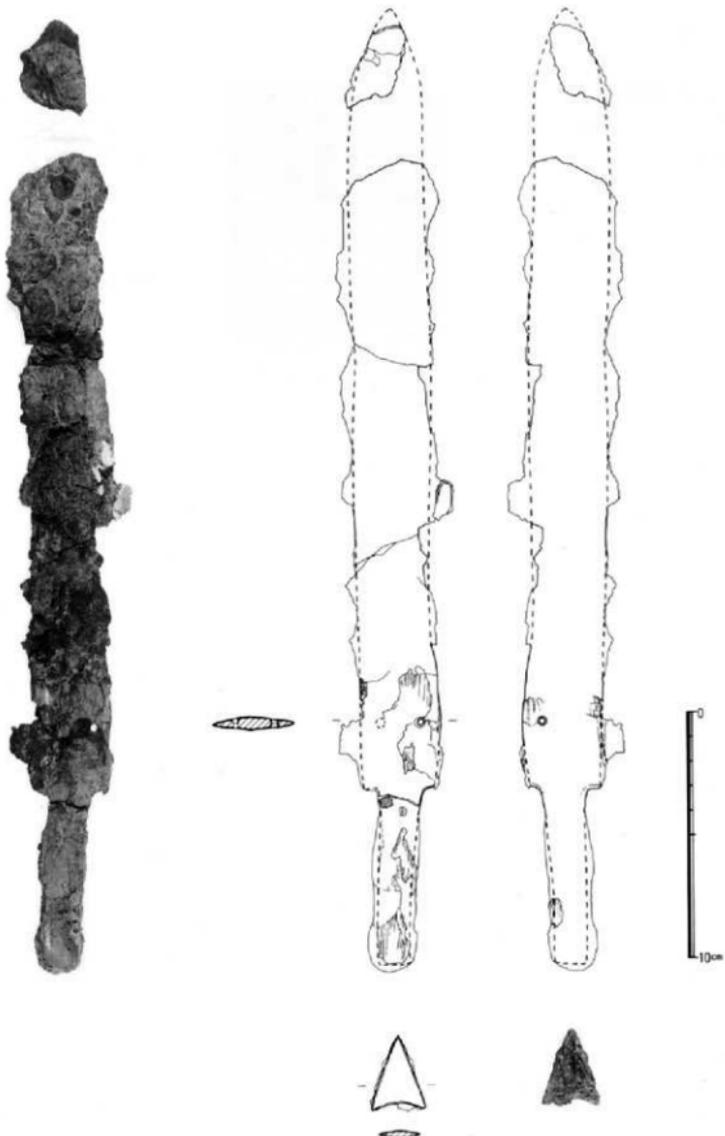


Fig.7 K5号墓棺室副葬铁剑·铁剑实测图 (1/2)

**副葬遺物 鉄 剣** 切先の部分を欠失するが、推定全長19.6cmを測る。身部は全体に錆化が著しい。身部推定全長16cm、幅3cmを測り、断面は偏菱形を呈し、中央に緩い鑄を有する。関部は幅3cmを測り、両端ともに幅6mmほど斜めに緩く切れ込む。また、関端から身部へ2.8cmの位置に、径3mmの孔が2個、間隔1.6cmで穿たれる。茎は全長7.2cm、幅1.5cmをはかる。茎と関付近には木質が全体に残る。また、身部中央付近の側辺には被葬者のものと思われる骨片が付着する。

**鉄 鏃** 基部が緩くカーブする無茎式の鉄鏃である。全長3cm、基部最大幅2.2cmを測る。全体に錆化が見られるが、残存状況は良好である。

## 2. K61号甕棺墓 (Fig. 8~10) (PL. 1)

墳丘のほぼ中央に位置し、主軸をN-23°-Wにとる。墓壇は墳丘盛土と埋土との区別が平面的発掘では困難であったが、甕棺墓の長軸に沿った長方形の土壇と考えられる。上下棺ともに土圧でつぶされて器壁の亀裂が著しいが、いずれも大型の甕を使用する接口式甕棺墓である。埋置角度はそれほど急ではなく、ほぼ水平に近い。上下棺は全長で2.5mを測る。接口部から30cmの下甕側の右側辺に鉄剣一点が副葬されている。

**上 甕** 上甕は、器高115.5cmを測り、やや外方に垂れる平坦口縁の直下には低い断面コ字形の2条を巡らす。外口径74.9cm、内口径61cmを測る。

また、胴部の中位にはやや上向きに付けられた断面コ字形の突帯2条を巡らす。胴部の最大径70.8cmを測る。胴部突帯以下では、粘土帯が8~10cmを観察することができる。底部径は15cmを測る。

器面調整は、外面口縁部と突帯部に横ナデ、他の部位はナデを施す。また、内面の口縁部付近は横ナデで、他の部位はナデを施す。

器色は、内外面とも明るい褐色を呈する。胎土は、0.5~1mm大の石英砂粒を若干含むが、細かい粘土を使用し、密である。また、焼成は堅緻である。

さらに、胴部外面の上位の2ヶ所との底部外面に強い黒斑が観察される。また、口縁部の上端面や体部の内外面に上位にかけて黒色顔料の塗布と見られる痕跡がある。

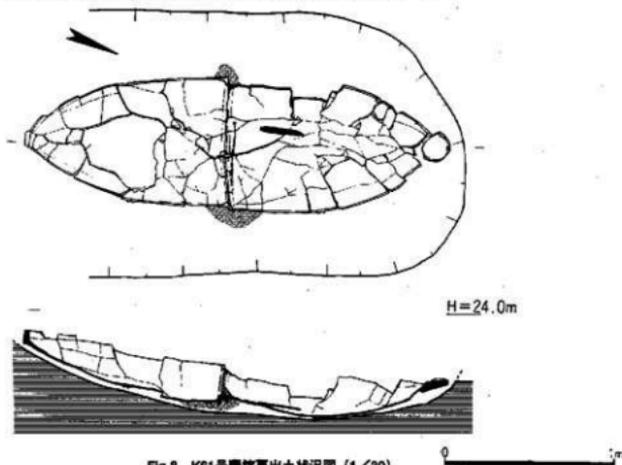


Fig. 8 K61号甕棺墓出土状況図 (1/30)

下 甕 下甕は、器高117.2cmを測る大型甕である。口縁部は、短く外側がやや肥厚する平坦口縁となる。外口径が72.8cm、内口径56.9cmを測る。口縁下には突帯が付かない。

胴部の中位よりやや上がった位置に断面三角の突帯2条を巡らす。胴部の最大径は70.4cmを測る。また、底部径は、17.8cmを測る。

器面調整は、外面の口縁部、突帯付近は横ナデ、他の部位はナデを施す。内面は口縁部が横ナデで、他の部位はナデを施す。

器色は、内外面ともに淡い褐色を呈する。胎土には0.5~1mmの石英砂粒を多く混入する。焼成は、やや堅緻である。

更に、胴部の上部には弱い黒斑1ヶ所、底部付近に強い黒斑が1ヶ所見られる。また、外面全体にごく僅かに黒色顔料が点々と付着する。

副 葬 品 鉄 剣 先端の切先部を欠失している。残存長25.6cmを測るが、復元全長27.6cm程度と考えられる。身部残存長は23.4cmであり、復元長は25.6cm程度となろう。身幅は、胴部付近で3.2cm、先端近くで2.6cmとなり、切先にしたがって狭くなっている。また、中央部には明瞭な錆を有し、先端付近の断面形は明瞭な偏菱形をなす。胴部から1cm程度身部寄りに径3mmの孔2個を1.4cm間隔で穿っている。

茎は、長さ2cmで非常に短く、端部の幅1.7cmをはかる。剣は全体に錆化が著しく、茎の端部には被葬者の骨片が固着している。

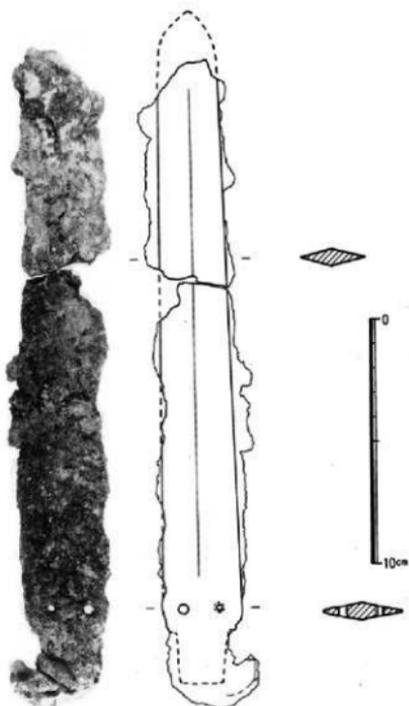


Fig.9 K61号変性黒銅副葬鉄剣実測図 (1/2)

### 3. K62号甕棺墓 (Fig.11~13) (PL. 2)

墳丘中央よりやや西側に位置し、墳丘長軸にはほぼ直交して埋置される。主軸はN-110°-Wをむく。墓壇は隅丸長方形をなし、2段に掘られる。甕棺は土圧によってかなりの細片に潰されている。上下甕とも甕を使用する接口式大型棺である。下甕の底部に近い右側辺部に素環頭太刀1点と銅鏡1面が副葬されていた。

上 甕 上甕は、口縁部外口径51.3cm、内口径39.3cmをはかる中型甕である。口縁部はよくしまり、内傾して屈曲が著しく、断面く字形を呈する。口縁直下に鈍い断面三角突帯1条を巡らす。また、胴部中位よりやや下がった位置に断面コ字形突帯2条を巡らす。胴部最大径は60cmを測る。胴部下半は締まりがなく、ぼつてりとしている。底部径は11cmを測る。器色は外面明褐色、内面暗褐色を呈する。胴部内外面に黒色顔料の痕跡が見られる。また、外面胴部中央に強い黒斑が2ヶ所ある。

器面調整は、外面の口縁部、突帯部付近が横ナデで、他の部位はナデを施す。また、内面は、すべ

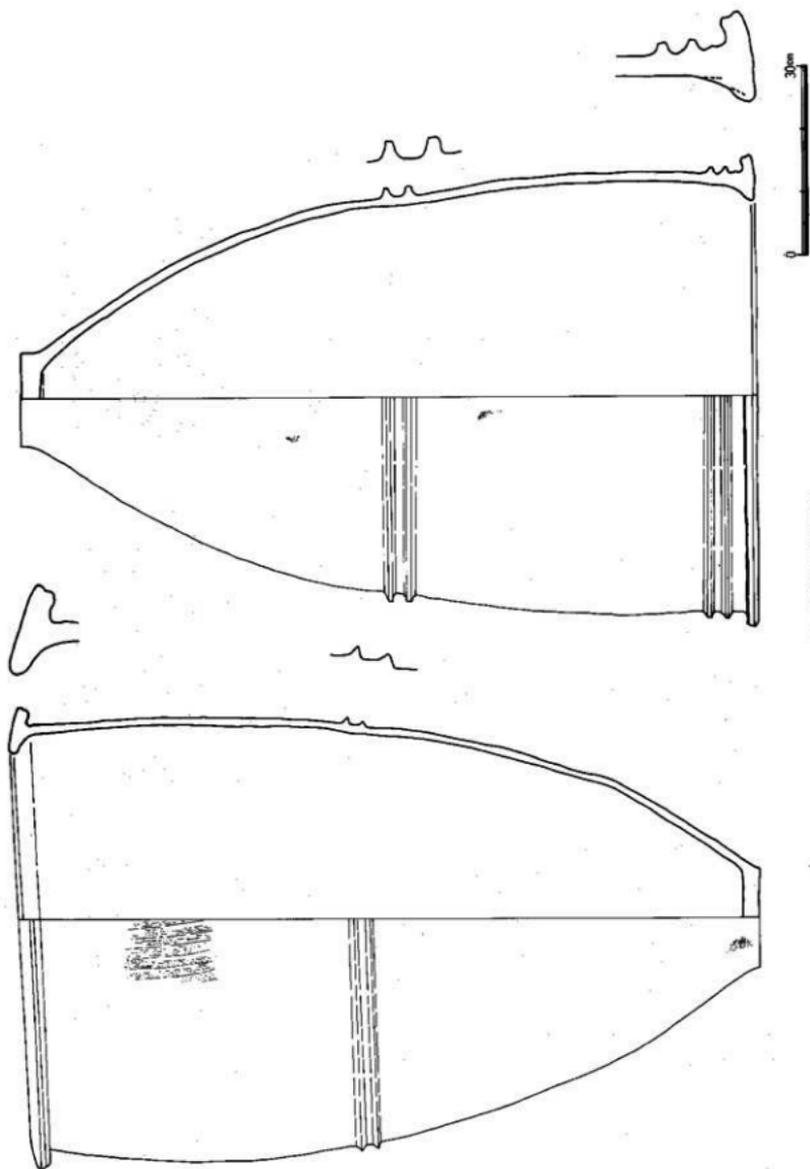


Fig.10 K61号铜器复原图 (1/8)

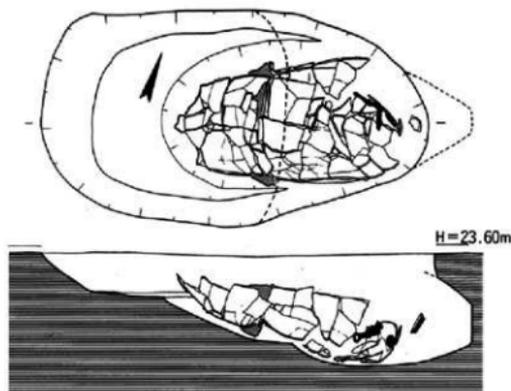


Fig.11 K62号鏡墓基出土状況図 (1/30)



てナアを施す。

胎土には、径0.5mm大の石英、長石砂粒を若干含む。焼成は、堅緻である。

下甕は、上甕と同様に断面く字形を呈し、内傾化の強い大型甕である。外口径68.2cm、内口径53.4cmを測る。口縁直下に細い断面三角突帯1条を巡らす。胴部位の最大径部分に断面コ字形の突帯2条を巡らす。胴部最大径は77.4cmを測る。胴部下半は上甕と同様に締まりがない。底部径12.8cm、器高104.4cmを測る。外面胴部に強い黒斑がある。また、口縁上縁から胴部全体にかけて黒色顔料痕が残る。

器色は、内外面ともに薄い灰褐色～淡褐色を呈する。

器面調整は、外面の口縁部、突帯部付近には横ナア、他の部位はナアである。また、内面は口縁部付近が強い横ナアで、これ以下の部位はナアを施す。

また、胎土には径0.5～1mmの石英、長石砂粒を若干含む。焼成は堅緻である。

**副葬品 素環頭太刀** 全体に錆化が著しく身部下の一部分を失っているが、全長35.2cmを測る。全体に重厚な造りで、身幅3cm、背部の幅0.9cmを測る。また、身部付け根では断面は長方形を呈し、厚さ0.8cmを測る。身部付け根から6.4cmのところまで幅0.3cm程度の素材を巻きつけた痕跡が残る。

環頭部は長さ4.2cm、幅5.4cmを測る。また、内径は長さ2cm、幅2.8cmを測り、形状は隅丸長方形を呈する。環部は径1cmの不整正な断面円形をなす。

**銅鏡** 面径6.9cmを測る平縁の銅鏡である。中央部紐は、中央に1個、その周辺に8個の突起を配置した所謂「博山爐」型に属する。また、内区は4個の半円文と4個の撰じり文が配置される。

外区は、銘帯となり、「見日之光 久不相見 長母相忘」の12文字が配される。

前演鏡としては類例の少ない鏡である。重圓文星雲鏡。

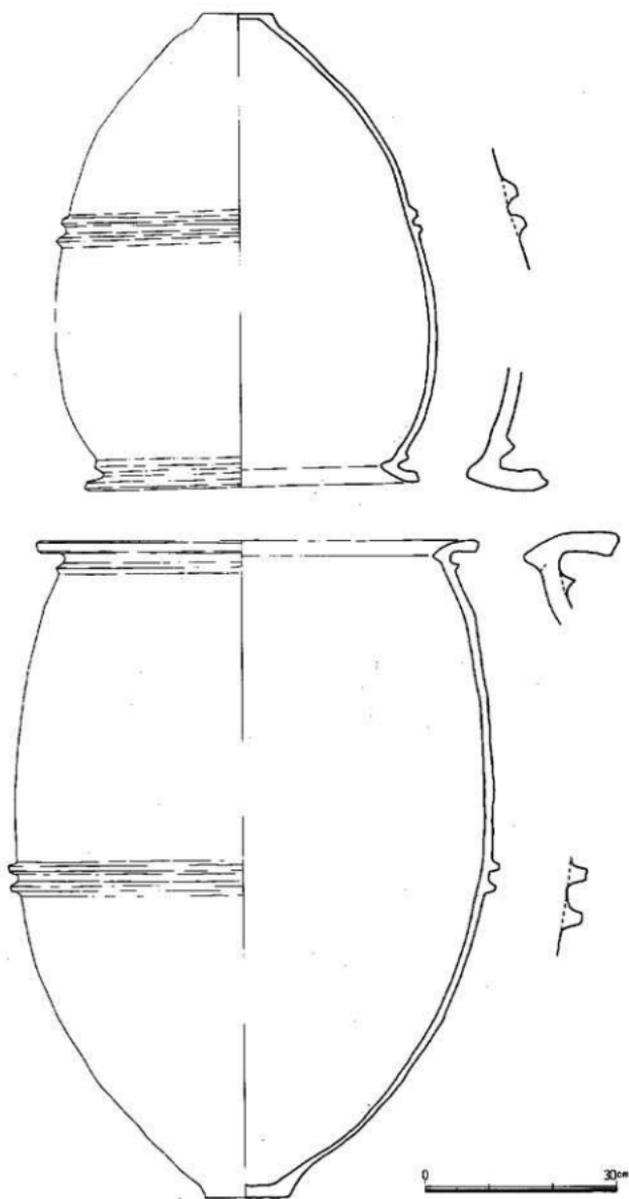


Fig.12 K62号鬲纹实例图 (1/8)

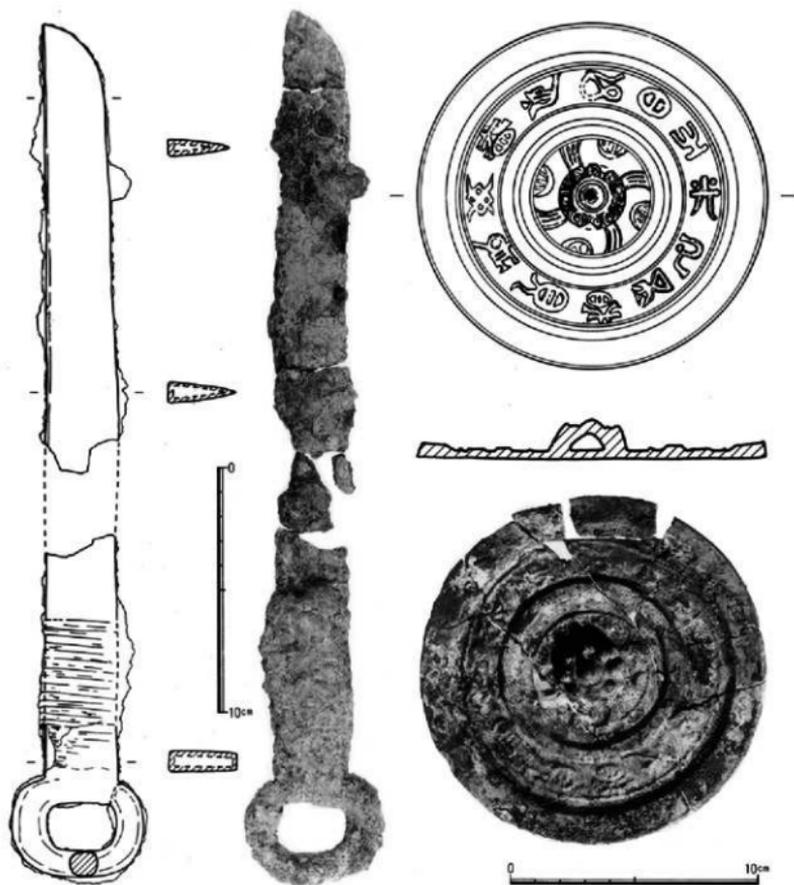


Fig.13 K62号雙棺墓副葬鉄刀・鏡実測図(1/2)

#### 4. K64号雙棺墓 (Fig.14~16) (PL. 2)

墳丘の南西側に位置し、主軸をN-27°-Wにむける。埋置された位置が浅く、上下甕ともに攪乱によってその大部分が旧状を失っている。このため上甕の遺存は非常に悪い。上甕には口縁部打ち欠きの甕、下甕に中型甕を使用する接口式大型棺である。埋置角度はほぼ水平に近いと考えられる。墓墳もまた明瞭ではなく、最下部で長辺1.2m、短辺1mの長円形の掘り方が確認される。かろうじて攪乱からのがれて残った下甕の右側辺の被葬者の腰部にあたると思われる位置に鉄製刀子一点が副葬されていた。

上 甕 上甕は上記のように接口部の一部を除いてすべて破片であり、図化に耐えない。

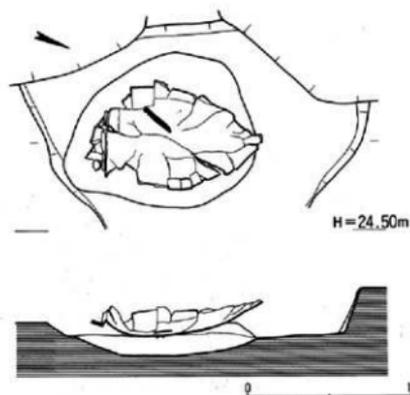


Fig.14 K64号甕棺墓出土状況図 (1/30)



**下 甕** 下甕は、口縁部の外口径49.6cm、内口径39.8cmを測る中型甕である。器高は、92.9cmを測る。

口縁部はよく締まり、内傾化が著しく断面く字形を呈する。口縁部直下に低い断面コ字形の突帯1条を巡らす。

胴部は、全体に卵状の形状をなし、不安定な感じを与える。底部より3/5程度上がった位置に断面形がコ字形の突帯2条を巡らす。胴部の最大径は65.6cmで、底部径10.6cmを測る。

器色は、内外面ともに明るい褐色を呈する。胴部上位～中位にかけて強い黒斑が見られる。また、胴部上体には炭化物が点状に付着する部分があり、全面に塗布されていた可能性が高い。

器面調整は、外側の口縁部、突帯部付近が横ナデで、これより以下ではナデを施す。また、内面は、口縁部付近は横ナデでこれより以下ではナデを施す。

胎土は、径0.5～2mmの石英、長石砂粒を若干含むが、密である。焼成は堅緻である。

**副 葬 品 素環頭刀子** 全体に錆化の著しい鉄製刀子で、環頭部の一部を失っている。全長22.4cmを測る。

身部は、全体に研ぎ減りのためかなり細く、全長19.8cm、身最大幅で1.5cmを測り、身部の基部で幅1.1cmとなる。

また、背部は直線的でなくかなり曲がりくねっている。

環頭部は、長さ2.6cm、幅推定値3.6cmを測り、内部孔は長さ1.4cm、幅推定値2.2cmを測る兩丸長方形をなす。

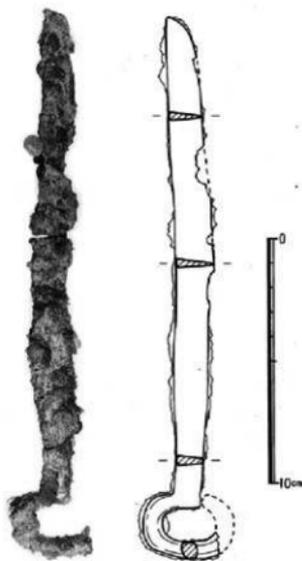


Fig.15 K64号甕棺墓副葬品素環頭刀子実測図 (1/2)

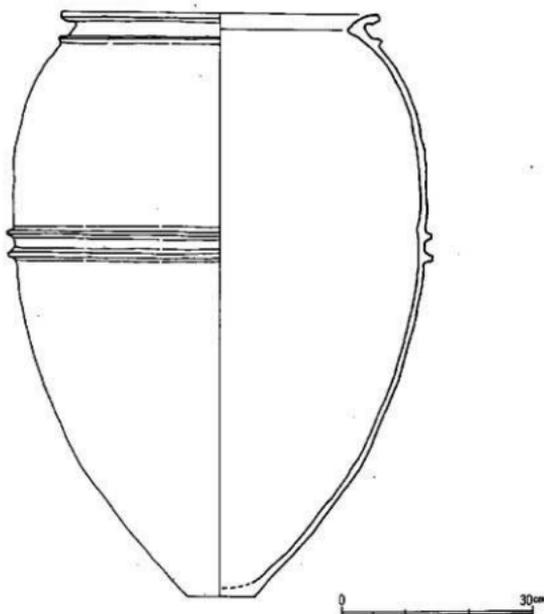


Fig.16 K64号甕棺実測図 (1/8)

#### 5. K75号甕棺墓(Fig.17~19)(P.L.3)

墳丘のほぼ中央に位置し、主軸をN-17°-Wにむけており、墳丘の南北長軸とほとんど平行に埋置されている。埋置角度はほぼ水平と考えられる。上下甕ともに大型の甕を用いた接口式大型棺である。接口部は、白色粘土により丁寧に目貼りなされているが、甕棺は上下棺ともに土圧によりつぶれており、製作時の粘土帯の単位を示すように接合部に沿って多くの亀裂が見られる。

墓壇は、平面調査では墳丘盛土と墓壇埋土との明瞭な区別が、上部では困難であったため、ほとんど甕の上面付近で確認したもので、長さ2.6m、幅1.1m規模の長方形をなす。

また、接口部より約20cmほど下甕側で細形銅剣一点とこれに付属する青銅製把頭飾り1個が副葬されていた。出土状況では銅剣茎から把頭飾りまでの距離が12cmほどあり、下甕に被葬者を頭から入れ、体部の腰付近に銅剣の切先を足元にむけて副葬したと考えることができよう。

上 甕 上甕は、外口径73.8cm、内口径59.3cmを測る大型甕である。器高は、112.2cmを測る。最大径は口縁部にあり、平坦口縁下に1条の断面三角突帯を巡らす全体に丁寧な造りの甕である。胴部の最大径は71cmを測り、中位よりやや下がった位置に下向きの断面コ字形突帯2条を巡らす。底部付近はよく締まり、底部径14cmを測る。

器色は、外面明褐色、内面褐～暗褐色を呈する。胴部外面の上位に2ヶ所、同下位に1ヶ所、内面

上位に1ヶ所の黒斑が見られる。

また、口縁部～外面全体にかけて黒色顔料痕が僅かに観察できる。器面調整は、外面口縁部、突帯付近は横ナデ、他はナデで部分的にハケ目が残る。胎土に径0.5～2mmの石英、長石砂粒を多く含む。焼成は、堅緻である。

下 甕 下甕は、上甕と同様の大型甕である。外口径73.2cm、内口径55.6cm、器高116.5cmを測る。口縁部直下に断面コ字形突帯2条を巡らす。また、胴部中位よりやや上がった位置に下向きの断面コ字形突帯2条を巡らす。器色は、外面黄白色、内面暗褐色を呈する。外面上半に大黒斑2ヶ所、内面上部及び外面の突帯以上に黒色顔料を塗布する。器面の荒れが激しく、外面底部に一部縦ハケ目がある。

胎土は、砂粒を多く含むが、密である。焼成は、堅緻である。

副 葬 品 細形銅剣 全体に細身であり、腐食が著しい切先付近の一部は欠損する。

器色は、先端部が緑色、それから節帯より1～2cmほど先端に近い部分までが灰緑色を呈し、錆化は少なく色調が変化している。また、節帯以下では漆黒色を呈し、良質の青銅であることがわかる。

剣の全長は、35.4cmを測り、樋は対称ではない。樋から切先までの長さ4.6～4.8cmを測る。剣方の長さ4.2cm、同中央部幅3cmを測る。

また、背部は、おもに中央部付近でブロンズ病が進行しており、銅が関部まで通る。このため節帯以下関部までが研ぎ出されたため刃部を形成している。また、この研ぎだしのため関部端は棘状に突出したように見える。

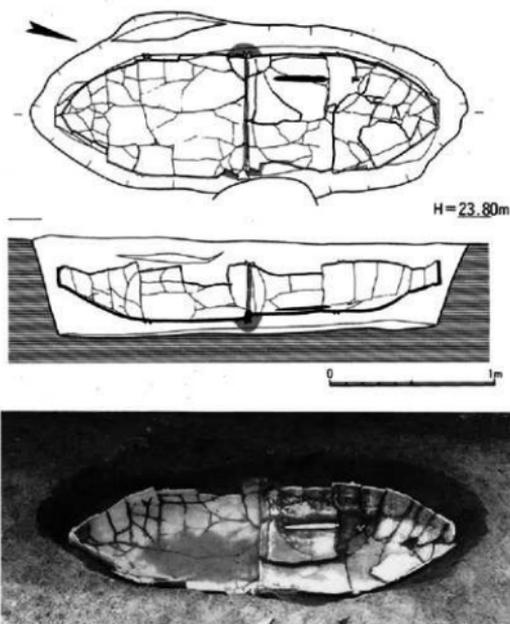


Fig.17 K75号甕棺墓出土状況図 (1/30)

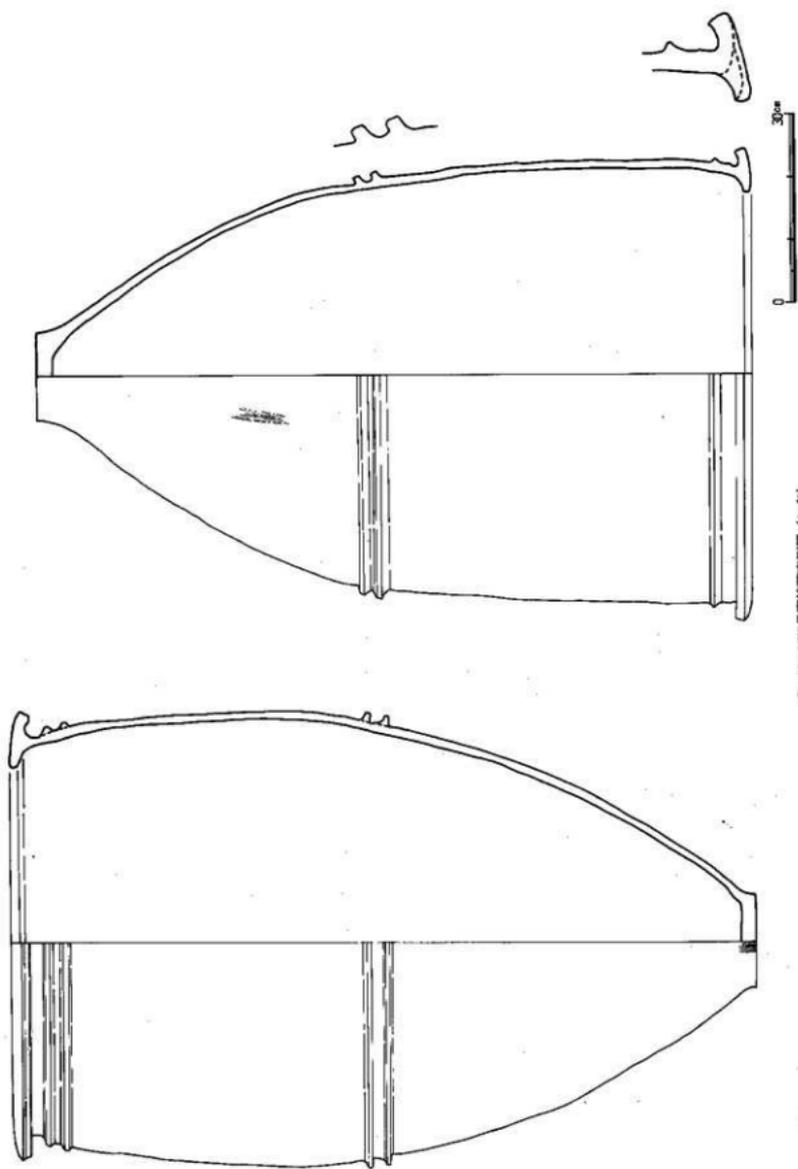


Fig.16 K75号铜尊背面图 (1/6)

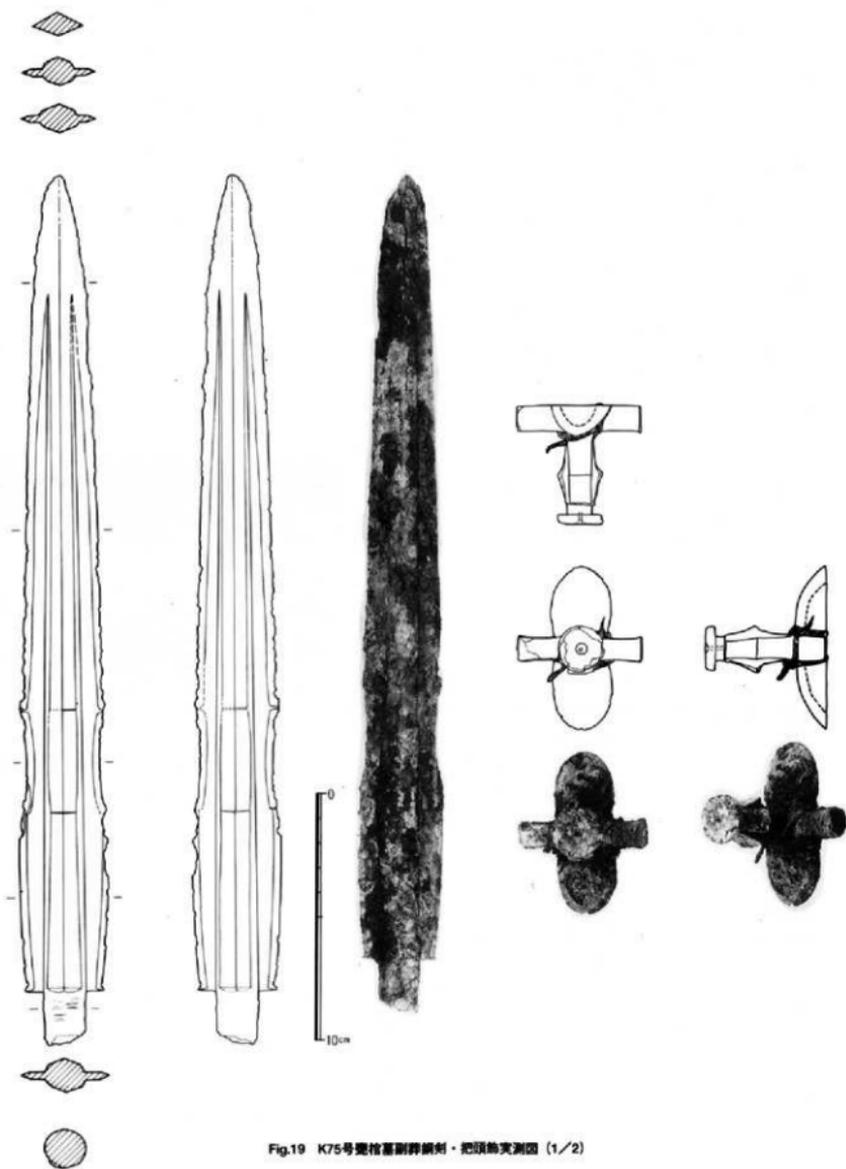


Fig.19 K75号曼陀罗副神剑柄·把顶部实测图 (1/2)

## 6. K77号甕棺墓

(Fig.20~22) (PL.4)

墳丘の中央よりやや南側に位置し、主軸をN-14°-Wにとる。銅剣を副葬したK75号甕棺と近接し、ほぼ同一方向に埋置されている。埋置はほぼ水平で、上下甕ともに大型の甕を使用する接口式甕棺墓である。棺長は全体で2.2mをはかる大規模のもので、下甕中央に切先を南側にむける銅剣一点が出土した。なお墓墳は、底面に近い部分でしか確認が困難で、甕棺墓の形にそった長円形をなす。

上 甕 上甕は、外口径67.9cm、内口径54.5cmを測る大型甕である。全体に砲弾状をなし、最大径は口縁部にある。

器高は、102.9cmを測る。口縁は、内外によく発達した平坦口縁で、口唇部中央が内外ともに窪み、その直下に1条の断面三角突帯を巡らす。

また、胴部は最大径が66.9cmを測り、ほぼ中央部の位置に下向きの断面三角形の突帯2条を巡らす。底部径は、17.6cmを測る。

器色は、外面が明るい淡褐色、内面暗い褐色を呈する。また、外面全体へ口縁上面と内面上位にわたり黒色顔料の塗布および外面上位から下位におよぶ黒斑が観察される。

また、器面調整は、外面で口縁部と突帯部付近が横ナデで、胴部下半の一部にハケ目調整が見られる。他の部位はナデを施す。また、内面は口縁部付近で横ナデで、以下はナデを施す。また、胴部上半に部分的な横ハケ目調整が残る。胎土には径が0.5mm大の石英、長石砂粒を若干含むが、比較的良好な粘土を使用する。焼成は堅緻である。

下 甕 下甕は、上甕よりやや大型の甕である。全体に細身で、胴部突帯以上はほぼ垂直に立ち上がる。器高は、114.0cmを測る。口縁部は平坦をなし、外口径72.1cm、内口径56.5cmを測り、直下に断面三角の突帯1条を巡らす。

また、胴部は、中位よりやや上がった位置に下向きで、やや細身の断面コ字をなす突帯2条を巡らす。胴部下半はよく締まり、底部径17.2cmを測る。

器色は、外面が明るい褐色、内面が暗い濃い褐色を呈する。また、器の内外面全体にわたって黒色顔料の塗布が観察される。また、胴部の下半へ底部にかけて強い黒斑が見られる。

器面調整は、外面で口縁部、突帯付近に強い横ナデで、底部付近に細かい縦ハケ目調整が見られる。これ以外の部位は、ハケ目調整とは異なる板状工具によると思われる縦方向のナデ調整を施す。また、内面は、全体に板状工具と指によるナデで器面調整を行っている。

胎土は、径0.5~1cm大の石英、長石砂粒を僅かに含むが、比較的細かい粘土を使用している。また、焼成は非常に堅緻である。

これら上下の甕は器高などの法量のうえでやや差はあるが、甕の本来の器色からは赤い甕と白い甕の組合せであり、そのままでは色の対比は明らかであるが、これらに黒色顔料を塗布することによって棺として色の統一が図られているのかもしれない。

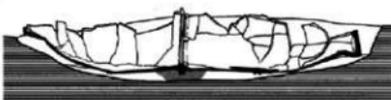
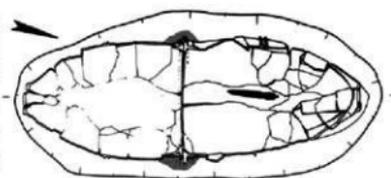


Fig.20 K77号甕棺墓出土状況図 (1/30)

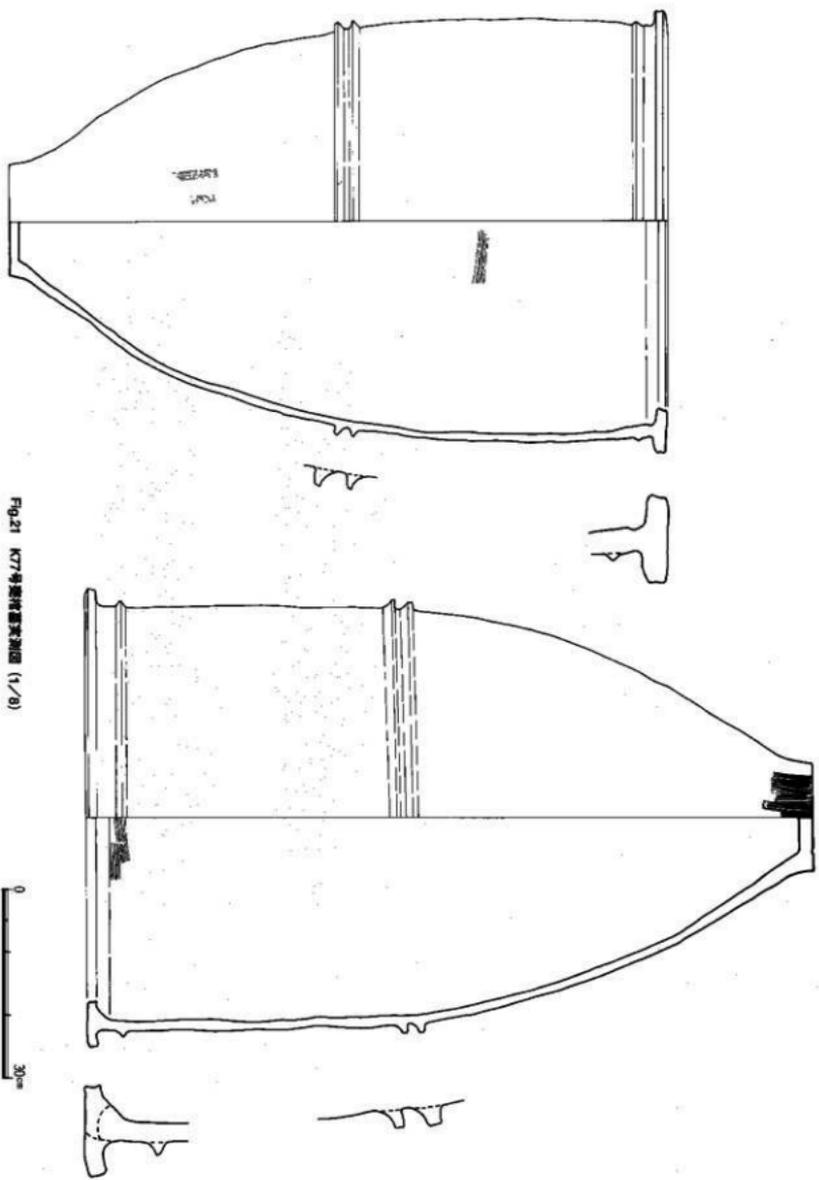


Fig.21 K77号銅器圖式測圖 (1/8)

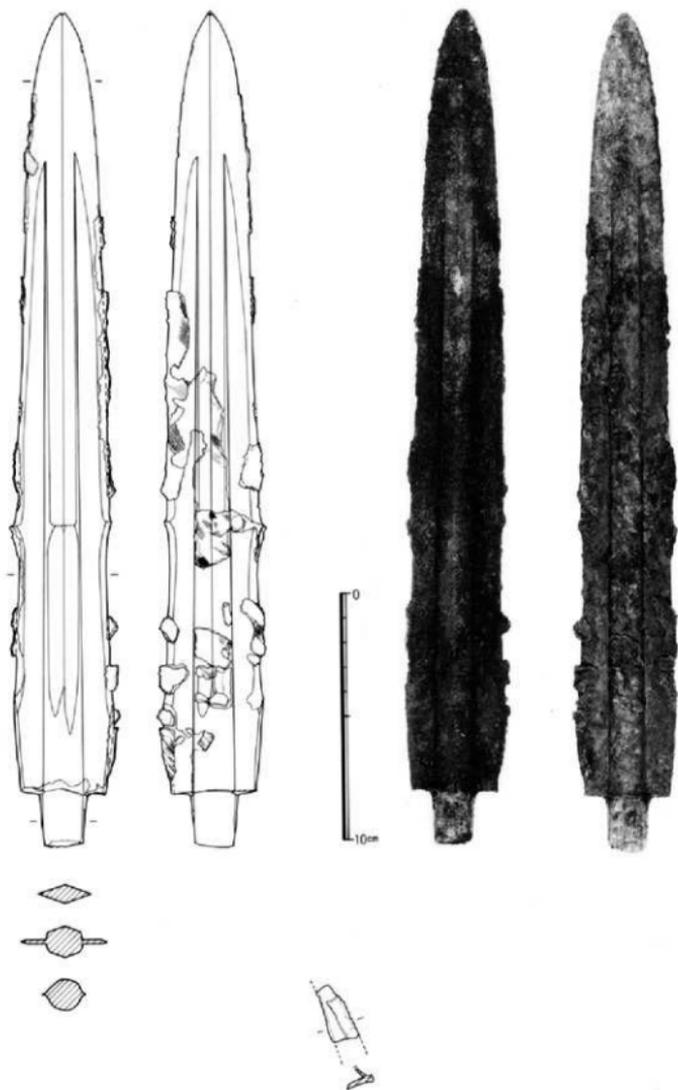


Fig.22 K77号雙格基副劍銅劍・銅質測圖(1/2)

**副葬品 細型銅剣** 切先の一部を僅かに欠失するが、全体的に保存が良好で、重厚な造りの銅剣である。全長を33.9cmを測る。刃方は、下方の節帯が擦り落されているために本来のサイズを知りえないが、現状では概ね長さ6～6.2cm、中央部幅3.6cm程度を測る。また、樋は両面ともに対称とならないが、樋より切先までの長さは概ね5.9cmである。また、背部の鑄は関部までは伸びていない。刃方下部から関までの身部側辺は研ぎだしによる緩い刃部が形成されている。さらに茎は太く、力強い造りとなっている。また、この銅剣には表裏ほぼ全面に絹布の付着が認められ、埋葬時には絹布に包まれていたものと考えられる。

**銅 銅剣に伴う鈿**は、小破片である。幅1cmで、残存長2.2cmを測る。

## 2. 木棺墓 (Fig.23~25) (PL5)

墳丘形成後の表土と考えられる黒色土層を除去した後に検出された木棺墓である。

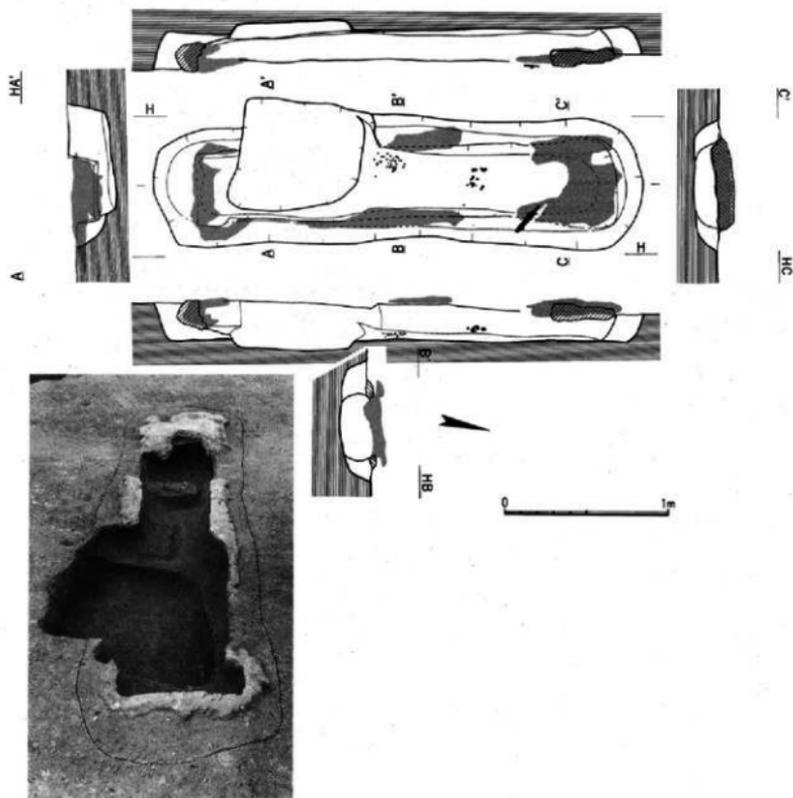


Fig.23 木棺墓出土状況図 (1/30) (H=24.50cm)

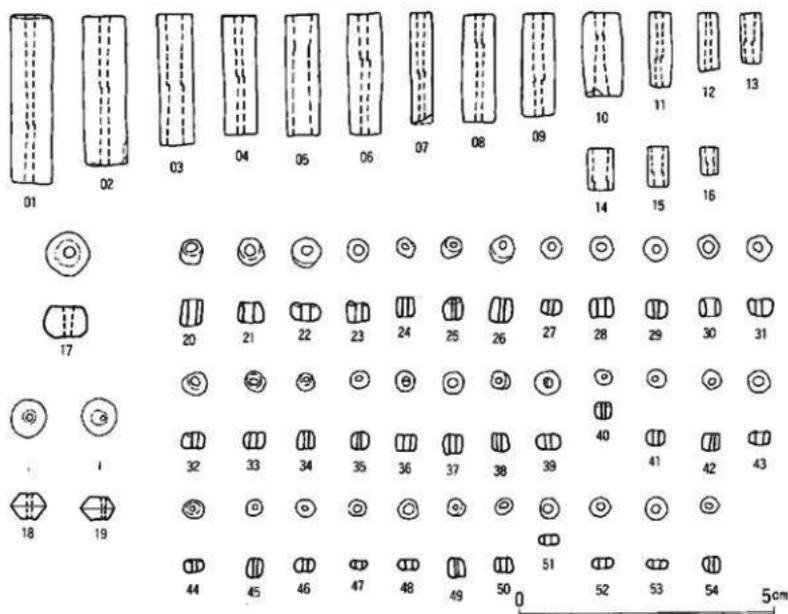


Fig.24 木棺墓出土土類実測図 (1/1)

Tab.1 桶波木棺墓 出土土類計測表 (mm)

番号	種類	最大径	最小径	石材	備考	番号	種類	最大径	最小径	石材	備考
01	碧玉	33.1	7.9	碧玉	暗緑色	28	小玉	4.0	4.5	ガラス	コバルトブルー
02	〃	29.0	8.8	碧玉	〃	29	〃	3.6	4.7	〃	〃
03	〃	25.8	6.6	碧玉	淡緑色	30	〃	3.2	4.8	〃	〃
04	〃	23.5	6.4	凝灰岩	淡緑白	31	〃	3.5	4.8	〃	〃
05	〃	23.8	6.2	碧玉	淡緑色	32	〃	3.5	4.9	〃	〃
06	〃	23.8	6.6	碧玉	〃	33	〃	3.4	4.4	〃	〃
07	〃	21.8	4.9	凝灰岩	緑白色	34	〃	4.0	3.6	〃	〃
08	〃	20.8	6.5	碧玉	暗緑色	35	〃	3.6	4.0	〃	〃
09	〃	19.8	6.5	〃	〃	36	〃	3.5	3.8	〃	〃
10	〃	16.7	7.2	凝灰岩?	淡緑色	37	〃	3.7	4.5	〃	〃
11	〃	14.4	4.1	碧玉	濃緑色	38	〃	3.8	3.5	〃	〃
12	〃	11.5	3.8	凝灰岩	〃	39	〃	3.0	5.0	〃	〃
13	〃	10.3	4.0	碧玉	暗緑色	40	〃	3.1	3.6	〃	〃
14	〃	8.1	5.2	〃	〃	41	〃	3.1	3.9	〃	〃
15	〃	8.3	4.2	〃	〃	42	〃	3.6	3.8	〃	〃
16	〃	5.2	3.4	〃	淡緑色	43	〃	2.8	4.6	〃	〃
17	小玉	6.5	8.3	ガラス	紫紺色	44	〃	2.4	4.0	〃	〃
18	算盤玉	5.0	7.3	水晶	無色	45	〃	4.0	3.0	〃	〃
19	〃	4.8	6.8	〃	〃	46	〃	2.5	4.0	〃	〃
20	小玉	5.3	4.5	ガラス	コバルトブルー	47	〃	1.8	3.5	〃	〃
21	〃	3.9	5.1	〃	〃	48	〃	2.1	4.1	〃	〃
22	〃	3.5	5.8	〃	〃	49	〃	3.6	3.7	〃	〃
23	〃	4.1	4.4	〃	〃	50	〃	3.0	3.7	〃	〃
24	〃	3.9	4.0	〃	〃	51	〃	2.0	4.0	〃	〃
25	〃	4.1	4.1	〃	〃	52	〃	2.1	4.2	〃	〃
26	〃	4.9	4.8	〃	〃	53	〃	1.7	4.4	〃	〃
27	〃	3.2	4.5	〃	〃	54	〃	3.1	3.5	〃	〃

墳丘の中央よりやや南西に位置し、K66号墓棺蓋の東に隣接するが、直下にK88号墓棺蓋が埋葬されていることから明らかにこれよりも新しいの時期の所産である。

墓竈の掘り方は、長短の規模が $2.98 \times 0.74$ mの隅丸長方形をなし、深さが約20cmを測る。足部に当たる南側の側辺は近世墓の墓竈によって破壊を受けているが、内部に安置された木棺は長さ2.55m、幅0.45m程度の長方形棺と考えられ、棺の横断面が底面、側面ともに半円を描くことから棺本体は削抜き棺である可能性がある。また蓋を被せた後に、特に頭部上を中心に、側辺部、小口足辺部に丁寧な白色粘土による被覆がなされている。

棺内部では、北側の小口部の被葬者の頭部にあたる位置に管玉16個、ガラス小玉1個、算盤玉2個からなる首飾り一連が出土した。また、これより約50cmほど南側にガラス小玉35個からなる一帯が出土し、その位置から被葬者の手首を飾ったものと考えられる。また頭部の東側に近い棺外には鉄剣一振りが副葬されていた。

#### 副葬品

**玉類** 管玉 管玉の総数16個は首飾りのものである。

管玉は、長さ3.31cmの大型のものから0.52cmの小型のものまであって、全体にサイズの上では均一性に欠ける。

色は、暗い緑色～淡い緑色のものが見られるが、色の濃いものは石質の上で碧玉製、淡いものは凝灰岩と考えられる。管玉の穿孔方法は、ほとんど両面からの穿孔であるが、比較的に小型であるNo.12の管玉については片面からの穿孔の可能性がある。

**小玉** No.17はガラス小玉である。高さ6.5mm、幅8.3mmを測る玉で、木棺墓中の小玉の中では比較的大型のものである。玉の色は、紫紺色を呈する。

**算盤玉** 出土した算盤玉の2個とも水晶製である。No.18が高さ5mm、幅7.3mmで、No.19が高さ4.8mm、幅6.8mmを測るもので孔部がやや中央よりずれているが、サイズのうえでは選色は殆どない。製品としてはかなりの秀品と考えられる。

**小玉** 手首の飾りに使用されたと考えられるガラス小玉で、総数35個ある。

玉の色は、すべてコバルトブルーに限られている。法量では径5.8～1.7mmのものまであって、サイズのうえでは均一な傾向は認められない。

**鉄剣** 木棺頭部東側の棺外にあって、棺長軸と身部を交差するように副葬されていた鉄剣である。

鉄剣は、側辺や茎付近を中心に錆化がすすんでいるが、全長22cmを測る。なお、茎長は7.1cmである。この鉄剣の特徴として、茎が全体の比率からすると非常に長く、身部は中央の錆が明瞭でなく、断面形に見られるように錆が目立たない扁平な紡錘状をなす形態となることである。

また、身部から茎にいたる間のは斜め方向に流れる様に移行し、明瞭に区別が認めにくい。

このように、この鉄剣は剣としてはかなり小型であり、しかも茎が長いなどの点から機能としてはむしろ槍先として使用された可能性が高いと考えられる。

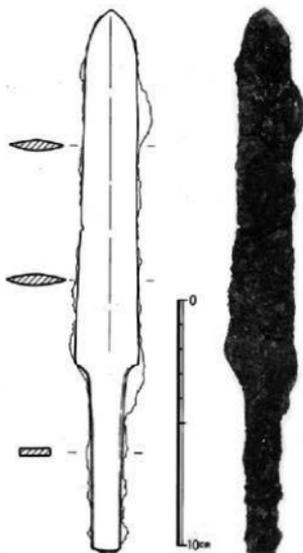


Fig.25 木棺墓副葬鉄剣実測図 (1/2)

### 3. 福岡市西区樋渡甕棺遺跡出土の鉄剣及び 細形銅剣に付着する織物について

京都工芸繊維大学名誉教授 布目順郎

標記の織物（第1図）について調査したので、ここにその結果を報告する。鉄剣はK5号甕棺墓、細形銅剣はK77号甕棺墓から発見されたものである。時代は弥生中期後半とされる。

#### 1. 材質

材質調査は繊維断面形によった。断面作成は従来と同様パラフィン切片法によった。結果は第2図にみるように、明らかに家蚕のものである。

#### 2. 織り密度と繊維断面計測値による産地推定

出土の両織物は第1図にみるように、平絹であり、その織り密度と繊維断面計測値は第1表に示す通りである。

まず織り密度をみると、弥生中期後半の他遺跡から出た平絹9種類での織り密度の平均(25.4×16.8)と大差のないものである。

因みに、弥生時代の麻織物6種類での平均密度は20.5×14.2であるから、それらに比べれば細密である。

筆者はかつて、弥生中期後半に属する他の遺跡から出た9種類の平絹を、織り密度の点からすべて日本製とみなしてきた。したがって、本遺跡出土の両平絹もまた日本製とみて差支えないと思われる。

次に、本遺跡の平絹の繊維断面計測値を漢代のそれ（第2表）と比較（比較は経緯の平均値で行ない、差の有意性検定は省略する）してみると、次のようになる。

**鉄剣の絹：**完全度については、漢代4墓の絹での値のいずれよりも小さい。断面積については、漢代4墓のうちの陽高、楽浪の値よりは大きく、馬王堆、ノイン・ウラの値よりは小さいが、どちらかといえば楽浪の値に近い。

**銅剣の絹：**完全度については、漢代4墓の絹での値のいずれよりも小さいが、どちらかといえば陽高及び楽浪、とくに楽浪の値に近い。断面積については、経緯ともに100  $\mu^2$  を越える大きな値である。かといって野蚕のものでないことは繊維断面形によって明らかである。この値（経緯の平均で113.35  $\mu^2$ ）は漢代4墓でのいずれよりも大きく、漢代4墓のうち最も小さな値を示す陽高の約3倍、最も大きな値を示すノイン・ウラの約1.6倍である。この値は日中両国の現代での値に近いものであり、中国宋代の値にも比較的近い。

鉄剣の絹での完全度が漢代4墓の絹でのいずれよりも小さいことは、その繊維が日本産であることをあらわしているともて差支えないであろう。断面積が楽浪の値に近いことは、その繊維を生産した蚕が楽浪系三眠蚕であることを想わせる。おそらく、そのような種類の蚕が出土地のあたりで飼育されていたと思われる。

銅剣の絹の場合は大分事情が異なる。その完全度は楽浪絹の値に近い。しかし、だからといってそれを産した蚕が楽浪系品種であったとはいえない。というのは、断面積のほうは異常に大きくて、これは三眠系品種に限られていたと考えられる楽浪系品種とは思われず、むしろ四眠系品種の可能性が考えられるからである。

繊維断面計測値によって比較しようとする場合に、完全度よりは面積によるほうが信頼度がより高いことについてはしばしばのべてきたところであって、その断面積が異常に大きいことからすれば、華中あたりの産かとも思われる（華中産の蚕糸は一般に繊維断面積が大きい）。しかし、すでにのべ

たように、織り密度からみれば日本的である。したがって、その当時本遺跡のあたりでそのような蚕品種（おそらく華中あたりの系統の四眼蚕）が育成されていたと考える以外にない。

このような改良品種が当時存在したこと自体驚異的といわなければならない。そうした品種改良が中国本土で行なわれたか、それとも日本で行なわれたかについては、そのいずれともいえない。

終りに、本調査の機会を与えられた福岡市教育委員会に深く感謝する。

文献

- 1) 布日順郎「養蚕の起源と古代絹」藤山潤、1979

Tab.2 橘波甕棺遺跡出土の鉄剣及び細形銅剣に付着する平絹の繊維断面計測値と織り密度

資 料	経緯の別	繊維断面についての計測値			織糸数 (対1cm)	経糸数と 緯糸数の比	織糸の巾 (mm)
		完全度(%)	面積( $\mu^2$ )	供試繊維の数			
鉄剣に付着する平絹	経	48.9±4.91	48.8±4.43	24	25	2.08	0.30—0.50
	緯	49.0±3.66	54.8±4.73	20	12		—
細形銅剣に付着する平絹	経	50.9±3.65	119.4±14.70	30	25	1.00	0.40—0.45
	緯	48.9±2.56	107.3±11.81	30	25		0.20—0.25

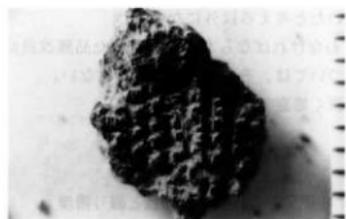
備考 鉄剣は第5号甕棺、細形銅剣は第77号甕棺からのもの。時期は弥生中期後半。

Tab.3 漢代の平絹における繊維断面計測値

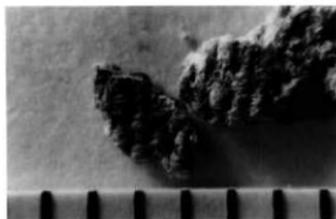
遺跡名	繊維横断面についての計測値	
	完全度(%)	面積( $\mu^2$ )
陽高県(山西省)	50.9 (10)	37.1 (10)
楽浪	50.8 (23)	49.8 (23)
馬王堆1号	— (53.9) (5)	65.5 (69.3) (5)
ノイン・ウラ	53.9 (20)	73.0 (20)
パルミラ	—	—

- 備考 (1) 馬王堆の繊維横断面計測値は『考古学報』(1974年第1期)にあるもの(ただし、〔 〕内の数値は筆者が同学報に示された繊維横断面写真をもとに算出したもの)。  
 (2) 本表の数値にはマフタでのものは含まれていない。  
 (3) ( ) 内の数値は資料数。

Fig.26 稲波寛性遺跡出土の平網



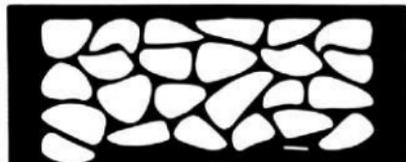
A. 鉄剤に付着する平網



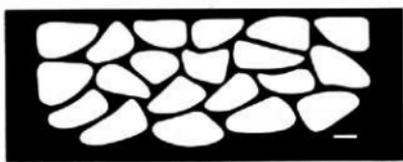
B. 細形鋼剤に付着する平網

Scale : いずれも 1 mm

Fig.27 出土平網の縦横断面転写図 (個々の断面転写図を無秩序に並べたもの)



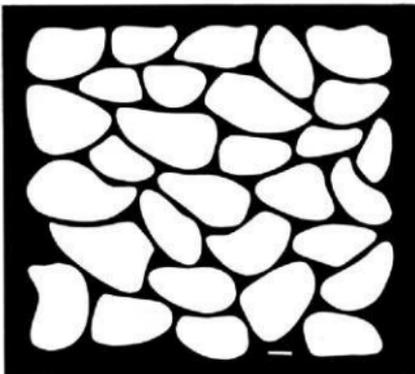
A



B



C



D

A 鉄剤の平網の経糸 B 同じ平網の緯糸 C 細形鋼剤の平網の経糸  
D 同じ平網の緯糸 Scale : いずれも 5 μ

#### 4. 単独発見の銅剣 (Fig.28) (PL.4)

墳丘墓の北側に位置し、過去の土取りによって墳丘が失われた部分で遊離して出土した。

銅剣は、表面近くに埋蔵されていたため風化が進んでおり、節帯以上の側辺部や先端部分を欠失する。現存の全長は30.2cmであるが、推定では、31.2cm程度と考えられる。

體は両面ともにほぼ対称である。身部の最大幅は推定4.5cm程度と考えられ、1ヶ所しかない節帯部分にあたる。節帯以下関部までは先端部とは角度を変えた研ぎだしが行われ、刃部を形成している。この状況から考えると下部の節帯は当初から存在しなかった可能性がある。

また、背部の鑓は関部まで通る形態となろう。関部の幅は、推定4.2cmを測る。

茎は、分厚い角棒状をなし、長さ2.6cmを測り、中央に目釘穴と考えられる、内径4mmほどの1孔を穿っている。この銅剣の出土した地点に最も近いのはK01号要棺墓である。

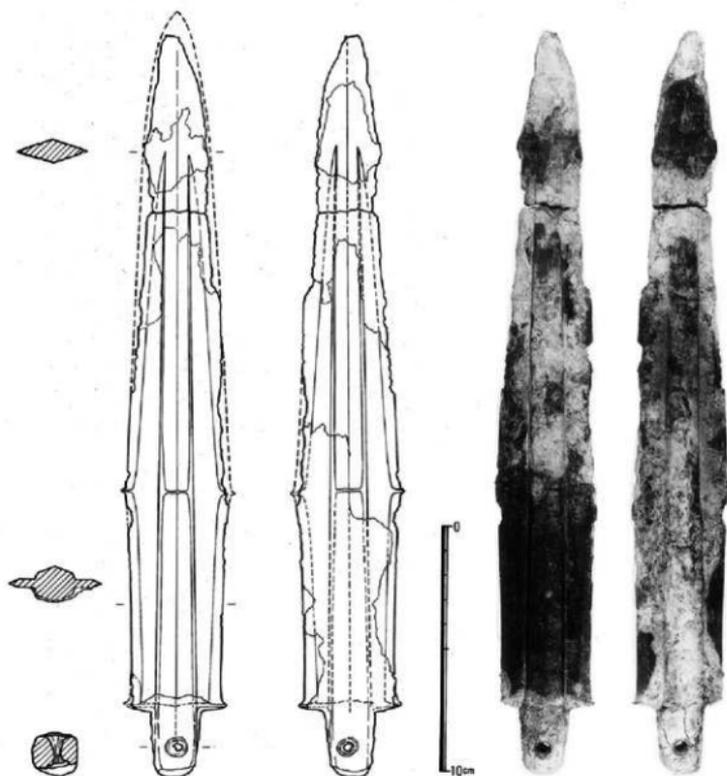


Fig.28 単独発見銅剣実測図 (1/2)

Tab.4 第3次調査遺構一覧表

番号	単棺	形状			組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期(型式)	備考
		複棺			上蓋	下蓋					
		接口式	覆口式	吞口式							
K1	/	○	/	/	甕 (打突き)	甕	大型	N-38°-E			
K2	○	/	/	/	/	甕	大型	N-215°-W	/	中期後半	
K3	/	○ <sub>?</sub>	/	/	甕 <sub>?</sub>	甕	小型	N-11°-W	/		
K4	○ <sub>?</sub>	/	/	/	/	甕	大型 <sub>?</sub>	N-17°-W	/		
K5	○ <sub>?</sub>	/	/	/	/	甕	大型	N-96°-W	/	中期末	
K61	/	○	/	/	甕	甕	大型	N-23°-W	/	中期中葉	鉄剣I
K62	/	○	/	/	甕 (打突き)	甕	大型	N-110°-W	/	中期後半	素環頭太刀 前漢鏡I
K63	/	○	/	/	甕	甕	小型	N-78°-W		中期後半	
K64	/	○	/	/	甕 (打突き)	甕	大型	N-27°-W	/	中期末	素環頭刀子I
K65	/	○	/	/	甕	甕	大型	N-23°-W	9°	中期後半	
K66	/	○	/	/	甕	甕	小型	N-35°-W	5°	中期末	
K67	/	○	/	/	鉢	甕	大型	N-30°-W	10°	中期後半	
K68	/	○	/	/	甕	甕		N-77°-E	1°	中期後半	
K69	/	○	/	/	壺 (打突き)	甕	大型	N-42°-W	/		
K70	/	○	/	/	甕 (打突き)	甕 (打突き)	大型	N-25°-W	37°		
K71	/	○	/	/	甕	甕	大型	N-42°-E	10°	中期後半	
K72	○	/	/	/	/	甕	大型	N-18°-W	7°	中期後半	
K73	/	○	/	/	壺 (打突き)	甕	大型	N-13°-W	29°		

K75	/	○	/	/	甃	甃	大型	N-17-W	0°	中期中葉	楕形銅剣1、青銅甃把銅飾1
K76	/	○	/	/	甃	甃	大型	NS	3°	中期	
K77	/	○	/	/	甃	甃	大型	N-14-W	0°	中期中葉	楕形銅剣1
K78	/	/	/	○	甃 (打欠き)	甃	大型	N-10-W	/	中期後半	
K79	/	○	/	/	甃	甃	中型	N-7-W	/	中期	下腹に赤色顔料が多量に残る
K86	/	○	/	/	鉢	甃	大型	N-67-E	19°	中期後半	
K87	/	○	/	/	壺 (打欠き)	甃 (打欠き)	小型	N-27-E	/	中期	
K88	/	○	/	/	鉢	甃	大型	N-27-W	23°	中期後半	
K89	/	○	/	/	鉢	甃	大型	N-17-W	/	中期後半	
K90	/	○	/	/	甃	甃	小型	/	15°	中期後半	墳丘墓断面にかかる
K91	○	/	/	/	/	甃	大型	N-21-E	10°	中期後半	
K92	/	○	/	/	甃	甃	小型	N-41-E	/	中期末	
M1	/	/	/	/	/	/	/	N-11-W	/		本器系 鉄剣1、碧玉・銅劍銅板各1、 ガラス小玉系、水晶製母蓋玉2

## 5. 小 結

以上、副葬遺物を出土した榑渡墳丘出土の甕棺墓、木棺墓について略述した。以下では記述上前後することとなるが榑渡墳丘墓の規模と構築状況についてふれておきたい。(Fig.3,4)(PL.4)

5C代の帆立貝式古墳である榑渡古墳の調査において、後円部北側の破壊坑を清掃している際に墳丘下部に後のK01甕棺墓にあたる甕棺墓が破片ではなく、すべて原位置を保って検出されたことが墳丘墓ではないかという疑問へつなげた。その後、古墳墳丘の調査をすすめる中で墳丘長軸にあたる東西方向の土層断面図を作成する作業においてはつきりと墳丘墓であることを確認した。

**構築状況** 土層図でまず特徴的なのは、ほぼ墳丘の両端部から中央に向かってせりあがるようにしてのびる厚さ10cm程度の黒色土層(黒色バンドとよぶ)である。これを境として上部と下部の土の堆積状況がまったく異なることに気付いた。つまり黒色バンドより上部は竊状の版築構造をもち、さらに表面に葺石を伴う点で明らかに古墳墳丘と認定できるものであるが、これより下部の堆積はこれ以前のものである。さらに土層の観察をすすめると土層中央部の墳丘上面から近世墓の墓壇とともに掘り込まれた大型の墓壇があることに気付いた。これらは、K61・79号甕棺墓のものであることが明らかであった。また、この土層と直交方向に設けた南北土層断面でもK90号甕棺墓が頂上部から掘り込まれていることが判った。このことから、5C代の榑渡古墳は築造当時墳丘として遺存していた墳丘墓をそのまま利用して、上部にさらなる盛土をして墳丘としたことも明らかとなった。

また、土層断面図の中で、SAとした暗茶褐色～黒褐色粘質土は土層中に炭化物を多く含み、弥生時代前期末ころの生活址である。この土層の東西は削り取られたように層が切れており、この上に暗褐色砂質土(SB)を薄く敷く。更にこの上面には墳丘の大半を占める黒褐～暗茶褐色土(荒砂・円礫・基盤土である淡黒褐色砂質粘土(SD)ブロックを混入)を厚く盛り上げる。しかしながら盛土の際に版築を意識した部分は殆ど観察できなかつた。このあと墳丘の裾部に淡褐色土(SF)を薄くかけて終了である。**墳丘規模** 墳丘の規模については、遺存した墳丘を全面露出してコンタ-図を作成してはいないので甕棺墓の分布範囲・分布状況およびかろうじて観察された東西及び南北の土層断面図から推定した。

まず甕棺墓は、中期後半から後期初頭にかけ30基以上が埋置されたと考えられるが、これらの配置はその主要なものは南北方向がもつとも多く、次いで東西方向、さらに不定方向に配置されており、これらの分布の範囲がほぼ長方形に近いことが考えられる。

さらに、土層断面では東西・南北ともに約2m幅の土層を残して周辺を掘り下げたためこの距離間でしか復元の材料がないこととなる。しかしあえて復元を試みることにする。東西断面の黒色バンドの下面で25cm単位に標高をとり、さらに南北方向の土層断面でも同様の作業を行い、土層幅2m間に平行にはわせた。この際南北土層断面では標高25mの地点から黒色バンドが平坦な堆積を示すことから墳丘の頂上部は平坦に近い形状であったと考えた。

また、東西断面では東端部で黒色バンドの端部が弥生時代後期前半代の溝遺構に切られるしており、東側の墳丘裾が明らかである。さらに、西側でも黒色バンドが一度緩やかに下降する部位が認められ、これが墳丘の西側裾と考えることができる。

これらのことから2m幅の土層以外の部分についても先の甕棺墓等の分布状況から考えた墳丘の形が長方形であろうとの認識で同レベルの等高線図を作成した結果、東西約25、南北約27m、高さ約2m規模の長方形墳丘墓と推定される。

これ以外の部分については第3章で触れることにしたい。

## 第二節 第4・5次調査

**調査概要** 第4・5次調査では、ほぼ3群の弥生時代前期末から中期前半にかけての墓地が検出された。

それは、調査区の南西部に位置するH17・18地区にある第1群(金海式甕棺墓32基以上)とこれより東側約200mのところ分布する第2群(G16地区、板付Ⅱ式壺をともなう前期末甕棺墓20数基)及び第2群から北東へ約50mの地点に分布する所謂古武高木地区(F15地区)の第3群である。

第1群は、南側の浅い谷部の辺縁にそって東西に長く形成された墓地であり、東西約60m、南北30mの範囲に32基の甕棺が営まれている。副葬品はまったく出土していない。

第2群は、小規模な墓地であるが頭部に羽状文を巡らす壺形土器が一部に見られ、墓地の形成が弥生時代前期末に始まったことをうかがうことができる。副葬品はまったく出土しないが、甕棺墓から大型の磨製石剣および磨製石鎌の先端部が出土している。

第3群は、第4・5次調査を含めると甕棺墓50基、木棺墓4基が確認された。このうち、大小の規模が明らかな第4次調査では、甕棺墓34基のうち大型棺16基、小型棺18基で構成される。また、第5次の確認調査の結果から墓地はさらに北側に約20mほど広がっており、東西に長く、面積が約1,500㎡規模の墓地と考えられる。しかしながら、墓地の東半部分は小型棺が多く、埋葬方向などの規則性が少ない。この点で、大型の甕棺墓、木棺墓は墓地西側に集中し、埋葬施設の主軸を概ね磁北から東へ30°~40°ほど振った方向に向けることが明らかであり、墓地の計画的造営がなされたものと考えられる。

第3群では、先の甕棺墓・木棺墓のうち7基の甕棺墓(K100.109.110.111.115.116.117号)と4基の木棺墓(第1~4号)のすべてから副葬品が出土している。

甕棺墓での副葬品の構成は、基本的に細形銅剣1口を伴う甕棺墓と更にこれに翡翠製勾玉・碧玉製管玉を伴う甕棺墓(K117号)の1群と装身具(翡翠製勾玉・碧玉製管玉・銅劍)のみの1群が区別される。

また、木棺墓は、細形銅剣のみの第4号、細形銅剣と碧玉製管玉をもつ第1号、細形銅剣に翡翠製勾玉・碧玉製管玉を伴う非常に大型の墳墓である第2号などが見られるが、これらを遥かに凌ぐ豊富な副葬品を出土したのが第3号である。ここでは、細形銅剣2口、細形銅矛1口、細形銅文1口、それに多鈕細文鏡1面、翡翠製勾玉・碧玉製管玉が出土した。そしてそれぞれの木棺墓には小壺が副葬されており、木棺墓の造営時期を知ることができる。また、甕棺墓・木棺墓には大型の標石を伴うものがある。なお、今回報告には有柄石剣を出土したK125号甕棺墓もあわせて収録した。

### 1. 甕棺墓

#### 1. K100号甕棺墓 (Fig.31~33) (P.L.6)

墓地西端側に位置し、主軸をN-17°-Eにとる。上甕に口縁打欠きの大型甕、下甕に大型甕を使用する覆口式の大型甕棺墓である。墓壇は、縦横・横穴ともよく残り挿入状況がよく判る。埋置角度は、25.5°をはかり、かなりの急角度で埋置されている。下甕の中央部で切先を南に向けて細形銅剣1点が出土した。

**上甕** 上甕は、口縁部を打欠く大型甕で口縁直下以下が残る。大型の底部から球状に膨らむ胴部はほぼ垂直に立ち上がる。残存する最上部で径73.9cmを測り、胴部最大径が76.6cmとなる。口縁直下では浅い3本の平行な横沈線を巡らし、胴部の立ち上がる部位にも4本単位の横沈線を巡らしてこの沈線

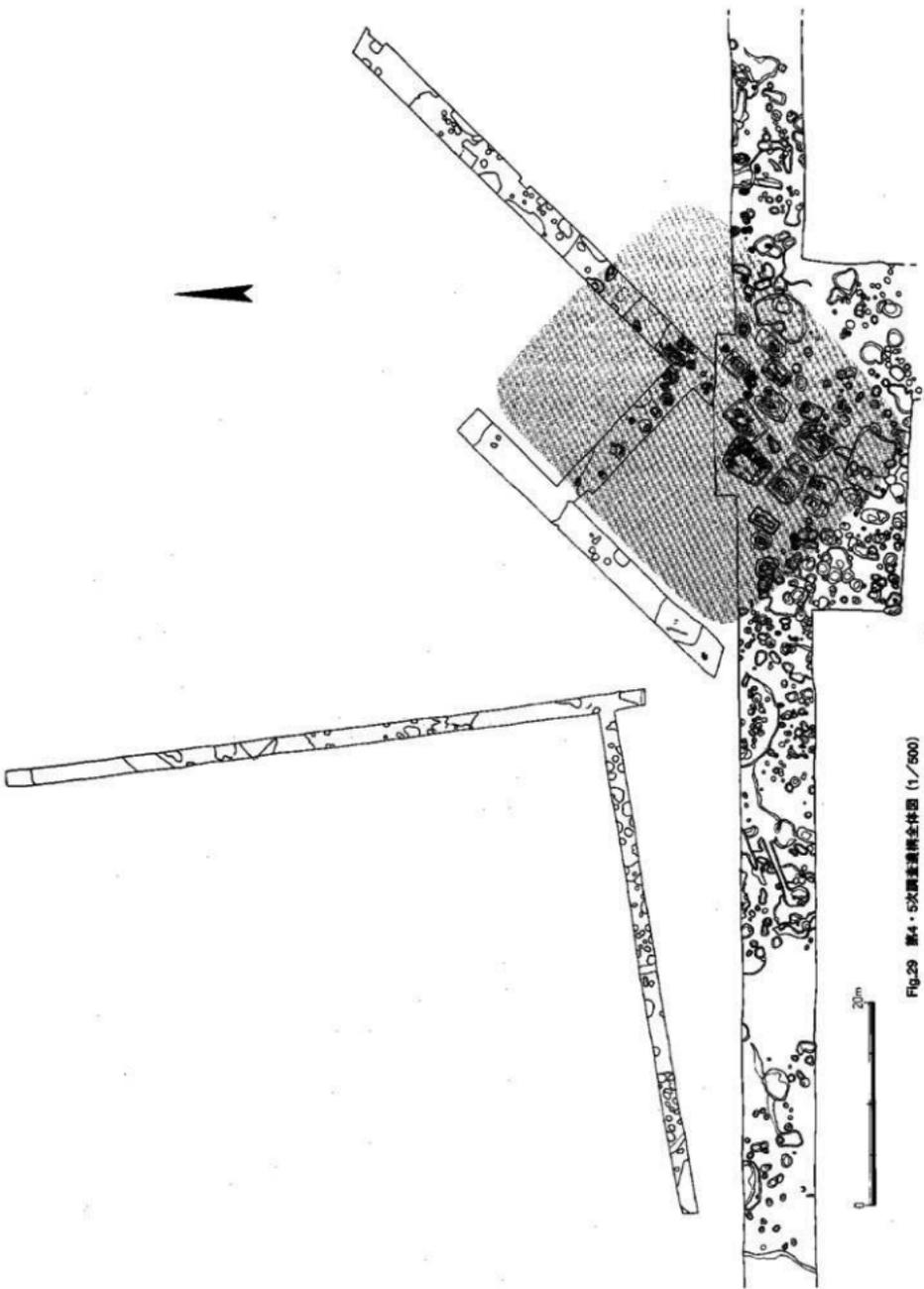


Fig.29 第4・5次調査遺跡全体図 (1/500)

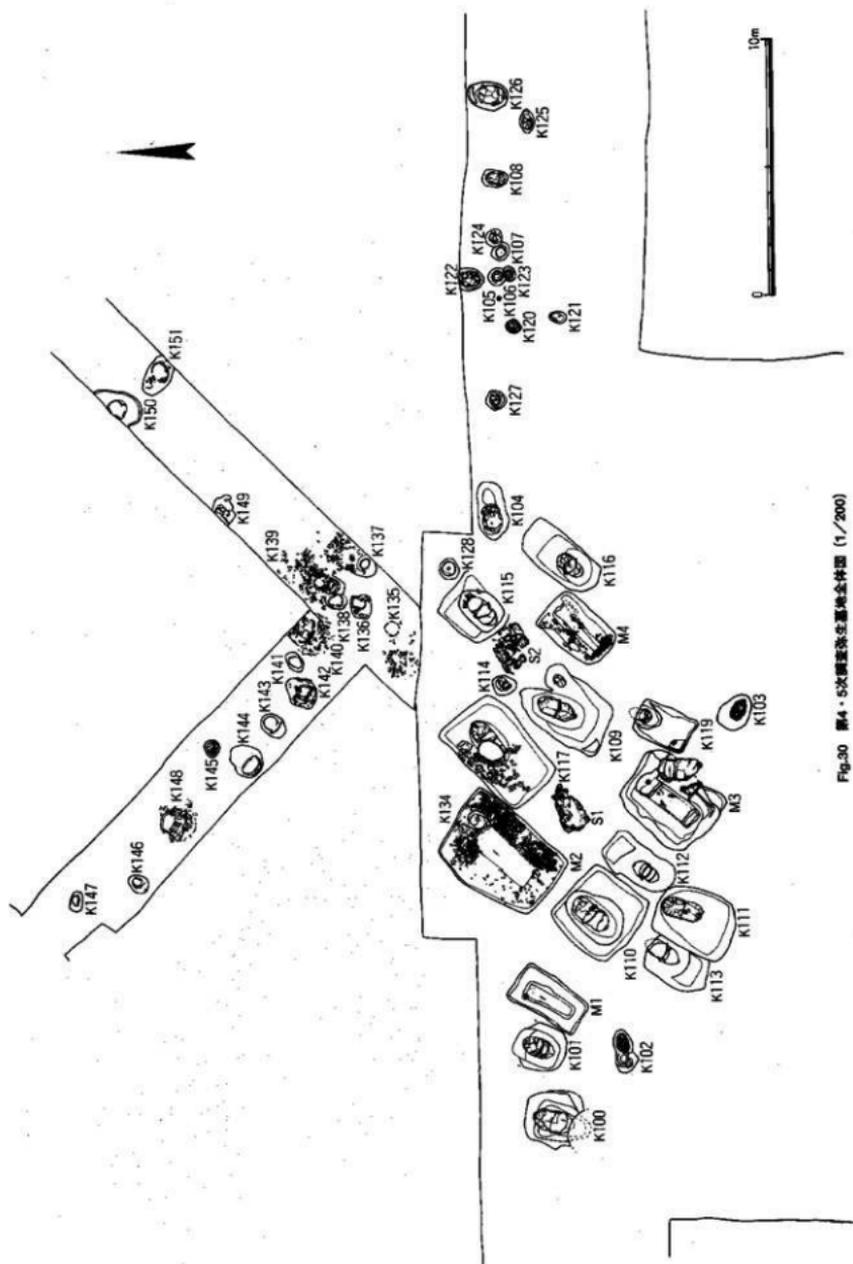


Fig. 30 第4・5次調査採生動物標本地図 (1/200)

間を浅い4本の縦沈線で区画している。器色は、外面が淡褐色、内面暗褐色を呈する。外面4ヶ所に黒斑あり。器面調整は外面の胴部中央にヘラナデ、他はナデである。内面は全てナデである。胎土に1~2mmの石英砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。残存器高89.6cm、底部径19.2cmを測る。

下 甕 下甕は、肥厚する口縁部の口唇内外に刻み目を施す大型甕である。分厚くて大型の底部から膨らむ胴部は中位以上でやや締まり、頸部付近で外反する。口縁部下および胴部中位より上がった位置に3本単位の横沈線を巡らし、この間を浅い3本単位の縦沈線で繋ぎ、5ヶ所に区画している。

器色は、内外面ともに暗褐色を呈し、胴部上位と下位に黒斑が1ヶ所認められる。また、口縁上面から外面全体にかけて赤色顔料が認められる。

器面調整は、外面口縁部に横ナデ、他の部位はナデで、胴部の一部にヘラ削りを施す。内面は、口縁部ナデで、一部横ハケ目を施す。これ以下はナデである。

また胎土には径1~2cmの石英砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。

また口縁は、外口径86cm、内口径77.5cmを測る。

器高は、101.4cmを測り、胴部の最大径は83.6cmとなる。

また底部径は16.8cmで、厚さ4cmを測り、非常に分厚いものとなっている。

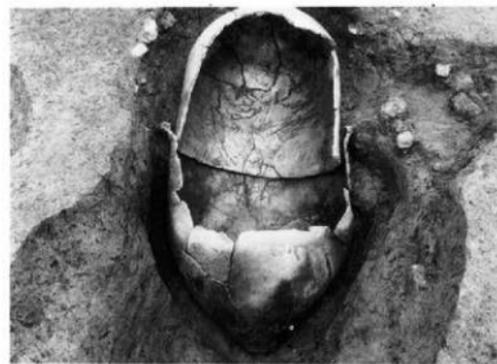
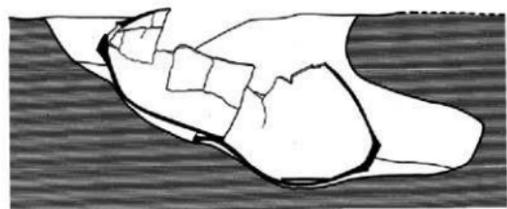
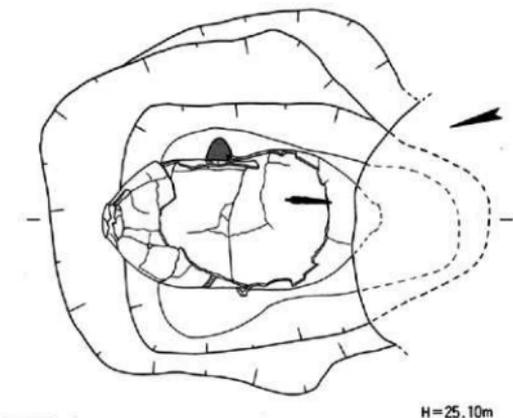


Fig.31 K100号甕器出土状況図 (1/30)

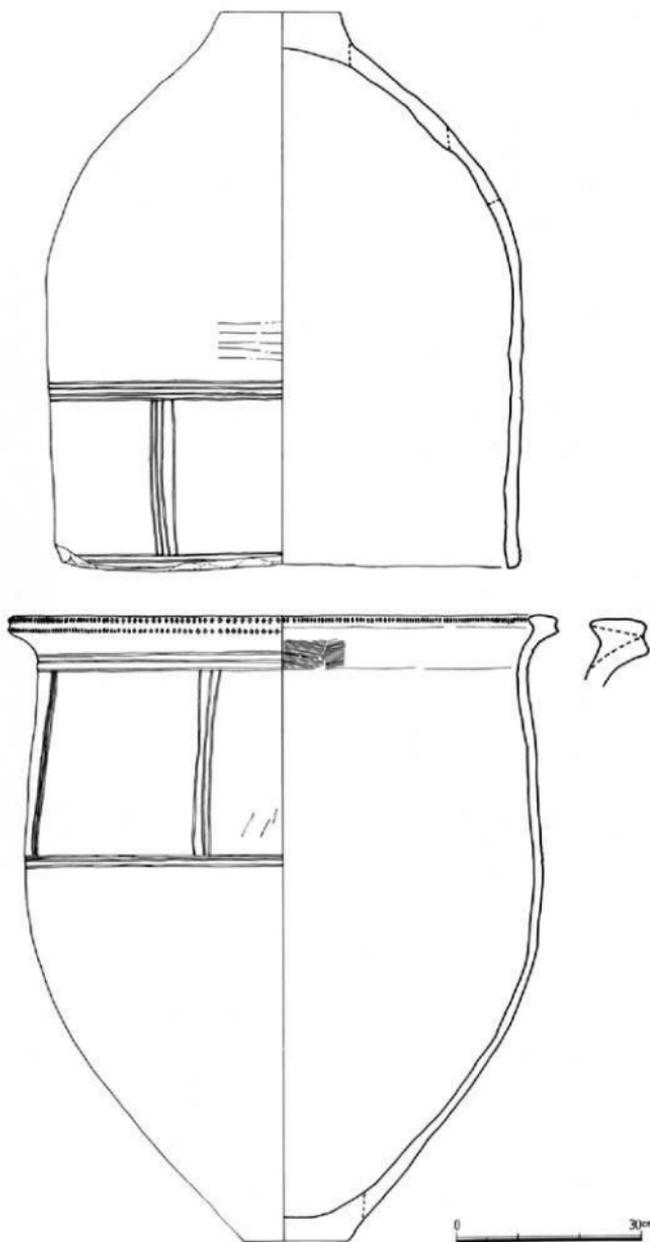


Fig.32 K100号甕棺実測図 (1/8)

副葬品 細形銅剣 下甕のはば中央で出土した。全長29.5cmをはかる銅剣である。胴部の片面及びび茎の一部は腐食によると考えられる錆で欠損している。他の部分は全体に保存状態は良好である。器色は全体に淡い青緑色を呈し、光沢を放つ。また、剣方周辺には黒色の物質が薄く付着する。

身部では、樋が左右非対称であり、切先までの長さは4.2~4.5cmを測る。切先は損傷したものが十分研ぎ直されていないように鈍いが斜め方向に研ぎ痕が残る。また身の刃部以外は背部に平行の研磨が見られる。

剣方は、長さ3~3.2cm、中央部幅2.85cmを測るが、節帯の下部のものは見つからない。身幅は3.15cmを測る。

背部の錆は、剣方以下には及んでいない。また、茎には着柄のための径1mm程度の細い紐が巻きつけられているのが観察できる。

## 2. K109号甕棺墓(Fig.34~36)

(PL.7)

大型墳墓の集中する墓地のほぼ中央部に位置し、主軸をN-24°-Eに向ける。上下甕ともに大型の甕形土器を使用する接口式大型甕棺墓である。

墓壇は、拳大の転礫を多く含む地山に掘り込まれ、規模は長短が2.5×2.5m程度の方形をなし、2段に掘削されていたと考えられる。

甕棺の埋置角度は、約20°を測り、かなりの急角度で埋置されている。

上下甕の接口部付近で碧玉製管玉10個が出土したが、小型の製品であり、他の遺構での出土例から首飾り

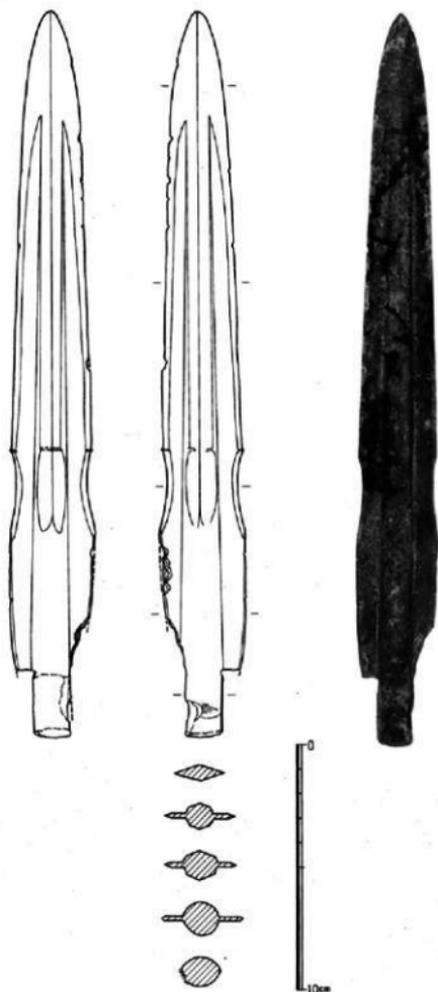


Fig.33 K109号甕棺墓副葬品銅剣実測図 (1/2)

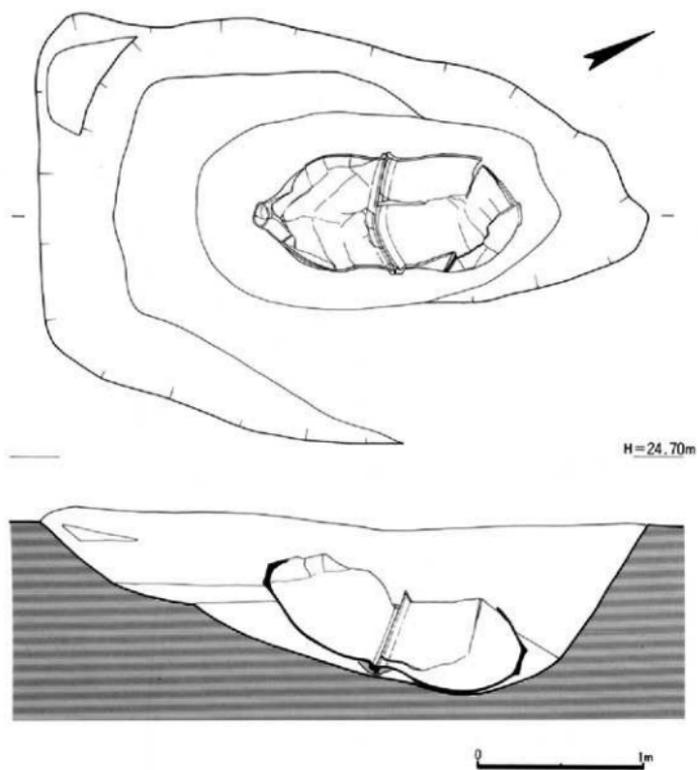


Fig.34 K109号甬棺墓出土状况图 (1/30)

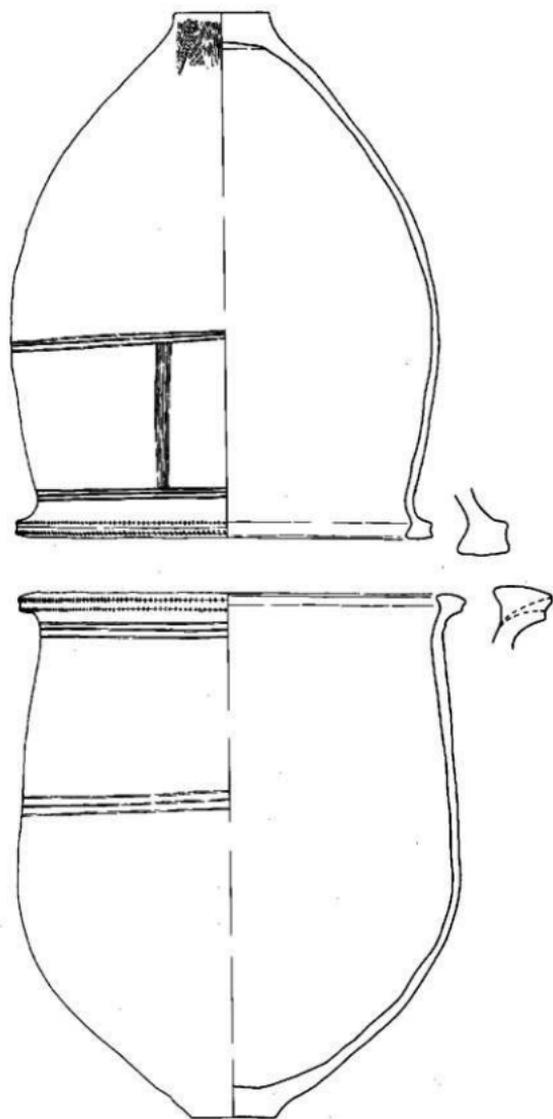


Fig.35 K109号墓棺灰陶器 (1/8)

と考えられることから出土数のうえで不足する数である。

上 甕 上甕は、肥厚する口縁部の外側口唇部に刻み目を施す大型の甕形土器である。

径15cm、厚さ4.5cmの頑丈な底部から半球状に膨らむ胴部は、中位から口縁に向かって締まり、上端で小さく外反して口縁部に接続する。

口縁部外面は強いナデで緩く窪み、また口縁部内面は粘土の接合部が小さくへこみとなって緩くならず。口縁直下と胴部中位より上がつた位置に、3本単位の平行な横沈線を施し、これらの間を繋ぐ5本単位の縦沈線が5個所に引かれ、全体を4つに区画している。

上甕の器色は、外面明るい褐色～暗い褐色と変移し、内面は明るい褐色～淡橙色を呈する。器面調整は、外面で底部の一部にハゲ目が残るが、これ以外の部位は全てナデ調整を施し、この後に沈線による装飾が行われている。また、内面は全てナデ調整であり、口縁内面は横ハゲ目調整後に行っている。胎土には1mm大の石英、長石の砂粒を多く混入する。焼成は、堅緻である。

口縁部の外口径は、65.9cm、内口径57.2cmを測る。器高は、82.4cmで、胴部の最大径66.8cmを測る。

下 甕 下甕は、上甕と同様の形態をなし、やや法量のうえで大型である。底部径が12.8cm、厚さ5cmを測る底部から半球状に膨らみ、胴部中位からやや内傾気味に立ち上がり、口縁部付近で小さく外反する。肥厚する口縁部は、横ナデ調整後に外面口唇の上下に刻み目を施すが、上下の刻み目は同時に施されたものではない。また、口縁下と胴部中位よりやや上がつた位置にヘラ工具による3本単位の平行する横沈線を巡らす。沈線の継続部は必ずしも順調に繋がることなく、ずれるものがあり、やや間隔が緩やかである。なお、下甕には縦沈線は見られない。

器面調整は、外面が口縁部・頸部付近では強い横ナデで、これ以下の胴部でナデ調整を施す。内面は、全体にナデ調整で、内底部に明瞭な指おさえが見られる。

器色は、外面で明るい褐色～暗褐色、内面褐～暗褐色を呈する。また、外面胴部の下半に黒斑が見られる。同様に内面の底部を除く殆どの範囲に強い黒斑が見られる。

胎土には径1～2mm大の石英、長石の砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。

口縁部は、外口径70.8cm、内口径61.8cmを測る。また、器高は82.2cmで、胴部の最大径79.1cmを測る。

副葬品 碧玉製管玉 10個が出土したが、そのサイズから首飾りの一連のものと考えられるが、他の墳墓出土の例からは数の上で数十個の場合が多く見られることから失われたものがあるとかんがえられる。管玉は、最大のもので全長9.2mm、最大幅3.4cmであり、最小のサイズでも全長6.4mm、最大幅3.3mm程度であり、長さよりもむしろ幅についての均一性が高い。つまり、玉の最大幅の差は3.0～3.4mmという極めて差の小さいものである。

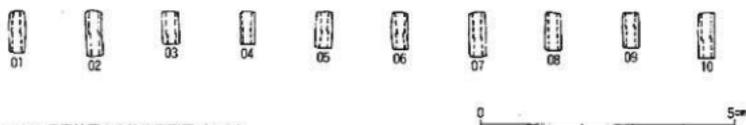


Fig.36 K109号甕棺墓出土管玉実測図 (1/1)

Tab.5 K109号甕棺墓 出土玉類計測表 (mm)

番号	種類	最大径		石材	備考	番号	種類	最大径		石材	備考
		長さ	幅					長さ	幅		
01	管玉	8.3	3.1	碧玉		06	管玉	7.2	3.3	碧玉	
02	〃	9.2	3.3	〃		07	〃	8.8	3.3	〃	
03	〃	6.5	3.3	〃		08	〃	7.4	3.1	〃	
04	〃	6.7	3.0	〃	片割れ欠く	09	〃	7.0	3.3	〃	
05	〃	7.4	3.2	〃		10	〃	9.2	3.4	〃	

### 3. K110号甕棺墓 (Fig.37~41) (PL.7・)

墓地西側に他の墳墓と並列して営まれる。埋置された主軸の方位を $N-40^{\circ}-E$ にとる。

上甕に大型甕、下甕に口縁部打欠きの大型甕を使用する覆口式の大型甕棺墓である。

墓壇は、長短辺がほぼ3.1mを測る方形を呈し、内部に甕棺を埋置するための長円形の墓壇をさらに掘り込んでいる。また、埋置角度は、 $27.5^{\circ}$ と急傾斜で埋置されている。

下甕の口縁部よりやや下がった位置に銅劍2、翡翠製勾玉1、碧玉製管玉74個が副葬されていた。出土状況から、玉類は勾玉を親玉とする一連と考えることができよう。

上甕 上甕は、大型の底部から、半球状に膨らみ、胴部中位以上で内傾しながら立ち上がる甕で、口縁部に従って外反する。口縁部の内外口唇には細い、長めの刻み目を施す。口縁端部の粘土による肥厚は弱い。

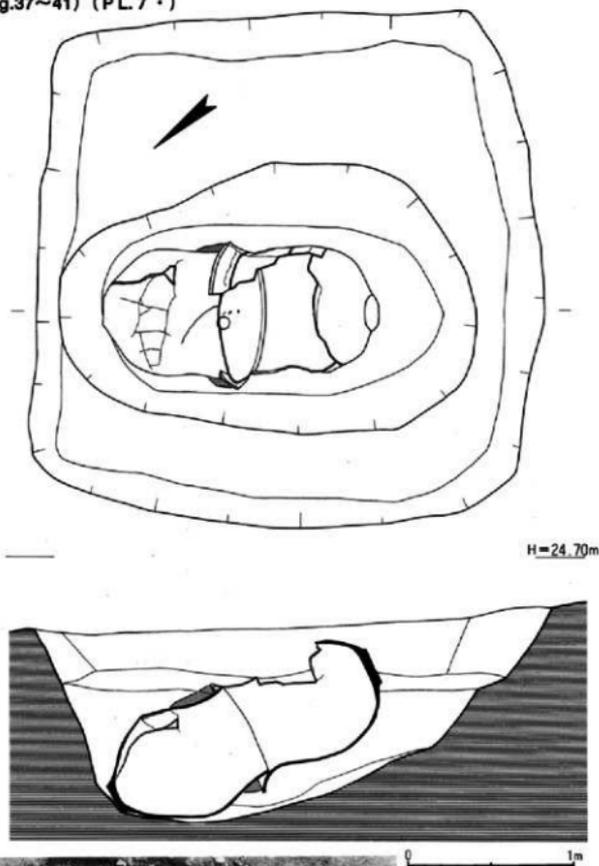


Fig.37 K110号甕棺墓出土状況図 (1/30)

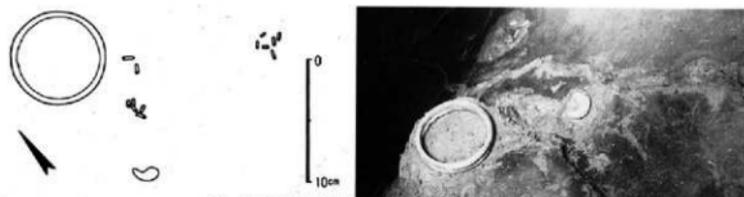


Fig.38 K110号鍔形基銅器遺物出土状況図 (1/4)

口縁部のやや下がった位置と胴部中位よりやや上がった位置に低い断面三角形をなす突帯1条をそれぞれづつを巡らす。器色は、内外面ともに赤褐色を呈し、外面及び口縁に黒色顔料を塗布する。また外面胴部中央に黒斑あり。器面調整は、内外面ともに口縁部・突帯部横ナデで、他はナデである。胎土に0.5~1cmの石英砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。口縁部は、外径85.7cm、内口径78.2cm、器高95.1cm、胴部最大径77.2cm、底部径22.2cmをそれぞれ測る。

下 壺 下壺は口縁部を打欠く大型甕である。安定した底部から半球形に膨らむ胴部はほぼ中位で最大径をなし、やや内傾しながら口縁にいたり外反する。全体に整美な造りで、器壁も均一に調整されている。胴部は、突帯や沈線文で飾ることなく素文である。

器色は、外面で黄褐~淡褐色、内面明るい赤褐~暗褐色を呈する。また、外面の胴部下半には対交する位置に黒斑が見られるのと内面上部にも強い黒斑が見られる。

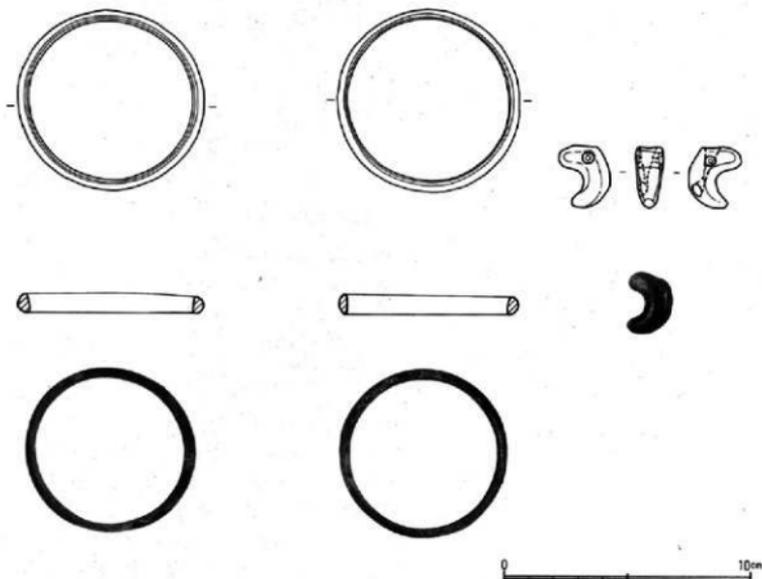


Fig.39 K110号鍔形基銅器銅剣・勾玉状基銅器 (1/2)

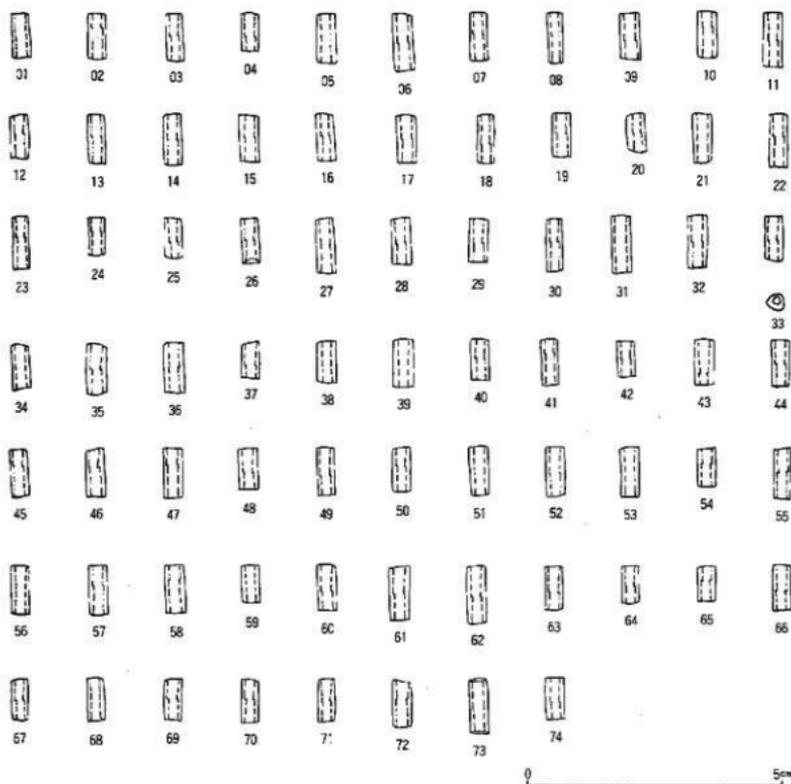


Fig.40 K110号銅棺墓出土管玉実測図(1/1)

器面調整は、外面で上位は不明であるが、下位は細かい縦ハケ目を施す。内面は、上部が横方向の細かいハケ目調整、中央部は横～斜め方向のケズリ、そしてこれ以下は荒れのため明瞭ではないが、ナデ調整と考えられる。

胎土には径1mm大の石英、長石砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。残存する上端部は、内径69.6cmを測り、器高94.5cm、胴部の最大径78.3cm、底部径18cmを測る。

**副葬品 銅 銅 玉類**と殆ど近接して2個が重なって出土した。

左側のものは外形がややひずんでいるが、いずれも素環の銅製銅である。いずれも断面形が半円状をなすもので、縁辺部は全体にやや黒ずんでいる。現在の平面図の状態がもつとも安定している。

法量では、左側資料が外径で7.35～7.6cm、内径で6.5～6.65cmを測る。なお、重量は37.85gを測る。また、右側資料は、外径7.45～7.4cm、内径で6.65～6.6cmを測る。また、重量は、35.8gを測るものであり、いずれも保存状況が非常に良好である。

**翡翠製勾玉** やや明るい緑色を呈する勾玉である。形は頭部が大きく、尾部が短いずんぐりしたものである。孔は、通常的位置の他に頭部上端から背部の下端に貫通する一孔がある。

Tab.6 K110号壙棺墓 出土玉類計測表 (mm)

番号	種類	法 量		石 材	備 考	番号	種類	法 量		石 材	備 考
		全長	最大幅					全長	最大幅		
01	管玉	8.9	3.7	*		38	管玉	8.4	4.0	*	
02	*	9.1	3.7	*		39	*	9.5	4.0	*	
03	*	9.3	3.7	*		40	*	8.3	3.8	*	
04	*	7.2	3.8	*		41	*	9.3	3.5	*	
05	*	9.8	4.1	*		42	*	7.5	3.7	*	
06	*	11.5	4.1	*		43	*	9.0	3.8	*	
07	*	9.5	3.8	*		44	*	9.3	3.7	*	
08	*	10.0	3.4	*		45	*	10.0	4.0	*	
09	*	9.8	4.1	*		46	*	10.0	3.6	*	
10	*	8.9	3.9	*		47	*	10.0	3.9	*	
11	*	10.8	4.0	*		48	*	8.4	3.9	*	
12	*	8.7	3.8	*		49	*	9.8	3.6	*	
13	*	9.9	3.6	*		50	*	8.9	3.5	*	
14	*	10.0	3.7	*		51	*	9.8	3.8	*	
15	*	9.5	4.2	*		52	*	10.0	4.0	*	
16	*	9.3	3.9	*		53	*	10.2	3.8	*	
17	*	9.6	4.0	*		54	*	7.5	3.7	*	
18	*	9.4	3.4	*		55	*	10.6	3.7	*	
19	*	8.8	3.8	*		56	*	9.9	3.8	*	
20	*	7.7	3.6	*		57	*	10.0	3.9	*	
21	*	9.8	3.9	*		58	*	9.8	4.0	*	
22	*	10.9	3.8	*		59	*	7.4	3.7	*	
23	*	10.5	3.6	*		60	*	9.2	3.9	*	
24	*	7.7	3.6	*		61	*	10.0	4.2	*	
25	*	8.0	3.5	*		62	*	11.7	3.9	*	
26	*	9.1	3.8	*		63	*	8.8	3.5	*	
27	*	10.8	3.9	*		64	*	7.6	3.4	*	
28	*	9.3	4.0	*		65	*	7.2	3.5	*	
29	*	8.8	3.8	*		66	*	9.3	3.8	*	
30	*	10.3	3.3	*		67	*	8.4	3.5	*	
31	*	11.7	3.9	*		68	*	8.8	3.5	*	
32	*	10.4	3.8	*		69	*	8.4	3.6	*	
33	*	9.1	3.6	*		70	*	9.0	3.5	*	
34	*	9.1	3.6	*		71	*	8.5	3.5	*	
35	*	10.2	4.0	*		72	*	9.4	3.6	*	
36	*	10.2	4.0	*		73	*	11.0	3.8	*	
37	*	7.3	3.6	*		74	*	8.4	3.9	*	

勾玉は、長さ2.4cm、最大幅2.05cm、厚さ1.1cmを測る。

碧玉製管玉 全体で74個が出土した。全て濃い緑色を呈する秀品である。全体のサイズでは飛び抜けて大型のものがなく、ほぼ首飾りと考えて差し支えないものと考えられる。

図に示したように殆どの管玉が両面からの穿孔と考えられるが、中にはNo.01.05.08.21.27.31.34.38.39.51.53.56.59.68.73などのように片面からの穿孔の可能性のある管玉も見られる。

また、全体のサイズでは、最大全長が11.7mmのものから最短の7.3mmの幅があるが、一方最大幅の比較では、3.2~4.1mmの幅が認められるなかで、むしろこれらの平均値に近い最大幅3.6mm程度の管玉が多いものと考えられることができる。

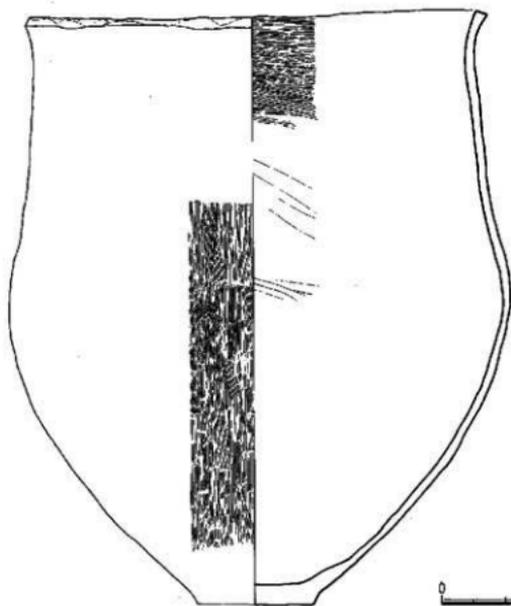
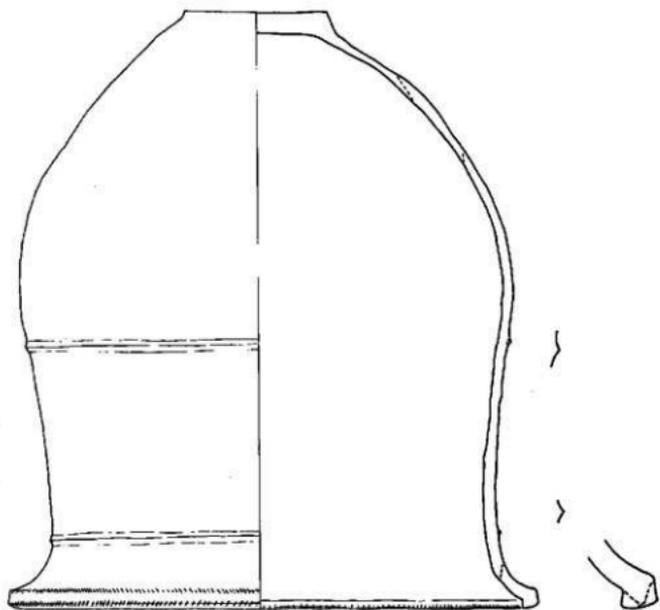


Fig.41 K110号楚棺实测图 (1/8)

#### 4. K111号甕棺墓 (Fig.42~45) (PL.7)

墓地南西側に位置し、主軸をN-15°-Eにむける。

埋置角度は19°を測る。

墓坑は、K110号と同様な方形のプランをなし、北側に片寄って埋置されている。

下甕に大型甕、下甕に口縁打欠きの大型甕を使用する覆口式の大型甕棺墓である。

下甕との境に近い上甕口縁部付近に碧玉製管玉92個が副葬されていた。玉の出土位置には赤色顔料の痕跡が見られた。

上甕 上甕は径17.8cmを測る大型の底部から急激に膨らみ、胴部最大部はかなり底部に近い。胴部はやや内傾気味に立上り、口縁部で急激に屈曲する。口縁の外側口唇の下端に整然とした刻み

目を施す。また内面中央には、1条の低い三角突帯を巡らす。口縁下と胴部中位よりやや上がった位置に4本単位の平行な横沈線と、この間を3本単位の縦沈線で5区画に区画している。器色は、内外面ともに淡褐～暗褐色を呈する。また、外面胴部に強い黒斑が見られる。全体に鉄分の沈着が著しい。器面調整は、外面口縁部が横ナデ、胴部がナデである。内面は、上半部が細かい横ハケ目、以下がナデである。胎土には径1～3mm大の石英、長石をやや多く含み、焼成は堅緻である。

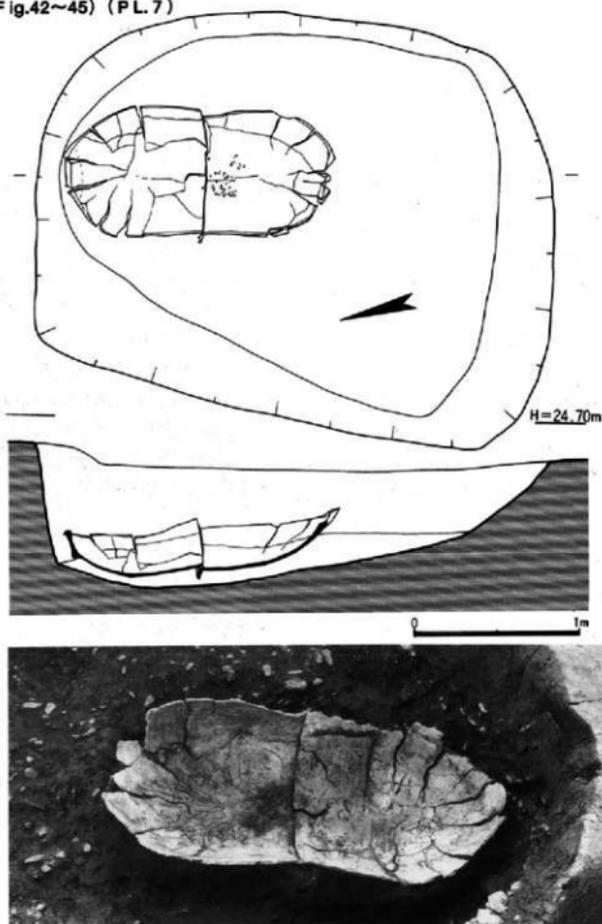


Fig.42 K111号甕棺墓出土状況図 (1/30)

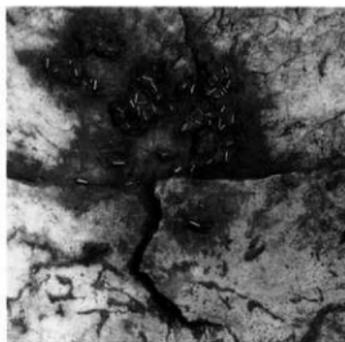


Fig.43 K111号副葬基葬群葬遺物出土状況図 (1/4)

口縁部は、外口径75.9cm、器高80.8cm、胴部最大径69.4cm、底部径17.6cmを測る。

下 甕 下甕も上甕とほぼ同様な器形をとるが、口縁部を打欠いており、底部がやや上げ底となっている。口縁下と胴部中位からやや上がった位置に3本単位の平行する横沈線を巡らす。また、これを繋ぐ縦沈線は、これに続いて4本単位のもの3ヶ所、3本単位のもの2ヶ所が近接して描かれ、計5ヶ所となり、4つに区画される。

器色は、内外面ともに明るい褐色～暗い褐色へと変移する。また、外面の胴部には強い黒斑が2ヶ所見られる。内外面ともに鉄分の沈着が著しい。

器面調整は、外面が全面に丁寧なナデを施し、内面では上端部には細い横ハケ目調整で、これより下部は器面の荒れのために明瞭ではないが、全面ナデと考えられる。

胎土には、径が1～2mmの石英、長石砂粒をやや多く含み、焼成は堅緻である。

口縁部は、残存部の口径が、64.1cm、残存器高79.3cmを測る。また、胴部の最大径は、71.8cmで、底部径は19.4cmを測る。

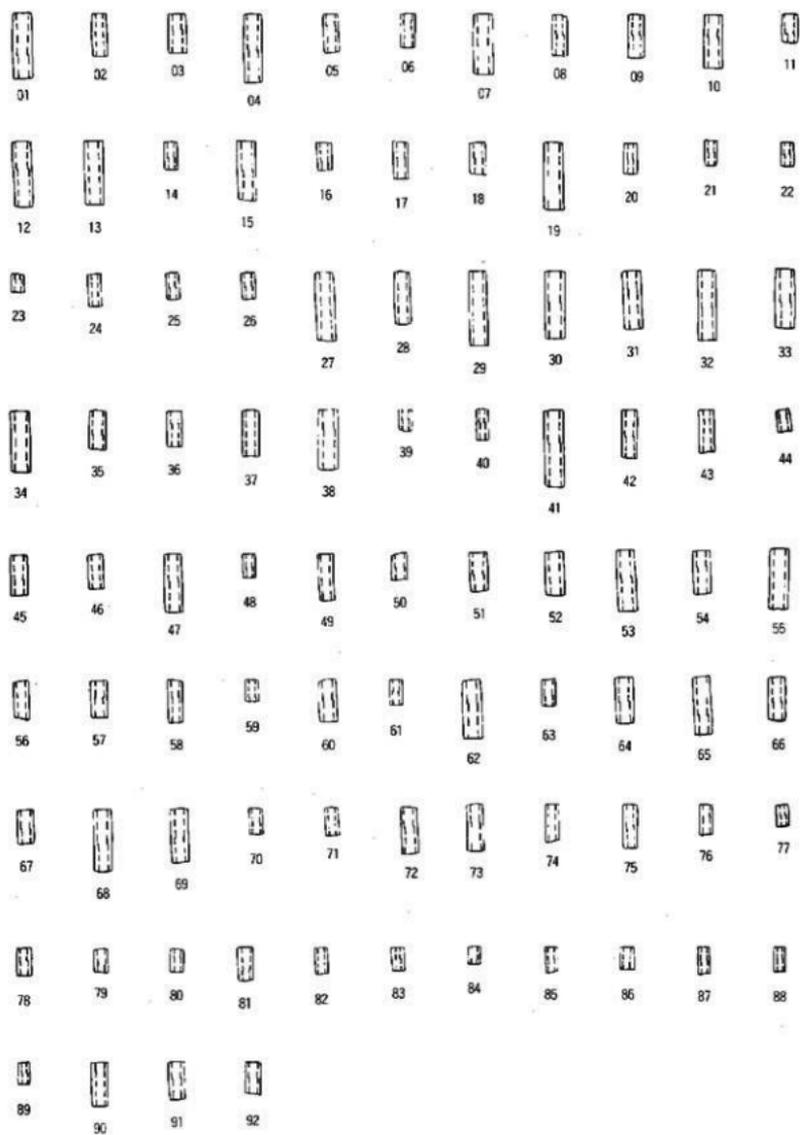
**副葬品 碧玉製管玉** 赤色顔料に埋もれて92個の碧玉製管玉が出土した。管玉は、全て濃い緑色をした良質の石材を使用している。

管玉は、92個が混在して出土したが、サイズの上では明らかに異なるものが見られ、後述する第2号木棺墓で出土した頭部の玉群と腰部の玉群とが明らかにサイズが異なる例と一致するものと考えてよい。

すなわち、No.01のような全長が12.9mm、最大幅4.1mmのタイプとNo.03のような全長が7.7mm、最大幅3.6mmを測るタイプとである。

前者のタイプは、No.01.04.07.10.12.13.15.19.27.28.29.30.31.32.33.34.38.41.47.49.53.55.62.65.68.69.72.73などがこれにあたり、27個を数えるが数の上ではこれ以上であろう。このタイプは先の第2号木棺墓の腰部近くで見つかった一群とサイズの上で非常に類似することから手首を飾った玉類とかがえられる。それから、後者のタイプで他の大多数をしめるやや短い一群は首飾りと考えられよう。

つまり、この一群と思われていた管玉群は、首飾りとおそらく手首を飾る玉とが混ざり合っていたものと考えた。



0 5cm

Fig.44 K111号楚墓出土青玉实例图 (1/1)

Tab. 7 K111号密棺墓 出土玉器計測表 (mm)

番号	種類	法 量		石 材	備 考	番号	種類	法 量		石 材	備 考
		全長	最大幅					全長	最大幅		
01	碧玉	12.9	4.1	碧玉		47	碧玉	11.5	2.6	碧玉	
02	◇	8.3	3.1	◇		48	◇	4.9	3.3	◇	
03	◇	7.7	3.6	◇		49	◇	9.1	3.3	◇	
04	◇	13.5	4.0	◇		50	◇	5.3	3.7	◇	
05	◇	7.6	3.2	◇		51	◇	7.8	4.0	◇	
06	◇	6.3	2.9	◇		52	◇	8.9	3.7	◇	
07	◇	11.8	7.1	◇		53	◇	12.2	3.4	◇	
08	◇	8.1	3.0	◇		54	◇	8.9	4.1	◇	
09	◇	8.3	3.1	◇		55	◇	11.8	3.3	◇	
10	◇	10.6	3.9	◇		56	◇	7.6	3.4	◇	
11	◇	5.4	3.4	◇		57	◇	7.4	3.1	◇	
12	◇	12.8	3.9	◇		58	◇	8.4	2.7	◇	
13	◇	12.5	4.1	◇		59	◇	4.3	3.6	◇	
14	◇	5.5	2.9	◇		60	◇	8.5	2.6	◇	
15	◇	11.6	3.8	◇		61	◇	5.0	3.9	◇	
16	◇	5.3	3.3	◇		62	◇	11.8	2.9	◇	
17	◇	7.1	3.2	◇		63	◇	5.4	3.7	◇	
18	◇	6.1	3.3	◇		64	◇	9.3	3.6	◇	
19	◇	13.1	4.2	◇		65	◇	11.5	3.8	◇	
20	◇	6.0	2.8	◇		66	◇	8.8	3.2	◇	
21	◇	4.8	2.8	◇		67	◇	6.9	3.7	◇	
22	◇	4.7	2.6	◇		68	◇	12.3	3.7	◇	
23	◇	3.5	2.7	◇		69	◇	10.9	2.9	◇	
24	◇	6.4	2.8	◇		70	◇	5.2	2.8	◇	
25	◇	5.1	2.7	◇		71	◇	5.4	3.6	◇	
26	◇	5.1	2.9	◇		72	◇	9.3	3.5	◇	
27	◇	13.2	3.9	◇		73	◇	9.6	2.8	◇	
28	◇	10.2	3.2	◇		74	◇	7.5	2.9	◇	
29	◇	14.7	3.8	◇		75	◇	8.9	2.9	◇	
30	◇	13.2	4.2	◇		76	◇	6.9	2.5	◇	
31	◇	11.6	3.9	◇		77	◇	4.3	2.9	◇	
32	◇	13.9	4.0	◇		78	◇	5.5	2.9	◇	
33	◇	11.7	4.0	◇		79	◇	4.7	2.7	◇	
34	◇	12.0	3.4	◇		80	◇	4.7	3.3	◇	
35	◇	7.7	3.7	◇		81	◇	6.7	2.6	◇	
36	◇	7.3	3.1	◇		82	◇	5.4	2.7	◇	
37	◇	9.0	3.6	◇		83	◇	4.8	2.7	◇	
38	◇	11.9	3.9	◇		84	◇	3.7	2.6	◇	
39	◇	4.0	2.8	◇		85	◇	5.2	2.9	◇	
40	◇	6.1	2.5	◇		86	◇	4.8	2.7	◇	
41	◇	15.1	4.0	◇		87	◇	5.6	2.7	◇	
42	◇	9.5	3.3	◇		88	◇	5.0	2.3	◇	
43	◇	8.5	3.3	◇		89	◇	4.4	3.6	◇	
44	◇	4.4	2.8	◇		90	◇	8.8	3.4	◇	
45	◇	7.9	3.4	◇		91	◇	7.4	3.3	◇	
46	◇	6.9	3.3	◇		92	◇	6.3	3.7	◇	

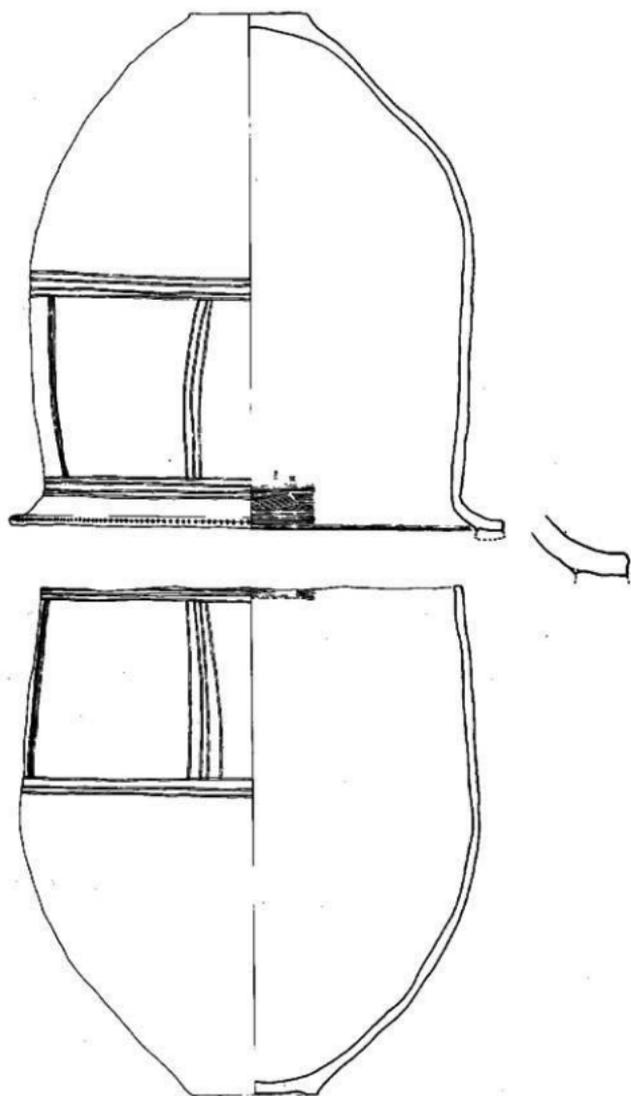


Fig.45 K111号墓椁室测图 (1/8)



### 5. K115号甕棺墓 (Fig.46~48) (P.L.)

大型墳墓としてはもともと北東に位置する。主軸をN-44°-Eにとる。上下棺ともに大型の甕を使用した接口式の大型甕棺墓である。

墓墳は、やや小振りであるが南北2.5m、東西2mの長方形を呈し、甕棺の挿入は北側から行われている。

甕棺の埋置角度は、35°を測り、非常に角度の強い埋置を行っている。下甕のほぼ中央から切先を南に向けた細形銅剣一点が副葬されて出土した。

上 甕 上甕は、やや上げ底の分厚い底部から膨らみ、胴部のほぼ中位でやや内傾気味に立上る胴部を有し、口縁近くになって緩やかに外反する。

口縁部は、上端部をほぼ水平に肥厚させ、口唇の下端に間隔のやや緩い刻み目を施す。

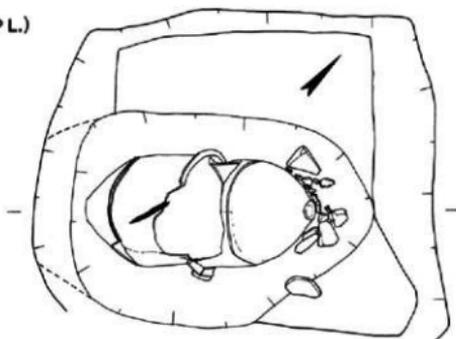
また、胴部の中位よりやや上がった位置に2本単位の平行な横沈線を巡らす。

器色は、外面で明褐～暗褐色に変移する。また、内面は淡褐色を呈する。

外面には全面に黒色顔料の塗布が見られ、口縁上面や内面上部にも赤色顔料が付着する。また、内外面ともに強い黒斑あり。

器面調整は、外面上部が横ナデで、下部は横方向のヘラミガキを施し、底部にオサエが見られる。内面は上部が、荒いハケ目で、これ以下でナデを施す。

胎土には、径1～2mm大の石



H=24.60m

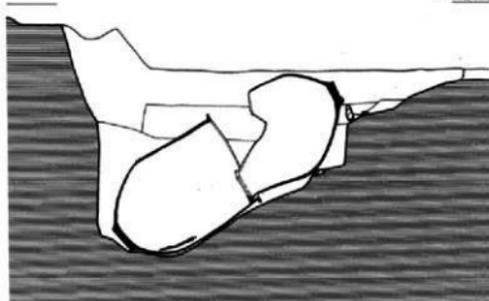


Fig.46 K115号甕棺墓出土状況 (1/30)

英、長石砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。

口縁部は、外口径が65.5cm、内口径59cmである。器高は、79.8cmで、胴部最大径は、65.4cmで、底部径14cmをはかる。

下 甕 下甕は、大型の底部から半球形に膨らみ、最大径の部分から緩く立上り、口縁で外反する。口縁部は上端に粘土を貼付て肥厚させ、端部が外方にやや垂れる。また、胴部の最大部に低い三角突帯2条を巡らす。

器色は、内外共に淡褐色を呈し、外面に黒色顔料を塗布し、一部に赤色顔料も残る。器面調整は、外面上半縦ミガキ、下部横ミガキである。

口径71.1cm、器高85.2cm、胴部最大径70.3cm、底部径17.4cmを測る。

副葬品 細形銅剣 全体に青みを帯びた緑色を呈する。先端部を僅かに失っているが、現存長29.9cmを測る。復元推定長は30.1cm程度と考えられる細身の銅剣である。

身部の幅は左右ともに対称とはならず、剣方は長さ4cm、中央部の幅が2.9cmを測る。また、身部の最大幅は3.5cmを測る。

背部の鏃は剣方下端までしか伸びない。

剣方下方の突起から関までは6cmを測るが、側辺は両面とも研ぎだされて刃部を形成している。

関部は、明瞭に直線をなさず、端部が挟り状となるなど形状が乱れている。

また、背部の中央には青白色の錆と共に白色の木質が付着しており、他の例から鞘の一部と考えられる。

この白色の木質は茎の下端部にも付着しており、柄材の一部と思われる。

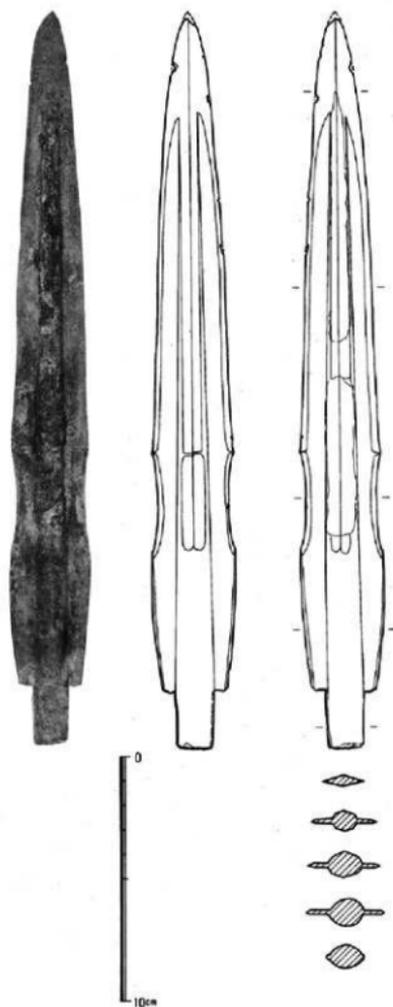


Fig.47 K115号出土銅剣実測図 (1/2)

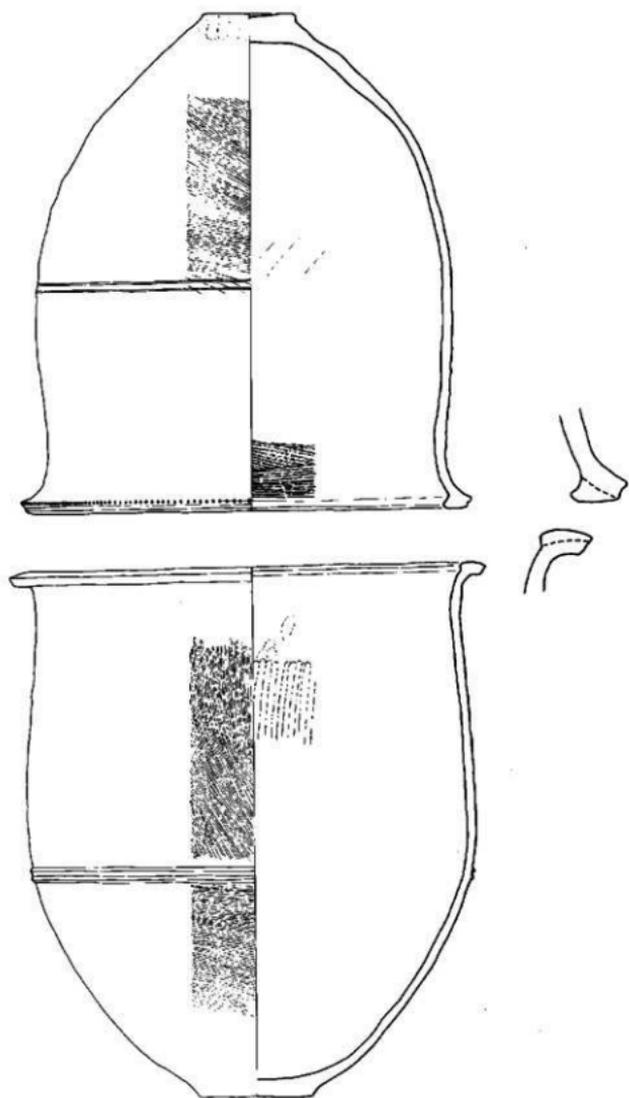


Fig.48 K115号器作实例图 (1/8)

0 30cm

## 6. K116号甕棺墓 (Fig.49~52)

墓地の東辺に位置し、主軸をN-37°-Eにむける。甕棺は、北側から挿入され、埋置角度45°の非常に急角度で埋置されている。墓壇は、南北が3.4m、東西が1.6mを測る長方形をなし、甕棺の埋置部分はさらに1.1×1.4m程度の円形堅穴が掘削される。

甕棺は、上下棺ともに大型の甕を使用する覆口式の大型甕棺墓である。口縁部は白色粘土で丁寧に目貼りされる。下甕のほぼ中央に切先を南に向けて細形銅剣一点が副葬されていた。また、外側掘り方の底部に副葬小壺1個が見つかった。

上 甕 底部を欠く大型甕である。胴部最大径部は低く、ほぼ垂直に立ち上がる胴部上半は口縁に及んで緩く外反する。肥厚する口縁部の外側口唇の上下に整然とした刻み目を施す。口縁下と胴部中位よりやや上がった位置に3本単位の平行な横沈線を巡らす。さらにこの間を繋ぐように3本単位の縦

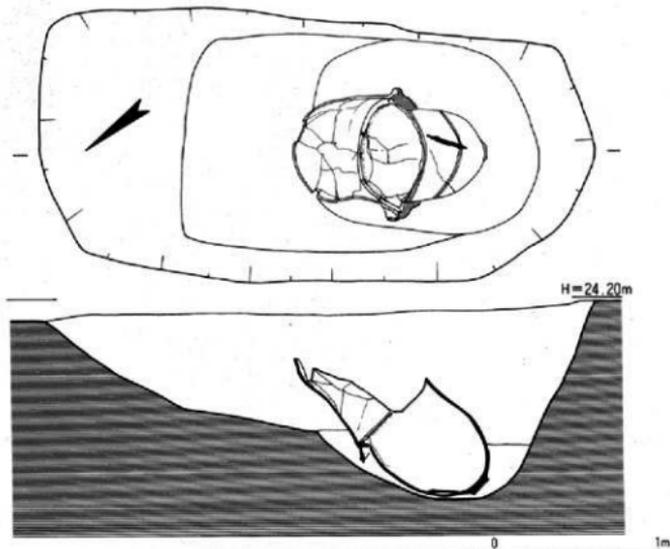


Fig.49 K116号甕棺墓出土状況図 (1/30)

沈線を5ヶ所描き、全体を4つに区画している。

器色は、内外面共に赤褐色を呈し、胴部外面中央に強い黒斑あり。器面調整は、外面口縁部横ナテ、胴部横ミガキ、内面口縁部横ナテで、直下は横ハケを施し、これ以下はナテである。口縁部は、外口径74.9cm、内口径68cmで、残存器高80.2cm、胴部最大径67.5cmを測る。

下 甕 下甕も上甕と同様の大型甕で、底部はやや上げ底である。肥厚する口縁部は内面の口唇にも刻み目を施す。胴部の沈線飾りは上下ともに3本単位で、縦沈線を伴わない。器色は、内外面共に明褐～赤褐色を呈する。また、内外面全体に赤色顔料の痕跡が点々と見られる。器面調整は、外面口縁付近横ナテ、胴部上位ナテ、同下位が横ミガキ、底部付近縦ハケ目調整である。内面の口縁部付近横ナテ、胴部ナテ、底部付近はヘラ削り、指おさえがみられる。

口縁部は、外口径64.3cm、内口径56cmを測る。器高は、84.2cmで、胴部最大径64cm、底部径16.4cmを測る。

副葬品 細形銅剣 全体に黒みを帯びた緑色を呈し、先端部を欠損する。現存する全長は、25.2cmを測り、推定全長26cm程度のやや小型の銅剣となろう。身部の樋は左右ともに対称をなさない。剣方は、長さが2.7cm、中央部の幅3.2cmを測り、剣方下方の突起から胴部までの長さは5.4cmを測る。背部の柄は、剣方まででこれ以下にはおよばない。胴部は、明瞭に直線をなさず、斜め方向に茎へ移行する。また、茎には軸と直角方向に細かい刻みが観察できる。

小 壺 やや上げ底気味の底部に半球形の胴部を有し、頸部に1条の三角突帯を巡らす。口縁部は外反して立上り、端部は平坦となり、外方に垂れる。器色は、外面黒褐色、内面暗赤褐色を呈し、外面に黒色顔料を塗布する。

器面調整は、外面胴部で斜めあるいは横方向の丁寧なヘラミガキで、口縁は縦方向に暗文風にヘラミガキを施す。また、内面は口縁で横ヘラミガキ、これ以下は円棒状工具で、斜めヘラミガキを加える。胎土に石英砂粒を多く混入するが、焼成は堅緻である。

器高は、17.4cmで、胴部の最大径21.25cmを測る。また、口径が、13.35cmで、頸部径10.2cm、底部径5.35cmを測る。また、胴部の下半部には黒斑が多く見られる。特徴ある壺形土器である。

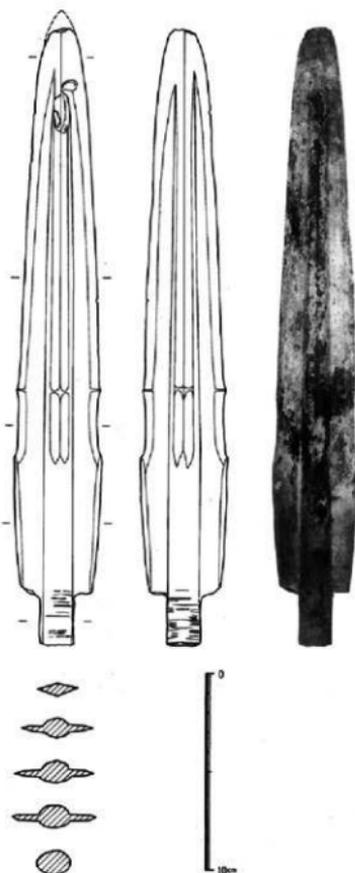


Fig.50 K116号変性基副葬銅剣実測図 (1/2)

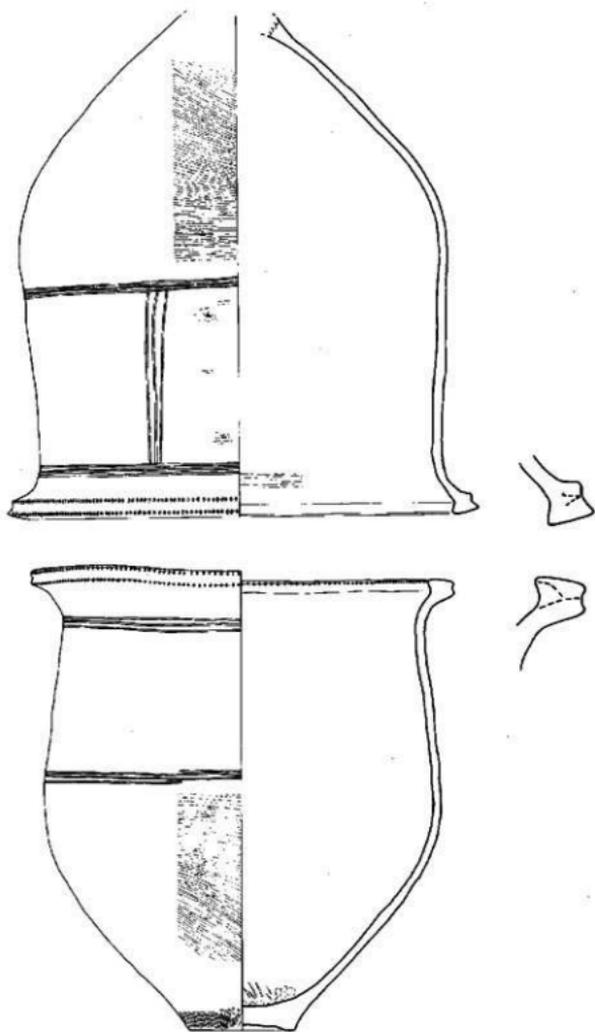


Fig.51 K116号曼陀实测图 (1/8)

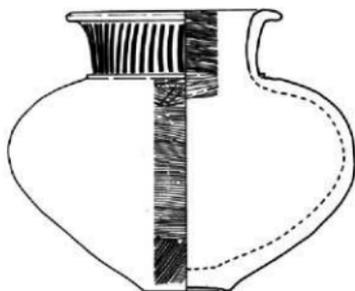


Fig.52 K116号甕棺墓副葬土器実測図 (1/3)



0 10cm

### 7. K117号甕棺墓 (Fig.53~58) (PL.8)

墓地内の大型甕のうちでは北側中央部に位置し、主軸方向をN-51°-Eに向ける。上甕に大型甕、下甕に口縁部打ち欠きの大型甕を使用する覆口式大型甕棺墓である。

墓壇は、非常に大型であり、南北の長軸辺長が4.3m、南側の小口部辺長が2.7mを測る隅丸の長方形をなし、底部に2.5×1.2mの長方形土壇を更に掘削し、甕棺を埋置するが、外側の墓壇は隣接する第2号木棺墓に次ぐ規模となっている。

甕棺は北側から挿入した形となっており、通常であれば墓壇内底面の広い部分は上甕側となることが多く、変則的な埋置方法に見える。

また、埋置角度は、18°を測り、やや緩く埋置され、接口部には分厚く白色粘土による目貼りが行われている。甕棺墓は、埋置後に砂礫混じりの暗褐色砂質土によって墓壇外形のレベルラインより50cmほど盛り上げられている。さらにこの後、下甕にあたる位置を中心として盛土上に角礫が敷かれ、特に墳墓の中央にある下甕直上には根石状に角礫を円形に組み大型の礫を標石として乗せている。

標石は、長辺が1m、短辺が0.7mで、最も厚いところで0.3mを測る花崗岩礫である。

それから、上甕のほぼ中央部分で翡翠製勾玉1個と碧玉製管玉42個、ガラス小玉1個からなる一連の装身具とこの西側に切先を南側に向けて副葬された細形銅剣一点が出土した。このように副葬品は全て上甕からの出土であり、通常の埋葬方法であれば頭部を下甕に挿入すると考えられることからこの甕棺の場合は頭部を上甕においたと考えることができるかも知れない。こう考えると銅剣は、被葬者の頭部付近に切先を足元に向けておかれた可能性がある。また、棺内の埋土を精査の結果、朱が検出されている。

上 甕 上甕は、非常に分厚く、大型の底部を有し、緩やかに膨らむ胴部は最大径の位置がかなり低いところにある。これ以上の胴部はやや内傾気味に立上り、口縁部付近で急激に外反する。

口縁部は、肥厚して上面は平坦部をなすが、上端は水平ではなくうねっている。また、口縁部口唇の外側上下には上下で間隔の異なる刻み目を施している。

口縁の下と胴部中位よりやや下がった位置に3本単位の平行する横沈線を描す。この甕については横沈線を区画する縦方向の沈線は認められない。

器色は、外面が淡褐～暗い淡褐色で、内面は淡褐～暗褐色を呈する。

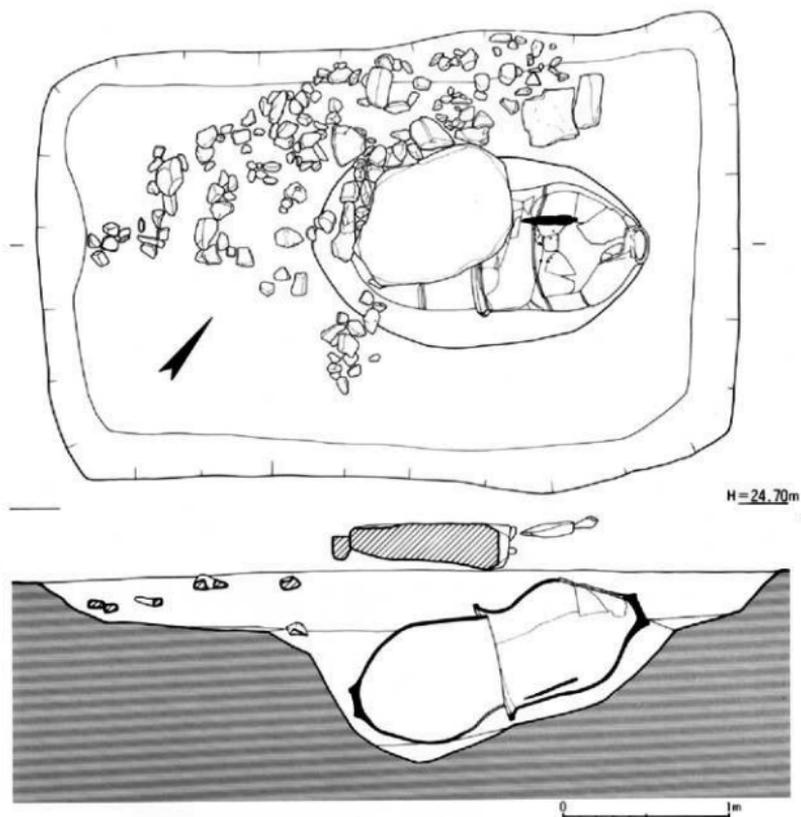


Fig.53 K117号墓棺墓出土状况图 (1/30)



また、口縁部の上面から外面の上半部にかけて赤色顔料が多く付着しており、外面上部から下部および内面の上半部に黒斑が見られる。

器面調整は、外面で、上半部がナデで、下半部は荒い縦および斜め方向のハケ目調整を施す。内面は、全面ナデ調整を施す。

胎土には径が1~2mm大の石英、長石砂粒を多量に含み、焼成は堅緻である。

口縁部は、外口径79.8cmで、内口径72.9cmを測る。器高は、99.2cmで、胴部最大径75.4cm、底部径22.4cmを測る。

下 甕 下甕は、口縁部端部を打ち欠いたもので、底部も欠損する。

形態的にはほぼ上甕と同一であるが、やや比較的に胴部の締まりが少ない感じをうける。

口縁下と胴部中位よりやや上がった位置に3本単位の平行する横沈線を巡らす、これらの間を区画する縦方向の沈線は見られない。

器色は、外面が淡褐~暗褐色、内面が淡褐~明赤褐色を呈する。また、外面にごくわずか赤色顔料が付着し、内面上部にも赤色顔料の痕跡が見られる。さらに外面中央部や内面上部には各々黒斑が見られる。

器面調整は、外面が上半部はナデで、下半部は上下および左上方向のヘラミガキを施す。内面は、上部が横ハケ目調整、中・下部が全面ナデ調整を施す。

胎土には、径1mm大の石英、長石砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。

口縁部は、残存部径で68.3cmを測る。また、残存器高は、88.9cmで、胴部の最大径は73.4cmを測る。**副葬品 細形銅剣** 全体に非常に保存状態の良い銅剣である。

器色は、全体に灰緑色を呈し、茎と切先の一部が灰色味を帯びた黄緑色で、身部の側辺部は、光沢を放っている。

銅剣は、全長35.3cmを測り、身部の樋はほぼ対称形をなす。樋の先端から切先までは長さ4.2cmを測り、よく研ぎだされている。

また、切先から上部節帯までは長さ20.2cmを測り、背部の錆もこの位置よりやや下がったところま

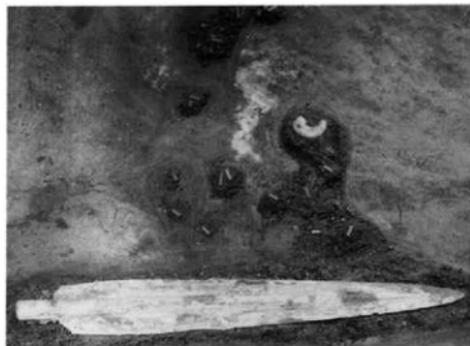
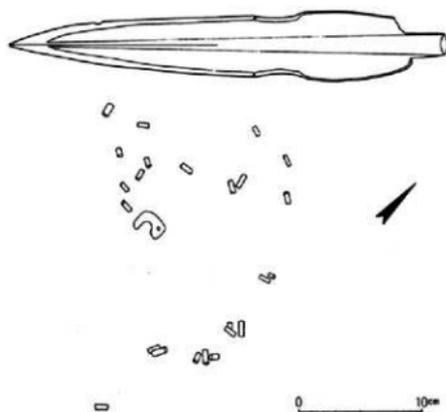


Fig.54 K117号雙栴器副葬遺物出土状況図(1/4)

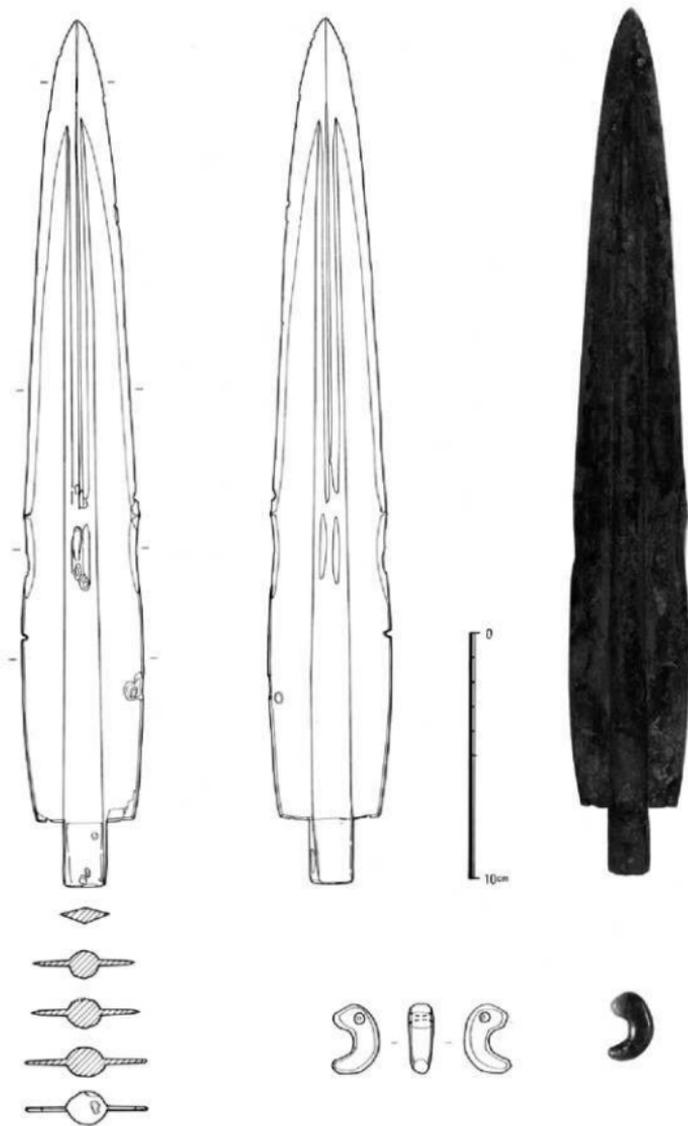


Fig.55 K117号楚棺墓铜箭镞·勾玉实测图 (1/2)

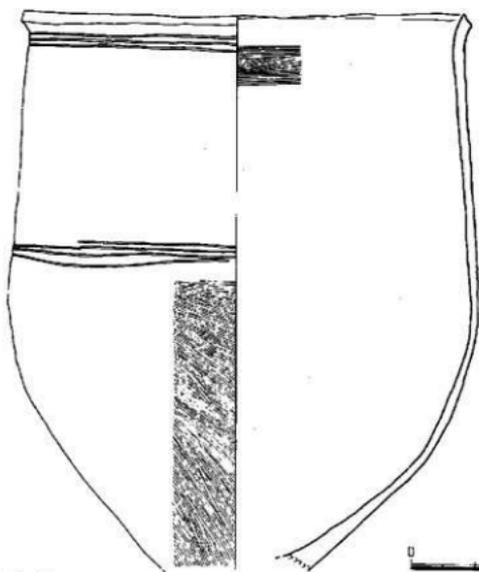
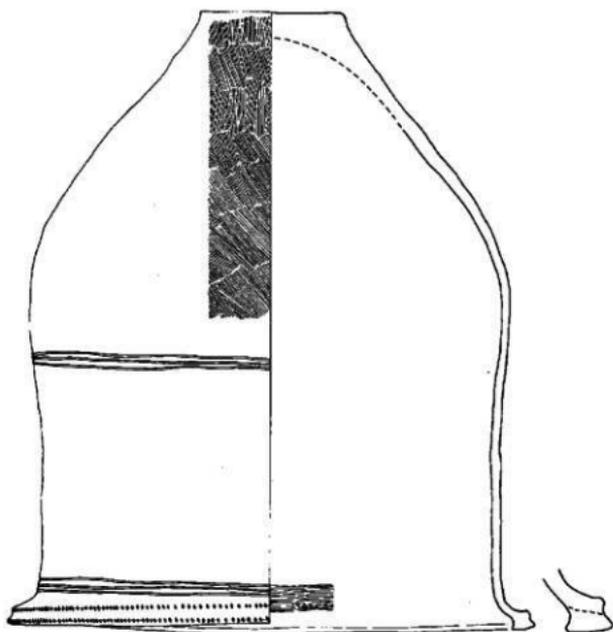


Fig.56 K117号壺横実測図 (1/8)

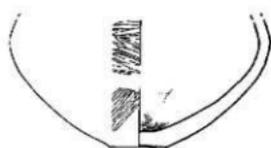


Fig. 57 K117号発掘基副葬土器実測図 (1/3)

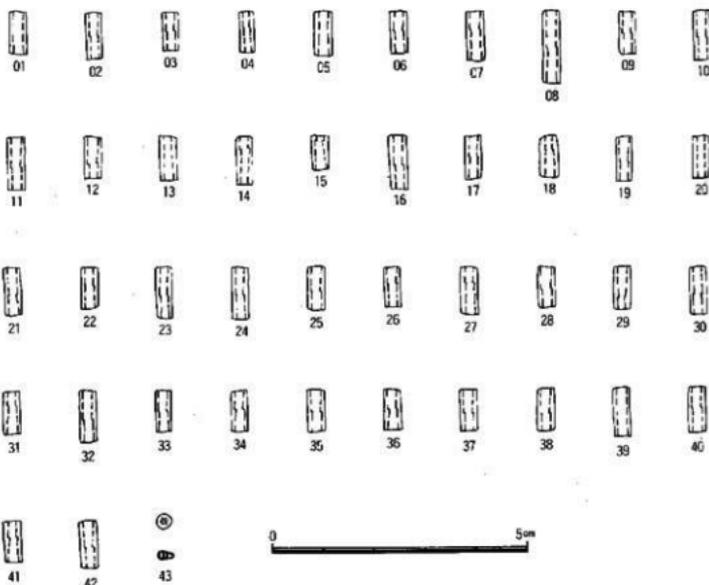


Fig. 58 K117号発掘基出土管玉実測図 (1/1)

で伸びている。しかし、鉤は切先の穂先端部以下と片面は切先先端以下の部分で単純な直線をなさず、小さい平坦面をなすほど両面から平均に研ぎだしが行われていない。

刃方は、表裏・左右ともに長さが4~32cmのものがあり、それぞれ大きさが異なる。また、中央部の幅は4.5cmを測る。

刃方の下部から関部までは長さが8.2cm、最大幅5cmを測る。関の幅は、両側ともに1.1cmを測り、よく整えられている。また、茎は、しっかりしたつくりで、軸と直交方向に細かい擦痕が見られる。着柄のための繊維を巻きつける作業であろう。

**翡翠製勾玉** 濃い緑色を呈する精品である。頭部に一孔を穿つ通常のタイプの勾玉で、長さ2.75cm、幅1.9cm、最大厚1cmを測る。首飾りの親玉であろう。

**小壺** 墓壇底面の下甕近くに副葬されていた小壺である。

頭部の上半以上を欠損する。やや上げ底となる底部から半球形に膨らむ胴部をもつ。外面は概ね黒

Tab. 8 K117号壙棺墓 出土玉類計測表 (mm)

番号	種類	法 量		石 材	備 考	番号	種類	法 量		石 材	備 考
		全長	最大幅					全長	最大幅		
01	碧玉	8.2	3.6	碧玉		23	碧玉	10.1	3.4	碧玉	
02	◇	9.1	3.5	◇		24	◇	10.1	3.6	◇	
03	◇	7.7	3.4	◇		25	◇	8.5	3.6	◇	
04	◇	8.0	3.3	◇		26	◇	7.9	3.4	◇	
05	◇	8.8	3.6	◇		27	◇	9.3	3.7	◇	
06	◇	8.3	3.5	◇		28	◇	8.0	3.5	◇	
07	◇	9.9	3.8	◇		29	◇	8.3	3.6	◇	
08	◇	14.5	3.5	◇		30	◇	9.6	3.4	◇	
09	◇	8.7	3.5	◇		31	◇	8.5	3.6	◇	
10	◇	9.7	3.8	◇		32	◇	10.3	3.6	◇	
11	◇	10.4	3.7	◇		33	◇	8.3	3.5	◇	
12	◇	8.2	3.6	◇		34	◇	8.1	3.4	◇	
13	◇	8.7	3.9	◇		35	◇	8.5	3.5	◇	
14	◇	9.3	3.4	◇		36	◇	8.2	3.6	◇	
15	◇	6.5	3.7	◇		37	◇	8.2	3.6	◇	
16	◇	10.3	3.7	◇		38	◇	8.4	3.6	◇	
17	◇	8.5	3.5	◇		39	◇	10.0	3.4	◇	
18	◇	7.7	3.7	◇		40	◇	9.1	3.5	◇	
19	◇	8.8	3.5	◇		41	◇	8.6	3.6	◇	
20	◇	8.5	3.8	◇		42	◇	9.5	3.7	◇	
21	◇	9.7	3.6	◇		43	小玉	1.8	3.0	ガラス	
22	◇	8.1	3.6	◇							

褐色を呈し、胴部下半の半周は灰褐色となる。

また、内面は、黒褐色を呈し、全面に黒色炭化物が付着する。

器面調整は、外面で底部端がナデで、これ以外の胴部は斜め、横方向のヘラミガキを施す。内面は、横ナデあるいは縦方向のナデ調整を施す。

胎土は、石英砂粒を多く含み、焼成は良好である。

底部径は、3.3cmで、胴部最大径15.45cmを測る。

碧玉製管玉 濃い緑色の秀品である。総数42個が出土した。一部には、No.08のような全長14.5cmを測る大型のものが見られるがその他はいずれも短い小型のもので首飾りにつかわれた種類のもとの共通するサイズの玉類である。

ガラス小玉 僅か1個が出土した。紫紺色を帯びた色調である。高さ1.8mm、幅3.0mmを測る。

## 8. K125甕棺墓 (Fig.59~61)

墓地の大型墳墓群から約18mほど東側の墓地東端に位置する。主軸をN-65°-Eにむける大型の単独甕棺である。棺は大型の壺形土器を使用している。

埋置角度は、38°を測り、かなり急角度で埋置されている。口縁部を覆うのは木蓋と考えられる。

前に記したようにこの甕棺墓と西側にある大型墳墓との間にある甕棺墓は全て小型の小児用甕棺と考えられる。

甕棺のほぼ中央で、柳葉形の磨製石鏃1本が先端を南側に向けて出土した。

**甕棺** 壺は、底部径が17.2cmを測る大型の底部から緩やかに半球状に膨らむ胴部を有し、頸部はほぼ垂直に立ち上がって口縁部付近で緩く外反する。

口縁部は、肥厚することなく、外反する口縁は直口縁となり口唇部の下端に整然とした刻み目を施す。

口縁部直下および胴部と頸部の境目に2条づつの平行な沈線文を巡らす。上下の横沈線を繋ぐ縦の沈線文は見つからない。

器色は、内外面ともに明るい褐色～薄い褐色を呈する。また、外面の胴部には黒斑が認められる。

器面調整は、外面で口縁部が横ナデで、頸部から胴部にかけてはナデ調整を施す。内面は、口縁部が横ナデで、頸部の上部に横方向のハケ目を施している。これ以下は全面にナデ調整を施す。

胎土には径が1～2mmの石英、長石の砂粒をやや多く含む。焼成は、非常に堅緻である。

口縁部は、口径73.8cmで、胴部の最大径は71.4cmをはかる。また、器高は、95.1cmを測る大型の壺である。  
**副葬品** 有柄磨製石鏃 棺の中央で見つかった磨製石鏃である。

全長が11.25cm、最大幅2.35cmを測り、柳葉形をなす。

切先にやや肩をもつが、シャープな仕上がりで、背部に明瞭な溝を有する。茎は短く、端部は直線的に擦り落されている。鬩は湾曲して茎に繋がる。

器色は、暗黄灰色を呈し、石材は粘板岩を使用している。石鏃は、先端部の古い破損は見られず、完形であることと茎部の刻痕が古く着柄時のものと考えられる点で被葬者を刺突したのではなく、副葬されたものと考えられよう。

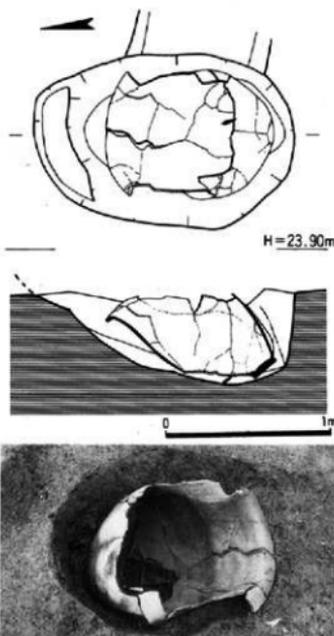


Fig.59 K125号甕棺墓出土状況図 (1/30)

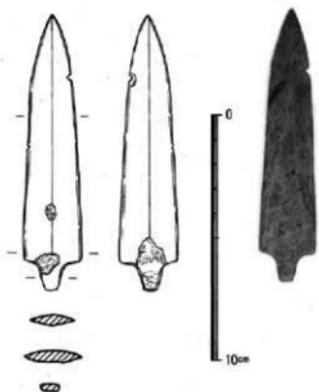


Fig.60 K125号甕棺墓出土磨製石鏃実測図 (1/2)

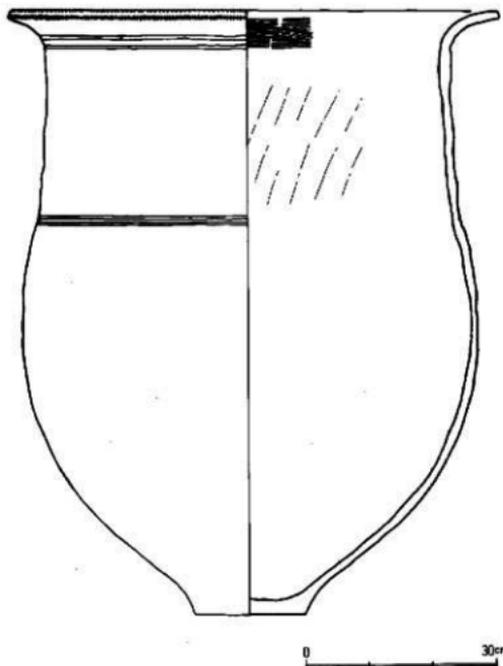


Fig.61 K125号木棺実測図 (1/8)

## 2. 木棺墓

**調査概要** 飯盛吉武地区圃場整備事業に伴う第4次(昭和59年度)の発掘調査は、吉武高木地区圃場の切り土工事および構造物建設を伴う対象区について実施された。つまり、切り土のある田面や構内の道路、水路の建設区域がこれにあたる。

この中で高木地区は、南北方向の2号幹線道路と東西方向に走る1号幹線道路がもつとも大規模なものであり、試掘調査の結果1号幹線道路部分に遺跡が蜜集し、本格的な調査が必要となった。

特に後に「早良王墓」と言われ大量の青銅器を出土した地点は同道路の東端部にあり、地元の聞き取り調査では「塚」が過去に同地にあつたと言われていた。このため、同地点が扇状地の先端に位置することもあって古墳時代後期の横穴式石室をもつ小円墳群の残骸が残っているものと考えた。

調査では、表土を削いだ後に多くの礎群が露出していたので複数の遺構と考え、数本のトレンチを設定して前後関係を調べたが、大型礎が点在したり扁平礎を敷き詰めたものが確認されるにとどまった。こうしたなかで、木棺墓としてはもつとも西側にあたる第1号木棺墓の副葬小壺が見つかり、精査した結果、墓壘より香玉製管玉が出土したため、木棺墓を伴う妻棺墓地であることが次第に明らかとなった。また、この後隣接する第2号木棺墓に大型標石が伴うことから、続いて第3号木棺墓が調査され、最後に横穴式石室の玄室床面敷き石と考えていた第4号木棺墓が調査されることとなった。調査に当たっては先入観を持たないことが重要であることを再度認識せられた。

1. 第1号木棺墓 (Fig.62~66) (PL.6)

墓地の西側端に位置し、K101号妻棺墓の東側に隣接して営まれている。

棺は、主軸をN-30°-Eにとり、2段掘りの墓壇をもつ。墓壇は、北側の小口部分がやや広く、長さ1.6m、中央部で1.6mを測り、南側小口で、1.3mと小さくなる。また、長軸辺の長さは3mを測る。現存する深さは、約20cmを測る。掘り方底部は殆ど平坦である。

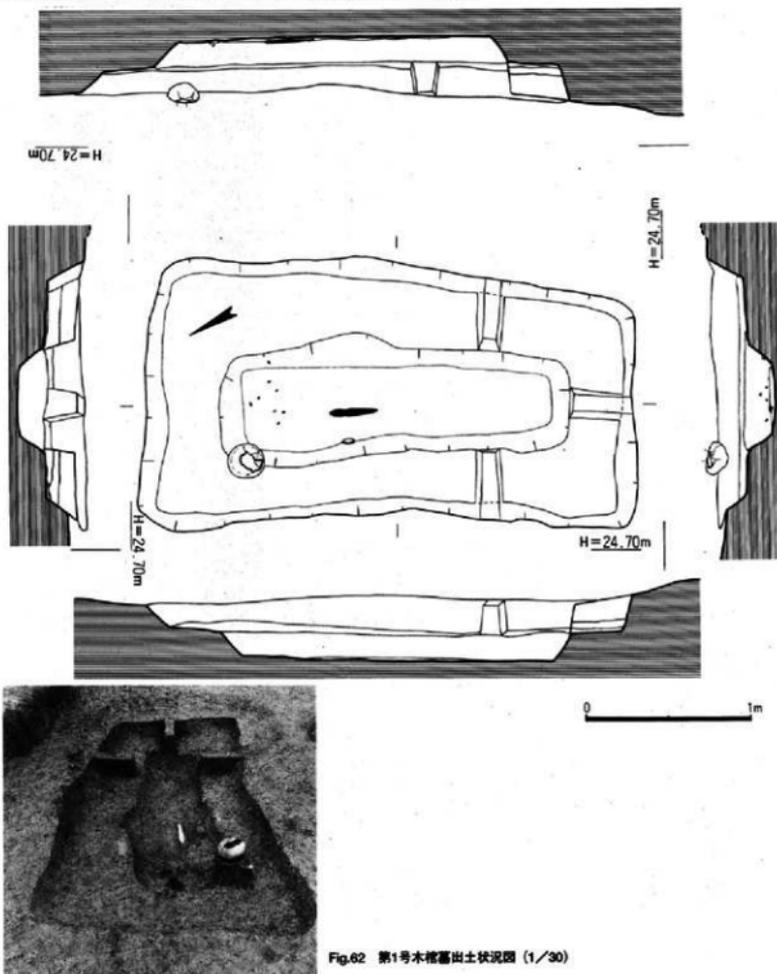


Fig.62 第1号木棺墓出土状況図 (1/30)

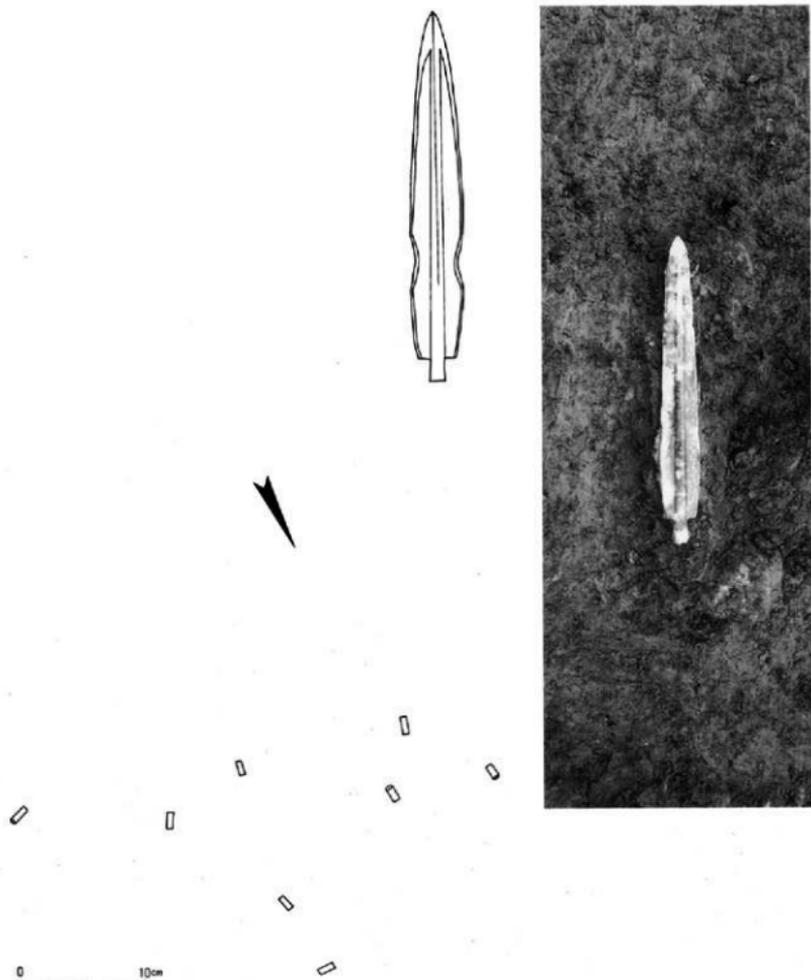


Fig.63 第1号木棺墓副葬遺物出土状況図 (1/4)

また、内部の棺主体は、やはり北側小口部が幅広く、0.7mを測り、中央では0.65m、南端小口部で、0.5mを測る規模である。長軸辺は、2.15mを測り、北西の小口隅の上に副葬の小壺1個が置かれていた。

また、北側小口部には20個の碧玉製管玉がほぼ円状に並んで検出されており、出土位置とサイズから首飾りと考えられる。また、管玉の両側約50cmのところでは棺の長軸に平行に細形銅剣一点が出土し

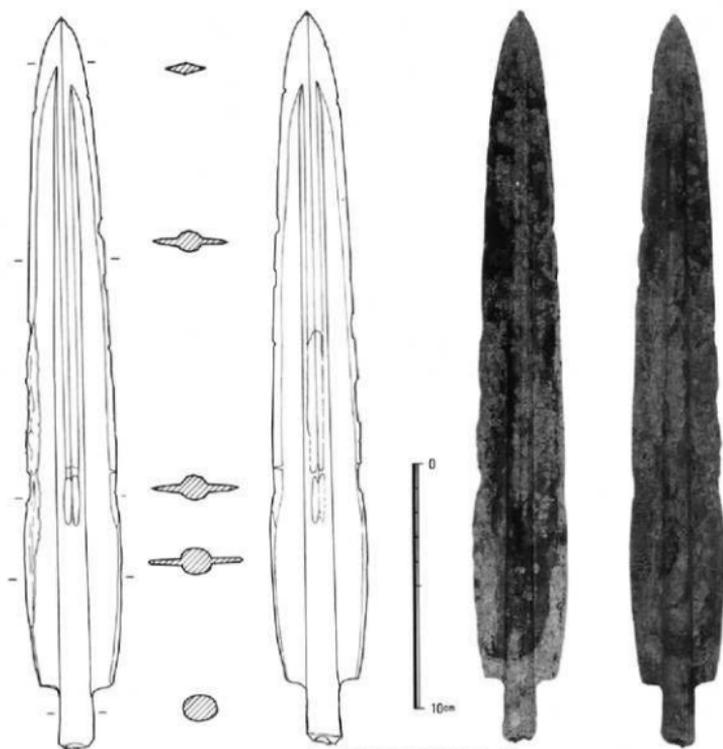


Fig.64 第1号木柙墓副葬铜剑实测图 (1/2)

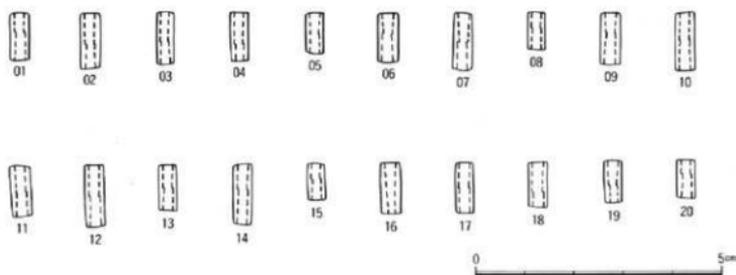


Fig.65 第1号木柙墓出土玉器实测图 (1/1)

Tab. 9 第1号木棺墓出土玉類計測表 (mm)

番号	種類	計測		石材	備考	番号	種類	計測		石材	備考
		全長	最大幅					全長	最大幅		
01	碧玉	9.6	4.2	碧玉		11	碧玉	10.5	4.3	碧玉	
02	◇	11.2	4.2	◇		12	◇	12.6	4.0	◇	
03	◇	10.5	3.8	◇		13	◇	9.4	3.7	◇	
04	◇	10.1	3.9	◇		14	◇	12.5	4.0	◇	
05	◇	8.2	4.0	◇		15	◇	7.5	3.6	◇	
06	◇	9.9	4.3	◇		16	◇	10.6	4.3	◇	
07	◇	11.7	3.9	◇		17	◇	10.3	3.7	◇	
08	◇	7.5	3.6	◇		18	◇	9.2	3.8	◇	
09	◇	10.4	4.1	◇		19	◇	8.4	3.7	◇	
10	◇	11.7	4.1	◇		20	◇	8.0	4.0	◇	古刀剣類

た。これらの出土状況からこの木棺に埋葬された被葬者は、頭部を北に向け、銅剣を胸に置いて埋葬された可能性が高い。

棺の底部横断面形は、ほぼ平らなものである。

**副葬品 細形銅剣** 先端部を僅かに欠失するが、全長が、29.8cmを測る。

銅剣は、錆化の進んでいない部分は暗褐色を呈し、錆化の進んだ部分は淡緑色を呈する。

また、錆化は、身部中位から剣方の下方の一辺が著しく、刃部や節帯の突起を失っている。

剣方は、全体的に保存状態があまり良好ではなく、残存する部位でも長さ2.2cmと小さい。また、中央部の幅は3.4cmで、剣方下部の突起から関部までの身長は、6.7cmを測る。

身部の樋は、片面で左右が対称ではないが対称な面での樋から切先までの長さは2.7cmを測る。同身部の最大幅は、3.9cmを測る。

また、背部の錆は、下部節帯までしか伸びていない。これ以下では背部は円棒状の断面を呈する。碧玉製管玉 総数20個が出土している。全て濃い緑色を呈する秀品で、良質の石材を使っている。

サイズは、全長の比較でもっとも長いものが12.5mm、最短のもので7.5mmを測る。しかし、長さのうえでは10mm前後のものももっとも多く、玉の最大幅は平均値3.96mm前後のものも多く選ばれている。小 壺は、やや上げ底気味の小さい底部から半球状に膨らむ胴部を有し、中位くらいを最大として急激に頸部におさまる。調査では口縁部は欠損していなかったが、比較的短く、頸部から急激に外反した口縁部であったと考えられる。

器色は、外面が暗赤褐色を呈し、全面に黒色顔料を塗布する。内面は、暗褐色を呈する。器面調整は、外部の上面で横ヘラミガキ、中位以下でもミガキを加え、底部付近で縦方向のナデが残る。

また、内面は、全体にナデ調整を施し、局所に指オサエが見られる。

胎土には石英砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。残存する器高は14.5cm、底部径5cm、胴部最大径19.4cmを測る。

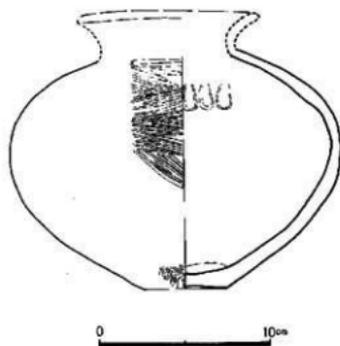


Fig.06 第1号木棺墓副葬土器実測図 (1/3)

## 2. 第2号木棺墓 (Fig.67~71) (PL.10)

墓地の西端に位置する木棺墓のうちではもつとも大型の木棺墓である。主軸をN-44°-Eにとる。墓壇は、平面形が北側に開くハチ形を呈する。北側小口幅3.65m、南側小口幅2.6mを測る。また、緒辺長は、4.6mで、深さ0.7mを測る。内部主体の木棺は主軸から外れて埋置される。長辺長2.6m、短辺長1mを測る規模である。側辺のうち東側は木棺安置後の詰め石が顕著で、これから側板の高さは0.4m以上の規模である。また、棺底部の断面形は半円状をなし、底板の形状を同わせる。

棺底では北側小口近くで、翡翠製勾玉1個と碧玉製管玉94個からなる首飾りと考えられる玉群とともに南側床面でやや大型の碧玉製管玉39個からなる玉群(手飾り)及びこれに隣接して棺軸に平行する位置に置かれた細形銅剣1点が副葬されていた。これらから被葬者は頭部を北におき、右側辺に銅剣をおいて埋葬されたと考えられる。

また、平面図では図示できていないが墓壇の南西隅付近には花崗岩の大角礫がおかれており、標石の断片と思われる。

なお、木棺の北側小口には副葬小壺が置かれていた。

**副葬品 細形銅剣** 銅剣は、全体暗い緑色を呈する。全体に身部の側辺部分の破損が著しく、切先も一部欠失している。残存する全長は、29.1cmである。身部の樋は、対称形とならないが、現存する切先までの長さは2.7cm・3.7cmを測る。

また節帯は、長さ3.1cmで、中位での幅は3.3cmを測る。また、節帯下部の突起から闊部までの長さは6.1cmを測る。身部の節帯より以下も刃部が研ぎだされ、背部には闊まで錆がおとる。

茎はしっかりした造りで、端部には研磨が施される。

**翡翠製勾玉** やや小型の碧玉製管玉94個と一連となる首飾りの親玉と考えられる異形の勾玉である。濃い緑色を呈する良質の石材を使用する。

長さは、3.5cmで、最大幅2.9cm、厚さ1.5cmを測り、通常的位置のものとはかに頭部から尾部へ縦に1孔を穿っているため、十字に孔が貫通している。

**碧玉製管玉** 上段のもので、勾玉と一連の小型の管玉である。94個が出土した。濃い緑色を呈する良質の石材を使用している。最小のものはNo.06の全長4.8mm、最大幅3.0mmで、最大のものはNo.88の全長10.4mm、最大幅3.7mmを認めることができる。

全長の平均値は、6.82mmで、最大幅は3.26mmと考えることができる。

**碧玉製管玉** 下段のもので、銅剣の東側に出土したやや大型の一連管玉である。これも濃い緑色を呈する良質の石材を使用している。最小のものは、No.123で、全長8.6mm、最大幅4.7mm、最大のものは、No.124で、全長16.6mm、最大幅4.9mmを測る。

全長の平均値は、13.01mmで、最大幅4.74mm程度と考えることができる。

**小 壺** 壺は、胴部下半以下を欠失する。半球形の胴部から反転する口縁部は端部がやや垂れて、内面が跳ね上げ状となる。

また、口縁部の口唇は幅広く、頭部に1条の三角突帯を巡らす。器色は、外面が茶褐色を呈し、頭部および胴部に黒斑が多く見られ、光沢を放っている。内面は黒色を呈する。

器面調整は、外面で細かいヘラナデで、内面は口縁がナデで、胴部との境に横ハケ目調整を施す。

胎土には石英粗砂粒を多く含む。焼成は堅緻である。口径12.2cm、頸部径10.2cm、胴部最大径22.8cmを測る。

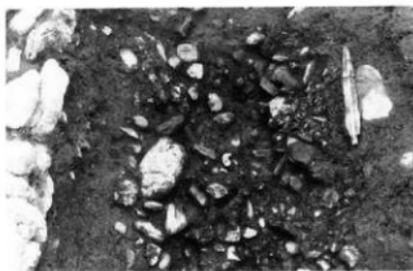
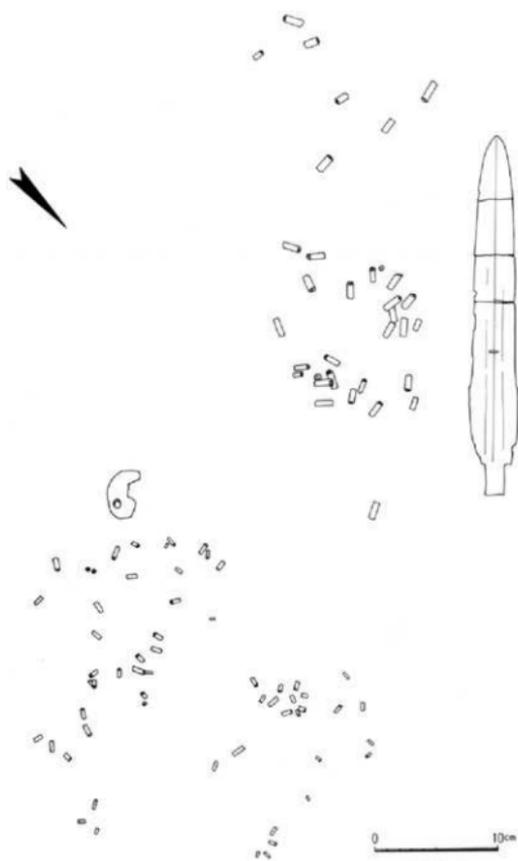


Fig.67 第2号木棺墓副葬铜剑·勾玉出土状况图 (1/4)



Fig.68 第2号木棺墓出土状況図 (1/30)

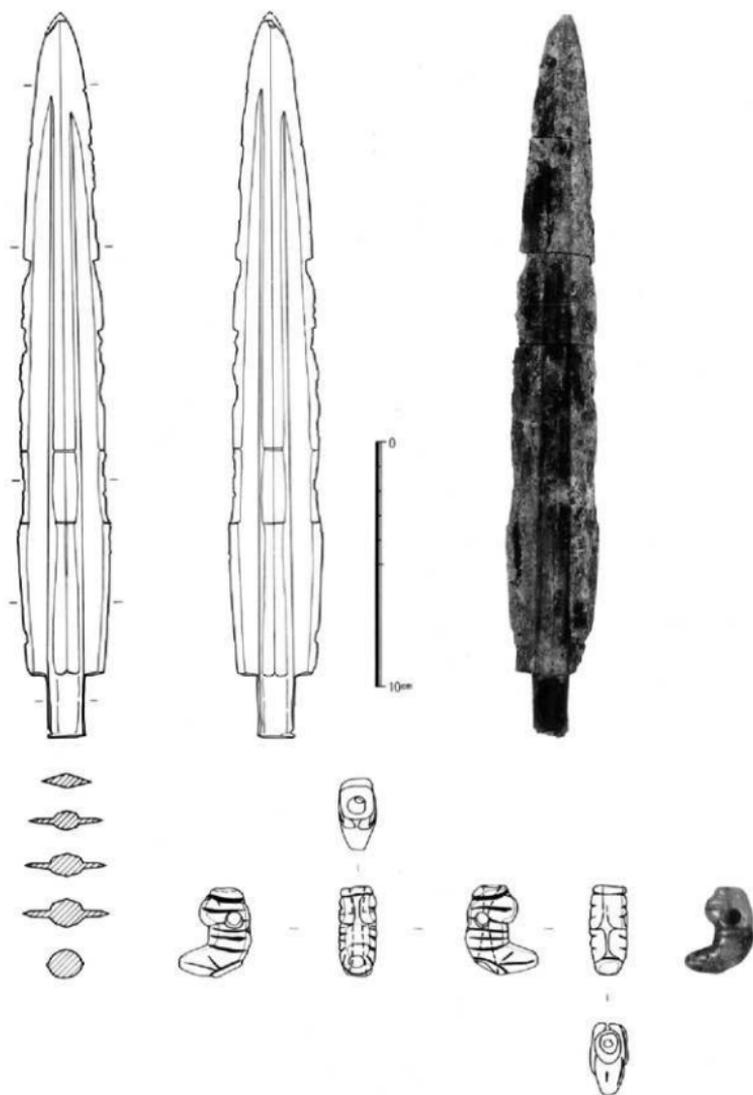


Fig.69 第2号木棺墓出土銅劍・勾玉実測図 (1/4)

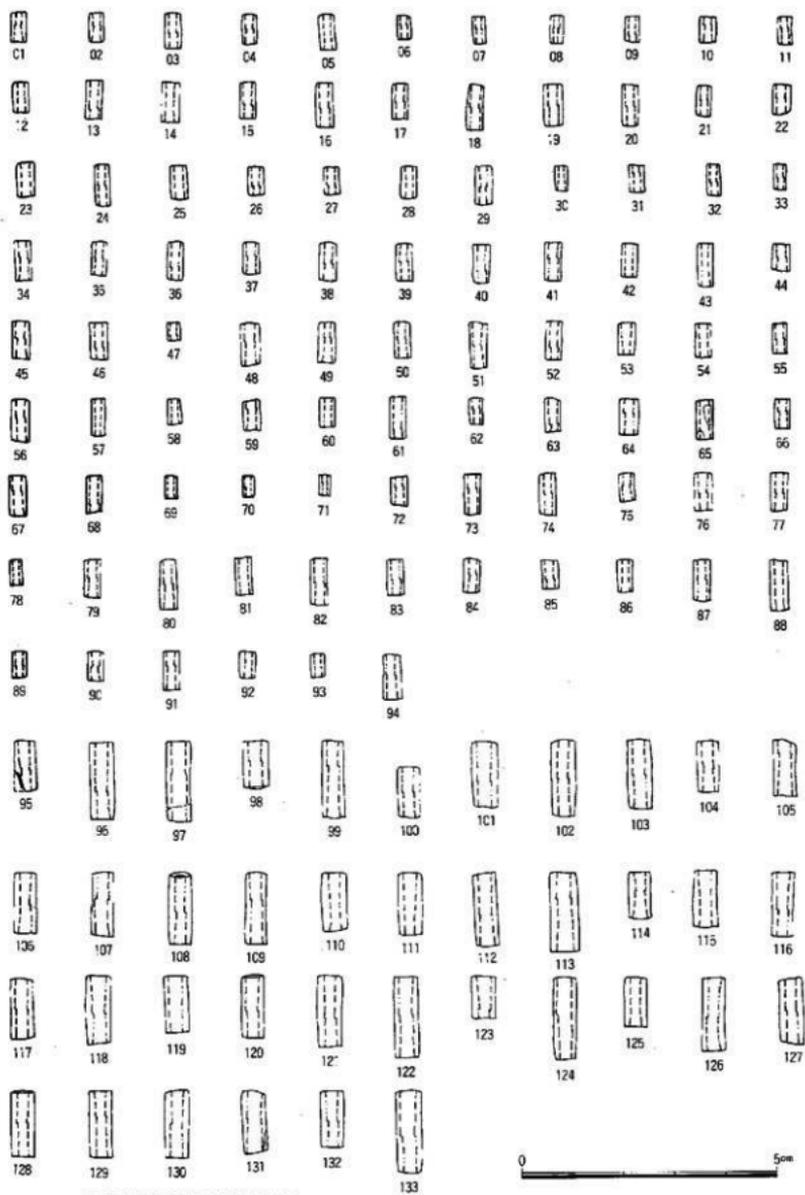


Fig.70 第2号木柙墓出土管玉刻图 (1/1)

Tab.10 第2号木棺墓 出土玉類計測表 (mm)

番号	種類	長さ	幅	石 材	備考	番号	種類	長さ	幅	石 材	備考
01	碧玉	6.0	3.4	碧玉	類焼り	69	碧玉	4.7	2.5	碧玉	類焼り
02	*	6.0	3.0	*	*	70	*	4.5	2.5	*	*
03	*	7.0	3.3	*	*	71	*	4.1	2.5	*	*
04	*	6.0	3.1	*	*	72	*	6.0	3.0	*	*
05	*	6.9	3.3	*	*	73	*	8.1	3.6	*	*
06	*	4.8	3.0	*	*	74	*	8.3	3.4	*	*
07	*	5.6	2.5	*	*	75	*	5.8	3.2	*	*
08	*	5.3	2.5	*	*	76	*	7.7	3.7	*	*
09	*	5.0	3.1	*	*	77	*	7.7	3.6	*	*
10	*	5.1	3.3	*	*	78	*	5.2	2.4	*	*
11	*	5.8	3.0	*	*	79	*	7.7	3.6	*	*
12	*	5.9	3.2	*	*	80	*	10.0	3.5	*	*
13	*	7.7	3.5	*	*	81	*	7.5	3.4	*	*
14	*	8.0	3.6	*	*	82	*	9.4	3.6	*	*
15	*	7.0	3.2	*	*	83	*	7.5	3.8	*	*
16	*	8.8	3.8	*	*	84	*	6.9	3.4	*	*
17	*	7.0	3.5	*	*	85	*	5.9	3.3	*	*
18	*	9.0	3.5	*	*	86	*	6.5	3.1	*	*
19	*	8.2	3.7	*	*	87	*	8.2	3.4	*	*
20	*	7.9	3.3	*	*	88	*	10.4	3.7	*	*
21	*	5.9	2.9	*	*	89	*	5.3	2.9	*	*
22	*	5.6	3.6	*	*	90	*	5.9	3.0	*	*
23	*	6.8	3.6	*	*	91	*	7.8	3.4	*	*
24	*	8.2	3.2	*	*	92	*	5.3	3.0	*	*
25	*	6.7	3.4	*	*	93	*	4.7	3.0	*	*
26	*	5.8	3.3	*	*	94	*	9.0	3.8	*	*
27	*	5.4	3.5	*	*	95	*	9.5	4.2	*	崩壊
28	*	6.3	3.2	*	*	96	*	15.5	4.8	*	*
29	*	7.4	3.3	*	*	97	*	16.2	4.9	*	*
30	*	4.9	2.6	*	*	98	*	9.3	5.1	*	*
31	*	5.5	3.1	*	*	99	*	15.6	4.5	*	*
32	*	6.2	2.8	*	*	100	*	10.1	4.8	*	*
33	*	5.0	2.7	*	*	101	*	13.2	5.1	*	*
34	*	7.8	3.5	*	*	102	*	15.1	4.7	*	*
35	*	6.7	3.2	*	*	103	*	13.8	4.8	*	*
36	*	7.5	3.3	*	*	104	*	10.0	4.5	*	*
37	*	6.1	3.6	*	*	105	*	11.2	4.8	*	*
38	*	7.3	3.5	*	*	106	*	12.3	4.5	*	*
39	*	7.4	3.4	*	*	107	*	13.0	4.4	*	*
40	*	7.9	3.4	*	*	108	*	14.2	4.4	*	*
41	*	7.7	3.4	*	*	109	*	14.4	4.6	*	*
42	*	6.9	3.1	*	*	110	*	11.5	5.2	*	*
43	*	8.5	3.5	*	*	111	*	12.3	4.8	*	*
44	*	5.3	3.4	*	*	112	*	14.7	4.7	*	*
45	*	7.3	3.5	*	*	113	*	15.7	5.3	*	*
46	*	7.4	3.6	*	*	114	*	9.2	4.7	*	*
47	*	3.8	2.5	*	*	115	*	11.4	4.8	*	*
48	*	8.5	3.7	*	*	116	*	13.2	4.4	*	*
49	*	8.0	3.5	*	*	117	*	12.3	4.6	*	*
50	*	7.1	3.2	*	*	118	*	13.7	5.2	*	*
51	*	9.4	3.8	*	*	119	*	11.4	4.8	*	*
52	*	7.9	3.2	*	*	120	*	12.7	4.6	*	*
53	*	6.3	3.7	*	*	121	*	14.4	5.0	*	*
54	*	6.9	3.0	*	*	122	*	16.3	4.9	*	*
55	*	6.1	3.0	*	*	123	*	8.6	4.7	*	*
56	*	8.5	3.7	*	*	124	*	16.6	4.9	*	*
57	*	7.2	3.2	*	*	125	*	10.1	4.5	*	*
58	*	5.2	2.6	*	*	126	*	14.9	4.6	*	*
59	*	6.3	3.6	*	*	127	*	13.4	4.7	*	*
60	*	6.0	3.1	*	*	128	*	13.7	4.6	*	*
61	*	8.4	3.3	*	*	129	*	13.6	4.7	*	*
62	*	5.4	2.8	*	*	130	*	13.7	4.7	*	*
63	*	6.8	3.3	*	*	131	*	12.7	4.9	*	*
64	*	7.3	3.6	*	*	132	*	11.4	4.6	*	*
65	*	8.1	3.4	*	*	133	*	16.8	4.9	*	*
66	*	6.0	3.0	*	*						
67	*	8.0	3.4	*	*						
68	*	7.5	3.4	*	*						

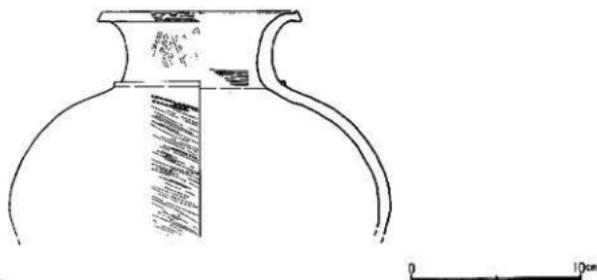


Fig.71 第2号木棺墓副葬土器実測図 (1/3)

### 3. 第3号木棺墓 (Fig.72~78) (P.L.10)

大型墳墓の群集する墓地の中央部南端に位置する大型の木棺墓である。主軸方位をN-36°-Eにとる。

墓壇は、縁辺がいびつな隅丸長方形を呈する。墓壇壁は垂直に立つことなく、緩いカーブを描いて立ち上がる。掘り方の規模は、長辺の長さが3.7m、短辺の長さ2.9m、深さ0.9mを測るもので、第2号木棺墓と比較すると掘り方と木棺規模ではかなり小型である。

主体部の木棺は、長辺の長さが2.6m、短辺の長さ0.9mの規模と考えられ、短辺の位置にある小口板掘り方から組合せ式の木棺と考えられる。掘り方の底面は、木棺墓周辺を広く長方形に縁取る様に内面が青灰色に変色している。

それから、墓壇の上面からやや上がった東辺部に、長辺の長さが1.7m、短辺長0.8m、厚さ0.5mサイズの花崗岩の大型礫がのつており、標石と考えられる。この大型礫は、本来1個以上はあったことが明らかであり、旧状では墓壇全体を覆っていた可能性が高いと考えられる。

木棺墓内の被葬者は、頭部が北を向いて埋葬されている。また、北側小口近くの床面には翡翠製勾玉1個、碧玉製管玉95個で一連となる首飾りが出土した。

また、遺体の右側辺にあたると思われる西側側辺の付近で、3個の青銅器が重なって出土した。個々の青銅器は下部から細形銅矛、細形銅剣とそれから最上部に多紐細文鏡が見つかった。

さらに、遺体の左側辺と考えられる東側側辺近くで細形銅戈を内側に、細形銅剣を外側にして並べて副葬している。これらはいずれも切先を足の方向にむける。

このうち細形銅戈は出土状況から着柄のまま副葬された可能性は少ない。また、細形銅矛や細形銅文には身に絹布が付着している。

それから北小口部の棺外で副葬の小型壺1個が出土した。

第3号木棺墓から出土した細形銅剣2口、細形銅矛1口、細形銅文111の5口の青銅器類は、その数、種類ともに豊富で、他の木棺墓や甕棺墓などには見られない特徴となっている。

**副葬品 細形銅剣 図(Fig.74)**の左側の銅剣は、棺内右側辺に他の青銅器とともに重なって副葬されたものである。

銅剣は、全体に灰緑色～暗灰緑色を呈し、保存状態は良好で、光沢を放っている。全長が、33.5cmを測り、ほぼ完器と考えられる。また、全体に研ぎだしが不十分であり、背部の錆の形成が不十分である。身部の握はほぼ対称形をなし、切先までの長さは2.8cmを測る。また、刃方は、長さが2.6cmと小さく、中位での幅は4.1cmを測る。刃方の下端部から胴部までの長さは7.6cm、最大幅4.6cmを測り、

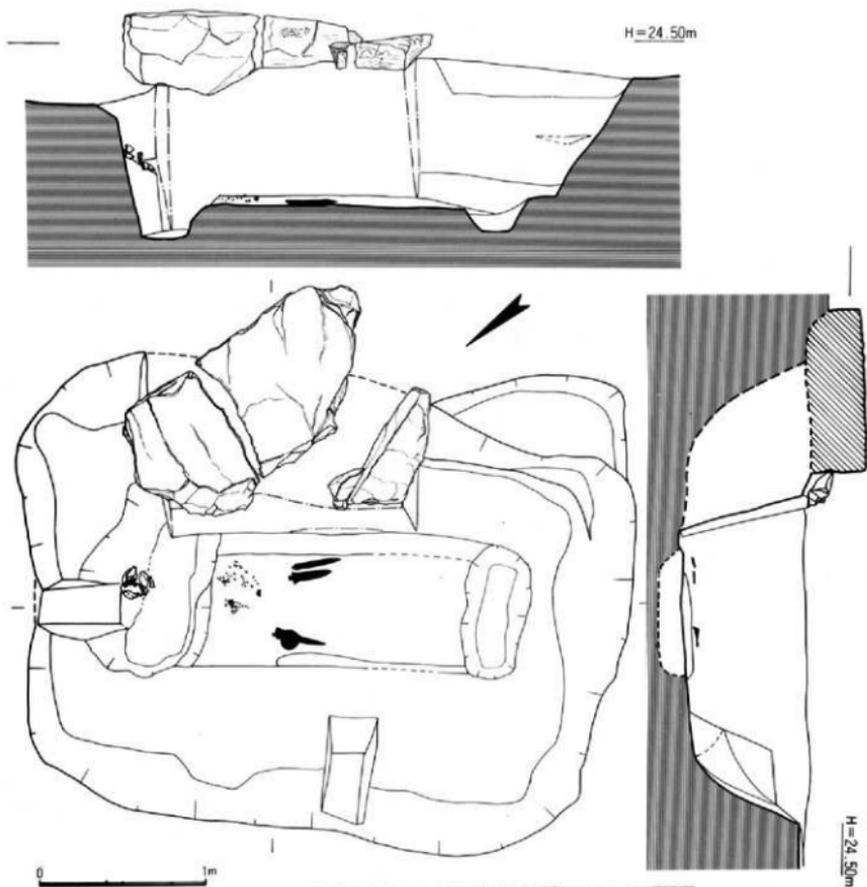


Fig.72 第3号木棺墓出土状况图 (1/30)

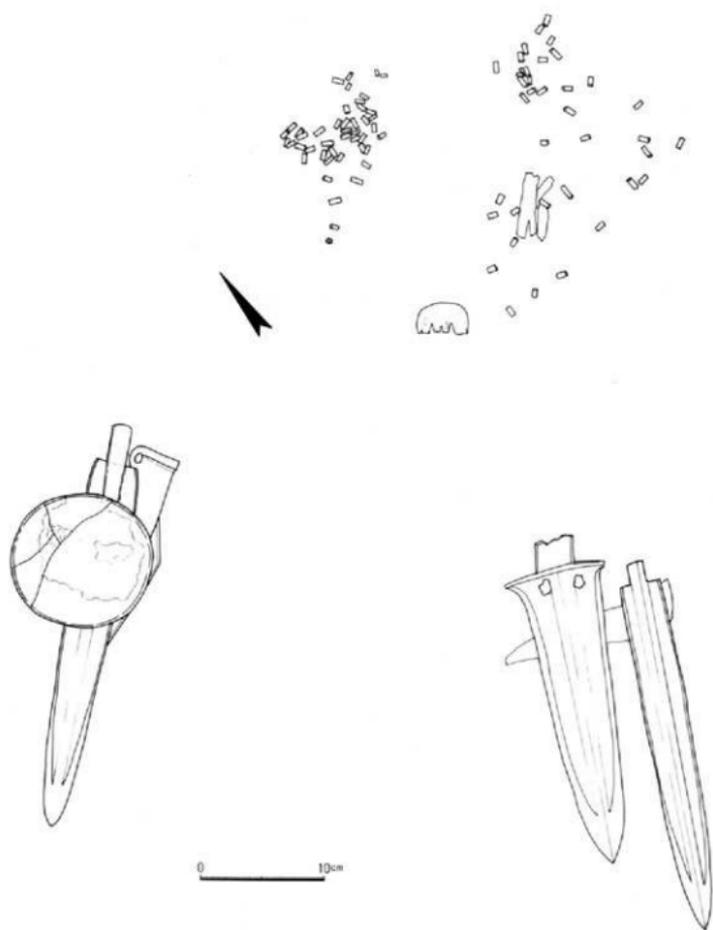


Fig.73 第3号木棺墓副葬遺物出土状況圖 (1/4)

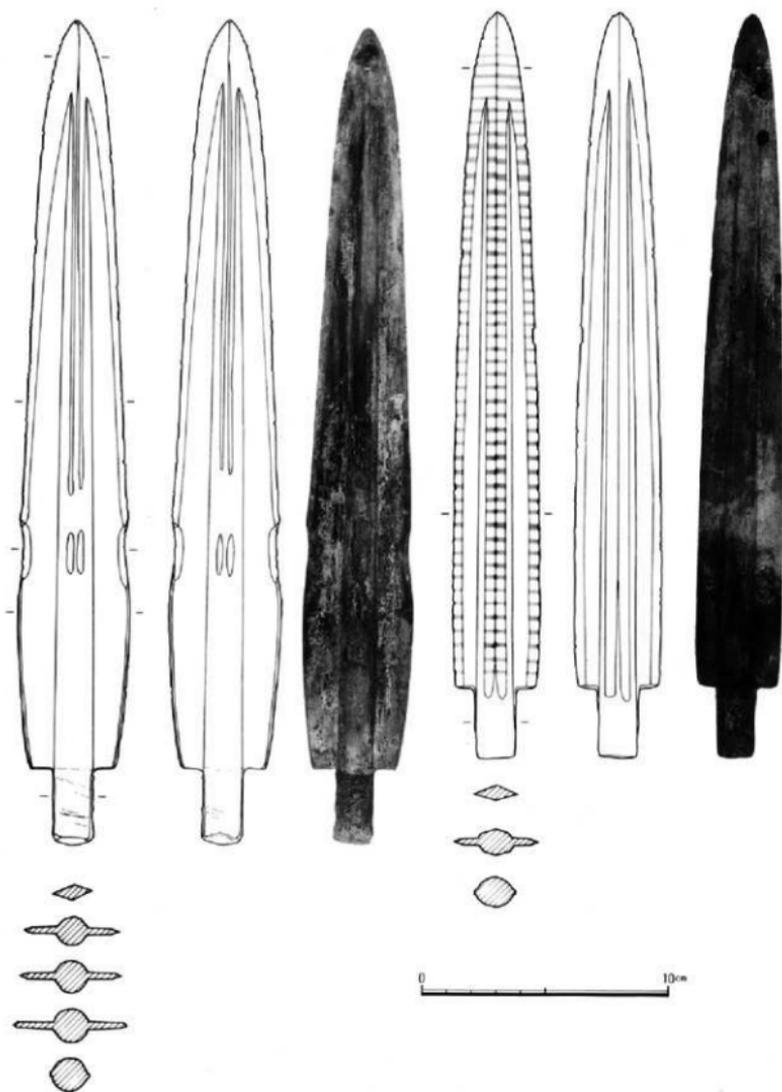


Fig.74 第3号木棺墓副葬铜箭头实测图 (1/2)

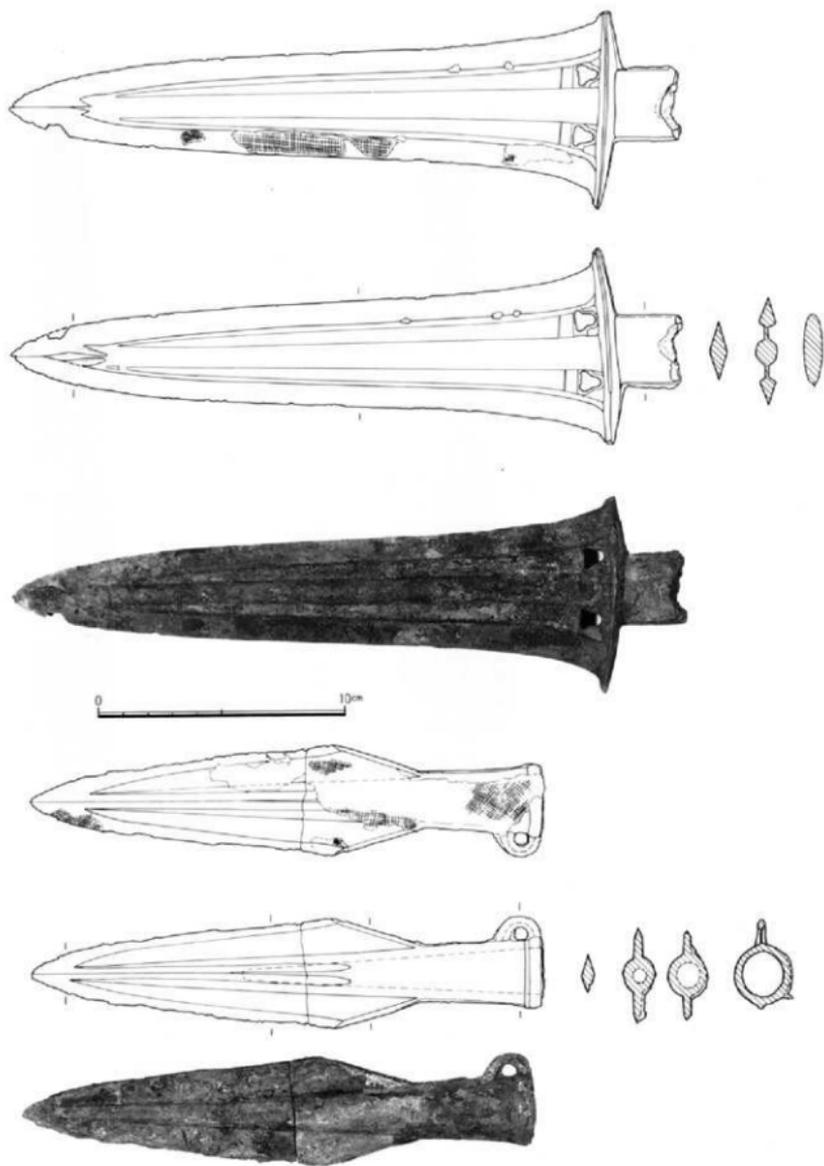


Fig.75 第3号木棺墓铜矛头·铜矛实测图 (1/2)

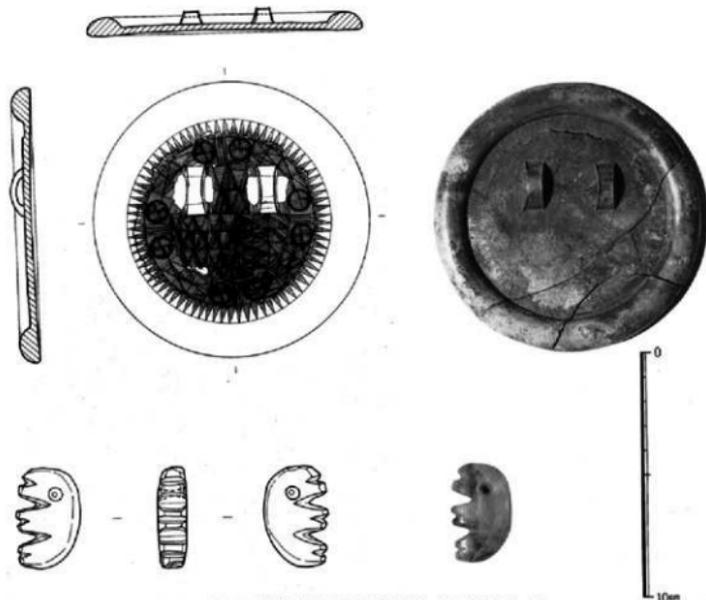


Fig.76 第3号木棺墓副葬多量銅文鏡・勾玉実測図(1/2)

鑄放しのままである。

また、刃方以上では刃部の形成は表裏ともに通常に行われているが、研ぎが弱いのか背部の鑄は刃方上端部より2cmほど先端部までしか形成されておらず、それも極めて弱いものである。胴部の幅は3.4cmを測る。また、茎は、長さ3cm、径1.6cmで、断面が扁円形をなす。

図(Fig.74)の右側の銅剣は、棺の左側辺に置かれたもので、器色が全体に灰緑色～暗灰緑色を呈し、非常に保存状況の良好なものである。全長が30.3cmを測り、特徴として刃方を持たず直線的な身部をなす。樋は両面ともに非対称であるが、切先までの長さは2.6～3.6cmを測る。

さらに、身部の片面は、刃部および背部の全面にわたって研ぎわけが見られ、いずれも幅3mm程度で身に対して左上がりの斜め方向と直交方向の研ぎが交互になされている。背部の鑄は胴部までおよび、胴部の幅は、3.2cmを測る。また、茎は、長さ2.8cm、幅1.6cmの扁円形をなす。

細形銅矛 棺の右側辺に置かれた銅矛で、器色は灰緑色を呈する。全長が、20.7cmを測り、刃部の長さ12.2cm、翼の長さ3.5cmを測る。また刃部と翼の境の幅は4.5cmである。

また、刃部はその下端まで中央に鑄を有し、樋は非対称であり、側辺部の破損が多い。翼部も刃付けがなされている。袋部は、下端に1個の扁平な耳を付する。銅矛は全体的に造りがしっかりしたものである。また、片面には絹布が全面に付着している。

細形銅戈 棺の左側辺部に置かれた銅戈である。器色は、灰緑色を呈し、全体的に保存の良好な製品である。全長が27cmを測り、造りは全体的に重厚である。

身部は先端部の両方向からの研ぎだしが十分ではなく、片面では明瞭な鑄を有するものの反対面では先端の一部しか形成されない。また樋の長さは表裏で非対称であるが、下端部の孔部に近接して2

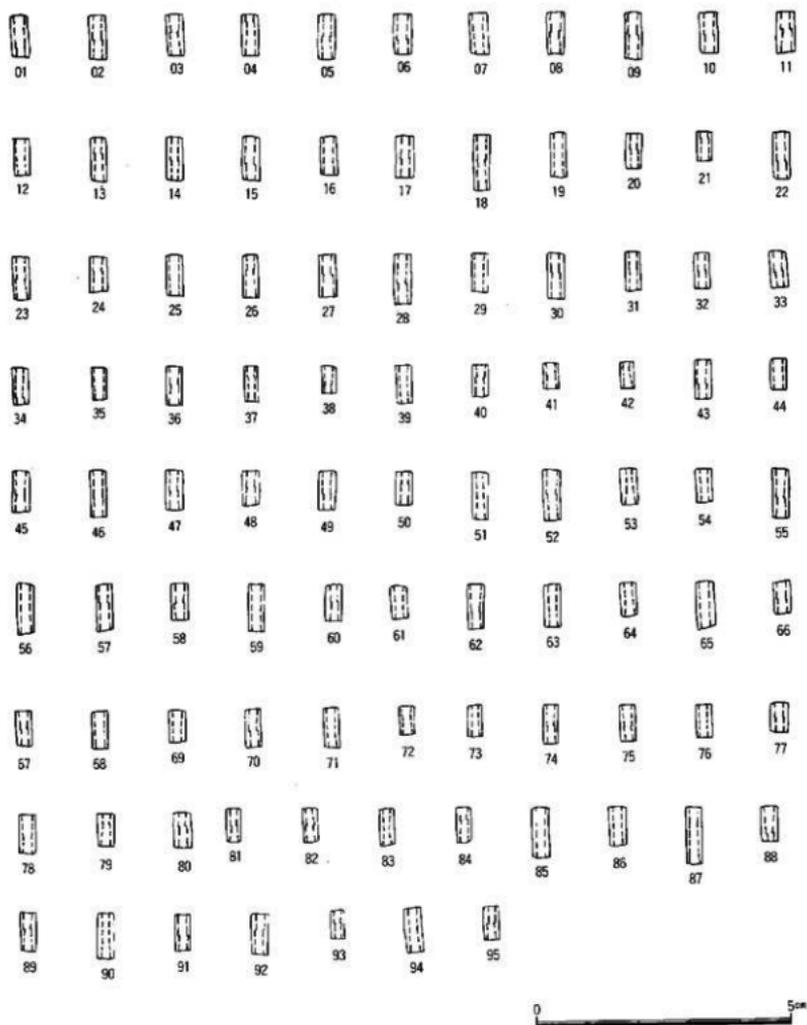


Fig.77 第3号水塔墓出土玉笏测图 (1/1)

Tab.11 第3号木棺墓 出土玉類計測表 (mm)

番号	種類	法 量		石 材	備 考	番号	種類	法 量		石 材	備 考
		全長	最大幅					全長	最大幅		
01	管玉	8.0	3.8	碧玉		49	管玉	7.7	3.6	碧玉	
02	*	8.4	3.9	*		50	*	6.7	3.5	*	
03	*	7.9	3.5	*		51	*	9.6	3.3	*	
04	*	8.1	3.6	*		52	*	10.1	3.5	*	
05	*	8.8	3.3	*		53	*	7.1	3.4	*	
06	*	8.0	3.6	*		54	*	6.8	3.4	*	
07	*	8.3	3.7	*		55	*	10	3.4	*	
08	*	8.1	3.4	*		56	*	10.1	3.3	*	
09	*	9.0	3.5	*	古い欠失あり	57	*	9.3	3.3	*	
10	*	8.1	3.7	*		58	*	7.2	3.4	*	
11	*	8.0	3.6	*		59	*	9.5	3.4	*	
12	*	7.3	3.2	*		60	*	7.3	3.4	*	
13	*	8.6	3.5	*	一部不正円形	61	*	6.4	3.6	*	
14	*	8.4	3.4	*		62	*	8.8	3.3	*	
15	*	8.6	3.6	*		63	*	8.5	3.3	*	
16	*	7.6	3.5	*		64	*	6.4	3.5	*	古い欠失あり
17	*	8.2	3.8	*		65	*	9.5	3.7	*	
18	*	10.9	3.5	*		66	*	6.7	3.2	*	
19	*	8.5	3.4	*		67	*	7.0	3.2	*	
20	*	6.9	3.2	*		68	*	7.5	3.4	*	
21	*	5.8	3.1	*		69	*	6.4	3.5	*	
22	*	9.3	3.4	*		70	*	7.8	3.3	*	
23	*	8.4	3.3	*		71	*	7.9	3.2	*	
24	*	7.2	3.7	*		72	*	5.6	3.0	*	
25	*	8.0	3.3	*		73	*	6.5	3.0	*	
26	*	8.3	3.2	*		74	*	8.0	3.0	*	
27	*	8.5	3.3	*		75	*	7.6	3.2	*	
28	*	10	3.3	*		76	*	6.9	3.5	*	
29	*	7.8	3.2	*		77	*	5.9	3.7	*	
30	*	9.1	3.5	*		78	*	8.1	3.3	*	
31	*	7.8	3.2	*		79	*	6.7	3.4	*	
32	*	7.1	3.2	*		80	*	7.0	3.6	*	
33	*	7.4	3.5	*		81	*	6.3	2.9	*	
34	*	7.3	3.4	*		82	*	6.8	3.2	*	
35	*	6.4	2.9	*		83	*	7.4	2.9	*	
36	*	7.7	3.4	*		84	*	6.8	2.9	*	
37	*	7.0	2.8	*		85	*	10	3.6	*	
38	*	5.5	3.1	*		86	*	7.7	3.7	*	
39	*	7.7	3.4	*		87	*	11.2	3.3	*	
40	*	6.3	3.2	*		88	*	6.7	3.4	*	
41	*	5.3	3.0	*		89	*	7.6	3.2	*	
42	*	5.6	2.8	*		90	*	9.0	3.0	*	
43	*	7.8	3.7	*		91	*	7.1	3.1	*	
44	*	6.3	3.1	*		92	*	7.9	3.6	*	
45	*	8.4	3.4	*		93	*	5.8	2.9	*	
46	*	9.5	3.4	*		94	*	8.6	3.6	*	
47	*	8.2	3.6	*		95	*	6.4	3.0	*	
48	*	7.1	3.4	*							

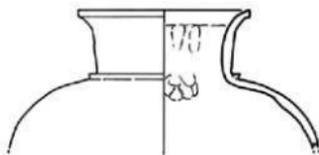


Fig.76 第3号木棺蓋副葬土器実測図 (1/3) 0 10cm

本の区画線が見られ、この部分は段をなして肥厚する。

また、関の幅は、8cmである。内は、長さ2.7cm、幅3cmのサイズで、端部は一部に研磨が見られる以外は未調整であり、関との境界部分には甲張りが残る。また、身部に絹布が付着している。

**多鈕細文鏡** 棺の右側側辺部に細形銅剣、細形銅矛とともに鏡面を上にして副葬された鏡である。

面径は11.2cmを測り、鏡面は凹面をなす。また縁の断面は半円の蒲鉾形をなしている。

鏡の裏面は、中心よりずれた位置に3cm間隔で2個のブリッジ状の紐をつける。また、内部の文様帯は外区に鋸歯文を巡らし、内部を細線で埋めている。また、中区の特徴は、2個単位の円文を4対配置し、これ以外の部位を三角形、長方形などに区切り、さらにこれらを平行、綾杉状に細線で埋めている。内区は紐周辺で消された部分も見られるが、円内を不等分に分割して不統一な三角形に区切り、これらをさらに細線で埋め尽くしている。なお、外区の約半周にわたって鋳型のずれがみとめられる。

**翡翠製勾玉** 棺の北側小口部近くで95個の碧玉製管玉とともに出土した。色調は、白色部分の多い緑色を呈する。全体に平たく、背部の反対側には大型のノッチが2ヶ所、小型のノッチ3ヶ所を有する大型の異形勾玉である。このノッチ間の突出する部分は細かく面取りされ、稜をなしている。

**碧玉製管玉** 先の勾玉とともに棺の北側小口部で出土した管玉で、一連をなすものである。

石材は、濃い緑色を呈する均質なもので玉として完成度の高い製品が多い。

玉のサイズは、95個の平均で全長が7.77mm、最大幅が3.35mmを測るが、最大のものがNo.87で、全長11.2mm、最大幅3.3mmを測る。また、最小のものはNo.41で全長5.3mm、最大幅3.0mmを測るが、玉としての均一性は長さよりも寧ろ直径を揃えることに主眼が置かれているものと考えられる。

**小 蓋** 北側小口部の上部に副葬されていた小型の蓋形土器である。胴部の下半部を欠失している。

よく膨らんだ胴部は、頭部にいたって断面三角形をなす段状の突帯1条を巡らす。口縁はやや外傾気味に立上り、端部近くで外反する。

器色は、外面が黒褐色を呈し、内面は、暗赤褐色である。また、外面の全部と内面胴部上端近くまで黒色顔料の塗布がみられる。

器面調整は、胴部が幅広いヘラ状工具による横方向のナデで、口縁部は縦方向のヘラナデである。また、内面は口縁部の上端付近に横方向のヘラナデを加え、胴部はナデ調整で、口縁部との境に指押えが見られる。

胎土は、石英の細砂を若干含み、精良な粘土を使用している。焼成は堅緻である。

口径は、10.5cmを測り、胴部径13.2cm、残存胴部径18.6cm、残存器高8.6cmを測る。

#### 4. 福岡市西区吉武高木遺跡出土の細形銅矛及び 細形銅戈に付着する織物について

京都工芸繊維大学名誉教授 布目順郎

吉武高木遺跡の第3号木棺から出た標記の銅器にそれぞれ織物が付着していることについては、飯盛遺跡（吉武遺跡群）第4次調査概要<sup>1)</sup>において指摘されている。このたび、これらの織物を調査する機を得たので、ここにその結果を報告する。なお、本木棺墓の時期は弥生中期初頭とされる。

##### 1. 材質

出土の織物（第1図）の材質調査は、それら織物を構成する繊維の断面形によった。断面作成はパラフィン切片法による。

結果は第2図にみるように、明らかに家蚕のものである。

銅戈の織物では緯糸の採取が困難であったため、経糸のみについて調査した。

##### 2. 織り密度と繊維断面計測値による産地推定

第1図にみるように、出土の絹はいずれも平絹であり、織り密度と繊維断面についての調査成績は第1表に示す通りである。

銅矛の絹での $40 \times 20$ という密度は有田遺跡（弥生前期末）の絹のそれ<sup>2)</sup>に等しく、比恵・栗山両遺跡（いずれも弥生中期前半）の絹でのそれにもきわめて近い<sup>3)</sup>。

銅戈の絹での $20 \times 20$ はそれらよりもはるかに粗い。

筆者は有田、比恵、栗山の絹を、その織り密度から日本製とみなした。したがって本遺跡の2つの絹もまた日本製とみて差支えないと思われる。

本遺跡の絹の繊維断面計測値を、第2表に示す漢代絹でのそれと比較（比較は経、緯の平均値で行ない、差の有意性検定は省略する）するとき、次のことがいえる<sup>4)</sup>。

**銅矛の絹**：完全度については漢代4墓での値のいずれよりも小さい。

断面積については漢代4墓のうちの陽高、楽浪よりも馬王堆、ノイン・ウラの値に近い。

**銅戈の絹**：完全度については漢代4墓のうちの陽高、楽浪よりも馬王堆、ノイン・ウラの値に近い。

断面積については漢代4墓のいずれにおけるよりも小さく、過去に扱った弥生絹のいずれにおけるよりも小さい。

繊維の断面計測値を互いに比較しようとする場合、通常、完全度によるよりも面積によるほうが信頼度が高いことから、面積を互いに比較することによって出土の絹の材料系を産した蚕の品種を想定するとすれば、銅矛の絹の材料を産した蚕は中国本土系のおそらく四眠蚕であった可能性があり、そのような蚕が出土地のあたりで飼育されていたものと思われる。他方、銅戈の絹の場合は楽浪系三眠蚕のものである可能性が考えられる。しかしその値が異常なくらいに小さく、かつ織り密度が粗いことから考えると、屑物（本来ならばマワタ用とされるようなもの）が使われている可能性もある。

終りに、本調査の機会を与えられた福岡市教育委員会に感謝の意を表する。

文献 1) 福岡市教育委員会「飯盛・吉武地区園場整備に伴う発掘調査-飯盛遺跡(吉武遺跡群)第4次調査概要-」1985

2) 布目順郎 投稿中

3) 布目順郎「比恵遺跡出土の細形銅剣に付着する織物・繊維について」

(福岡市教育委員会「比恵遺跡-第6次調査-遺跡編-」福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集) 1983

4) 布目順郎「養蚕の起源と古代絹」雄山閣、1979

Tab.12 吉武高木遺跡出土の細形銅矛及び細形銅戈に付着する平網の繊維断面計測値と織り密度

質 料	経緯の別	繊維断面についての計測値			織糸数 (対1cm)	経糸数と 緯糸数の比	織糸の巾 (mm)
		完全度(%)	面積( $\mu^2$ )	供試繊維の数			
細形銅矛に付着の平網	経	51.8±4.67	69.9±4.83	20	40	2.00	0.30—0.40
	緯	48.8±3.89	64.5±6.46	20	20		
細形銅戈に付着の平網	経	53.7±4.51	28.9±3.65	30	20×20	1.00	

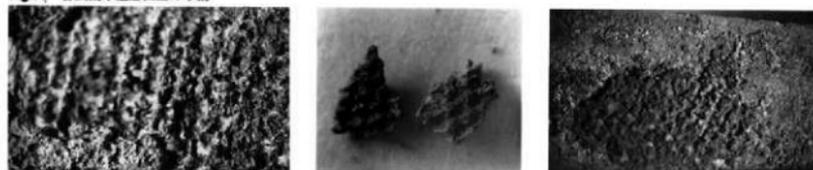
備考 標記の銅矛と銅文はともに第3号木棺から出たもの。時期は弥生中期初葉。

Tab.13 漢代の平網における繊維断面計測値

遺跡名	繊維断面についての計測値	
	完全度(%)	面積( $\mu^2$ )
陽高峴(山西省)	50.9 (10)	37.1 (10)
樂浪	50.8 (23)	49.8 (23)
馬王堆1号	— (5)	65.5 (5)
	[53.9]	[69.3]
ノイン・ウラ	53.9 (20)	73.0 (20)
バルミラ	—	—

- 備考 (1) 馬王堆の絹織物断面計測値は「考古学報」(1974年第1期)にあるもの(ただし、[ ]内の数値は著者が同学報に示された絹織物断面写真をもとに算出したもの)。  
 (2) 本表の数値にはマワタでのものは含まれていない。  
 (3) ( )内の数値は資料数。

Fig.79 吉武高木遺跡出土の平網



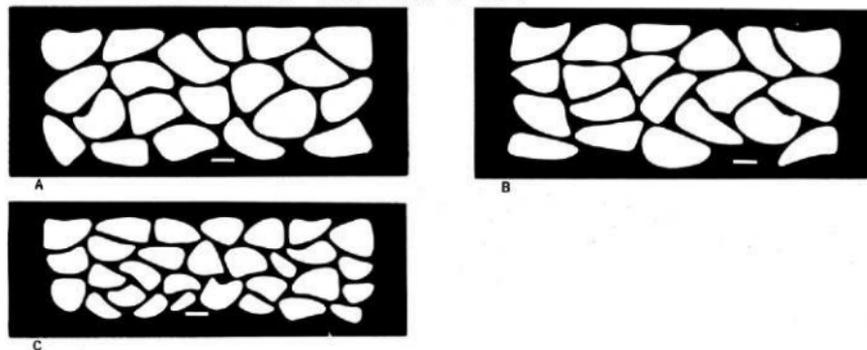
A 細形銅矛に付着する平網

B その一部拡大

C 細形銅戈に付着する平網

Fig.80 出土の平網の繊維断面転写図(個々の断面転写図を無秩序に並べたもの)

scale: いずれも1mm



A 細形銅矛の平網の経糸 B 同じ平網の緯糸 C 細形銅戈の平網の経糸

scale: いずれも5 $\mu$

5. 第4号木棺墓 (Fig.81~83) (PL.10)

大型墳墓の分布する墓地の東側に位置し、主軸の方位を他のものと近いN-46°-Eにむける木棺墓である。

この木棺墓は、規模のうえでは第1号木棺墓に近いサイズである。

まず、墓壇は、長方形を呈し、長辺の長さが3m、短辺の長さは北側で1.8m、南側で1.6mとなり北側が幾分幅広く、深さ0.9mを測るものであるが、この木棺墓の特徴はこのうえに置かれた標石の形態である。第2・3号木棺墓やK117号甕棺墓に特徴的に見られるような大型の角礫を用いて墓壇上にお

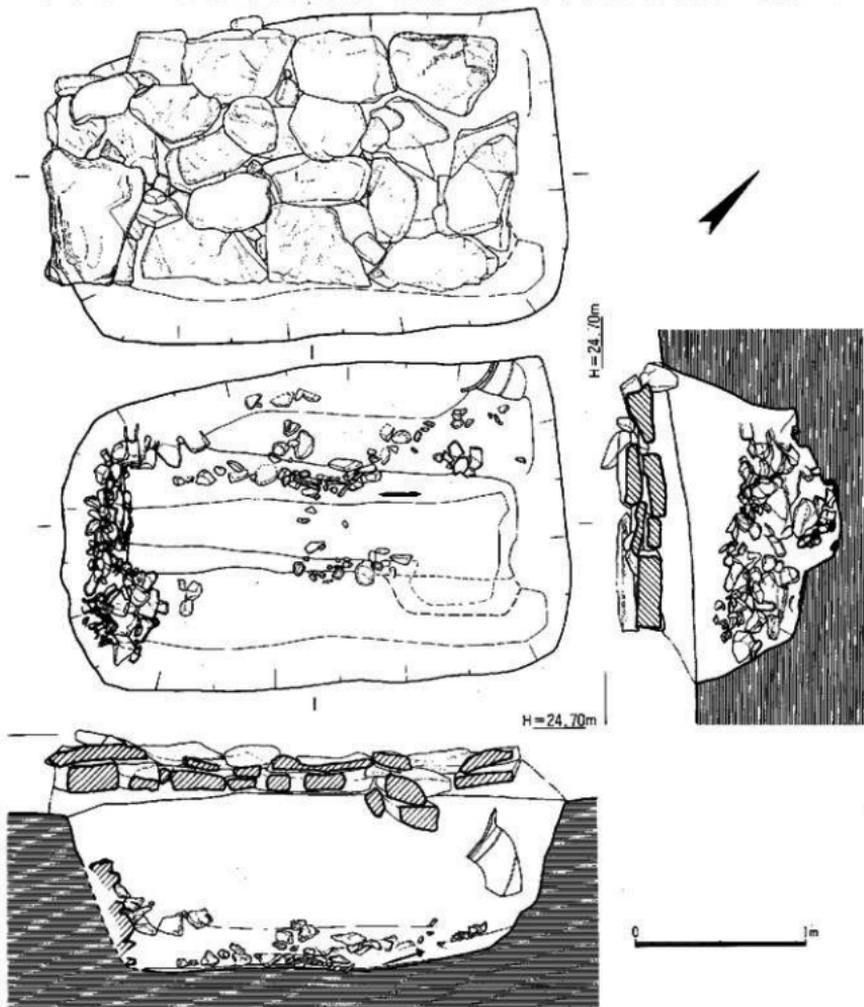


Fig.81 第4号木棺墓出土状況図

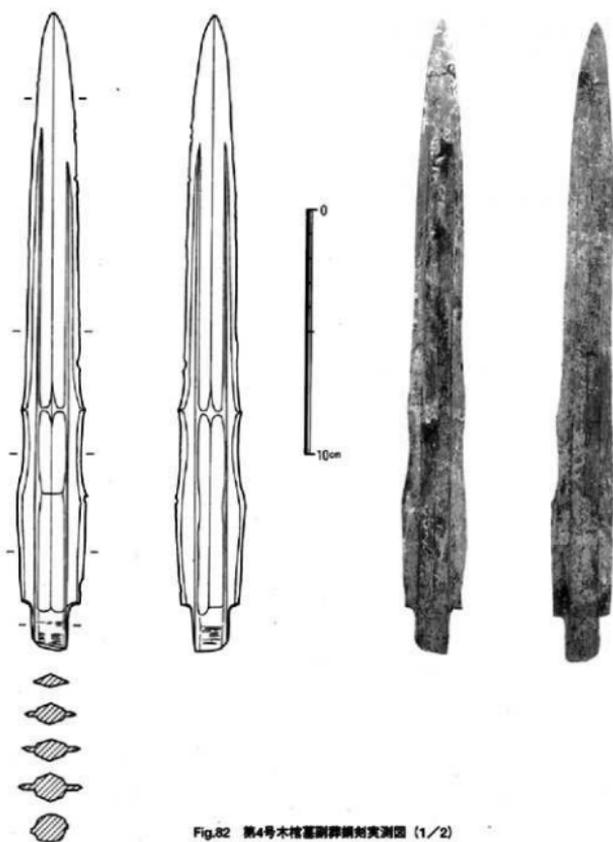


Fig.82 第4号木棺墓副葬銅剣実測図 (1/2)

いて標石とするものとは異なり、大型のものでも長さが0.7m、幅0.3mほどの扁平な安山岩や花崗岩の礫を使用し、石材の長辺をうまく利用して形を整え、墓壇の外縁に沿って全面を長方形に覆う形態である。

また、この標石は墓壇の上端部から高いところで約30cmほど浮いており、これ以上の墳丘盛土が想定できよう。

墓壇内の棺主体は、長辺の長さが2.3m、短辺で0.6mを測る規模の木棺墓であり、被葬者は北側に頭部を向けて埋葬されたと考えられる。また、木棺底部の横断面形は半円状をなす。

また、棺の埋置後にはとくに南側小口部において丁寧な詰め石が行われており、その上端部が棺の規模に対応すると考えられる。

木棺墓の北側小口に近い側辺部に切先を南に向けた細形銅剣1点が副葬されていた。

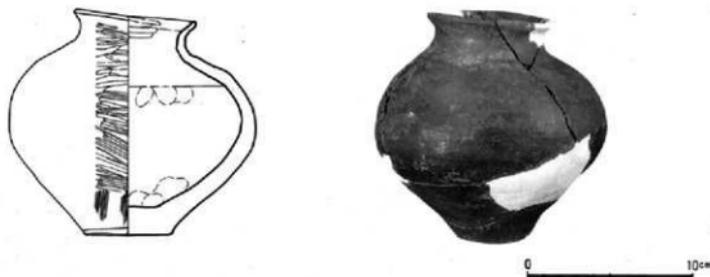


Fig.83 第4号木棺墓副葬土器実測図 (1/3)

また、同様に北側小口部に近い側面に棺外副葬と考えられる小壺1個がつけられて破片となり出土した。

それから、墓壇の北西隅の壁には胴部にヘラ描きの平行沈線文を有する金海式土器が一部顔を出しており、木棺墓の墓壇掘削のときに掘り残されたと判断できることから、切り合いの少ない木棺墓と甕棺墓の中で、少なくとも木棺墓より古い甕棺墓が存在することが考えられた。

**副葬品 細形銅剣** 全体に研ぎ減りが非常に進んだ銅剣である。器色は、淡緑色から暗緑色を呈する。全長が、26cmを測り、全体的なバランスから茎の大きさが異常に目立つ。

穂は、片面で非対称である。対称な片面では穂上端から切先までの長さが5.2cmを測る。

刃方は、長さ3.5cmで、中位での幅2.3cmを測るが、片方の辺では下部が不明瞭となっている。刃方下部以下間までの身部の長さは4.4cmを測る。また、間の幅は、2.4cmを測り、背部の錆はこの間まで及んでいる。茎には、着柄のための繊維が巻かれているのが観察できる。

**小壺** 比較的大きな底部から膨らむ胴部はほぼ中位で最大径に達し、短い外反する口縁部へとつながる。壺は、左右対称ではなく、いびつで口縁部も水平とならない。

器色は、外面胴部の殆どに黒斑が見られ、これ以外の部位では内外面ともに暗い赤褐色を呈する。

器面調整は、外面が口縁部～胴部の殆どの部分に横ヘラミガキを施し、下端部近くに非常に細かい縦ハケ目、ナデが残る。また、内面は、磨滅が著しいが、内底部や頸部付近に指押えが見られる。

胎土は、石英細砂を多く混入し、やや粗である。焼成は、堅緻である。

器高は、13.1～13.9cmで、口径7.5cm、頸部径6.8cm、胴部最大径14.9cmを測る小壺である。

Tab.14 第4・5次調査遺構一覧表

番号	車種	構造			屋根	埋方	埋方	埋方	埋方	埋方	備考
		開口式	開口式	開口式							
K100	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	壁形跡あり
K101	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	土層埋方・一部埋方あり
K102	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K103	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K104	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K105	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K106	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方に2次穿孔あり
K107	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	下に2次穿孔あり
K108	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K109	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K110	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K111	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K112	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K113	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K114	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	下に埋方埋方あり
K115	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K116	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K117	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K118	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K119	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K120	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K121	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K122	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	下に2次穿孔あり
K123	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K124	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K125	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K126	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	下に2次穿孔あり
K127	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	下に2次穿孔あり
K128	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K129	/	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	

番号	車種	構造			屋根	埋方	埋方	埋方	埋方	埋方	備考
		開口式	開口式	開口式							
K130	/	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	壁片
K131	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K132	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K133	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	
K134	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K135	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K136	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K137	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K138	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	金海式5次埋方あり
K139	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K140	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K141	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	6次埋方あり
K142	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	6次埋方あり
K143	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K144	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K145	/	/	○	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K146	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K147	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K148	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K149	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
K150	○	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	6次埋方あり
K151	/	○	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
K152	/	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	5次埋方あり
M1	/	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
M2	/	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
M3	/	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり
M4	/	/	/	/	壁	壁	壁	壁	壁	壁	埋方埋方あり

### 3. 小 結

これまで吉武高木地区にかかる第4・5次調査で検出した弥生時代の埋葬遺構のうち、特に副葬品を伴うものについて簡略な報告を行ってきたが、ここで報告した各埋葬主体について副葬遺物の構成を再記しておく。なお、青銅製武器類の分類区分は、森貞次郎先生による分類で行っている。

- ・ K100号甕棺墓 細形銅剣Ⅰ口(細形銅剣BⅠ式、長さ29.5cm)
- ・ K109号甕棺墓 碧玉製管玉10個(平均全長7.77mm、最大幅3.23mm)
- ・ K110号甕棺墓 銅剣2個(外径7.3cm、内径6.6cm)  
翡翠製異形勾玉1個(長さ2.4cm)  
碧玉製管玉74個(平均全長9.32mm、最大幅3.76mm)
- ・ K111号甕棺 碧玉製管玉92個(平均全長8.13mm、最大幅3.32mm)
- ・ K115号甕棺墓 細形銅剣Ⅰ口(細形銅剣BⅠ式、現存長さ29.9cm)
- ・ K116号甕棺墓 細形銅剣Ⅰ口(細形銅剣BⅠ式、現存長さ25.4cm)
- ・ K117号甕棺墓 細形銅剣Ⅰ口(細形銅剣BⅠ式、現存長さ35.3cm)  
翡翠製勾玉1個(長さ2.4cm)  
ガラス製小玉1個
- ・ K125号甕棺墓 柳葉形有柄磨製石鏃1個(長さ11.25cm)
- ・ 第1号木棺墓 細形銅剣Ⅰ口(細形銅剣BⅠ式、29.8cm)  
碧玉製管玉20個(平均全長9.99mm、最大幅3.96)
- ・ 第2号木棺墓 細形銅剣Ⅰ口(細形銅剣BⅡ、現存長さ29.1cm)  
翡翠製異形勾玉1個(長さ3.5cm)  
碧玉製管玉①94個(平均全長6.82cm、最大幅3.26)  
碧玉製管玉②13個(平均全長13.1mm、最大幅4.74mm)
- ・ 第3号木棺墓 多鈕細文鏡1面(面径11.2cm)  
細形銅剣Ⅰ口(細形銅剣BⅠ式、長さ33.5cm)  
細形銅矛Ⅰ口(細形銅矛A式、長さ20.7cm)  
細形銅劍Ⅰ口(細形銅劍C式、長さ30.3cm)  
細形銅戈Ⅰ口(細形銅戈B式、長さ27cm)  
翡翠製異形勾玉1個(長さ4cm)  
碧玉製管玉95個(平均全長7.77mm、最大幅3.35mm)
- ・ 第4号木棺墓 細形銅剣Ⅰ口(長さ26.0cm)

このように弥生時代前期末～中期初頭にかけて営まれたと考えられる吉武高木地区の副葬品を出土した甕棺墓、木棺墓は、調査から10年近く経った現在でもその副葬数や埋葬主体での副葬頻度についての特色は変わっていない。しかしながら、今回の報告書作成にあたって個別の整理を進めるうちに問題点がやや整理されたのではないかと感じている。

すなわち、高木地区に関しては弥生時代前期末から中期前半ころまでの墓地がほぼ3群認められ、確実に前期末に遡る墓地もあり、副葬品を多く持つようになった墓地とのつながりをどのように考えるか。また北西側約100mに位置する吉武大石地区やこれを含んでやはり前期末ころから墓地の形成が始まると考えられる甕棺ロードとの関係をどう理解するかである。

また、全体として豊富な副葬品を出土した吉武高木地区においても第3号木棺墓を除けば基本的に副葬品は銅剣一点、あるいは装身具のみといった単数に近い構成であると理解できる。さらに、第3号木棺墓の副葬品である銅剣には殆ど実用に供されたことがないのではないかと考えられる調整不良のものや研ぎわけのある装飾性を合わせもつもの、内に甲張りの付いたままの銅戈があるなど他の甕棺墓や木棺墓出土の副葬品とは様子が異なることも判ってきた。

また、もう一つの課題は、これまで弥生時代前期末に位置付けられてきた所謂「金海式」甕棺の時期をどのように考えるかということである。数の上では多くはないのであるが一部には副葬の小壺を伴うものがあり、これらは何れも弥生時代中期初頭に位置づけられる土器であると考えることができる。このため副葬土器を見る限り前期末まで遡る金海式甕棺は少なくとも第4・5次調査では見当らない。同様に木棺墓に副葬された小壺類もやはり前期末に遡るものは少なく、副葬土器型式の判断をもとに墓地の形成過程を追及することが必要な作業であると考えられる。

また、埋葬主体のうち金海式タイプの甕棺墓には外面に赤色顔料を塗布する、あるいは内面でまともって赤色顔料(水銀朱)が見つかったり、これに対して木棺墓ではまったく痕跡すらない点が指摘できる。

これらの問題は今回報告の第6次調査の成果とあわせて第3章で整理することとしたい。

### 第三節 第6次調査報告

「飯盛・吉武団体営園場整備事業」に伴う発掘調査は、昭和56年度の開始時から、事業指導課である農業土木課、ならびに飯盛吉武地区土地改良組合と定期的な協議の場を設けながら実施してきた。昭和58年度の樋渡地区、そして昭和59年度の高木地区と、豊富な副葬品が相次いで発見され、埋蔵文化財に対する地元の関心と理解が年ごとに高まった。遺跡を地元の財産として、また誇りとして保存しようという合意を得ることができ、発掘による破壊を最小限度におさえる共通認識で事前協議を重ねた。三者のこのような経験的な蓄積は、協議を円滑に進めるのにおおいに役立った。

第6次の調査対象地は、西の第18号水路、東の第1号幹線道路、北の第7号支線道路、南の第2号水路に囲まれた約106,000㎡である。グリッドでは、O-13からF-13までの東西に長い長方形の区画にあたる。この調査対象地の南側には、第2号水路を挟んで、前年に発掘調査が行われた第5次調査区が平行に接している。

すでに園場整備は最終年度を迎え、基幹道路、水路ともに完成している部分もあり、大幅な設計変更は出来ない状況であったが、農業土木課や土地改良組合の努力と協力で事業対象面積約106,000㎡のうち、約5分の1の23,000㎡まで絞りこむことができた。

発掘作業は、「最古の土墓発見」とセンセーショナルな報道で、全国的に注目を集めた高木地区発掘の余韻がまだ残る昭和60年7月から開始した。なお発掘終了後の整理作業を考えて、従来からのグリッド名の他に次のように区分けをした。つまり発掘区のほぼ中央に南北の第2号支線道路が横切るのが、これより東側を6次調査の2区、西側を3区と呼び、さらに2区東端部の弥生時代の甕棺墓地だけを述べる場合に限り、その小字名から大石地区と呼ぶことにした。

この他に第2号水路、第2号支線道路、野方・金武線道路に接した太田地区など7か所でも調査を行なった。また、この年度で園場整備事業は完了する計画であったが、翌昭和61に排水施設の追加工事に伴う発掘調査を実施したので、都合7次の調査が行われたことになる。なお第6次調査の概要については、すでに「吉武遺跡群Ⅱ」に報告しているので、ここでは弥生時代の竪穴住居について補足する。

#### 弥生時代の竪穴住居

弥生時代の遺構として、大石地区の甕棺墓地の他に、竪穴住居跡、土壇、溝などを検出した。土壇は不整形のプランで掘りも浅く、中期から後期の土器片を出すものが多いことから、塵棄棄用と思われる。しかし、廃棄用と断定するには、集落との関連を確認する必要があるが、竪穴住居跡の発見は1軒のみに止まり、生活感が希薄である。数条の溝も方向性がなく、集落を区画したような意図は認められない。唯一の竪穴住居は、直径7mの円形で、床面中央には炉と思われる小壇がある。住居内での遺物は少ないが、西区今山産の太型始刃磨製石斧1個が発見された。ただ、2、3区の全面にわたって、柱穴大のピットが無数にあり、掘立柱建物による集落構成を考える必要がある。特に高木、大石、樋渡地区の厚葬墓の他に、千基を越す共同墓地の数は、大集落の存在なしにはとうてい考えられない。しかしながら第6次まで発掘調査を重ねてきたが、竪穴住居の数は納得できるようなものではない。とすると掘立柱建物で構成された集落、あるいは倉庫群などの景観を想像しなくなる。青銅器や装身具などの豊富な副葬品を持つ高木、大石、樋渡地区が近接し、また大型掘立柱建物が発見されていることから、この地区がある特殊な性格を帯び、普通の集落景観をしていなかったことも十分に考えられる。このため、発掘中に掘立柱建物の確認作業を慎重に行つたが、今後さらに各ピットの土器片を詳細に検討し、集落の景観を復元する必要がある。





Fig.85 第6次調査区全体図

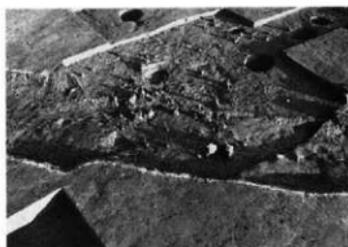


Fig.86 旧石器時代の調査

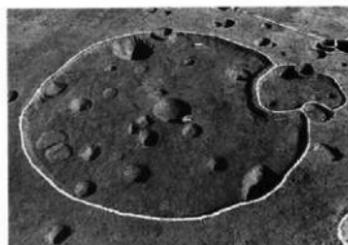


Fig.87 弥生時代の調査

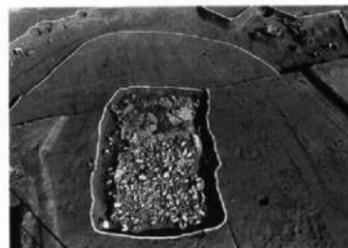


Fig.88 古墳の調査



Fig.89 中世遺構の調査



## 1. 大石地区の概要

標高382mの飯盛山から東の室見川方向に形成された扇状地には、その地形を巧みに利用して細かく水田が区画されている。いまは田・飯盛線という道路ができ、室見川に田村大橋が架けられているので、室見川右岸から容易に行き来することができるが、以前は飯盛・吉武の集落に行くには、上流か下流側の橋まで迂回して室見川左岸の土手を戻り、水田の中の道を通っていた。この道を土手から約500mほど歩くと、左手に小さな谷が見える。この谷は、竜谷川という流れが扇状地を南西側から開折してきたもので、室見川に注いでいる。道もその蛇行に合わせて緩やかにカーブしている。この付近には、かつて子供の遊び場になるほどの花崗岩の大きな石があったといい、小字名の由来にもなっている。この大石には次のような話が伝えられている。

昔、早良平野の東端にある油山（標高569m）の神と飯盛山の神が争うことがあり、室見川を挟んで互いに石を投げ合った。飯盛山の神が投げた石は、6.5km隔たった油山の西山腹に見事に突き刺さった。この石は、雨が降りそうな空模様になると、なぜか猫のように鳴き出すらしく、猫石の名で市民に親しまれている。一方、油山の神が投げた石は、室見川を越えたものの、飯盛山までは届かないで途中で落下した。これが水田に残る大石というのである。同類の話は、「つぶて石伝説」として全国各地に残っており、この地区固有の話ではない。伝説が生み出された裏には、早良平野を舞台にしたある種の闘争があったことを想像できないことはないが、私たちは別の意味で関心を持った。それは前年の「早良王墓」で、銅剣を副葬していたK117甕棺墓や第4号木棺墓のように、墓壇上部に角礫を整然と敷しめたり、扁平な花崗岩の大石を標石として配置していることを確認していたからである。道のそばにあった大石こそ、同じ性格の石で、再び豊富な副葬品を発見できるのではと誰もが期待した。

大石地区は、先に記したように2区東端部で発見した弥生時代甕棺墓地に限っての呼び方で、面積は約3,000㎡である。甕棺墓203基、木棺墓8基、土壇墓13基、そして5か所の祭祀遺構によって構成されている。うち甕棺墓11基と木棺墓4基の計15基から青銅器、石剣、土器などの遺物が出土した。

この部分の北200mには、昭和58年度第3次に調査した樋渡地区がある。弥生墳丘墓の中から、弥生時代中期後半から後期の甕棺墓27基、石棺墓と木棺墓各1基が埋葬されており、細形銅剣や前漢鏡、鉄製品などの豊富な副葬品が発見された。私たちは甕棺墓が盛土の中にあるのを初めて目にして驚いた。しかし、その位置が基幹水路の建設地にあたって設計変更が不可能で、保存できなかった無力さを十分に味わうことになった。

その翌年に実施した高木地区は、大石地区の南200mに位置している。弥生時代前期末から中期初頭にかけての甕棺墓34基と木棺墓4基が見つかった。そのうちいくつかはペアになって寄り添うように埋葬されていた。副葬品が次々に掘り出され、その興奮は第3号木棺墓の発掘で最高に達した。細形銅剣、細形銅矛、細形銅戈、多鈕細文鏡、翡翠製勾玉などが発見されたからである。

このように2地区の発掘調査によって、早良平野、特に室見川左岸地域における弥生時代有力集団の存在、そしてその発生と終末を語る資料を手にできたことになった。しかし両遺跡には時間差があり、有力集団の展開や消長をたどるには、両地区をつなぐ弥生時代中期中頃の墓地进行を別に確認する必要が出てきた。位置的にその両遺跡の間に挟まれた大石地区こそ、両史跡の間隙を埋めるような時期の墓地が発見されるのではと推測された。

ところで吉武遺跡群には、これらの豊富な副葬品を持つ厚葬墓地とは別に、副葬品をほとんど持たない普通の共同墓地在数か所に点在しており、なかでも南西のN-17グリッドから北東のG-13グリッドまで最大幅約50m、全長約500m以上の長さにのびる墓地がある。発掘現場では、樋渡地区や高木

地区と区別するために、甕棺ロード（道）とか甕棺ベルト（帯）と呼んだ。この長大な墓域は、弥生時代前期末に数か所で始まった墓地が、弥生時代中期末に至るまでにベルト状に形成されたもので、甕棺墓は千基をはるかに超えている。当初からベルト状の墓域を予定していたのか、はつきりしない。副葬品をほとんど持たないという特徴は、いつそう瀬渡地区や高木地区の厚葬墓を際立たせるとともに、“普通の墓地”の意味をあらためて問い直させることになった。

大石地区の位置は、この甕棺ベルトの延長部に当たっており、もしかしたら先の期待が外れる可能性も併せ持っていたのである。

西の3区から始めていた発掘調査は、発掘作業員の協力で順調に消化し、11月には2区の東端部に取りかかった。水田耕作土をのぞくと、予想通りに200基を越す墓壇が現れ、甕棺ベルトの一部であることがわかった。南西から北東に延びてきた墓域は、G-13グリッド付近で急に屈折して北に方向を変えている。時期は、弥生時代前期末から中期後半にかけての共同墓地で、高木地区のような短期間の特定集団墓ではない。私たちの期待は裏切られ“普通の墓地”の発掘を覚悟した。

ところが、日を追って甕棺墓や木棺墓から次々に遺物が掘り出され、青銅器はとうとう高木地区と同じ数量に達した。遺物を持つ甕棺墓や木棺墓は、高木地区と同じ弥生時代前期末から中期前半で、瀬渡地区とをつなぐ弥生時代中期中頃という限定された時期の墓地ではない。

これまでの学説では、青銅器は、その稀少性ゆえに権力者のシンボルとしての価値が与えられてきた。にもかかわらず“普通の墓地”からこれほど多くの青銅器が発見されるのか、しかもシンボルとして宝器であるはずの青銅器が、先端や袋部を欠いていたり、折れた石剣を伴っているのはなぜか、もしかしたら墓地から発見されるもの、すべてが副葬品と呼べないのではないのか、さらに副葬品の有無だけでは、被葬者の性格を断定できないのではないのか、たとえば赤色顔料のように身分を表す情報が別にあつて、私たちが気がついていないだけではないのか。私たちは既成の学説から離れて、さまざまな可能性を語り合い、細心の注意を払いながら発掘作業を続けた。

大石地区の歴史的な価値は、特定集団墓の高木、瀬渡地区との対比において、また甕棺ベルトの形成過程との関係で総合的に分析、検討されてこそ、明らかにできるが、今回は“副葬品”を出した木棺墓4基と甕棺墓11基について先に報告する。



Fig.92 発掘作業員のみなさん



Fig.93 大石地区全景

## 2. 木棺墓

大石地区は甕棺墓、木棺墓、土壌墓からなる共同墓地であるが、これらは混在して分布している。検出した8基の木棺墓は、発掘墓域の南西部と北東部の2か所に4基づつまとまっているように見える。8基のうち6基の主軸方位は、甕棺ベルトと同じ北東方向をとるのに対し、墓域の東端部にある第4、5号木棺墓だけは、前者と主軸を直交させて並ぶ。遺物は第1号木棺墓から細形銅戈と細形銅剣、第5号木棺墓から鞘入りの細形銅剣が出土した。この他に第4、6号木棺墓から、それぞれ弥生土器の小型壺が出土した。これら4基の木棺墓は北西部に集中している。

### 1. 第1号木棺墓

墓域のちょうど中央部にあり、主軸をN-57°-Eの方向にとる。墓壇は長さ2.46m、幅1.26mの長方形で、四隅は丸みがある。東側短辺(小口)が西側短辺よりも約20cm狭くなっているが、全体が整った平面形である。墓壇の壁は、ほぼ垂直に掘りこまれ、壁面に沿って幅約25cm、深さ約14cmの浅い溝がめぐっている。この溝に4枚の板材を立てて組み合せた木棺墓である。棺内は長さ185cm、幅60cmである。墓壇の上層観察によると、墓壇床面は地山の削り出しではなく、地山まで一旦掘り下げた後、黄褐色土を約10cm盛り上げている。裏込めだけで棺材を固定するのが困難なことから棺内に土を入れたことも考えられるが、小口板と側板の組み合わせ方はわからない。遺物は細形銅剣と細形銅戈各1口が北西隅寄り出土した。細形銅剣は、北側板が腐食した後、溝にずれ落ちた状況を示す。細形銅戈は、それと直交する形で西小口板寄りの床面から少し浮いた状況で出土した。細形銅剣が被葬者の右側に鋒を足元に向けて置かれたとすると、被葬者の頭位は東小口側となる。ただ腰に帯びていたとするには、頭側に寄りすぎている。一方、床面に密着していなかった細形銅戈は、保存状態も悪いこと

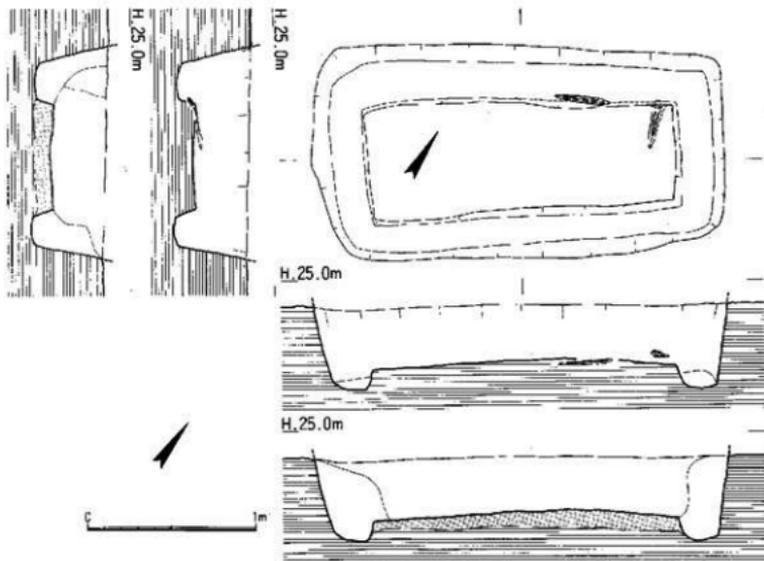


Fig.94 第1号木棺墓出土状況図 (1/30)

から、棺の上に置かれていたものが落下した可能性がある。ただ着柄されていたとすると、関の面が逆となっている。青銅器を複数持っているのは、大石地区ではK64号甕棺墓と第1号木棺墓の2基だけである。側板の裏込め土中より、弥生土器の壺と甕の小破片が出土したことから、この木棺埋葬の上限が推定できる。

**遺物 細形銅戈** 棺外にあったものが木棺が朽ちて落下したと推定した。全体に錆化が激しく、くすんだ灰緑色を呈している。身が波うち、土から切り離すことができないので略測図を示した。内は、幅36mm、長さ20mmあり、幅95mmの関とともに、がつしりした作りとなっている。脊となす角度は100



Fig.95 銅剣・銅戈

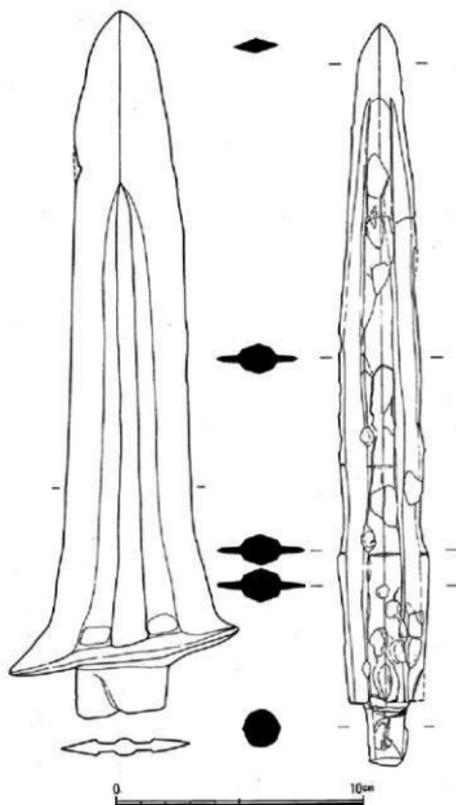


Fig.96 銅剣・銅戈実測図 (1/2)



Fig.97 第1号木棺墓 (南西より)



Fig.98 第1号木棺墓



Fig.99 第1号木棺墓



Fig.100 銅戈、銅剣出土状況

度である。関から鋒までは26.6cm。樋の上端から鋒までは長さ7cm。背は断面楕円形で觚がなく、樋の先端は背に合わさる。樋には紋様は鑄出されていない。鋒の幅は40mmあり、極端に彫らんでないが、その先端は丸みがある。

**細形銅剣** 共伴した細形銅戈と同じように残存状態が悪いために、周囲の土ごと取り上げ、保存処理をしながら慎重に清掃したが、刃部が部分的に欠けている。全長(鋒から茎までの長さ)は30.2cm、関まで刃部が研ぎだされた細形銅剣である。長さ25mmの茎は、14×16mmの断面不整円形で、柄に差し込んで固定するために巻いた繊維質が残っている。関幅は30mm、剣込の長さは37mm、その湾曲と突出部は顕著でない。

**土器** いわゆる供献や副葬の土器でなく、側板の裏込め土より2点出土した。5~7cmの小破片となっているので、口径や傾きなどは不正確である。1は、小型壺の胴上部破片と考えたが、ほとんど湾曲していない。胎土には2mm大の砂粒を含み、焼成はよい。外面は茶褐色、内面はやや明るい茶褐色を呈している。外面は丁寧なナデ調整が加えられ、ヘラ状工具による浅い沈線が2条つけられている。内面には、板状工具による調整痕がわずかに残っている。2は、壺の口縁部の破片。胴上部が直線的に内傾し、端部外側に断面三角形に粘土を貼りつけて、分厚いL字形口縁を作りだしている。胎土は、長石などの砂粒を多く含んでいる。口縁部は横ナデ、他は内外側ともナデ調整。口縁部下から胴部は黒色、焼成はよい。

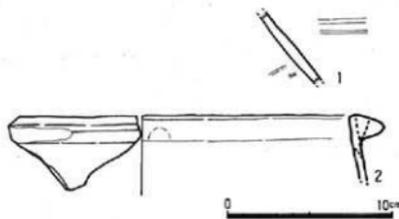


Fig.101 土器実測図 (1/3)

## 2. 第4号木棺墓

K25号甕棺墓と細形銅剣を出したK140号甕棺墓の間に挟まれている。主軸はN-43°-Eを向く。平面が隅丸長方形で、長さ2.92m、幅2.10mをはかる。幅の広い東小口側を頭位と考えた。墓壇は2段掘りで、1段目を47cmの深さに掘り込み、さらに中央に長さ1.74m、幅72cmの長方形に、12cm掘り込んでいるが、壁は1段目より傾斜がつき、主軸も東に5°ずれている。埋土の観察によると、2段目の四壁に35cm程度の高さの板材を組み、裏込めをして遺体を埋葬する棺を作っている。墓壇検出面より30cm下で口縁部を東に向けて横転した小型壺が出土した。木棺の上に置かれていたのが、落ち込んだものであろう。また1段目の北隅は弥生中期中頃のK29号甕棺墓で切られていることから、埋葬時期を限定できる。

遺物土器 口径13.7cm、底径5.8cm、器高17.9cm、胴最大径22cmの小型壺である。胴部は張り強く、胴中位に最大径がきて玉葱状となっている。頸部はほぼ直に立ち、上端で大きく外反してそのまま丸くおさめて口縁部を作っている。頸部と胴部の境には、背の低い小さな突帯1条が巡っているが、これは粘土貼りつけではなく、ヘラ状工具で引きだしたようである。外面はヘラ状工具で丁寧にナデて、ミガキ状になっている。焼成はよく、茶褐色を呈する。

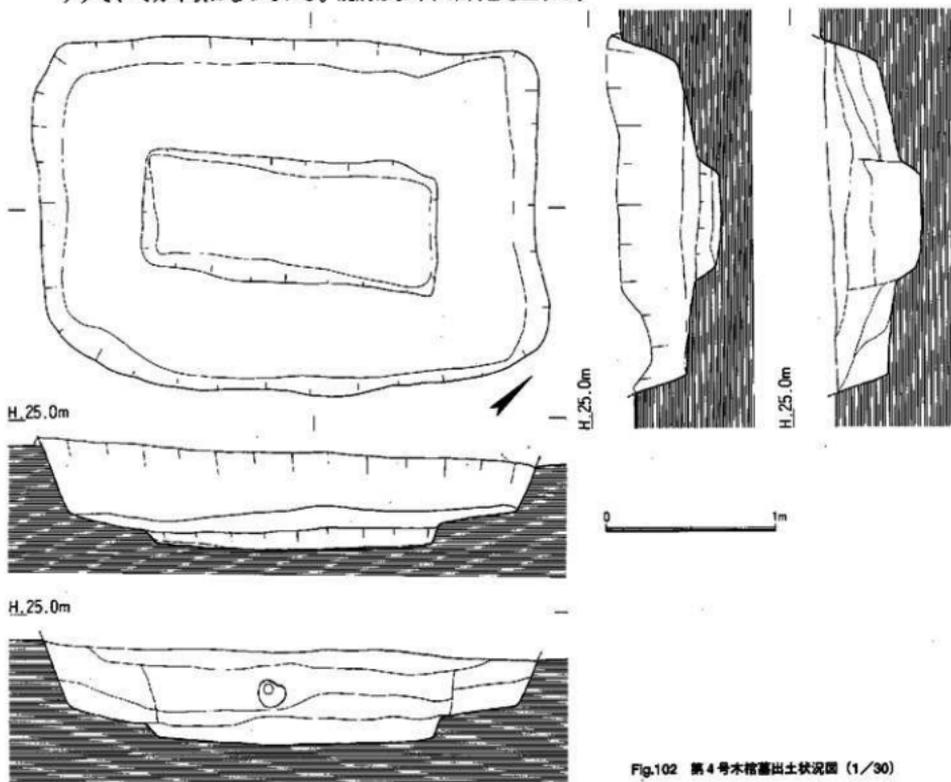


Fig.102 第4号木棺墓出土状況図 (1/30)



Fig.103 第4号木棺墓

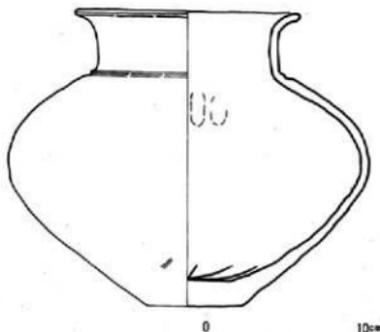


Fig.104 土器実測図 (1/3)

### 3. 第5号木棺墓

墓域中央部の最東端で検出した。南西から北東方向にのびてきた甕棺ベルトは、ここで北西—南東方向に埋葬された数基の甕棺墓や木棺墓と直交しているが、第5号木棺墓もその一つである。主軸はN-34°-Wで、東側にK177号甕棺墓が寄り添うように並んでいる。墓壇は2段掘りのように見えるが、中央に組み合わせ式の木棺を置いた後に裏込めをしている。まず長さ2.35m、幅1.52mの隅丸長方形で深さ42cmまで掘り込む。墳底を水平にし、長さ160cm、幅50cmに板材を組み、砂質の茶褐色土を使って約30~50cmの厚さに裏込めをする。これが2段目の掘り方のように見える。小口の幅は両端とも大きな違いはないが、北西側小口がわずかに広いこと、さらに平行に並ぶK177号甕棺墓も北西から埋置

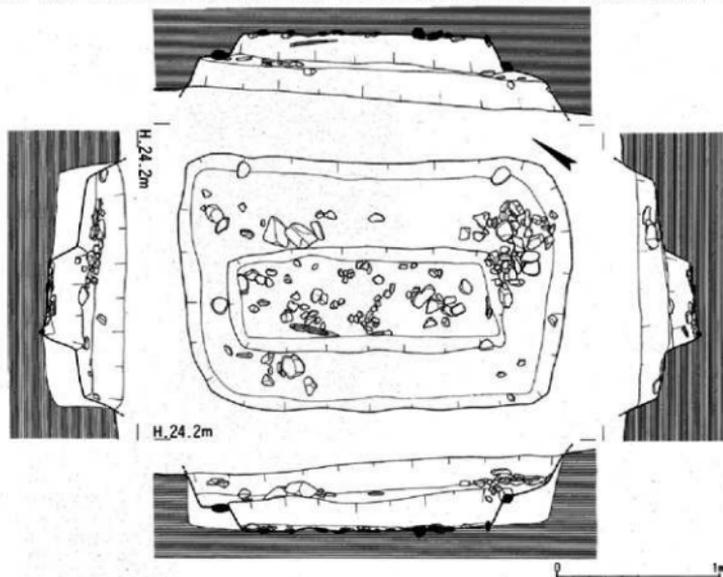


Fig.105 第5号木棺墓出土状況図 (1/30)

されていることから、北西側を頭位と考えた。2段目の上には拳大の礫が敷かれており、この面を木棺の蓋面と考えると、死者を葬るにはやや浅すぎる感がある。棺底にも小さな礫が見られるが、これは地山内の礫層である。

遺物は、細形銅剣1口が棺内床面のやや北寄り出土した。頭位を北西側と推測したが、銅剣は第1号木棺墓と同じように被葬者の右側に剣先を足元に向けて置いたことになる。発掘時には、特別な出土状況ではなかったために、撮影、実測など通常の作業を経て取り上げたところ、下に木質部が残っていた。この木質部は、細形銅剣の背に合わせて内側を丁寧にくり抜き、ぴったりと納まるように工作していることから鞘と断定した。鞘金具や把頭飾が共伴する場合、鞘つきで副葬されたものが、木質部の鞘は腐食した可能性があるが、実際に鞘つき銅剣として発見されたのは、佐賀県切通遺跡に次いで2例目となった。墓境内に多少湿気があったのが幸いしたのであろう。

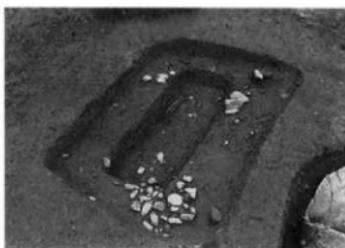


Fig.106 第5号木棺墓



Fig.107 作業風景



Fig.108 第5号木棺墓

遺物 細形鋼剣 全長30.4cm、錆が闊まで通る。全体に錆で緑青色となり、特に鞘が残っていた裏面(図右面)は錆化が激しい。闊は脊に直交し、幅34mmである。剣込の長さ35mm、樋先端から鋒までは40mmをはかる。茎は16×14mmの断面楕円形で長さ21mm、柄に装着するための工作がわかる。まず、糸を巻き、その上に樹皮状のものをかぶせ、さらにその上を糸でしばって固定する。そして最後に、一番外側を赤色の塗料で塗り固める。これらの状況は、把部が着いて鞘に納められていたことを示しており、武器としての実用性を十分にうかがわせるものである。

鞘 木質のために腐食が激しいが、残存部からかろうじて原形を想像することができる。現在の長さは25.3cm。図に当たる部分の断面形は、底辺31mm、高さ10mmの蒲鉾状である。底辺側に細形鋼剣の脊幅に合わせて、幅16mm、深さ7mmの半円形に溝を縦にくり抜いている。溝は上に向かって細く、浅くなっている。本来はこのような材を二つ合わせて鞘としたのであろう。表面は漆など特別な処理はなく白木のままである。また鞘金具や把头飾などはなかった。樹種については同定作業を怠っている。

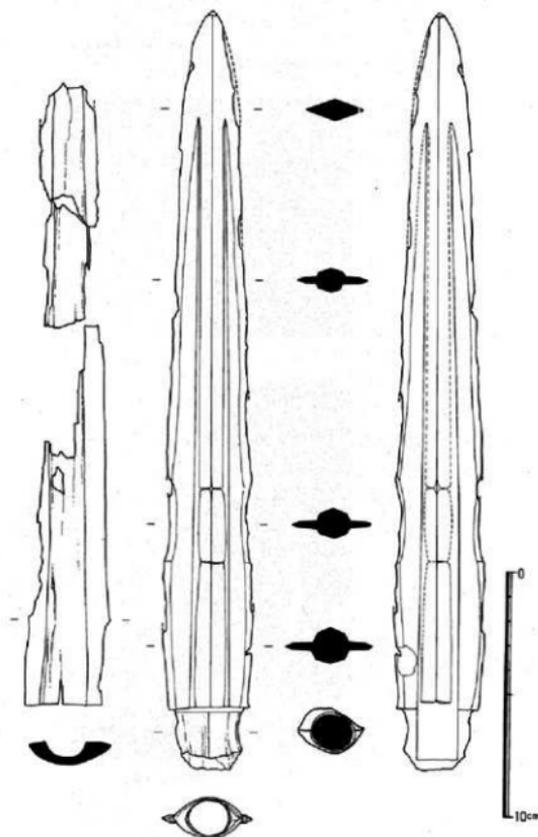


Fig.109 劍剣、精実測図 (1/2)

Fig.110 劍剣、鞘

#### 4.第6号木棺墓

第5号木棺墓の北西5.5mにあり、同じように甕棺ベルトの方向と直交している。主軸はN-46°-Wに向く。いま両小口とも破壊され原形を止めていない。長側壁も高さ25cmが残るだけである。墳底から判断すると、長さ約2.50m、幅約1.05mの規模が推測できる。第1、5号木棺墓のように板材を据える溝が掘り込まれていた

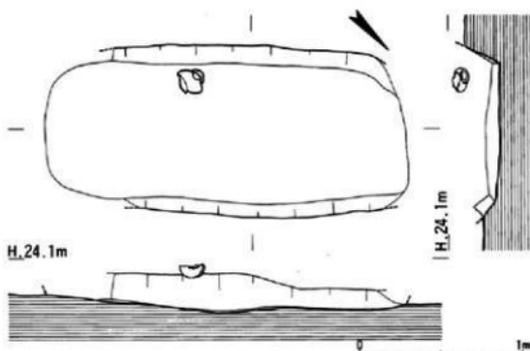


Fig.111 第6号木棺墓出土状況図 (1/30)

り、2段掘りということではないので、木棺墓とする積極的な根拠はないが、第4号木棺墓と同じように墓壇中心の南側壁寄りで、弥生土器の小型壺が床面から浮いた状況で出土したことから、ここでは木棺墓と考えて報告する。

遺物土器 墓壇自体が大きく削平されているので土器の残りも悪い。底部と胴部の半分以上を失っているが、復元反転して図示した。口径9.4cm、胴最大径17.5cm、器高15cm以上を測る。第4号木棺墓の小型壺に比べ、一回り小さい。胴部は張りがなく、また頸部が締まっているので、球形に近い胴部となっている。頸部は内傾し、上方で緩やかに湾曲して口縁部となる。頸部と胴部の境に同じような小さな突帯を1条巡らしている。器面の調整は、口縁部が横ナデ、他はヘラ状工具によるミガキ状のナデを丁寧な施している。胎土に砂粒を多く含んでいるが、焼成はよく暗褐色をしている。

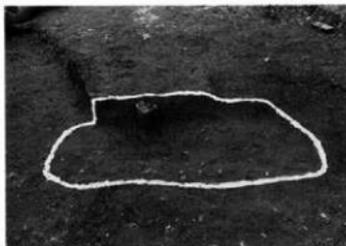


Fig.112 第6号木棺墓

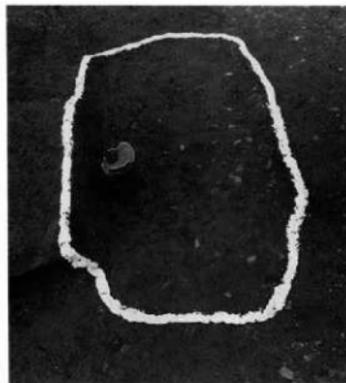


Fig.113 第6号木棺墓

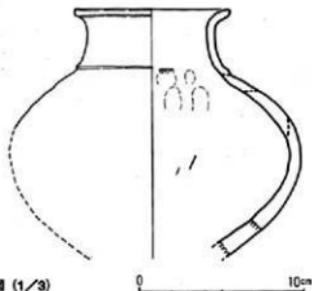


Fig.114 土器実測図 (1/3)

### 3. 甕棺墓

大石地区の甕棺墓は、弥生前期末から中期後半にかけての203基を検出したが、先にも記したように大石地区は甕棺ベルトの一角にあたる。大石地区だけで一つのまとまりのある墓域として完結するわけではないので、墓域の範囲を明確にできないことを先に断っておく。

甕棺の時期が分かるものだけをあげてみると、前期末から中期初頭56基、中期前葉22基、中期中葉47基、中期後葉41基となっており、その分布は、時期によって大きく2分される。前期末から中期前葉にかけては、墓域の西南部分にほぼ均一に分布するのに対し、中期中葉から後葉の甕棺墓は、北東部の2か所にそれぞれ密集する。また、墓域の主軸方位も、前者はほぼ北東方向を向くのに対し、後者ではその方向は一定していない。

何らかの遺物が発見された甕棺墓は、11基を数える。これらの遺物には、青銅器であってもそのまま副葬品とは考えにくいものも含まれている。体内に残された可能性のもの、また副葬品としての意識のないままに添えられたものもあるかも知れない。また特定集団墓の高木地区とは、副葬品の持つ意味が質的に異なることも考えられる。ここではあえて副葬品と断定をしないで、遺物として扱った。各甕棺墓の時期については、第三章にまとめている。

#### 1. K1号甕棺墓

大石地区で最初に掘り下げ、しかも青銅器が出土したので第1号の番号をつけ、その後は、調査順に通し番号をつけた。細形銅戈と細形銅剣を副葬した第1号木棺墓と磨製石鏃を出したK10号甕棺墓に挟まれ、墓域のちょうど中央部付近に位置する。楕円形の墓域を南西方向に斜めに掘り込み、その中に約30°の傾斜をもって下甕を入れている。上甕は削平によって、ほとんどが欠失しており、口縁部の一部だけが下甕に残存する。上、下甕の口径の大きさからすると、上甕を挿入したのであろう。とすると50cm以上は削平されていることになる。N-32°-Eの主軸は、南西から延びてきた甕棺ベルトの方向にはほぼ一致している。下甕から、細形銅矛の小破片を1点検出した。体内に残っていたものとも考えられるが、甕棺が著しく破壊されているので後世の破損の可能性もある。

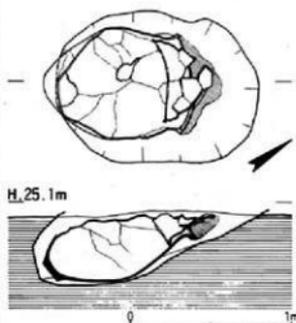


Fig.115 K1号甕棺墓出土状況図 (1/30)



Fig.116 K1号甕棺墓

上 甕 胴部の大部分が削平され、わずかに口縁部と胴上半部の破片が下甕に残っており、全体の5分の1ほどを接合復元できた。胴部に張りがなく、56.1cmの口径は胴部の最大径53.6cmよりも大きい。胴上半部は微妙に湾曲するが、ほぼ直立しながらのび、頸部で緩やかに外反して口縁部を作る。内側に粘土を貼りつけ三角形の断面となっている。上面はわずかに盛り上がり、その外端には、左下がりの刻み目を8~12mm間隔でつけている。胎土には1~2mm大の砂粒を多く含み、焼成はよく、外面は赤みを帯びたうすい茶色、内面がうすい灰茶色。外面に黒斑が見られる。器面の調整は、外面は左上がりのナデ、内面は横方向のナデを丁寧に加えている。頸部に3条、胴部に4条の沈線が通っている。残存部には縦に区画する沈線は認められない。

下 甕 口径64cm、器高に対し口径が小さいので、他の甕棺に比べて細身の器形となっている。胴部の最大径はちょうど中位にあり、胴下半部は、極端に膨らまないでそのまま底部につながる。胴上半部は上甕と同じようにわずかに内傾し、頸部で外に強く湾曲する。上部に厚く粘土を貼りつけて口



Fig.117 K1号甕棺

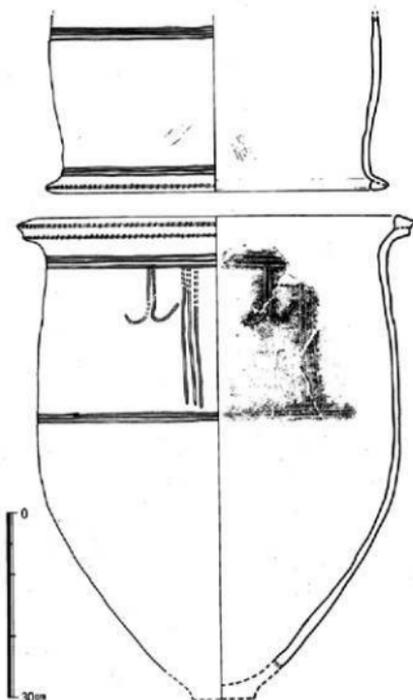


Fig.118 K1号甕棺実測図(1/8)

線を作るが、外端を強く横ナテしているので凹状となり、その唇状の上下に縦方向の刻み目を12~15mm間隔で施している。頸部と胴部中位に沈線を巡らし、その後縦方向に3条の沈線を加えている。上下の沈線はうまく平行していないが、一筆書きではない。残存部には1か所しか縦の沈線がないが、相対する側について2区画するのだろう。縦沈線のすぐ近くに同じ施文用具を使って釣針様の沈線を描いている。弥生土器や銅鐸型などに類例があるが、甕棺としては、福岡市西区飯塚遺跡群Ⅱ区の第23号甕棺がある。胴部外面の調整は、下半部はナテ上げ、上半部が左上がりのナテで、全体に丁寧な調整が行われている。砂粒の多い胎土だが、風化していないこともあって表面には砂粒は露出していない。内外面とも灰茶色を呈する。上甕に比べると焼成がよいが、胎土、色調とも視覚的には大きな違いを見出せない。

**遺物 細形銅矛** 長さ27mmの青銅器破片。わずかながら穂の一部が観察でき、刃部との角度で図のように細形銅矛の先端部付近と判断した。刃部幅10mm、刃部は研ぎ分けの可能性がある。現在、錆が進んでいるが、部分的に緑青色を呈している。大石地区の青銅器のあり方からすると、殺傷時に体内に打ち込まれた可能性が強いが、断定できない。

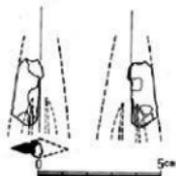


Fig.119 銅矛実測図 (1/2)

## 2. K10号甕棺墓

K1号甕棺墓の北西側70cmに接近して位置する。墓壇は不整形円形で、わずかに下甕が残っていた。棺内に崩落した破片を接合すると、鉢形土器が復元できた。下甕の口縁部は見当たらないので、おそらく打ち欠いて、上棺の鉢と合わせたのであろう。両方の口径からすると挿入式と推測できる。埋置角は30°と水平に近い傾斜なので、上棺を支えて埋葬しやすいように墓壇内の北側には段を設けている。上棺を合わせて埋葬時の形状を復元推定すると、少なくとも50cmは削平されたことがわかる。遺物は下甕の中ほどで、磨製石鏃1点が先端を底部に向けた状況で発見された。棺内に密着しているが、甕棺墓全体が大きく破壊されているので原位置なのか不明。

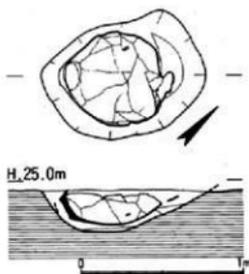


Fig.120 K10号甕棺墓出土状況図 (1/30)

**上甕** 口縁部と胴部の約半分が残る。口径50.2cm。早く削平を受けたのか、器面は風化が進み、砂粒が露出している。底部を欠いているが、きわめて深い形である。胴上半部は湾曲しながら内傾して口縁部となる。端部に粘土を貼りつけ、断面が丸みのある三角形を作る。この下方6.5cmに背の低い三角突帯が一部残っている。この直上に浅い沈線が巡っており、三角突帯の貼りつけ位置をあらかじめ示したのであろう。器面の調整は、外側の口縁部下から三角突帯の下方6cmまではハケ目、

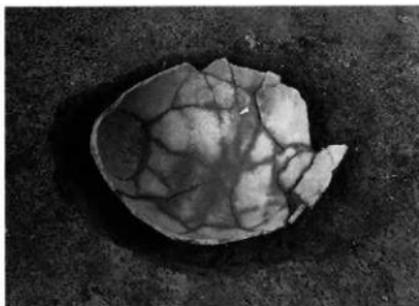


Fig.121 K10号甕棺墓

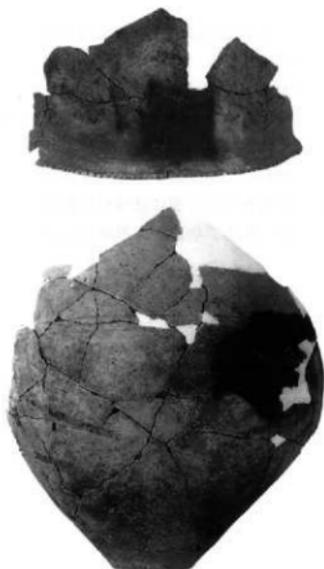


Fig.122 K10号壺片

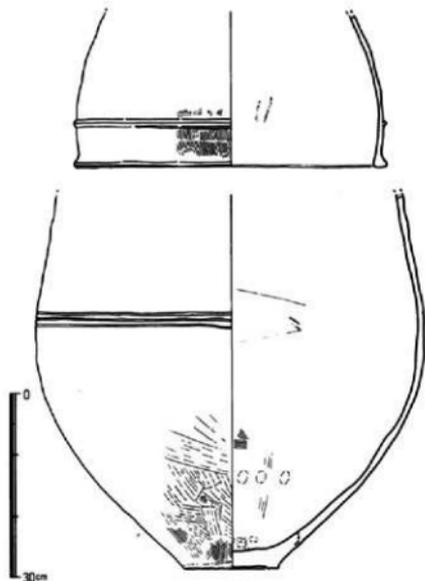


Fig.123 K10号壺片実測図 (1/8)

内面は丁寧にナアている。外面は灰茶色であるが、内面は黒斑のように全面が黒色を呈している特徴的である。

下 壺 頸部より上方を打ち欠いているので、全形がわからないが、現在の器高は62cm、底径15.3cm、胴部最大径62.5cmをはかる。胴部は膨らみのある形状で、厚い底部がつく。

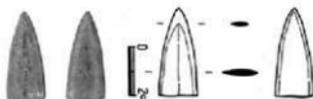


Fig.124 石鏃

Fig.125 石鏃実測図 (1/2)

底部は高台状に中心が窪み、周縁部の幅16mmが平坦となっている。胴上半部は内傾しながら直線的にのび、最大径のやや上方に3条の沈線を巡らせている。胴部の4分の1しか残っていないので、上方と胴の沈線は確かめようがない。器面は底部外面が左上がりの粗いハケ目、その上方はナア調整を加える。内面には縦方向のハケ目の条痕がかすかに見られ、底部の接合部には指圧痕が残る。内外面とも灰茶色を呈し、胴部の中程に黒斑がある。部分的に橙色を帯びたところがあり、意図的に塗布したことも考えられる。上棺とは、明らかに胎土、焼成、色調とも異なる。

遺物 磨製石鏃 縦に長い三角形の磨製石鏃で全長37mm、基部幅16mm、厚さ2mmの完形品。淡黄灰色をしている。図の左面は刃部が研ぎだされ、身の中央にかすかに鏃が通る。基部は面取りしており、石刺を転用した可能性もある。

### 3. K45号甕棺墓

墓域の中央部よりやや東寄りに位置し、主軸をN-56°-Wにとる。大石地区の全体図によると、K45号甕棺墓より北に東西に狭い空白地帯があり、墓域が区切られているように見えるが、これは西の3区から溝が延びているためで、K45号甕棺墓も北側が大きく削平されている。墓域は長楕円形で、二つの大型甕の口を合わせて、ほぼ水平に埋置し、接口部の外面には丁寧に粘土で目張りを施している。西棺がわずかに低いことから下棺と考えた。上棺より細形銅剣と細形銅矛が、それぞれ1口検出された。上棺が大きく破壊されているので、これらの副葬品が原位置を保っているとは思えないが、被葬者の頭位を上棺側とすると、銅剣は被葬者の右側に鋒を足元に向けて置いている。銅矛は、胸の位置に銅剣とはほぼ直交するような形で置かれたのであろう。また、銅矛の袋部には、柄の一部が残っており、第5号木棺墓の場合と同様、柄に着装され武器として使用された可能性が大きい。棺内からの出土なので柄の長さは限定できる。棺内から赤色顔料が検出されている。

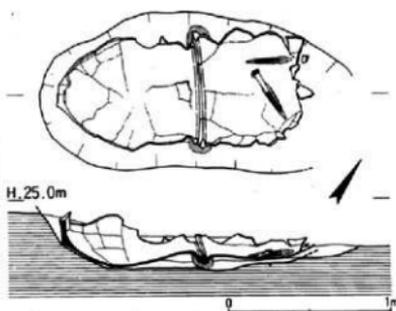


Fig.126 K45号甕棺墓出土状況図 (1/30)



Fig.127 K45号甕棺墓 (北東より)

上 甕 全体の2分の1が残る。口径67cm、底径145cm、器高83cm、胴部最大径65.2cm。最大径の位置は中位にあり、下半部は下膨らみで丸みがある。上半部は緩やかに内傾し、上方で強く外反し、上部に厚く粘土を貼りつけ口縁部を作っている。外端部は強く横にナデているので深く窪み、唇状の上下に刻み目を加えている。底部は上げ底状で、中央が厚みがある。頸部と胴部中位に3条の沈線



Fig.128 K45号甕棺墓



Fig.129 K45号甕棺墓

を返し、さらに縦に3本の沈線を入れる。その間隔が40cmあり、復元すると5区画になる。底部外面は粗いハケ目、他はナデ調整である。色調は外面が明るい茶色、内面は灰茶色である。粘土帯の接合は12~13か所か。上半部は内傾接合で下半部は外傾接合のようである。



Fig.130 K45号甕棺

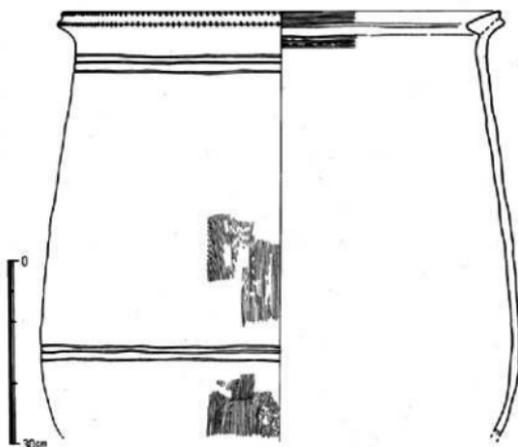
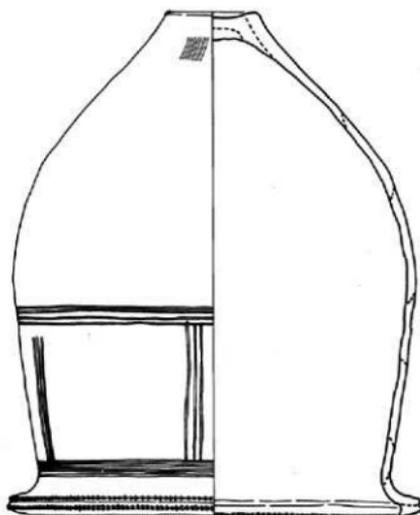


Fig.131 K45号甕棺実測図 (1/8)

下 甕 口縁部と胴部を縦に3分の1が接合できた。口径73cm、胴最大径78cm。胴下半部がわからないが、胴上半部が異様にのびた形をしている。もし胴下半部が通常の形状であったとしたら、相当に背の高い大型甕になろう。頸部の外反は上甕に比べて弱く、その分、口縁部の粘土貼りつけの上面が

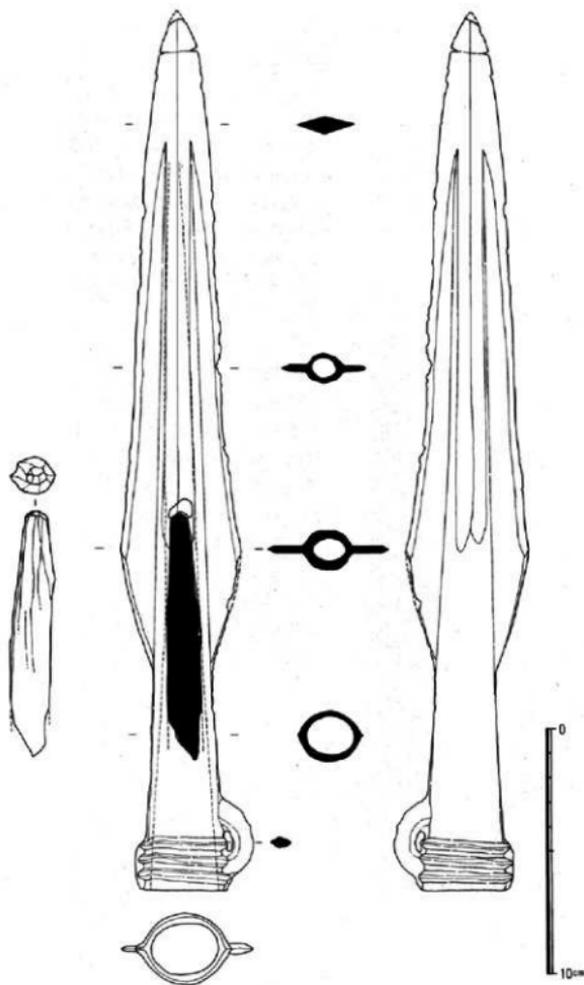


Fig.132 銅矛、木柄実測図 (1/2)



Fig.133 銅矛、木柄

内側に傾斜し、内側へ断面三角形に極端に突出している。外端部も深い凹状となり、その上下に等間隔の刻み目を施している。頭部よりやや下方に3条の雑な沈線が走る。内外面ともに色調は茶色である。外面は全面に縦のハケ目を施した後、ナデで消している。胴下部、中位、口縁部内面でハケの目幅が異なり、最低でも3種類の工具を使い分けているようである。わずかに風化が進んでいるが、砂粒の露出は少ない。粘土帯は底部から頭部まで9段積み上げている。

**遺物 細形銅矛** 全長35.7cm、鋒と両側の刃部に細かな欠損が見られるが、完形に近い。袋部断面は36×30mmの槽円形で、長さは88mmをはかる。端部に3本の節帯があり、半円形の耳がつく。耳の孔は、開いてはいるがあまりにも小さく用をなしていない。発掘中は気がつかなかったが、銅矛実測中に袋部の中に柄の先端が残っていることを発見した。取り出した木片は、長さ10cmあり、袋部の15.5cmまで達している。その先にはフェルト状の繊維が固まっており、柄を固定する目的であろうか。柄は鉛筆のように8面から削りだし、さらに先端を削り落としている。埋葬時に袋部の部分で切断された可能性もある。もし切断していないとしたら、二つの塊を合わせた180cm以内の長さを想定できる。

いずれにしても銅矛に柄が挿入されたまま発見されたことは、初めてのことであろう。

**細形銅剣** 現在、緑青色を呈し、刃部に細かな欠損があるが全体的に保存状態がよい。全長28.3cmで、剣込から関まで錆がないのが特徴である。長さ25mmの茎は、14×13mmで断面は円に近い。身は剣込下部の突出部が最も広く、37mmをはかる。関に向かって狭まり、関は脊に対してほぼ直角につくられ、幅は29mmである。身は鋒に向かって細くなり、櫛の先端から鋒までの長さは5cmである。

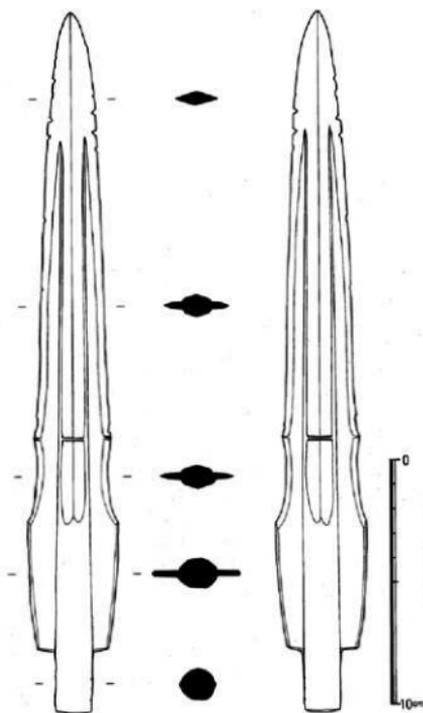


Fig.134 銅矛実測図 (1/2)



Fig.135 銅剣

#### 4. K51号甕棺墓

K45号甕棺墓の南西2m、K53号甕棺墓の北2.3mの所に位置している。主軸はN-47°-Sで甕棺ベルトの方向とほぼ一致する。墓壇は長軸2.32m、短軸1.42mの楕円形で、北東から約20°に斜めに掘りこまれている。墓壇は、78cmと深いので、上棺の底部から胴部の一部が削平されているだけで、他の甕棺墓に比べて残りがよい。上、下棺とも同じ大きさの甕を用いて接口式に埋置し、その接合部には黄褐色の粘土が帯状に巻かれている。上棺の口縁部を潰したような状態で、約30cm大の花崗岩角礫が1個出土した。おそらく標石のように墓壇の上に置かれたものが沈下したのであろう。

下甕胴部棺底から、細形銅剣1口が鋒を底部方向に向けて出土した。さらに棺内の土中より、管玉11個が発見された。また赤色顔料も認められた。

上 甕 底部と胴下半部の一部を欠くが、口縁部は全周を接合復元できた。色調は内外面とも灰茶色で、胴部中程に黒斑がある。口径70.2cm、推定器高約81cm。胴部に張りがないので、65.4cmをはかる胴部最大径は口径よりも小さい。頭部と胴部中位の2か所に各3本の沈線が巡る。下方の沈線は、太く浅い。さらに6か所に縦の沈線があり区画している。外面はナデ上げて調整している。

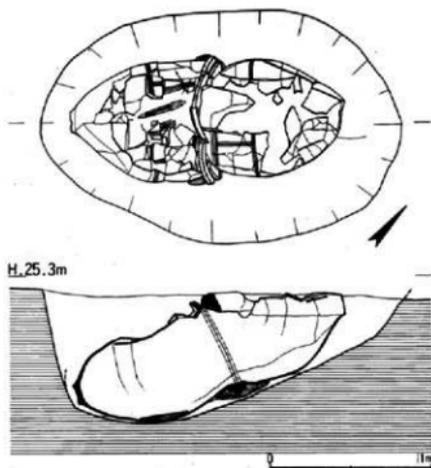


Fig.136 K51号甕棺墓出土状況図(1/30)

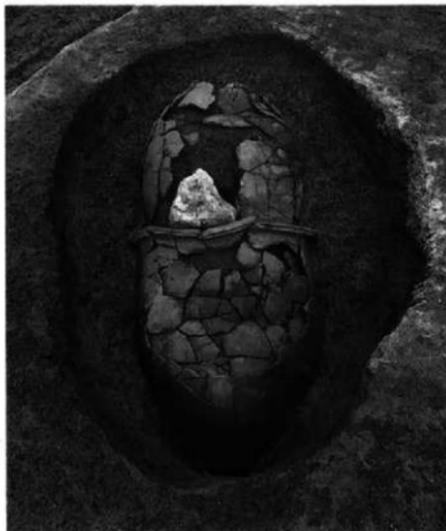


Fig.137 K51号甕棺墓

Fig.138 K51号甕棺墓



Fig.139 K51号甕棺

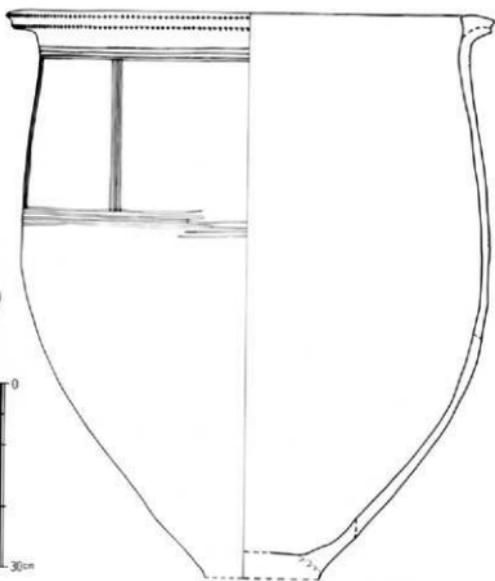
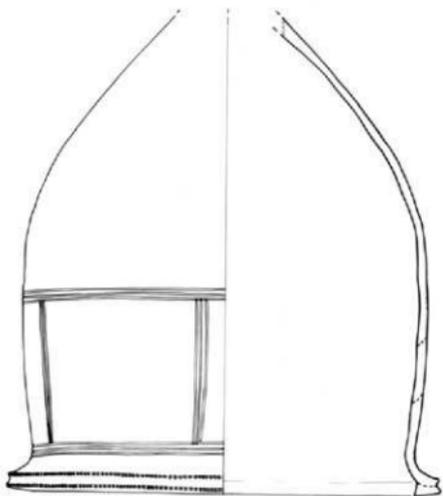


Fig.140 K51号甕棺实测图 (1/8)

下 甕 底部周辺の胎土は、残存状態が悪く接合できなかつた。口径68.4cm、器高92.8cm、胴最大径75.3cm、底径18.6cmをはかり、上甕よりもひとまわり大きい器形である。胴最大径の位置が中位より上方にあり、下半部が長い特徴をもつ。口縁部は粘土を厚く貼りつけ、上面はわずかに丸みがあるが幅広い平坦面を作る。外端部の刻み目は右下がり、間隔が不均一で粗い。頸部と胴部に各4条の沈線が巡り、さらに4本の縦の沈線で区画している。その間隔が狭く、7～8区画が想定される。器面は部分的に風化が進み、1～2mm大の砂粒が露出している。器面は主に縦方向のナデ調整。わずかに赤みを帯びた色調で、焼成はきわめてよい。胎土、焼成、色調など明らかに上甕とは異なる。

遺 物 細形銅剣 K45号要棺墓の銅剣とよく似た特徴を持つ。全体に緑青色で保存状態はよい。全

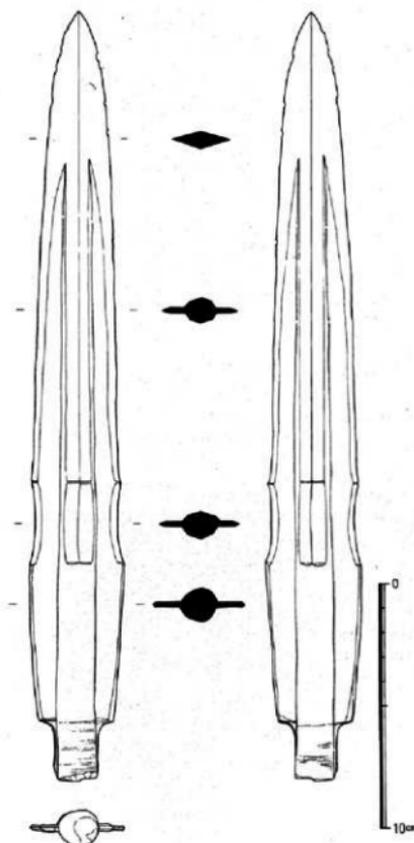


Fig.141 銅剣実測図 (1/2)



Fig.142 銅剣

長31.6cm、断面円形の茎は、長さ24mmと短い。閃は脊に直交しているが铸造時の甲張りが残っている。脊の跡は刃込まで、その下部は断面円形のままである。閃幅は30mmで細身の翼をしている。穂の先端から柄までは6cm。全体に布のような痕跡が付着している。

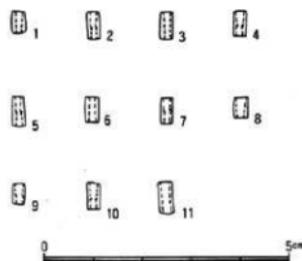


Fig.143 管玉実測図 (1/1)

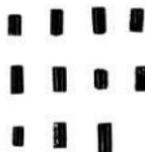


Fig.144 管玉

玉No.	長さ(mm)	幅(mm)	色調	備考
1	4.2	2.9	濃青色	
2	5.4	2.7	*	
3	5.5	2.6	*	
4	4.9	2.9	*	
5	6.0	2.7	*	
6	5.3	2.8	*	片割穿孔
7	5.2	2.7	*	上蓋文様
8	4.3	3.0	*	片割穿孔
9	4.2	2.4	*	むとむとしい
10	5.3	2.9	*	
11	6.5	2.9	*	むとむとしい

Tab.15 K51号甕棺墓出土管玉計測表

管玉 下甕の埋土中から発見したので、棺内の埋土をすべて洗浄したところ、11個となった。すべて碧玉製で、長さは、4.2~6.5mm、幅2.4~3.0mmと大きさに違いがある。大石地区では、玉類の出土は、K71号甕棺墓と2基だけで、高木地区の豊富さに比べると極端に少ない。

### 5. K53号甕棺墓

K51号甕棺墓の南約2.5mに位置する。これより南側は竜谷川の蛇行と平行して50cm程低い段になり、墓域は南に広がっていない。本来このラインが墓域の南縁であったのか、あるいは竜谷川の開析や耕作などで削られたのか断定はできない。墓壇は、長楕円形で壁は垂直に近い。主軸はN-78°-Eに埋置している。上下棺とも甕高90cmを超す大型甕を用い、互いの口を密着させる接口式である。その角度は13°で、西棺がわずかに高い。合わせ口の外面は、粘土で厚く目張りをしている。遺物は、東棺下甕から細形銅戈1口、また口縁部近くから磨製石剣が4点が出土した。細形銅戈は、甕棺墓中心軸よりやや南寄りの位置で直交するように、切っ先を北に向けている。また細形銅戈の下と下甕底部付近に赤色顔料が顕著に残っていた。これら遺物の出土状況から推測すると、腰部付近に磨製石剣と石剣が刺さった被葬者を、東棺下甕に頭から入れ、胸に細形銅戈を置いたのではなかろうか。

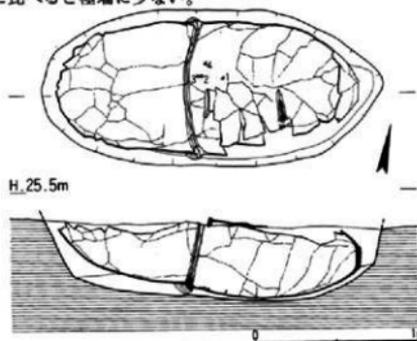


Fig.145 K53号甕棺墓出土状況図 (1/30)



Fig.146 K53号甕棺墓



Fig.147 K53号甕棺墓



Fig.148 簡木出土状況

甕棺の土器型式からすると、大石地区の遺物を持つ甕棺墓としては、K71号甕棺墓と並んで最も新しい時期に埋葬されている。

上 甕 上下棺とも砲弾形の胴部に三角突帯を貼りつけて、よく似た形をしている。上甕は、口径75cm、胴最大径72.4cm。胴部の厚さは他の甕棺が1cmを超すのに対し、底部付近でも9mmしかなく、全体に均一で整った作りとなっている。底部を欠いているが胴部の中位に背の低い小さな三角突帯1条を貼りつけている。ここから胴は上方に直立して42cmのび、口縁部がつく。口縁

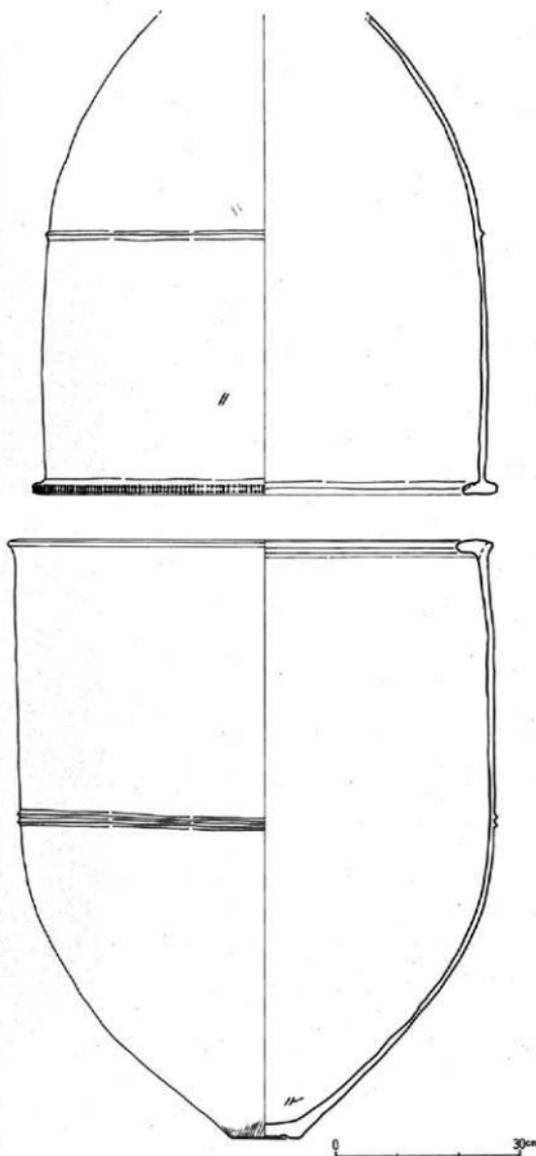


Fig.149 K53号甕棺実測図 (1/8)

部は内側に大きく突出し、上面は、5.5cmの幅広い平坦面となり、断面T字形となっている。外端は直に角張り、間隔の狭い刻み目を入れる。内外面とも肌色に近い茶色で、丁寧なナデ調整が施され平滑な器面となっている。

**下 甕** 胴上半部の5分の1が接合できなかったが、ほぼ完形である。口径78.5cm、器高98.5cm、底径11.5cm、胴最大径77cm。胴部中位よりやや上方に三角突帯を2条巡らせている。突帯は丁寧に横ナデされ、高さ1cm弱できわめて小さい。外端部に刻み目は無い。胴上半部は直立してのび、上方でわずかに内傾し、L字形の口縁部を作る。内側に異様に突出して、58mmと幅広い平坦面となっている。底部付近には粗いハケ目が残る。胴部はナデ調整で、ところどころに板状工具による調整痕が見られる。色調は茶色。胎土の砂粒は少なく、焼成も良好で視覚的には上壺と大きな違いはない。突帯から胴下半部にかけて黒斑がある。

**遺 物 細形銅戈** 暗緑灰色で鋒部近くの刃部が細かく欠けているが完形品である。全長21.1cm。きわめて薄い作りで、最も厚い関部でも4mmしかない。内は長さ15mm、幅14mmの長方形で、厚さは2mm。関は幅64mm、脊との角度は100度である。身は関から緩やかに内湾しながらのび、膨らまないでそのまま鋒となる。脊の断面は薄い楕円形で、銅はない。種の基部は脊を挟んで細い突縁で2段4区画する。下段には孔を開け、上段には縦に長い斜格子紋を鑄出している。類例が佐賀県唐津市宇木汲田遺跡などで知られているが、利器として果たして実戦に耐えられたのか大いに疑わしいほどの脆弱な作りとなっている。



Fig.150 K53号甕棺

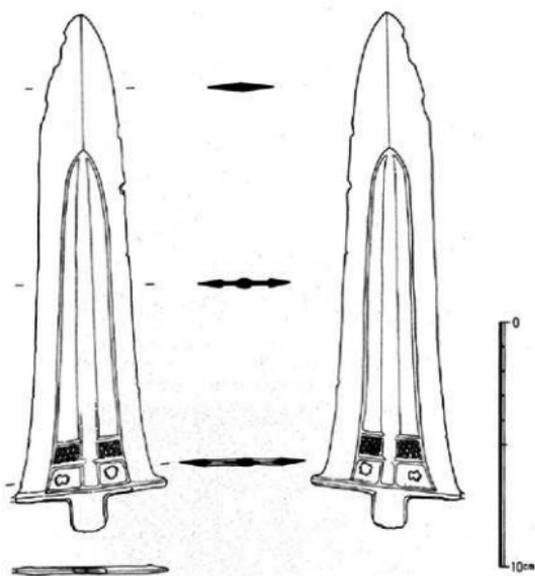


Fig.151 鏃実測図 (1/2)



Fig.152 鏃

磨製石剣 石鏃の可能性もあるが、身幅があるので石剣とした。

1は粘板岩質の暗黄灰色の石材を使っている。折損部で幅23mm、厚さ10mmの偏菱形。長さ31mm、よく研磨されている。2は暗灰色の粘板岩質、3mmと扁平である。折損部で幅30mm、先端も小さく欠いている。図左面は刃部を研ぎ出しているが、図右面は平坦に近い。3は同じように粘板岩で暗黄灰色を呈する。錆があり偏菱形の断面となっている。損折部で幅18mm、長さ19mmの小破片である。4は折損部幅22mm、長さ22mm、厚さ4mm。粘板岩質で暗灰色である。身の中央を残し縁部だけを両面から研磨している。

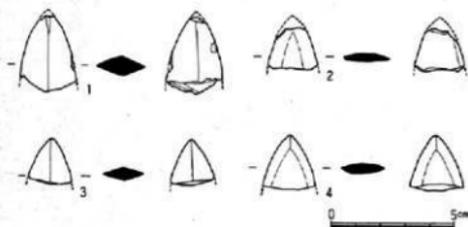


Fig.153 石剣実測図 (1/2)



Fig.154 石剣

## 6. K60号甕棺墓

K53号甕棺墓より東に6m離れて位置する。主軸N-48°Eで東側を上棺として20°に埋置している。墓壇は長さ2.22m、幅1.42mの長楕円形であるが、もとは、まず堅穴を掘り、さらに下棺を入れるために東側の底面に斜墳を掘ったのであろう。上下棺とも同じような器形の甕であるが、上甕がやや大きい。接口式で、外側は厚い粘土の目張りで、完全に密着している。棺内に落下した破片を取り除くと、接口部から磨製石剣の先端が1点出土した。

**上 甕** 口径72cm、胴最大径67.8cm。胴部に張りがない。頸部は小さく外反し、その上面に厚く粘土を貼りつけ口縁部を作る。口縁部外端は強い横ナアで凹状となり、上下に刻み目を施している。口縁部内端は斜め上方に著しく突出している。頸部と胴部最大径の上方に3条の沈線が巡る。その間隔は7~10mmである。沈線は3本の平行線ではなく、一筆書きの要領で3回転している。さらに縦の沈線が2か所に見られるが、上下の沈線に連結せず、平行もしていない。6区画か。上棺でありながら、風化していないので、砂粒の露出も少ない。全体に焼成は良好である。内外面とも濃い茶色をしている。

**下 甕** いま胴上半部の2分の1が失われている。口径67cm、器高87.5cm、底径14cm、胴最大径69.5cm。底部は周縁が平坦で中央がへこみ、高台状をしている。最大径が胴部のちょうど中位にあり、頸部の締まりも強いので、下腹れの印象を与える。上甕に比べて頸部の外反が大きい。頸部に3条、その下方30cmに3条の沈線を入れているが、縦の沈線は見られない。表面の風化が進み、砂粒が露出しているが、特に胴下半部は異状に小砂粒が多い。色調は上甕と同じだが、下甕は胎土の砂粒含有量が多く、明らかに別の胎土が用いられている。器壁には10か所で粘土接合が観察できる。

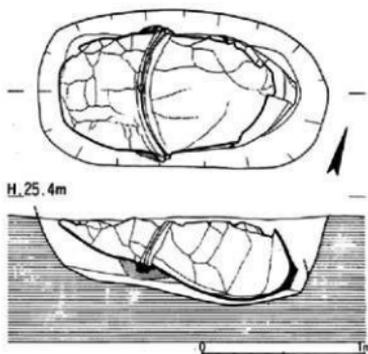


Fig.155 K60号甕棺墓出土状況図 (1/30)



Fig.156 K60号甕棺墓



Fig.157 石剣

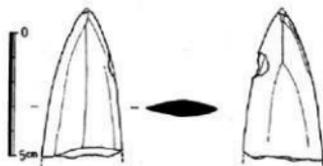


Fig.158 石剣実測図 (1/2)

遺物 磨製石剣 粘板岩質で暗黄灰色を呈する。折損部の幅32mm、長さ61mm。断面は偏菱形で厚さ7mm。両面で研磨が違い、図左面は鈍い錆が通っている。刃部の損傷部も同じ色調、風化をしているので、同時期に欠けたのであろう。



Fig.159 K60号鑿柱

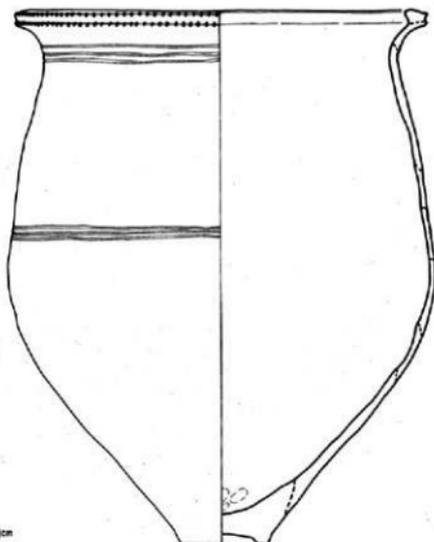
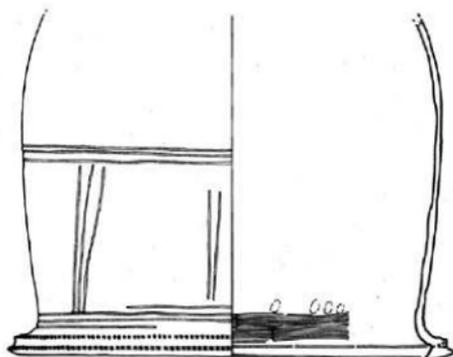


Fig.160 K60号鑿柱実測図 (1/8)

## 7. K67号甕棺墓

墓域の南西隅に位置し、遺物を持つ甕棺墓としては最も西端にある。主軸はN-58°-Eで、埋置角は27°である。撮影のために墓壇を下甕側に広げて掘ったが、本来は墓壇の底部を斜めに掘り込んでいる。上下ほぼ同じ大きさの甕を使った接口式であるが、粘土の目張りは認められなかった。遺物は、下甕の胴部棺底より細形銅矛1口が出土した。鋒をやや下方に向けて、甕棺主軸に対してほぼ直交するような形で検出されたが、原位置を保っているかどうかは不明である。鋒と袋部の一部を欠損しており、棺内の埋土をすべて水洗いしたが、その破片は発見できなかった。

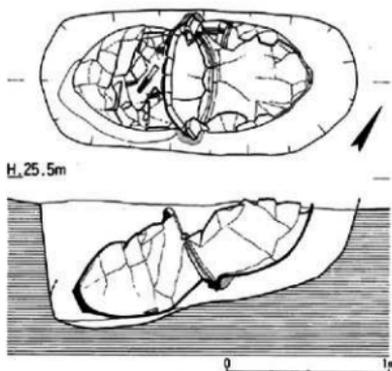


Fig.161 K67号甕棺墓出土状況図 (1/30)

上 甕 ほとんどの甕棺が茶色、あるいはうすい黄色系の色調を呈しているのに対して、K67号甕棺墓は上、下甕とも赤みが濃いのが特徴である。口径65.5cm、胴最大径65.6cmとほぼ同じで、最大径の位置が上にあるので底部に向かって細くなり、倒卵形の器形となっている。頸部はよく締まり、外反も長い。口縁部の粘土貼りつけは分厚く、刻み目も鈍いので鈍重な作りとなっている。沈線は頸部と胴部に3条巡らし、6か所に縦の沈線を入れて区画している。外面は細かいハケ目調整。内面はナデで仕上げている。



Fig.162 K67号甕棺墓



Fig.163 作業風景

下 壺 口径63.2cm、器高81.6cm、底径19cm。上壺よりも底部近くが締まって細身となる。粘土貼りつけで分厚い口縁部は、丁寧な刻み目が施されている。口縁部上面は丸みがあり内傾している。頸部と胴部の3条沈線は一筆書きである。縦に区画する4条の沈線は、等間隔に6か所に入れている。外面は丁寧なナデ調整。色調、胎土、焼成など上壺ときわめてよく似ている。胴部の2か所に黒斑がある。



Fig.164 K67号壺柱

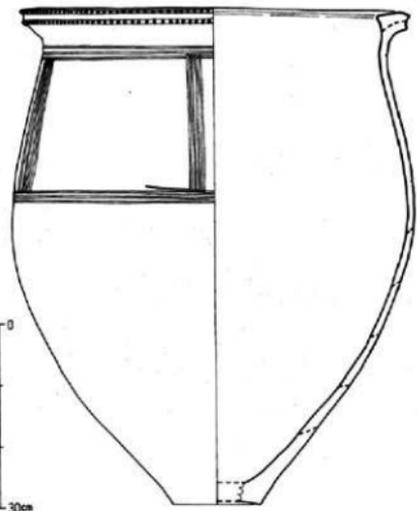
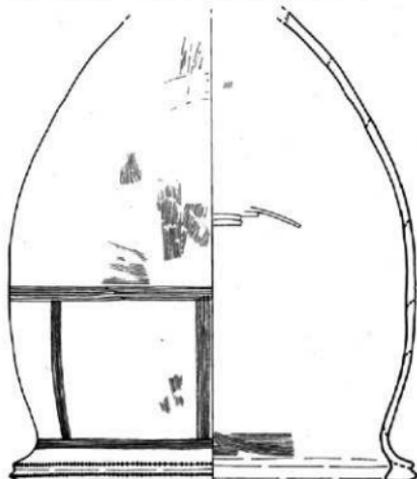


Fig.165 K67号壺柱実測図 (1/8)

遺物 細形銅矛 濃い緑青色で、表面の数か所にブロンズ病の跡が盛り上がっている。穂の先端部で折れ、袋の一部も欠いている。どちらも埋葬後の土圧などで損傷したのではなく、一時に力が加わり欠けたのであろう。袋端部の欠損は、ちょうど耳にあたるが、その大きさからすると、耳は本来なかったと思われる。現在長18.4cm、袋部は長さ7cm。袋部の末端は幅6mmの帯が廻り、断面は31×27mmの楕円形である。4cm前後の鋒部を想定すると、全長22cmとなる。断面の風化も同じ時間を経ているようである。



Fig.166 銅矛出土状況

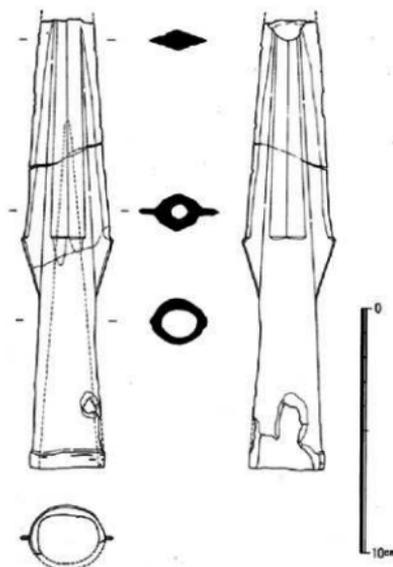


Fig.167 銅矛実測図 (1/2)



Fig.168 銅矛

### 8. K70号甕棺墓

墓域やや南寄りの、東側縁辺部で検出した。K45号甕棺墓の南東4.5mにあたる。主軸をN-70°-E方向にとり、東から約30°の傾斜をもって埋置されている。墓壇の北側は大きく削平され、甕の胴下半部がかろうじて残っているにすぎない。近くのK45号甕棺墓と同じ高さで地表が広がっていたと想定すると、深い墓壇となり、単棺ではなく複棺の可能性がある。棺内埋土より細形銅戈の破

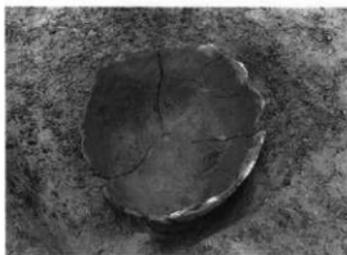


Fig.169 K70号甕棺墓

片4点が発見された。原位置は不明である。

下 甕 胴部より上半を欠いているので全形がわからないが、胴最大径が、他の甕よりかなり下方にあり、下膨れとなっているのが特徴である。底径18cm、胴最大径60.3cm。底部は、周縁18mmが平坦で中央が4mm程窪む高台状をしている。色調は外面が濃い茶色、内面がうすい茶色。外面の調整は、主に縦のナデの後、6～8mm幅で横方向の磨きを加えている。胎土は他の甕のように砂粒を多く含む粗い。胴最大径のやや下方に3.3cm大の穿孔があり、埋葬時に内面から穿たれたのであろう。

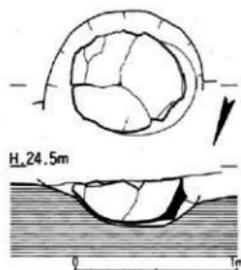


Fig.170 K70号甕棺出土状況図 (1/30)



Fig.171 K70号甕棺

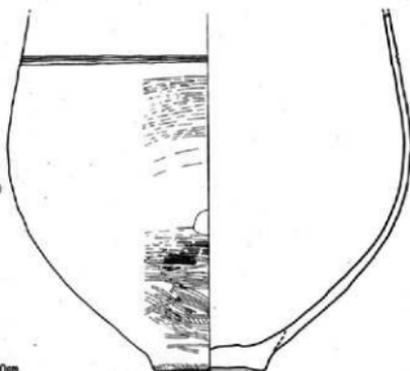


Fig.172 K70号甕棺実測図 (1/8)

遺物 細形鋼戈 棺内から鋼戈の破片4点が出土したが、刃部と鋒部の2点を図示した。4点とも鋼質が類似していることから同一個体と判断できる。鋒は断面偏菱形で、錆化が進んでいるが、わずかに錆が見られる。もう一点は、鬩の一部とその上方の刃部である。薄い襷から縦に割れ、刃部両面には、1.5mm幅の細かい研ぎ分けが見られるが、整然と並んでいない。全長は復元できないが、鋒部の形状からすると細身の鋼戈が想像できる。



Fig.173 研ぎ分け



Fig.174 銅形鏃

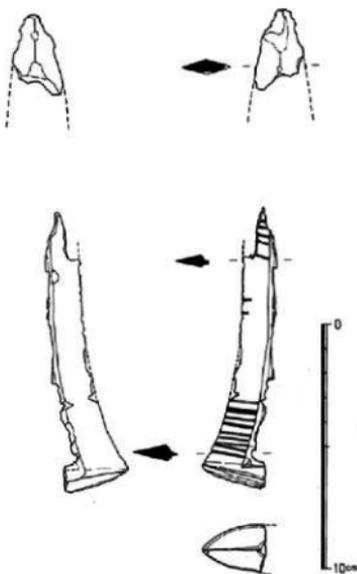


Fig.175 鏃実測図 (1/2)

### 9. K71号甕棺墓

K70号甕棺墓の北東約5m、同じように墓域の南縁で発見された。大きく削平され、甕の胴部破片が深さ20cmの墳底にわずかに残っているにすぎない。口縁部、底部とも消失しているが、器壁の厚さから、東側を底部と判断し、N-74°-Eの方向とした。埋置角は不明。遺物は、甕の内面に密着して検出された。遺物は直径約1.6cm、長さ約2.9cmの青銅製品で、緑青で覆われ原形がわからない状況であった。この周辺には長さ1cm前後の管玉(?)を縦割りにして研磨したものが数十点ちらばっており、赤色顔料も検出された。

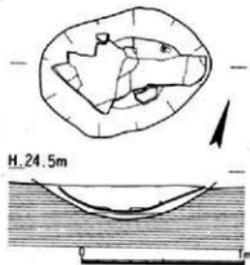


Fig.176 K71号甕棺墓出土状況図 (1/30)

下甕 複棺とは断定できないが、ここでは下甕として扱う。写真のように横52cm、縦60cmに接合できた。下側が底部側で、胎土は砂粒が少なく堅緻な焼成である。全体に薄手の作りで、K53号甕棺墓によく類似している。ただし胴部の三角突帯は見られないことからすると、同じような大きさの甕で、三角突帯下方の破片ということになる。



Fig.177 K71号甕棺墓

**遺物 青銅製品** 中心部まで錆化が進み、表面はひび割れたようになり、しかも両端も折損して原形を止めていない。全長29mm、断面円形で16mm。一緒に出た管玉の半載品も初めての資料で、青銅製品と関係があるのかさえもわからず、発掘時は一応、銅剣の把頭飾りではないかと推測した。その後、佐賀県鳥栖市柚比本村遺跡で同じような石製品で飾られた鞘付き銅剣が、完全な姿で発見されたことから、管玉(?)の半載品の使用目的がわかった。ただ青銅製品を把頭飾りと断定するまでには至っていない。



Fig.178 K71号銅剣

**石製品** 39点出土した。灰緑色の碧玉製で、長さ約3.5~9.2mmと大きさにばらつきがある。作り方は、まず管玉状の小円柱を縦に半裁し、その断面を研磨して、うすい蒲鉾状の断面にしている。その研磨面にわずかに縦方向の溝が認められるものがあり、管玉を再加工したと考えた。柚比本村遺跡例も同じような形状をしているが、研磨面に溝はなく、管玉の転用品とはいえないようである。鞘飾りとする作業工程上、管玉状にして半裁したのか、あるいは本来管玉として使用していたものを再加工したのか、興味深い。



Fig.179 青銅製品実測図(1/2)

玉No.	長さ(mm)	色調	備考	玉No.	長さ(mm)	色調	備考
1	8.85	灰緑色	上下に孔痕	21	7.60	灰緑色	
2	9.20	*	上に孔痕	22	7.60	*	上に孔痕
3	9.00	*	上下に孔痕	23	7.30	*	
4	8.30	*	上に孔痕	24	7.30	*	上に孔痕
5	8.50	*	上下に孔痕	25	9.90	*	
6	8.70	*	下に孔痕	26	7.30	*	
7	8.70	*	*	27	6.70	*	上下に孔痕
8	7.80	*		28	6.90	*	
9	8.20	*	上に孔痕	29	7.10	*	孔痕
10	8.20	*	上下に孔痕	30	6.30	*	上下に孔痕
11	8.10	*		31	6.90	*	きわめて細い
12	7.50	*		32	7.00	*	*
13	8.30	*	上に孔痕	33	6.40	*	
14	7.90	*	下に孔痕	34	5.40	*	上に孔痕
15	8.10	*	上に孔痕	35	5.30	*	中、下に孔痕
16	7.60	*	上下に孔痕	36	4.90	*	
17	7.40	*	*	37	5.20	*	
18	7.20	*	*	38	3.50	*	上に孔痕
19	7.80	*	上に孔痕	39	3.90	*	*
20	8.20	*	下に孔痕				

Tab.16 K71号銅剣墓出土管玉計測表



Fig.180 管玉

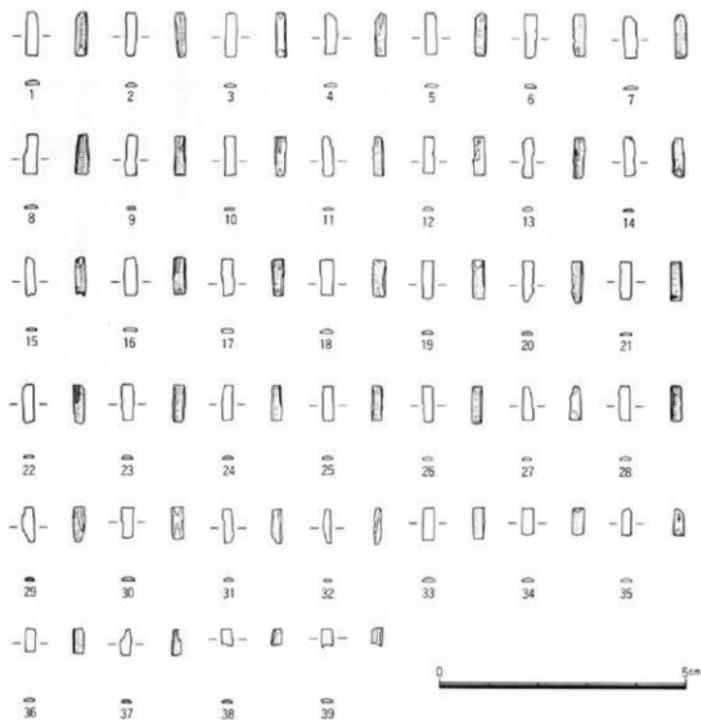


Fig.181 管玉实测图 (1/1)

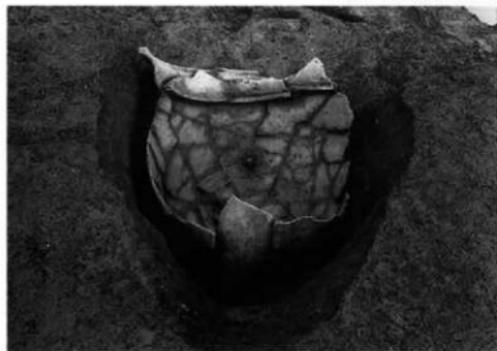


Fig.183 K81号葬棺墓

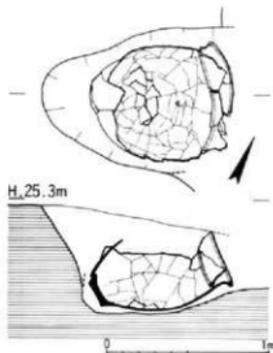


Fig.182 K81号葬棺墓出土状况图 (1/30)

### 10. K 81号甕棺墓

K 60号甕棺墓の北2.5mにある。大小2個の甕を使った複棺。第7号木棺墓の一部を切っている。上甕は、南側から掘り窪められた溝で切り落とされている。下甕で見つかった口縁部が原位置とすると、上甕の口縁部を入れ込んだ挿入式である。下甕の埋置角は25°しかなく水平に近い。下甕の胴部中央付近で石剣の先端が発見された。また、赤色顔料も発見されている。

上 甕 口辺部の2分の1が残る。全面に風化が進み、灰茶色をしている。口径は56cmで、胴最大径54cmよりわずかに大きい。頸部から緩やかに外反して、その上部に粘土を厚く貼りつけて口縁部を作

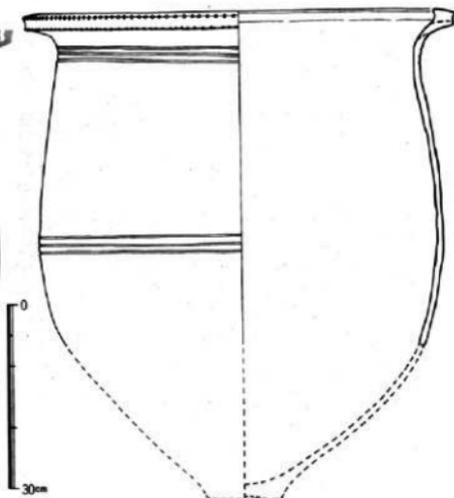
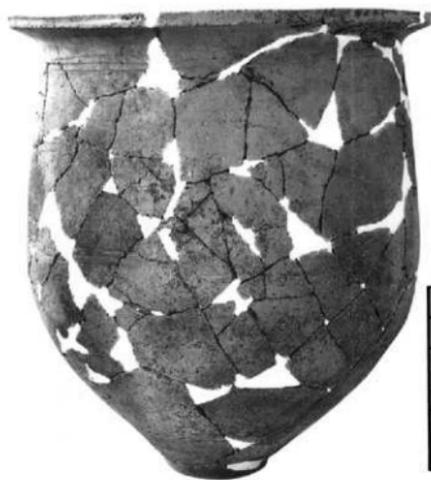
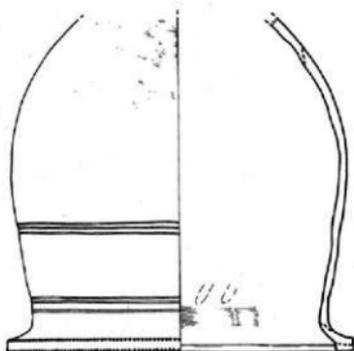


Fig.184 K81号甕棺

Fig.185 K81号甕棺実測図 (1/8)

るのは他の甕と同じだが、外端部が窪まず断面が方形に近いのが特徴である。沈線は頸部と胴部に各3条入れている。縦の沈線はない。外面には部分的に幅13mmの板目状調整具の痕跡が残っている。頸部内面は、ハケ目調整。内面に黒斑がある。

下 甕 上甕と同じ灰茶色をしている。口径69cm、器高78.5cm。胴部中位よりわずか上方に65.7cmの最大径がくる。底部は上げ底に近い。胴下半部は丸みがある。口縁部の刻み目は、上下とも大きい。沈線は一筆書きで頸部に3条、下方30cmに3条を入れる。縦の沈線はない。胎土には砂粒が多く粗い。色調、焼成など上下甕ともよく類似している。

遺物 磨製石剣 先端より25mmで折れ、表面はやや風化が進んでいる。淡黄灰色の粘板岩質。折損部で幅19mm、厚さ6mm。身に銅が通るので断面は扁平な菱形となっている。



Fig.186 石剣実測図 (1/2)

Fig.187 石剣

#### 11.K140号甕棺墓

第4号木棺墓の南東約1mにあり、同じ方向に並んでいる。主軸はN-37°-E。ほぼ同じ大きさの甕を接口式にして、墓壙の斜面に27°の角度で埋置している。合わせ目には日張りの粘土を巻いている。図では上下甕とも削平されたように見えるが、棺内に落下していた破片を取り除き、細形銅剣が出土した状況を示している。下甕の頸部付近で出土した細形銅剣は、鋒を底部に向けている。もし頭位が上甕にあったとすると、細形銅剣は右腰部にあたる。なお、棺内から赤色顔料も検出された。

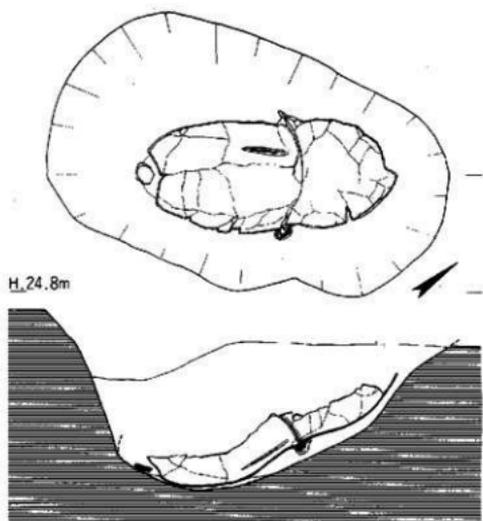


Fig.188 K140号甕棺墓出土状況図 (1/30)

上 甕 口径63cm、器高86.2cm、胴最大径64.2cm、底径17cm。口径より胴最大径が大きい、その位置が中位より上方にあるので、胴の張りを感じさせない。頸部の外反は緩やかで、口縁部外端は横ナデして凹状となる。下端は小さく突出し、刻み目は粗い。頸部と胴部の沈線は各3条、頸部は一筆書きだが胴部は平行線である。器面は底部が縦のハケ目、胴部は丁寧なナデ調整が施され、2~3mm大の砂粒を含むが、表面にはほとんど露出していない。色調は濃い茶色。底部は接合面から離れており、粘土の接合法がよく観察できる。

下 甕 上甕に比べ赤みが濃く、胎土、焼成とも異なる。口径68.6cm、器高87.8cm、胴最大径79.6cm。胴に張りがあり、外形は丸みがある。口縁部の作りは上甕のように厚い粘土を貼りつけている。沈線は頸部と胴部に各3条入れているが、胴部の沈線は3条とも一周してうまく結合していない。頸部内面は粗いハケ目痕が残っている。胴部内面に黒斑がある。



Fig.189 K140号甕棺蓋



Fig.190 K140号甕棺蓋

#### 遺物 細形銅剣

全長31.3cm、緑青色を呈している。剣込の下方が変形し、円にかけて錆化が激しい。茎は13×11mmの断面円形で、28mmと長めの茎となっている。剣込から円までは65mmあり、刃部を研ぎ出さない。樋から鋒までは51mmある。剣込の下突出部が最も身幅があり41mmをはかる。全体に細身の形状となっている。両面とも刃部と脊に1.5mm幅の研ぎ分けを丁寧に加えている。鋒部は横方向に研ぎ分けた後に縦に研いでいる。鞘を放った時の効果は十分に想像ができる。

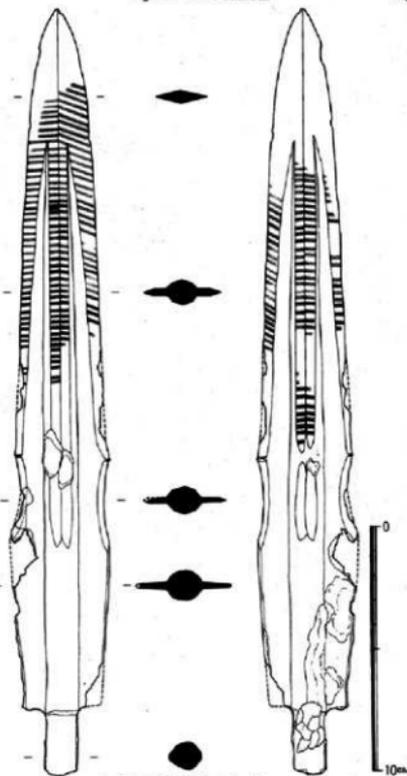


Fig.191 銅剣実測図 (1/2)



Fig.192 銅剣

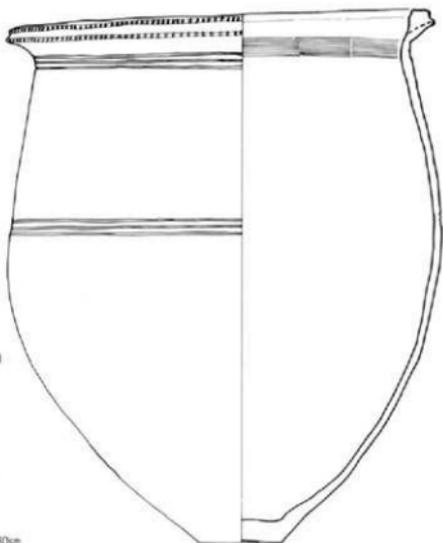
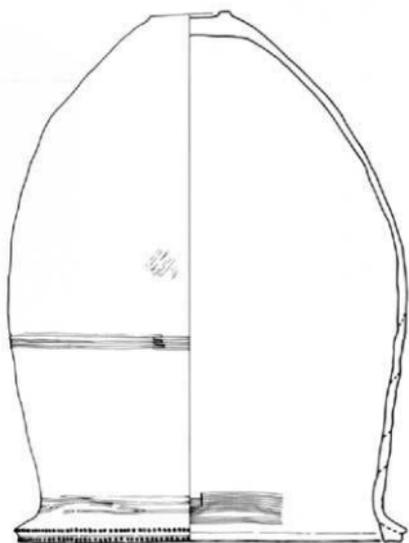


Fig.193 K140号甕棺

Fig.194 K140号甕棺实测图 (1/8)

#### 4. 小 結

第6次調査区東端で検出した弥生時代共同墓地の大石地区について、その調査結果を述べてきた。今回は、遺物を出土した木棺墓と甕棺墓に限ったので、大石地区の全容を明らかにできなかったわけではない。もともと大石地区は、圃場整備事業の計画に従って発掘区を設定したので、墓域の広がりを把握していない。また、グリッドN-17からG-13に至る約400mに及ぶ甕棺ベルトの一角を占めていることから、一つの完結した墓域として、範囲を確定できるのか問題がある。甕棺ベルトは、弥生時代前期末に数か所の小さな墓域から始まり、弥生時代中期末までに長大な共同墓地に成長したもので、その当初からベルト状の墓域を目指していたのか確かめようがなく、結果的な形状と言えないこともない。ただ、高木地区が弥生時代前期から中期初頭の短期間に営まれた厚葬墓であったのに対し

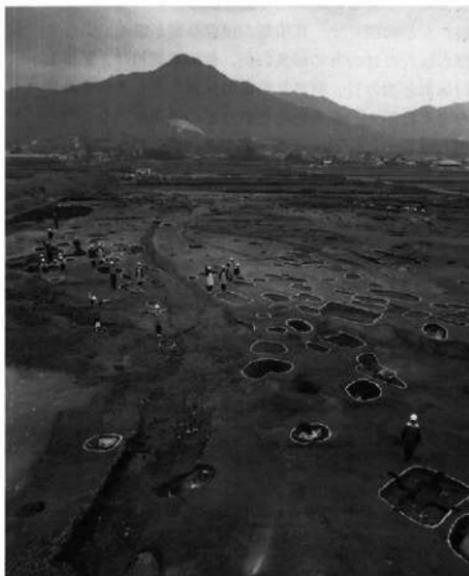


Fig.195 大石地区全景

て、大石地区は、甕棺ベルトに吸収されていくので、両者に一線を画した意識があったことは疑いがない。この違いこそ、高木地区、大石地区の歴史的重要性であり、その検討結果を報告するのが本書の命題である。高木地区との比較については、第4章にまとめているので、ここでは大石地区の問題点と調査成果について、二三補足するに止める。

大石地区が広大な吉武遺跡群の中で、どのような歴史的位置を占めていたのかを知るには、甕棺ベルトの詳細な分析が不可欠である。しかし2千基に近い甕棺墓のすべてを対象とするには、相当な時間を必要とする。したがって、大石地区に限って時期的な変遷をたどっても、あまり意味がないかも知れないが、甕棺ベルトにおける墓地の展開傾向を予測することは可能であろう。4枚の図は、弥生時代前期末から中期後半までを、おおまかに4期に分けて、甕棺墓の埋葬位置を示した。先に断つておくと、弥生時代前期末～中期初頭の中には、これまで金海式、城ノ越式と呼んできた甕棺を含んでいる。

甕棺は、弥生時代前期の壺形土器が次第に大型化し、さらに合わせ口としての機能が追求されて砲弾形の形状に変化する。金海式甕棺は、胴部に張りをもち、胴上半部が内傾し、胴部と口縁部直下に沈線を巡らすなど、まだ壺の特徴をよく残していることから、その過渡期に作り出されたもので、弥生時代前期末の時期が与えられてきた。しかし、最近、小型壺を共伴する発掘例が増加するとともに、金海式甕棺という型式設定と年代観について再検討が行われる機会が増えてきた。大石地区の甕棺墓には共伴例はないが、高木地区では、K116、117号甕棺墓の2基から小型壺が出土している。この他に大石地区、高木地区とも木棺墓から出土しており、これらの小型壺からすると、第4章に述べてい

るようやや新しい時期が考えられる。大石地区の全域が耕作などの削平で、甕棺墓の保存状態が悪く、胴部や底部の破片だけのものが多いが、金海式甕棺は、肥厚した口縁部と刻み目、胴部と頸部の沈線、そして多くの砂粒を含んだ胎土、赤茶色の色調などの特徴があり、他の甕棺とは容易に区別することができ、甕棺墓一覧表のように56基の金海式甕棺を認定した。

前期末から中期初頭にかけての甕棺墓は、大石地区の中央から南西側にかけて全域に散在しており、特に一か所に集中する様相ではない。このうち9基の甕棺墓と4基の木棺墓（出土した小型壺から、ほぼ同時期と考えた）から青銅器や磨製石鏃、磨製石剣などの遺物が出土し、全体に対して保有率は高い。なかでも第1号木棺墓は、細形銅戈と細形銅剣、K45甕棺墓は細形銅矛と細形銅剣を複数持つっており、際立っている。

次は中期前葉で、いわゆる汲田式甕棺の時期であるが、やや墓域が拡大するものの、ほぼ前の時期の範囲を踏襲している。この時期では、K53号甕棺墓が細形銅戈と磨製石剣4個、K71号甕棺墓が青銅製品と管玉加工品を持っているだけで、保有率は激減する。高木地区でも、この時期まで遺物を持つ甕棺墓はない。

中期中葉以降になると埋葬場所が北側に移動し、遺物を持つものは姿を消している。また共同墓地に対する祭祀遺構が5か所で行われている。

ところで、これまで意識的に副葬品という言葉を使用しなかった。大石地区の出土遺物のすべてを、副葬品として扱っていいのか躊躇せざるをえなかったからである。本来副葬品というのは、埋葬者の意識の問題であつて、現代人が副葬品と判断するには、それなりの定義を済ませておく必要がある。生前の社会的役割、人柄、嗜好を表わすことはあつても、被葬者の社会的地位を誇示、誇張するために棺内に入れたとするには、どのような材料で判断するのであろうか。当時の社会状況における青銅器の価値を下げるつもりはないが、大石地区の青銅器のあり方は、青銅器を宝器化し、権力のシンボルとする従来の説を再考せざるをえない。K1号甕棺墓の細形銅矛の細片、K67号甕棺墓の鋒と袋部を欠いた細形銅矛、K70号甕棺墓の4点に砕けたような細形銅戈、そしてK10号甕棺墓の磨製石鏃、K53号甕棺墓、K60号甕棺墓、K81号甕棺墓から出土した磨製石剣の切っ先片は、明ら

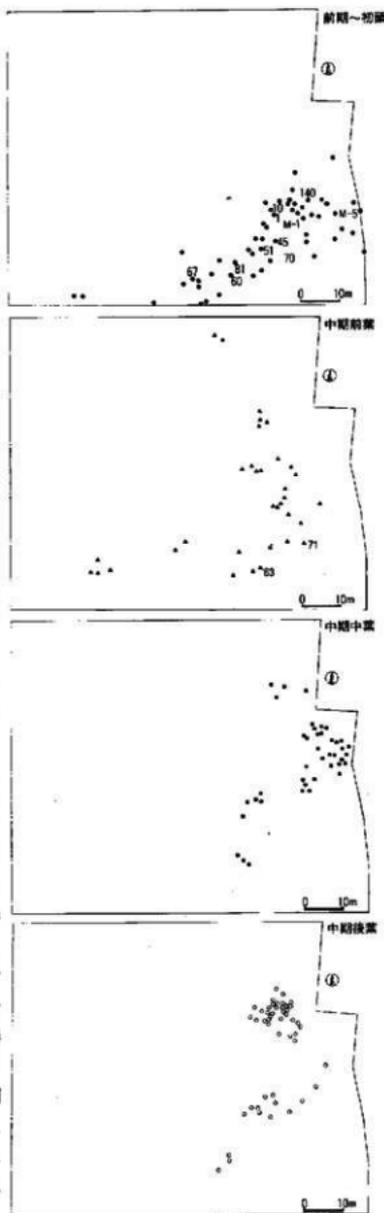


Fig.196 大石地区墓地の変遷

かに戦闘行為の結果であつて、死を悼み、死者に供献した副葬品ではない。また、K45号甕棺墓の柄が残る細形銅矛、鞘に納められていた第5号木棺墓の細形銅劍、細かな研ぎ分けを施し、鋭利さを誇示したK140号甕棺墓の細形銅劍などは、宝器でなく実用の武器として日常的に身に帯びていたことを如実に示している。これら被葬者の生前の持ち物こそ、その日常性ゆえに副葬品として考えるべきであろう。また権力としての副葬品という意味からすれば、青銅器と同じような稀少的価値があつたと思われる赤色顔料を持つ甕棺墓も無視できなくなる。

出土遺物の数量からすると、高木地区とあまり差がないように見えるが、大石地区は、細文鏡や銅劍がなく、また玉類が極端に少ない。また木棺墓と甕棺墓の墓墳規模が約半分以下と小さいなど、その質的差は歴然としている。ただ甕棺自体は、土器としての大型化が技術的に限界があり、高木地区の優位性を表現できなかったようである。

このように、大石地区の発掘では、当初期待していた高木地区と彌渡地区との間を埋める中期中頃の墓地ではなかつた。もし高木地区が発見されていなかったら、大石地区は「青銅器分散所有型」の遺跡として語られ、逆に高木地区だけの単独墓地であれば、「集中所有型」の萌芽が予想以上に早くからあつたことになり、従来の学説に合わない特別な墓地として扱われたであろう。高木地区と大石地区が合い並び、さらに甕棺ベルトのごく普通の共同墓地が存在していることによって、当時の重層的な階級やその分化段階、そして社会状況などを具体的に語れるようになったのである。

発掘調査は、昭和61年3月に終了したが、前年度の高木地区の保存に引き続いて、大石地区も保存する方針で土地区画改良組合の協力を仰いだ。大石地区が圃場整備工事の東端

に当たり、厚く盛土すると排水が困難となることから、大きな設計変更は不可能であつた。しかし度重なる協議の結果、地元の理解を得ることができ、数cmだけ遺構面を削ることはなつたが、全面が保存されることになつた。高木地区と大石地区が保存されたことは、その後の史跡申請作業に弾みがつき、平成6年10月4日に史跡指定が実現した。大石地区、高木地区が環境整備され、再びその姿を現す日も近い。



Fig.197 大石地区の遺物



Fig.198 遺構保存レベルの検討

Tab.17 大石地区甕棺墓表

番号	単棺	形 状			規模	埋置 方位	埋置 角度	時期 (式)	規 模	番号	単棺	形 状			規模	埋置 方位	埋置 角度	時期 (式)	規 模
		開口式	埋込式	開口式								開口式	埋込式	開口式					
1			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	壘形甕棺1。 大きく扁平。	71	?			壘	大型	N45°E	北東	壘	下層の下部のみ残る。 埋置角1。壘形甕棺。
2			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	下層は口縁部打ち 欠きか?	73			○	壘	大型	N45°E	北東	壘	上層は上半部を 打ち欠き。
4				壘	壘	大型	N45°E	北東	下層の底部のみ 残存。	74			○	壘	大型	N45°E	北東	壘	上。下層とも 大きく扁平。
6				壘	壘	大型	N45°E	北東	下層の底部のみ残存。 大きく扁平。	76	?			壘	大型	N45°E	北東	壘	壘形の大きさは 異なるか?
10				壘	壘	大型	N75°E	北東	大きく扁平。 埋置角1。	77			○	壘	大型	N75°E	北東	壘	上。下層とも 両面に残る。
14			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	形は、 形1に似られる。	81			○	壘	大型	N45°E	北東	壘	埋置角1。N75°E。 上層の埋込式と異なる。
15	?			壘	壘	大型	N45°E	北東	壘形か?	82	?			壘	大型	N45°E	北東	壘	残存の可能性あり。
17			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	形1に似られる。 埋置角1。	84	不明			壘	大型	N45°E	北東	壘	上層は 口縁部打ち欠き?
18			○	壘	壘	大型	N45°E	北東		86	?			壘?	N45°E	北東	壘	下層の 底部のみ残存。	
25			○	壘	壘	大型	N45°E	北東		89			○	壘	大型	N45°E	北東	壘	上。下層とも よく残る。
26			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	上層の口縁下に残存。	90			○	壘	壘	N45°E	北東	壘	上。下層とも ほぼ同じ大きさ
27	?			壘	壘	小型	N45°E	北東	下層開口部へ穿孔。	91				壘	大型	N45°E	北東	壘	上層は口縁部打ち欠き? 大きく扁平。
35			○	壘	壘	大型	N45°E	北東		92	?			壘	大型	N45°E	北東	壘	下層のみ残る。
43			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	上層の口縁部 打ち欠き。	130			○	壘	大型	N45°E	北東	壘	完全な壘形であった。 形1とは異なる。
45			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	埋置角1。形1と 類似か否か不明。	133			○	壘	大型	N45°E	北東	壘	形が異なることか 不明か?
46			○	壘	壘	大型	N45°E	北東		135	不明			壘?	N45°E	北東	壘	小破片。壘土から 発掘式とした。	
47			○	壘	壘	大型	N45°E	北東		136	不明			壘?	N45°E	北東	壘	小破片。	
50			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	上層の大半を扁平。	137	不明			壘	小型	-	北	壘	大きく扁平されて いる。壘形か?
51			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	埋置角1。壘土1。 壘形甕棺。内石?	140			○	壘	大型	N45°E	北東	壘	埋置角1。 上層は壘形甕棺。
52	?			壘	壘	N75°E	北東	壘	下層の底部のみ残存。	141			○	壘	壘	N45°E	北東	壘	上。下層とも やや小さい。
53			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	埋置角1。 埋置角4。	142			○	壘	壘	N45°E	北東	壘	上層は扁平。 形1に似られる。
56			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	上層の下半部を扁平。	149			○	壘	壘	N45°E	北東	壘	上層は壘形甕棺。 下層は埋置角打ち欠き。
60			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	壘形甕棺1。	150			○	壘	壘	N45°E	北東	壘	上層は 口縁部のみ残る。
62			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	上層は 口縁部打ち欠き。	166			○	壘	壘	N45°E	北東	壘	上層は大半を扁平。
64	?			壘	壘	大型	N45°E	北東		168			○	壘	壘	N45°E	北東	壘	上層は口縁部打ち欠き。 下層は埋置角下に穿孔。
65			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	壘。大きく扁平。	171				壘	壘	N45°E	北東	壘	上層は口縁部打ち欠き。 下層は埋置角下に穿孔か?
67			○	壘	壘	大型	N45°E	北東	埋置角1。	172	?			壘	壘	N45°E	北東	壘	口縁部は埋置角で打たない。 形1に似る。
68	?			壘	壘	大型	N45°E	北東	壘形の大きさを すると異なるか?	187			○	壘	壘	N45°E	北東	壘	上層は埋置角1。 形1に似る。埋置角なし
70				壘	壘	大型	N45°E	北東	下層の底部のみ残存。 埋置角なし1。	203			○	壘	壘	N45°E	北東	壘	上層の口縁部下層 のみに残る。

## 吉武遺跡群出土の赤色顔料について

### はじめに

吉武高木遺跡、大石遺跡および樋渡遺跡の墓棺墓内出土赤色物について、顕微鏡観察とX線分析を行い、赤色顔料の種類とその使われ方を調べた。墳墓出土例に関する現在までの知見によれば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄：赤鉄鉱を主成分とするベンガラと、硫化水銀（赤）：辰砂を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。

### 試料

試料の採取位置、分析結果と推定される赤色顔料の種類を表に示す。調査時に採取された赤色物は表に示す通り12点ある。赤色顔料が認められた遺構のすべてで試料採取が行われたわけではなく、高木遺跡や樋渡遺跡では他に多くの遺構で赤色顔料が検出されていたということである。

試料は顕微鏡写真1～3に示すような状態である。写真1吉武高木遺跡K117は墓棺内の土に僅かに赤色物が付着しているが、写真2吉武遺跡樋渡K79の赤色物は土に混じってはいるものの多量である。前者は実体顕微鏡下でも朱であることが推定されるほど粒子が大きい、後者は非常に微粒である。吉武大石出土赤色物の状態は吉武高木と同様である。これらを実体顕微鏡下で出来る限り調整（混入土砂、夾雑物等の除去）し、針先に付く程度を検鏡用に、残りをX線分析に供した。

なお、写真3に示した吉武大石K71の赤色物は2～3mm角の上片2点あるが、他の試料の状態とまったく異なり、厚く層状をなしている。写真4に横断面を示す。

### 顕微鏡観察

実体、生物顕微鏡により検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の三種の赤色顔料（朱、ベンガラ、鉛丹）は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。検査結果は表に示した通りである。朱の粒度は樋渡例が約0.5～20 $\mu\text{m}$ と小さい。その他はすべて、50 $\mu\text{m}$ 以上の粒子が多数含まれている。

### 蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施した。結果を表に示す。理学電機工業（株）製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計算管で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としてはNo1～10、12に水銀と鉄が、No11は鉄のみが検出された。全試料とも鉛は検出されなかった。その他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、これらはみな主として混入の土砂に由来するものと考えられる。ただし、鉄は上砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。

### X線回折

No2～6、8～12について、赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として、X線回折の測定を行

表 試料の分析結果と赤色顔料の種類

番号	試料の採取遺構		顕微鏡観察		蛍光X線分析		X線回折		赤色顔料の種類
			主	ベンガラ	水銀	鉄	辰砂	赤鉄鉱	
1	吉武高木遺跡	K117	+	-	+	+			朱
2	吉武樋渡遺跡	K79	+	-	+	+	+	-	朱
3		K45	+	-	+	+	+	-	朱
4		K51	+	-	+	+	+	-	朱
5		K53	+	-	+	+	+	-	朱
6		K71	+	-	+	+			朱(漆?)
7		吉武大石遺跡	K81	+	-	+	+	+	-
8		K140	+	-	+	+	+	-	朱
9		K141	+	-	+	+	+	-	朱
10		K149	+	-	+	+	+	-	朱
11		K171	-	+	-	+	-	+	ベンガラ
12		K181	+	-	+	+	+	-	朱

った。理学電機(株)製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球;クロム対陰極、フィルター;バナジウム、印加電圧;25kV、印加電流;10mA、検出器;シンチレーション計算管、発散および受光側スリット;0.34°、照射野制限マスク(通路側);4mm、ゴニオメーター走査範囲(2θ);30~66°、走査速度2θ4°/分、時定数;2秒の条件で測定を行った。結果を表に示す。No2~6、8~10、12に辰砂が、No11に赤鉄鉱が同定された。そのほか石英、長石などが確認されたが、それは主として混入土砂に由来するものと考えられる。

#### 結果と考察

以上の結果から、赤色顔料の種類を推定し表に示した。

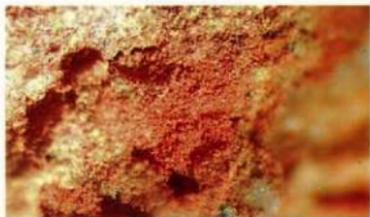
甕棺墓出土朱は時期によりその粒子径分布が異なる可能性がある。調査例が少ないので確かではないが、本例もそれを裏付ける資料であろう。三雲遺跡出土1号甕棺、門田遺跡北24号等前漢鏡を伴う時期の甕棺内出土朱は非常に細かく、粒子径範囲は約0.5~20μmと狭く、吉武樋渡例(写真6)はこれに類する。写真7福岡市飯氏遺跡の後漢鏡を伴う7号甕棺出土朱はそれに比べて粒子径範囲が約0.5~30μmと広い。吉武高木、大石例(写真5)はそれよりさらに粒子径範囲は広くしかも均一性に欠けることが認められる。今までの調査例では、石崎曲出、石崎大坪遺跡出土例がこのタイプであり、写真8拾六町ツイジ遺跡出土漆塗木製輪船の朱の粒子径分布は本例に似ていると思われる。

大石K71出土の赤色物は均一な厚さを持つ膜状を呈することから、経験的にみて漆膜の可能性は高いと思われる。落射光の観察では大粒の朱からなるようであるが、今後は薄片を製作し透過光により断面観察を行い、詳細を明らかにしたい。K71は不明青銅器および碧玉片が出土しており、本例が漆器の痕跡を示すものであると、柚比本村例に類する製品が副葬されていたかもしれない。赤色顔料や漆器の入手や流通、精製や使用方法等を考える上で、非常に興味深い事例であり、今後の類例の調査に期待される。

X線分析にご協力戴いた宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏に感謝致します。



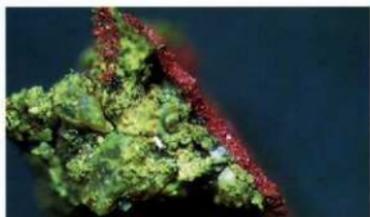
1 吉武高木K117出土赤色顔料 約40倍



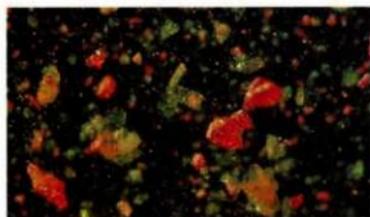
2 吉武樋渡K79出土赤色顔料 約40倍



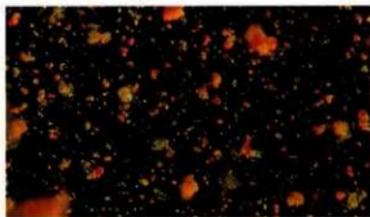
3 吉武大石K71出土赤色顔料 約40倍



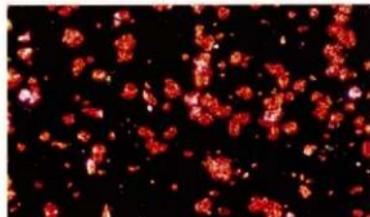
4 吉武大石K71出土赤色顔料 約40倍



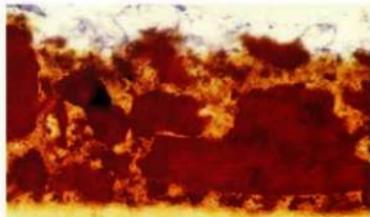
5 吉武大石K81出土赤色顔料 約100倍



6 吉武樋渡K79出土赤色顔料 約200倍



7 飯氏遺跡K7出土赤色顔料 約100倍



8 拾六町ツイジ遺跡出土漆塗腕輪(約650倍)

赤色顔料の顕微鏡写真

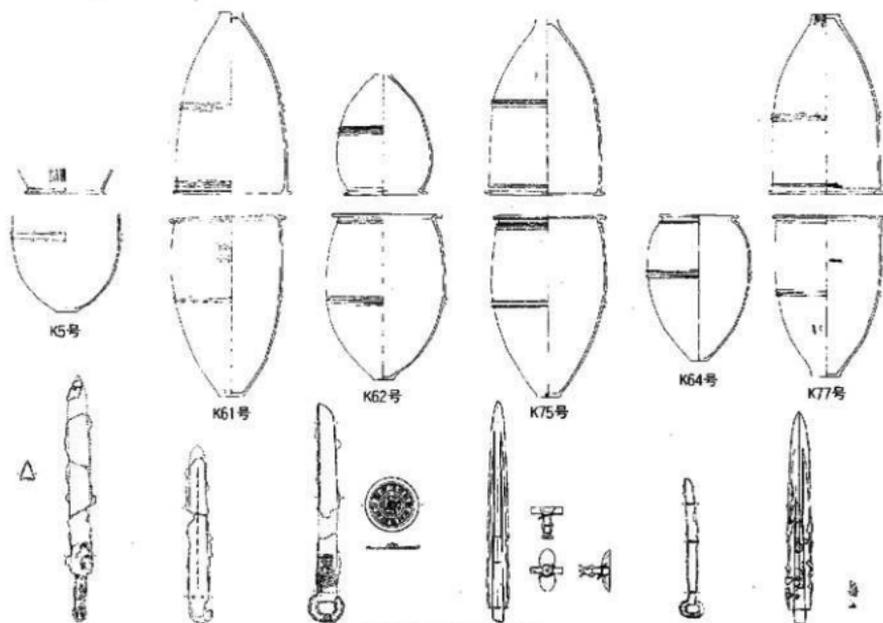
### 第3章 おわりに

これまで福渡地区墳丘墓(3次調査)、吉武高木地区(5次調査)および、吉武大石地区(6次調査)の調査において埋葬主体から副葬品が出土した、もしくは他の出土品の見られたものについて個別の報告を行ってきたが、もちろんこれだけでは各墓地の全体像を十分に明らかにすることは困難であることは明白である。しかしながら時間的な制約もあるため、以下では各墓地について同視の埋葬主体と副葬遺物の共存図をもとにしてその特徴を略述することによって吉武遺跡群の弥生時代墓地の理解につなげたい。

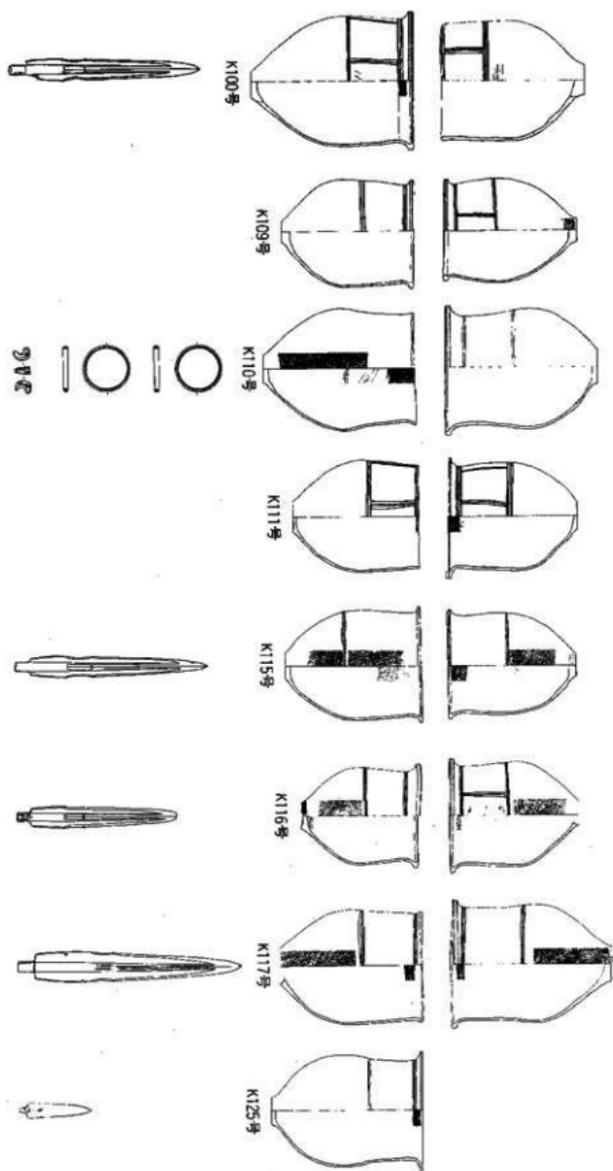
**福渡墳丘墓** 墳丘墓は、前述のように甕棺墓などの埋葬主体の配置状況および墳丘土層断面から観察できる墳端境界や墳丘上端部の状況から、その規模は墳丘の東西長約25m、南北長約27m、墳高2mを測り、南北に長い長方形の墳形をなすと推定される。

さて、この墳丘墓は、今回副葬品をもつ甕棺墓について整理を行った結果、墳丘墓に営まれた最も古い甕棺墓が従来言われてきた弥生時代中期後半よりやや遅る弥生時代中期中葉にあることが明らかとなった。つまり、型的にはやや差が認められるものの下図の細形銅剣を副葬したK77号、細形銅剣・把頭飾りを副葬したK75号、それから鉄剣を副葬したK61号、これらが中期中葉の段階と考えてよい。更に続く中期後半には素環頭太刀・重圏文星雲鏡を副葬したK62号が相当し、最後の段階は鉄剣・鉄鍔を副葬したK5甕棺、素環頭刀子を出土したK64甕棺などが中期末に位置づけられる。

このような時期的な構成から墓地の形成を考えると、まず中期中葉段階で墳丘墓の中央付近に青銅



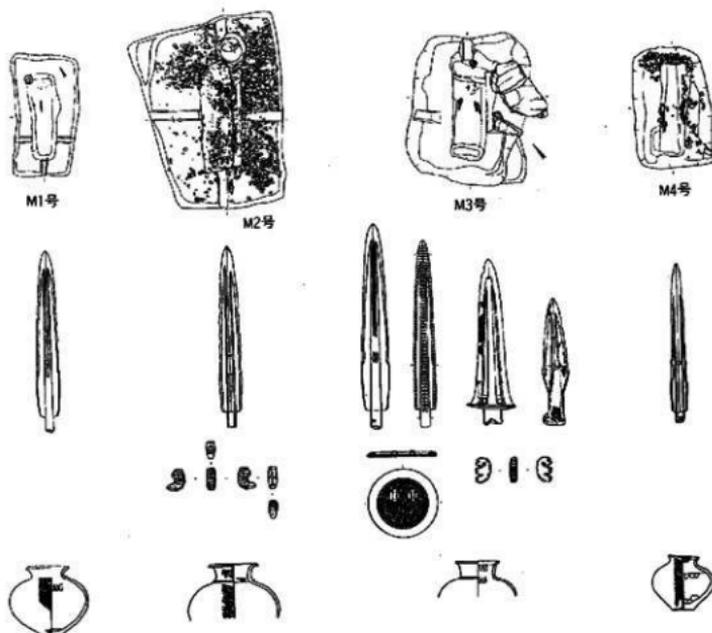
福渡墳丘墓出土甕棺墓と副葬品



器を副葬する甕棺墓が現在の検出数より多く営まれ、続いてこれらと殆ど重複しない周辺部に中期後半～中期末の甕棺墓が造営されたと考えられる。また、これらと異質な木棺墓は、先の墳丘上面をなす黒色バンド層を除去した後に検出されたものであるが、棺内出土遺物である水晶製算盤玉は弥生時代の類例では福岡県鞍手郡高木遺跡(中期前半)や長崎県杵岐郡芦辺町原ノ辻遺跡(後期終末)などで知られており、少なくとも時期的に弥生時代後期に含めてもよいと考えられる。

**吉武高木地区** 高木地区ではほぼ3群の墓地があり、副葬土器から墓地の開始は弥生時代前期末にあり、最も北側にある一群が「早良王墓」とよばれた地点にあたり、確認調査を含めると甕棺墓50基、木棺墓4基などが検出されている。このうち大型甕棺墓8基、木棺墓4基に副葬品を伴っている。また、副葬品の各埋葬主体での保有は、基本的に青銅器や装身具などの単一な分散保有である。ただ第3号木棺墓のように多くの青銅器・装身具などを副葬する例があるが、この棺で出土した副葬青銅器は一部を除いて祭器的要素の強いと考えられるものが多く、まさに副葬品といえる。

続いてこの墓地の形成を考えると、全体的に埋葬主体の墓壇の切り合いは殆ど見られないところから、相伴する副葬土器の型式比較に頼らざるを得ないが、これらの副葬土器はそれぞれが該期の時期的な特徴を十分持たないものも多い。しかしながら、甕棺墓・木棺墓それぞれの副葬土器を比較すれば、第1・2号木棺墓のようなものは胴部の最大径がほぼ中位にあり、いはば板付Ⅱ式でも最新段階に相当する弥生時代前期末の特徴を持つものに対して、甕棺墓のK116号などでは、明らかに中期初頭



吉武高木地区木棺墓と副葬品

の城ノ越式土器の特徴をもっており、この点で相対的に木棺墓の方が早く造営された可能性がある。

また、墓地の構成をみると例えば古い副葬小室をもつ第1号木棺や第2号木棺とK110・117号甕棺のように祖形となった古い壺の形態を残す墓壇の掘り方の規模や方向性からこの墓地で最初に造営された墓であることをうかがわせる。また、これらのあいだを埋めるようにK109・K112(疾走する鹿2頭を描く甕棺)号甕棺墓などの後出する中期初頭の時期の甕棺墓が位置するものこのことを裏づけるものである。

従ってこれらの位置関係から第3号木棺墓も同様に墓地形成の初現的な位置を占めるとかんがえられる。

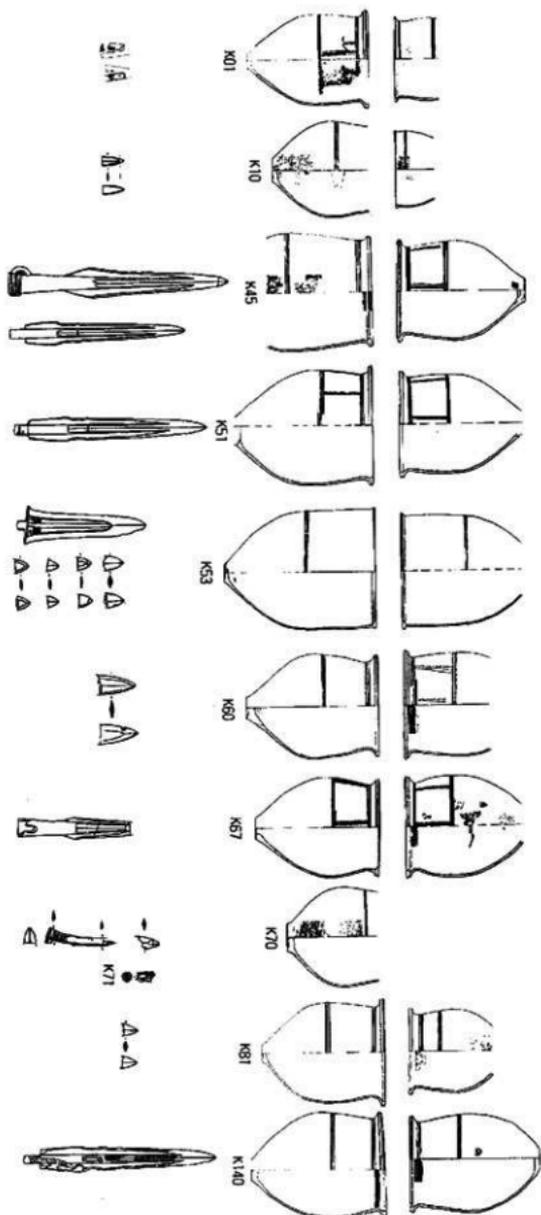
加えてこれらの墓地の大型墳墓は相互に切り合いを持たず、一部のものが大型の標石を持つ点で、個別に独立した盛り土をその殆どがもっていたものと考えられる。

#### 大石地区

遺物を出土した4基の木棺墓と11基の甕棺墓について個別に報告し、小結において墓地の構成と変遷などの概略を記した。

再び繰り返すが、大石地区の最大の特徴は、甕棺ベルトという“普通の集団墓

吉野大石地区甕棺墓と副葬品



地」に形成された墓地ということであろう。

しかも、細形銅剣、細形銅矛、細形銅戈などの青銅利器に混じって、磨製石鏃や磨製石剣の切先片は、従来のように墓地の出土品を副葬品と即断することを躊躇せざるを得ない。青銅利器には鞘や柄が着き、武器としていつでも人を殺傷できることを誇示している。K1、60、70号甕棺の細形銅矛や細形銅戈も、埋葬後の後世の削平で破砕されたものではなく、実戦の結果体内に遺存した可能性がある。これらの遺物の出土状況からすると、たしかに戦國の結果と考えざるをえない。さらに大石地区よりも優位にたつと思われる高木地区の副葬品が細文鏡や玉類など、祭祀、裝飾性が際だっていることからすると、階層分化が進んだ社会構造が浮かび上がってくる。

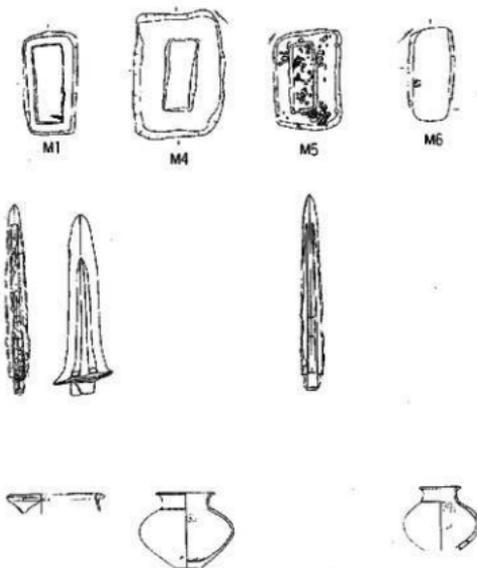
昭和61年、10月福岡市立歴史資料館で開催された「早良王墓とその時代」展示図録では、その展示目的に合わせて、「王墓」とか「戦死の墓」とかいう語句を使い、物語性をもたせた。今回報告書作成作業を進めながらあらためて大石地区の問題を整理したが、大筋では変更の必要はないであろう。ただ、争いの原因や規模などが明らかでない現状では、戦國集団とか戦國指揮層とか具体的な内容まで迫るにはまだ資料不足といわざるをえない。

### 結 語

甕棺ベルトを含めた墓地構成を概観すると、最も初現となる甕棺墓群は高木地区の南東50mに位置するG16地区や南西200mに分布するH17・18地区の一群であり、副葬小壺の型式から板付Ⅱ式中段会に比定される。高木地区と大石地区の遺物が検出された埋葬の時期については大石地区K1、70号甕棺を前期末に位置づけるとほぼ同時期に墓域の形成は始まったとみられる。両者とも中期初頭を盛行期としながらも、大石地区では中期前葉にあたる汲田式段階まで継続されている点が注目される。

機波墳丘墓の甕棺墓は中期中葉から末にかけての時期であり、墳丘の造営時期を中期中葉とするとさきの大石地区の副葬遺物を有する甕棺墓の終焉と時期的に重なっていない。高木地区にみられる朝鮮半島系の青銅器や装身具を分散所有する副葬形態の墓地群は中期初頭においてその役割を終える。

さらに墳丘墓造営の機動力となった集団は、楽浪郡を中継地とす



吉武大石地区木棺墓と副葬品

る漢文化の受容を積極的にすすめるなかで墳丘墓の構想を得、特定集団墓への階梯を進んだのである。

今回の調査報告を作成するにあたり関連科学分野から多くの成果が寄せられた。その主なものを以下に略述する。まず赤色顔料の分析では、前期末から中期初頭と中期後半の甕棺墓から検出された辰砂の粒子が時期が下るにつれて細くなり、発色も異なるという所見が得られた。

つぎに奥田尚氏による甕棺墓の胎土分析では、副葬遺物が検出された甕棺墓においても上墓と下墓によって土器の胎土に含有された砂礫構成に違いがあるものがあるとの指摘を受けた。これは甕棺が在庫品から被葬者に応じて選択されたとの解釈を可能にするもので、甕棺の消費段階を理解する上で画期的な所見である。

また蛍光X線分析によると高木地区出土の翡翠製勾玉の産地は、新潟県糸魚川流域であるとの結果が得られた。

樺渡地区と高木地区出土の青銅器に付着した絹布については、布目順郎氏の分析によると従来の3眠性の蚕に加えて、4眠性の蚕によって生産された国内産の絹があることが明らかとなった。

さいごに吉武遺跡群の調査報告書としてはきわめて不十分なものとなりましたが、今回遺跡の重要性をあらためて認識した。このことは将来の史跡整備の課題として今後十分な取組みをすすめていきたいと考えています。



高木地区調査状況1。(北東より、1985年4月1日)



高木地区調査状況2。(南西より、1985年4月1日)





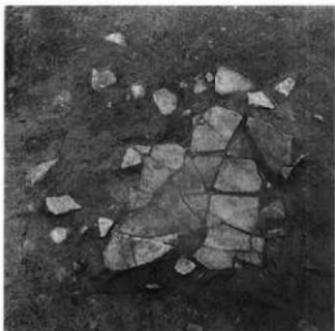
# 圖 版



1. 第3次調査K01号甕棺墓出土状況



2. 第3次調査K02号甕棺墓出土状況



3. 第3次調査K04号甕棺墓出土状況



4. 第3次調査K03号甕棺墓出土状況



5. 第3次調査K05号甕棺墓出土状況



6. 第3次調査K05号甕棺墓副葬遺物出土状況



1. 第3次調査K62号褒棺墓出土状況



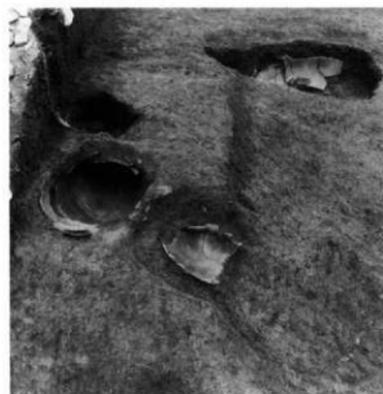
2. 第3次調査K64・65号褒棺墓出土状況



3. 第3次調査K66号褒棺墓出土状況



4. 第3次調査K67・68号褒棺墓出土状況



5. 第3次調査K69・70・71・73号褒棺墓出土状況



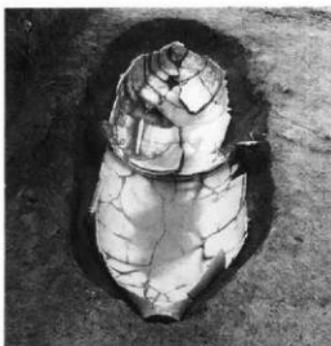
6. 第3次調査K71号褒棺墓出土状況



1. 第3次調査K72号甕棺墓出土状況



2. 第3次調査K76号甕棺墓出土状況



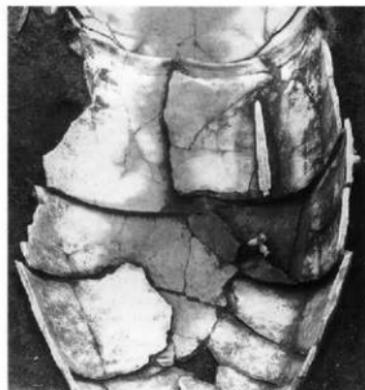
3. 第3次調査K75号甕棺墓出土状況



4. 第3次調査K75号甕棺墓副葬品出土状況



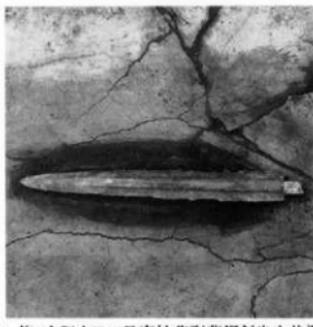
5. 第3次調査K75号甕棺墓副葬品出土状況(近影)



6. 第3次調査K75号甕棺墓副葬品出土状況



1. 第3次調査K77号喪棺墓出土状況



2. 第3次調査K77号喪棺墓副葬銅劍出土状況



3. 第3次調査K78号喪棺墓出土状況



4. 第3次調査K79号喪棺墓出土状況



5. 第3次調査K86号喪棺墓出土状況



6. 第3次調査単独出土銅劍出土状況



1. 第3次調査木棺墓出土状況



2. 第3次調査木棺墓南小口部近影  
(管玉・ガラス小玉群)



3. 第3次調査南小口部副葬品出土状況



4. 第3次調査木棺浜管玉出土状況



5. 第3次調査木棺墓ガラス小玉出土状況



6. 第3次調査木棺墓鉄剣出土状況(棺外)



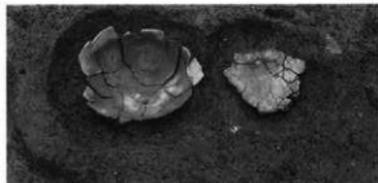
1. 吉武高木遺跡墓地全景(南より)



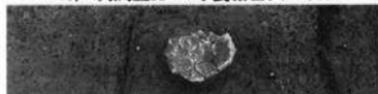
2. 吉武高木遺跡墓地近景(南より)



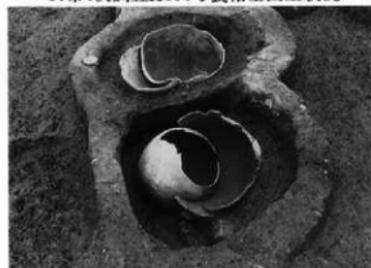
1. 第4次調査K104号甕棺墓出土状況



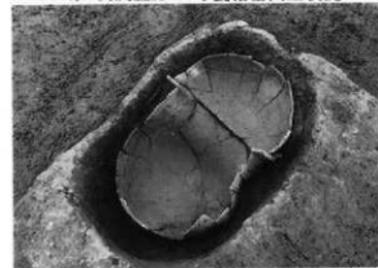
2. 第4次調査K106号甕棺墓出土状況



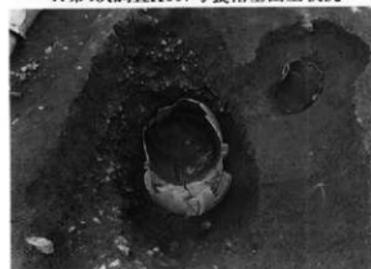
3. 第4次調査K105号甕棺墓出土状況



4. 第4次調査K107号甕棺墓出土状況



5. 第4次調査K109号甕棺墓出土状況



6. 第4次調査K111号甕棺墓出土状況



7. 第4次調査K110号甕棺墓出土状況



8. 第4次調査K112号甕棺墓出土状況



9. 第4次調査K113号甕棺墓出土状況



1. 第4次調査K114号甕棺墓出土状況



2. 第4次調査K118号甕棺墓出土状況



3. 第4次調査K117号甕棺墓出土状況(北より)



4. 第4次調査K117号甕棺墓出土状況(東より)



5. 第4次調査K117号甕棺墓出土状況近影(北東より)



6. 第4次調査K117号甕棺墓出土状況(南から)

7. 第4次調査K117号甕棺墓出土状況  
(東より、開棺時)8. 第4次調査K117号甕棺墓副葬品出土状況  
(北東より)



1. 第4次調査K119号甕棺墓出土状況



2. 第4次調査K120号甕棺墓出土状況



3. 第4次調査K121号甕棺墓出土状況



4. 第4次調査K122号甕棺墓出土状況



5. 第4次調査K126号甕棺墓出土状況



6. 第4次調査K127号甕棺墓出土状況



7. 第4次調査K134号甕棺墓出土状況



8. 第4次調査第4号木棺塞隙石出土状況(南西上9)



3. 第4次調査第3号木棺墓出土状況(北19)



1. 第4次調査第2号木棺墓出土状況(南19)



4. 第4次調査第3号木棺墓玉類出土状況(南上9)



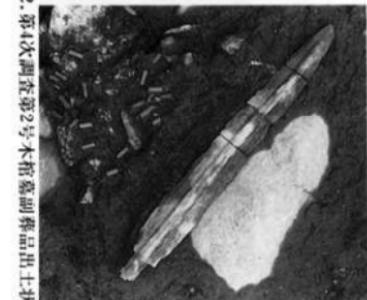
7. 第4次調査第3号木棺墓副葬土器出土状況



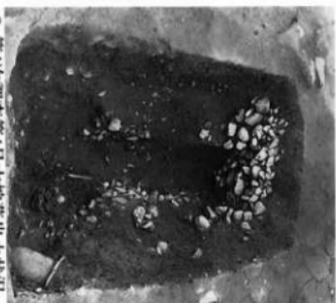
5. 第4次調査第3号木棺塞隙・劍・矛出土状況



6. 第4次調査第3号木棺墓副葬・劍支出土状況



2. 第4次調査第2号木棺墓副葬品出土状況



9. 第4次調査第4号木棺墓出土状況

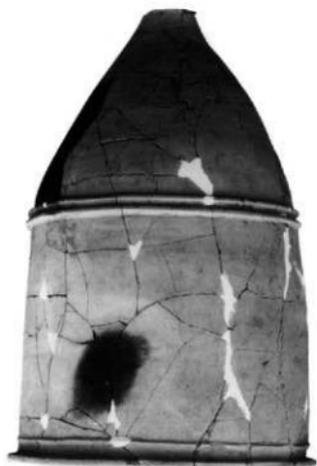


10. 第4次調査第4号木棺塞隙劍出土状況



1. 第3次調査K61号甕棺

2. 第3次調査K77号甕棺



1. 第3次調査K62号甕棺

2. 第3次調査K75号甕棺



3. 第4次調査K125号甕棺



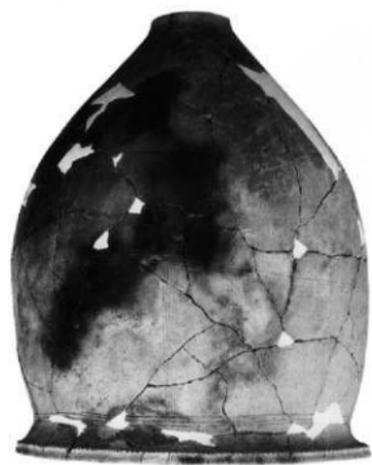
1. 第3次調査K64号甕棺



2. 第3次調査K5号甕棺



第4次調査K100号甕棺



1. 第4次調査K109号甕棺墓

2. 第4次調査K110号甕棺



第4次調査K111号甕棺



1. 第4次調査K115号甕棺

2. 第4次調査K116号甕棺



第4次調査K117号裹棺

---

吉武遺跡群Ⅱ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集

1996年3月29日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 大成印刷株式会社  
福岡市博多区東那珂三丁目6番62号

---